



カンボジアの文化復興(29)

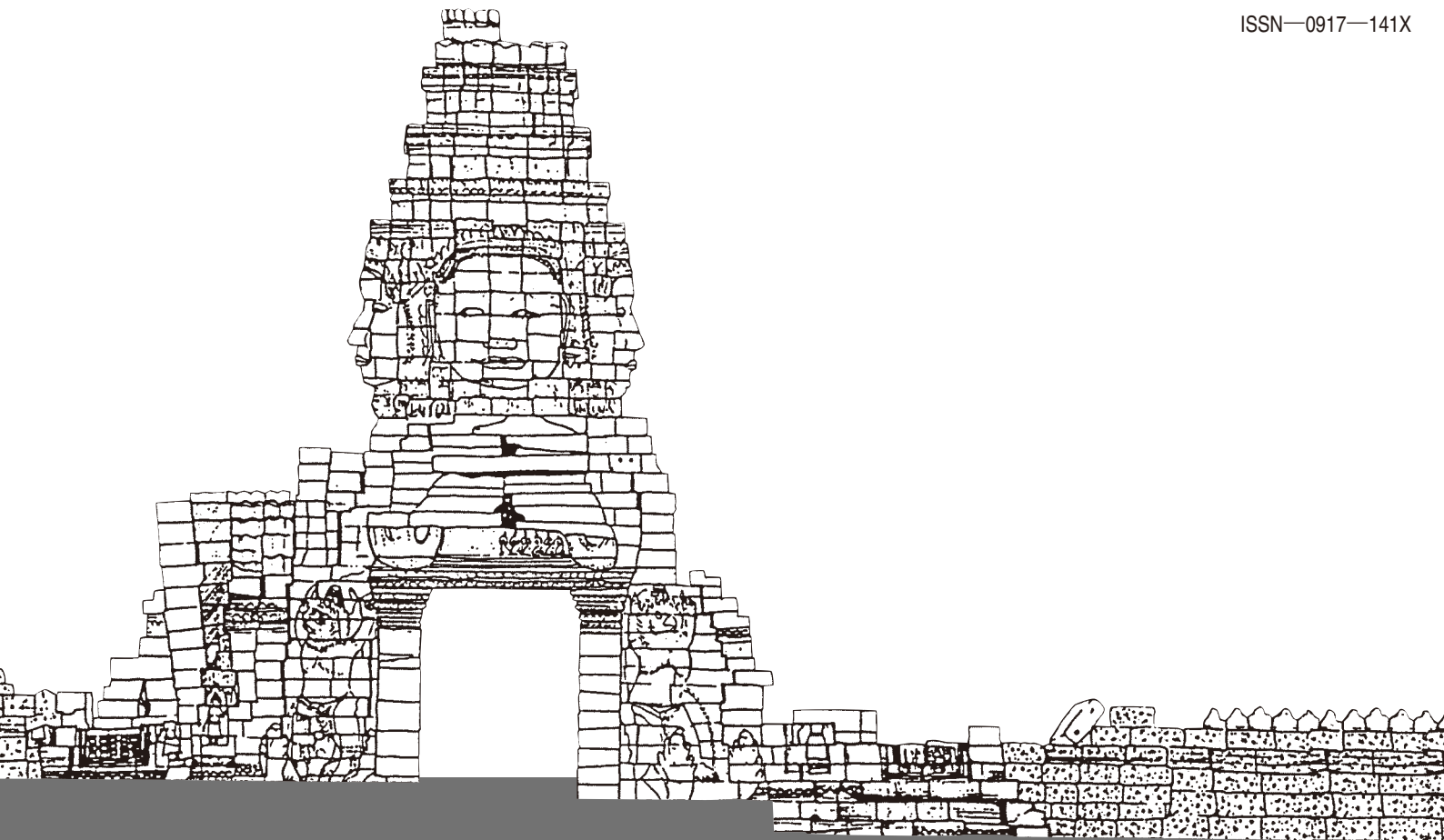
——アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

RENAISSANCE CULTURELLE DU CAMBODGE (29)

2014-2016年 合併号

上智大学アジア人材養成研究センター

Sophia Asia Center for Research and Human Development, Tokyo



カンボジアの文化復興(29)

——アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

RENAISSANCE CULTURELLE DU CAMBODGE (29)

2014-2016年 合併号

上智大学アジア人材養成研究センター

Sophia Asia Center for Research and Human Development, Tokyo

The Publication of the Research Report “*La Renaissance Culturelle
du Cambodge (29)*” was supported by a grant from Sophia University

© Copyright 2016 by Sophia University. ISSN-0917-141X

Edited & Published by
Sophia Asia Center for Research and Human Development
7-1, Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8554, Japan
Tel : (03) 3238-4136, Fax : (03) 3238-4138

カンボジアの文化復興 (29)

目 次

研究論文

| | | |
|---|---|----|
| カンボジアにおける絹織物業と文化的重層性について —華人系クメール人の役割を中心として— | 朝日由実子 | 3 |
| カンボジア北東部の地下式窖窯を用いた焼き締め陶器製作 —変容・喪失した窯業民族誌の再構成— | 徳澤啓一 / Chhei VISOH / Sureeratana BUBPHA | 23 |
| Factors that Led to the Change of the Khmer Capitals from the 15 th to 17 th century | Nhim Sotheavin | 33 |

研究調査報告

I. 建築学分野

| | | |
|--------------------------|------|-----|
| アンコール遺跡群のうち、未解明の遺跡 | 上野邦一 | 113 |
|--------------------------|------|-----|

II. 地質学分野

| | | |
|---------------------------|------|-----|
| アジア地域の地質から見たアンコール遺跡 | 盛合禱夫 | 141 |
|---------------------------|------|-----|

III. 図像学・美術史学分野

| | | |
|---|-------|-----|
| 1. クメール寺院建築の尊像配置 —プレア・カン寺院のリンテルに表現された禪定印仏坐像— | 久保真紀子 | 153 |
| 2. タ・プローム寺院の出入口に表された浮彫に関する調査報告 | 久保真紀子 | 177 |

IV. 考古学分野

| | | |
|---|--------------------------------|-----|
| アンコール・ワット西参道の環濠内考古学調査 —2015年12月調査速報— | 丸井雅子 / 宮本康治 / 三輪 悟 / ニム・ソテイーヴン | 201 |
|---|--------------------------------|-----|

研 究 論 文

カンボジアにおける絹織物業と文化的重層性について

—華人系クメール人の役割を中心として—

日本女子大学
朝日由実子

1. はじめに

カンボジアは、現在でも総人口の約8割が農村地域に暮らし、就業人口の約7割が農業に従事する農業国である¹⁾。また国民の約9割がマジョリティであるクメール人²⁾とされ、多民族構成の傾向の強い東南アジアの中でも、民族的同質性が高いといわれてきた。カンボジアの農村地域に居住する住民の大多数を占めるクメール人がもっぱら雨季稲作に従事する一方、既存社会に入る際に農地の取得が困難であったり、マジョリティとの生業の重なりを避けるためなどの理由から、エスニック・マイノリティの生業には、農業外の商業や手工業、サービス業も比較的多く、民族的バックグラウンドは就業選択にも少なからず影響してきた³⁾。とくに、農村における手工業の多くは、華人系⁴⁾やヴェトナム系住民などのエスニック・マイノリティ⁵⁾がその主要な担い手となってきた。

手工業のなかでも絹織物業は、2005年時点で手織機約2万台を擁するカンボジアの農村地域を代表する生業である (Ter Horst 2011: 18)。とくに複雑な技術を要し、独特の文様をもつ絹織物ホールはカンボジア女性の正装等に用いられ、フランス保護領期 (1863年～1953年) には、クメール・アイデンティティを象徴する「国民衣装」として確立されたといわれる (Edwards 2011)⁶⁾。今日、国際観光開発の活性化や、伝統的文化への再注目が増すなかで、クメール・アイデンティティを象徴するがゆえに、カンボジアの絹織物の「伝統」がアンコール王朝を起源とし、そのままクメール民族によって担われているとされる単線的でオーセンティックな見方をされることも増えている⁷⁾。

しかし、カンボジアの絹織物がもつ文化的な重層性や担い手のエスニシティに関する研究は、当初カンボジアの絹織物業の全体的把握を目的とする基礎的研究が中心とされてきたがゆえに、なかなか細分化された研究は行われてこなかった。他の東南アジア諸国に比べ、これまでのカンボジアの絹織物業研究は、1970年代から90年代に至る長年の内戦・混乱期における現地調査の難しさにより、内戦前の1950年代、1960年代にフランス人地理学者 Delvert (2002 [1961]) やフランス人民族学者 Dupaigne (1980) などが行った調査を除き、ほとんど研究的蓄積がみられなかった。内戦後、初の総選挙による1993年の新国家建設以降、UNESCOの委託を受けた日本の染色家でクメール伝統織物研究所代表である Morimoto (1995) による養蚕、機織産地の調査などを皮切りに、ようやく2000年代に入りカンボジアの染織業の研究は本格的に再開された。主要な研究として、オーストラリアの美術史家 Green (2003) がアンコール王朝期の染織物の利用に関する歴史的研究を行っているほか、染織技術の観点から、従来アンコール王朝期に主に輸入されていたインド産、中国産の布の影響だけではなく、東南アジア地域内でのマレー、チャンパー⁸⁾からの影響について検討する岩永 (2003)、植村 (2003) の堅実な研究も新たな視座を切り開いている。

また、現代における生業としての側面から、農村女性の雇用創出の手段として着目する経済学的、開発学的調査がなされてきた (Victor-Pujebet, B. and A. Peyre 2001; 荒神 2004)。

こうした研究から、物質文化研究として、いわば染織物というモノ自体やその生産工程、経済的利益に関する研究の厚みは増加してきたが、モノを生み出す生産者や流通業者に関する民族誌学的研究はほとんどなされてこなかった。そういった意味で、オランダの人類学者 Ter Horst (2011) の生産者、流通業者のエスニシティ (とくに広東系の華人系クメール人) に焦点を当てた研究は画期的である。一方で Ter Horst (2011) は、流通業者を主な研究対象とし、カンボジア全土をカバーするがゆえに、Asahi (2010) のように一村に特化し、地域性を重視した視点に欠けるといった問題点もある。

本稿では、第一に絹織物のモノそのもののもつ文化的背景の重層性を検討し、第二に現代においてそれを生産している担い手のエスニシティについて、先行研究の検討を中心に考察することを目的とする。

2. 絹織物の持つ文化的重層性

2-1. アンコール王朝期の布とインド、中国からの影響

カンボジアの絹織物業の源流は、9世紀～15世紀半ばに東南アジア大陸部で栄華を誇ったアンコール王朝期にあるとする言説が、2005年に愛知県で開催された日本国際博覧会のカンボジア館における展示解説などに見られた⁹⁾。しかし、こうした説を証拠づける確たるものは現在のところ存在せず、むしろカンボジアの現代における高度な絹織物の技術は、実際には15世紀半ば以降のポスト・アンコール期に発展し、技法的な観点からは、300年ほど前に確立されたのではないかと指摘されている (植村 2003: 125)。たとえば、岩永 (2003) は、カンボジアでは緋の制作が盛んであるにも関わらず、もっとも基本的な緋の技法である経緋がないことから、カンボジアの緋の歴史は比較的新しく、東南アジアに箆を供えた織機が導入されて以降のものではないかとする。東南アジアの染織研究の泰斗である Maxwell (2003) は、東南アジアの染織文化の形成過程について、地域的共通性としてまず腰機による比較的幅の細い紺や赤を基調とする幾何学的な織物を基層的な文化としつつも、その後のインドからの強い影響、中国からのモチーフの影響、イスラーム教の浸透、ヨーロッパの侵入を挙げている。そうした外来的な文化を段階的に吸収しつつも、現在は東南アジアの各地域で独特の染織文化が編み出されていること、東南アジアの染織文化は、近代西欧社会との接触以前からも変動はあり、また今日も新たな材質、都市化、グローバル化の中での文化的変容があることを説いている。

現在カンボジア王国がある地域では、過去にどのような染織文化が存在していたのか。熱帯モンスーン気候においては劣化が著しく、2、3世紀前の織物すら残存することが難しい¹⁰⁾。まず、アンコール王朝期の状況を知る手がかりとして挙げられるのは、碑文に見られる織物関連用語、レリーフ (遺跡壁面の浮彫) に描かれた図像からの判断である。また同時代の文書として、14世紀初頭前後、元朝の使者周達観に記された『真臘風土記』は、当時の織物の入手状況、使用状況などについて断片的ではあるもののかなりの情報が収集されている (周 1989)。

碑文にみられる織物関連事項の研究については、別稿に譲るとして、本稿では、上述の遺跡のレリーフに関する先行研究および同時代の文書記録から検討していくこととする。第一に、アン

コール遺跡群のレリーフの図像から往時の布製品、衣装について分析する Green (2003) によれば、周 (1989) の記録からみてアンコール王朝期には、主にインドおよび中国から布が輸入されていたが、中国産の布は主に衣装よりもパラソルや内装用に利用されていたとされる。たとえば、王の象徴としての扇、パラソル、担い籠や、家具関連 (カーテン、敷物) などである (写真 1、2)。一方、インド産の布は珍重されており、王、王族らの威厳を示す衣装として主に使用されていた。レリーフや彫像に残された神、天女の像の着用する衣装の形態には、インド文化の影響が強かったことを指摘している。上半身は基本的に裸体であったが、下半身にまとう衣服の形態には、2種類の腰布の巻き方があり、チョーン・クバン (インドのドーティに比定) およびソムポット (インドのサリーに比定) があった。これは、現代のカンボジアにおいても下半身に布をまとう主な2つの形態として残存している。とくにインドでは、裁断しない布が神聖性を帯びていると考えられ、また世代を越えて伝承される財として珍重されたため、カンボジアにおいても長方形の一枚布を裁断せずに身にまとう方法が定着したものと考えられる。Green (2004) は、このほかにカンボジアにおいて、インド産の布が使用されていた証左として、エジプト、カイロ近郊のフスタート遺跡から出土した13世紀西インド産の布片 (写真3) とアンコール・ワットのレリーフに描かれた窓枠の文様 (七宝文様) (写真4) との類似性について指摘している。

またインドからの輸入品より今日のカンボジアの染織文様に与えた影響が少なかったとされる中国産の布についても、写真5のようにアンコール・ワット遺跡の壁面浮彫には、古代中国で想像上の瑞鳥^{ずいちよう}としてもはやされ、その後も吉祥文様としてアジア各地に伝播した鳳凰が描かれており、中国文化の意匠の影響も見られることが指摘されている。これは、13世紀中国の天蓋用絹布のモチーフとしてもよく見られた文様である (Green 2004: 16)。

第二に、アンコール王朝期の生活状況を知る重要な記録として、前述の『真臘風土記』が挙げられる。これは、アンコール王朝末期の1296年から1297年に渡り、約1年アンコール都城に滞在したとされる中国元朝の対カンボジア外交使節の一員であった周達観が書き残した見聞録である。8,500字あまりの分量の中に、当時の地理、風俗などが多岐にわたって記述されており、時に異



写真1 団扇とパラソル、アンコール・ワット遺跡壁面浮彫 (12世紀) 出典: (Green 2004: 12)



写真2 勝利の旗、バイヨン遺跡壁面浮彫 (12世紀) 出典: (Green 2004: 16)



写真3 13世紀半ばにインドより輸入された木版の綿布片（エジプト、フスタート遺跡より出土）
出典：Green（2003: 41）



写真4 アンコール・ワット遺跡の窓枠に彫られた円形文様（12世紀）
出典：Green（2003: 40）

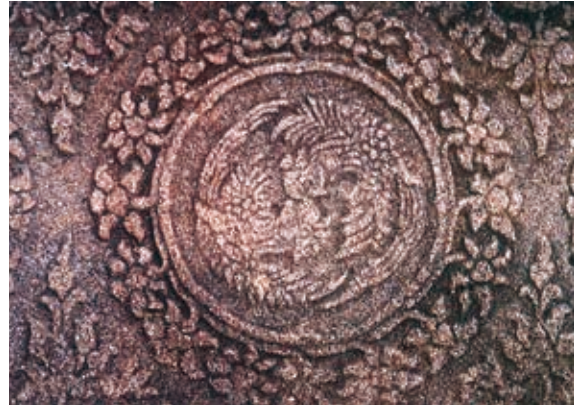


写真5 一對の鳳凰を囲む円形文様、アンコール・ワット遺跡壁面浮彫（12世紀）
出典：Green（2004: 16）

民族蔑視的で主観的である点は否めないものの、その資料的な価値は高い。

条の番号は、記者の和田（1989）が便宜上つけたものであるが、第1条「総叙」から第41条「国主出入」（国王の外出）までの全41条にわたる。そのうち織物に関連する条は、以下の13条におよぶ。

（四）服飾、（五）官属（役人たち）、（六）三教、（七）人物（住民）、（十）奴婢、（十二）野人（野蛮人）、（十七）死亡、（二十）出産（産出品）、（二十一）貿易（商売）、（二十二）欲得唐貨（入手を望む中国商品）、（二十六）蔬菜（そさい）、（三十）蚕桑、（三十一）器用

まず、（四）服飾の条を検討する。この条では、中国人である周達観の視点からみたカンボジア人の服飾文化の特徴と布の交易、生産について言及している。

「国王より以下、男女はみな椎髻（さいずちまげ）^{ついでい}で袒裼（上衣を脱いで肌を表すこと）^{たんせき}であり、ただ布（綿布）で腰を囲みつつむだけである。外出する時には、すなわち大布1枚を〔その上に〕加え、〔腰の〕小布の上にまとう。布には大いに等級がある。国王が〔身に〕つけている布には、金三、四両にあたいするものがあり、それはきわめて華麗精美である。この国の中では、〔カンボジア人が〕自分たちで布を織るけれども、暹羅^{せんら}¹¹⁾ および占城¹²⁾ からみな〔入って〕来るもの（布）がある。時々、西洋（南インド）より来るものをもって上〔等品〕とする。それが精巧でこまかく美しいからである。

ただ国王だけが純花布（精巧な更紗）を身に着けることができ、頭に金冠子（子は接尾辞）を

戴くが、金剛〔神〕が頭上に戴いているものようである。(中略)

大臣・王族は疎花布(あらい更紗)をまとうことができ、ただ官人のみが〔純・疎〕双方の花布をまとうことができる。庶民の間では、ただ婦人のみがこれをまとうことができる。」(周 1989: 21-23) (下線部は筆者加筆)

上記のように、周によれば、当時南インドや現在のタイ、ヴェトナムにあたる周辺国からの布の輸入と国内の布生産とがあったが、王権の象徴としての布は、王族や富裕なエリートによって着用された異国の布(輸入品)であり、一方庶民は幅の短い地元産の腰機で織られた布を着用していた。中国産の布については、(二十二) 欲得唐貨(入手を望む中国商品)の条に、中国からの第一の輸入品である金銀に次ぐものとして、軽縑帛(うすい絹布)が挙げられている。

また、(三十) 蚕桑(養蚕)の条には下記のとおり、当時のカンボジアでは養蚕は盛んには行われておらず、植物性の繊維を利用して簡素な腰機を使用していたとある。さらに、養蚕がカンボジアに導入された契機として、先に養蚕が行なわれていた現在のタイにあたるスコタイ朝の人々の移住があったことが記されている。

「土地の人はみな蚕桑に従事しない。婦人もまた〔同様に〕針線(縫い針と縫い糸)、裁補(裁縫)の事をくわしくしらない。僅かに木綿布を織ることができるだけである。また紡ぐことができないうで、ただ手で〔繊維を〕とりあつめて糸(糸)につくる。機杼(はたおり機械)がなく織るのに、ただ〔糸の〕一端を腰に縛り、〔他の〕一端を窓の上にかけて〔織り〕、梭(はたのひ)もまたただ1個の竹管を用いるだけである。

近年暹(スコタイ)人が来て居住すると、そこで養蚕を仕事とし、桑の種・蚕の種はみな暹の中より来た。〔カンボジアには〕また麻・苧(からむし)がなく、ただ絡麻(きあさ)があるだけである。暹人はところが絹糸をもちいてみずから黒い綾衣(模様のある絹織物)を織って着る。」(周 1989: 68-69)

周(1989)は、王都を中心に視察をしており、伝聞で知識を得た事柄も少なからずある可能性もあるが、Green(2004)もまた、12世紀におけるさまざまな生活状況が描かれたバイヨン遺跡壁面の浮き彫りに機織の図像が見られないことから、当時の生活の中で養蚕や機織りがあまり重視されていなかったのではないかと指摘している。このことから、アンコール王朝期においては、王族を中心とするエリート層は、衣服のみならず家屋の装飾などにも外来の豪華な布を豊かに使用していた一方で、地元産の布の技術についてはあまり関心が払われず、アンコール朝末期になり隣国のスコタイから絹織の技術が流入してきたことが伺える。

2-2. 大航海時代(15世紀～17世紀)のカンボジア

アンコール王朝は、15世紀半ばにアユタヤ王朝の進攻により王都が陥落した。その後のポスト・アンコール期に王都がアンコール地方から現在の首都であるプノンペン周辺に移転して以降にはいかなる状態であったのか。リード(2002)は、『大航海時代の東南アジア』の中で、15世紀から17世紀の東南アジアは、国際的には布の「生産者」というよりも「消費者」であった、と

記しており、前述の周（1989）が述べていることと重なる。またこの時期には、盛んな海上交易を背景に、カンボジアへのチュヴィア人（インドネシア）、ムラユ人（マレー半島）、チャーム人（ヴェトナム中部）の流入や、華人の流入もあった。

植村（2003）は、この交易の時代にマレー系のイスラーム商人たちが、インドの織物そのもののみならず、高度な染織技術をカンボジアに持ち込んだのではないかと指摘する。やがて交易の時代が、オランダ東インド会社の独占化を背景に、インドの高級布の購買に用いていた東南アジア産の香料、香辛料の価格が停滞したことなどによって、17世紀以降衰退するにつれ、域内の交易の重要性が低下し、各王宮がこれまで輸入していた西インド、グジャラート産のパトラ（写真6）¹³⁾を模した国産品の高級織物の生産を開始したと考えられる。

植村（2003: 128）は、15世紀に弱体化したチャンパー王国から多数のチャーム人がカンボジアに亡命し、1642年にはカンボジアにもムスリムの王が擁立されていること、15世紀頃からチャンパーが滅亡する17世紀末頃の間にはチャーム人を巻き込んでカンボジア独自の緋文化が成立したと考察する。また、高度な技術をもったチャーム人がカンボジアの王宮に抱えられ、徐々にクメール独自の文様を織る緋文化が形成され、やがて王宮の技術は、現在緋織が最も盛んなタカエウ州にも伝わった。一方チャーム人の多くはコンボン・チャーム州の地でチャンパー伝来の文様を織っていたのではないかとする。

しかし、管見ではポスト・アンコール期の王宮にチャーム人の織り手が存在していたという記録は発見できておらず、北川（2006: 201）によれば、フランスの博物学者アンリ・ムオが1858年に記したこととして、ウードンの王宮には、アンナム人の織り子がいたという¹⁴⁾。かつての王宮の技術者たちが、現在の絹緋織の産地の源流であるのか、チャーム人、アンナム人以外のクメール人の織り手は、存在していたのか、ポスト・アンコール期の王宮においていったいどのような人々が絹緋織に携わっていたのかについては、今後研究の余地がある。

また外来の織物の輸入から王国内での生産が盛んになった理由として、19世紀以降のタイ国内におけるタイシルクの評価の変化についての小泉（2006: 201-232）の歴史的研究にみられるよう、爾来東南アジアの各王宮において珍重されていた外来の品だけではなく、ある領域をもつ国民国家の形成過程において、「正当なる系譜」をもった「国民の手」による「国産品」を誇る感覚が確立したこともまた高級織物の自国生産の興隆に影響を与えていたと考えられる。

3. カンボジアにおける絹織物業と担い手

3-1. 現代カンボジアの絹織物業

現代におけるカンボジアの絹織物業は、基本的に首都近近に暮らす農家女性の副業として行われており、現在約2万台の織機が存在している。高級衣装としての絹織物業は、市場経済化に湧く都市部の消費者の増加を背景に隆盛しているが、一方で国内の限られた市場を対象とし飽和状態にもある（Asahi 2010）。主な絹織物には、紋織り、緯緋織りの技法を用いた織物があり、それぞれ儀礼などで着用される女性用のスカート（ソムポット）や男性のジャケット（アーウ）などに加工されて用いられる。先染めの緯緋織でつくられた「ホール」と呼ばれる総柄の絹織物は、中でもカンボジアの絹織物文化の技術的水準の高さを示す織物であり、絹織物の中でも量的にも多く生産されているカンボジアの絹織物業を代表するものである。



写真6 西インドグジャラート産のパトラ（平織／経緯緋）
経：200.0cm、緯：77.0cm シルクロード研究所蔵 出典：岩永（2003: 120）



写真7 カンボジアの儀礼用布（ピダン）／腰布、腰衣（チョン・クバン、サンポット）（三枚綾織／緯緋）
経：355.0cm、緯：98.0cm、シルクロード研究所蔵 出典：岩永（2003: 70）

ホールは、前述のとおり、西インド、グジャラート地方で生産され、広く東南アジアの王宮で大航海時代に珍重されていた「パトラ」（写真6）を模した布とされるが、パトラが経緯緋で平織りの技法であるのに対し、ホールは緯緋の綾織りであるという技法的な独自性を持つ。また布の裾文様や織機の形態などには、マレー系文化の影響も多々見られ、技術的には現在カンボジアに居住するムスリムのチャム人や、チュヴィア人などからの伝播が示唆されている（岩永2003）。写真7は、制作年代が19世紀から20世紀ころと推定されているホールの原型ともなるパトラを模した布である¹⁵⁾。カンボジアでは、パトラの形式や文様を模倣しつつも、制作技術を簡素化し、かつ文様がより美しく見えるような工夫がなされた。

3-2. カンボジアにおける民族構成と生業

文化人類学において「民族」とは、一般的に言語を中心とする文化の共有を意味し、特定の個別文化（言語、信仰、習俗、心理的特徴、領域、生業など）およびそれへの帰属意識を共有する、人類の下位集団であるとされる。さらに、帰属意識とは、近代以降に国民国家の形成へ向けて積極的な役割を担ってきた「民族」（ネーション）ばかりではなく、歴史学で言う前「民族的」集団、たとえば、民族体、また国民国家内部でマイノリティとして位置付けられる、いわゆる少数民族もはたまた通常は民族に対置される「部族」すらも包摂する、きわめて包括的な概念構成である。すなわち、「われわれ意識」とは、他者の存在を前提しない限り成立せず、ある境界の維

持によって実現されうるものである（井上 2006）。

またカンボジア語で、「～民族」と表現する場合、「人間」という意味の「チョン」、および「民族」や「国家」を意味する「チアット」をつなげて「チョン・チアット～」と呼ばれる。カンボジアにおけるエスニック・マイノリティに関する研究史をまとめた松井（2008）によれば、フランス保護領期（1863年～1953年）以前には、カンボジア王国は、その領域内のマイノリティに対して、交易や技能などの面で評価しており、朝貢等を通じて各集団の代表者との関係性を保つことをしていたとされる。ところがフランスの保護領化を境に、カンボジア王宮と国内における各民族集団との関係は、断絶もしくは衰退してしまったと指摘する。その一方で、フランスは近代的行政機構を設立する過程で、とくに華人を言語集団を同じくする幫^{ばん}ごとに編成し、新たな形で把握しようとしていた。

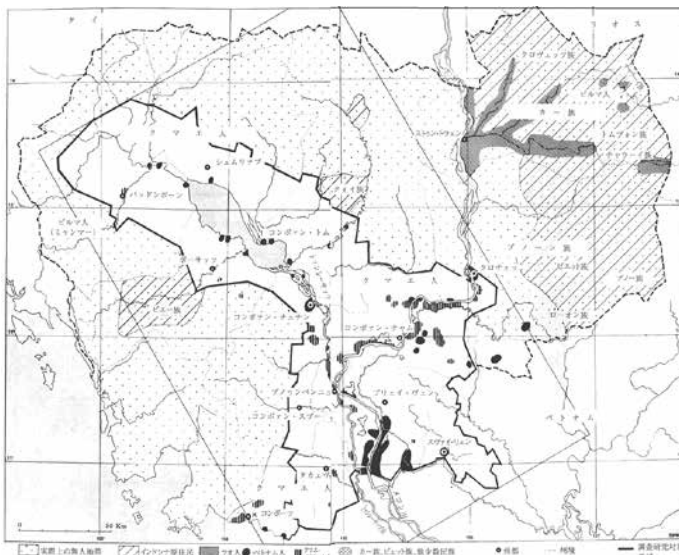
現在の民族構成は、国勢調査（1998年）の結果によれば、カンボジアの総人口約1,400万人のうちモン・クメール語族系のクメール人¹⁶⁾が約90%を占める。クメール人以外の諸民族として、全人口の各5%を中国人¹⁷⁾とヴェトナム人¹⁸⁾が占め、そのほかチャム人¹⁹⁾、ラオス人、ビルマ人、山岳少数民族²⁰⁾であるプーノン人やクォイ人などが居住している。

Delvert（2002）によれば、近代化、都市化に伴う人口の流動化が進む以前は、一般的にマジョリティであるクメール人が一部の王族や官吏を除いて農村に居住し、農業を営むのに対し、中国人は都市部や河川沿いでの商業や手工業に従事し、ヴェトナム人が漁業などに従事するなど、比較的ゆるやかな分業形態にあった。フランスによる保護領期時代には、「優秀な官吏」として積極的に徴用されたヴェトナム人に対する敵対的感情が芽生えたともいわれるが、同時に他の東南アジア地域にも見られるような植民地政府による外国人登用により、複合社会化が進んだ。なかでも買弁となった華人による商業の独占化が強化された。

1953年にフランスから独立して以降は、国民国家建設を目的とする「カンボジア国民」としての同化政策が進んだ。クメール・アイデンティティの高揚は、近代化政策とも相まっていた（Edwards 2001）。1975年～1979年のポル・ポト政権は、共産主義政権であると同時に、民族主義

的政策も断行し、多くのヴェトナム人、チャム人が虐殺されたり、飢えによって亡くなった。都市に居住する者、商業に従事する者や肌の白い特質をもつ華人もまたポル・ポト政権期においては、「革命の敵」として迫害される者が多かった。

現在のカンボジアでは、クメール人を中心に国民の多くが公式言語であるカンボジア語を話し、上座部仏教を信仰している。その他に、ヴェトナム人を中心としたキリスト教徒、チャム人を中心に

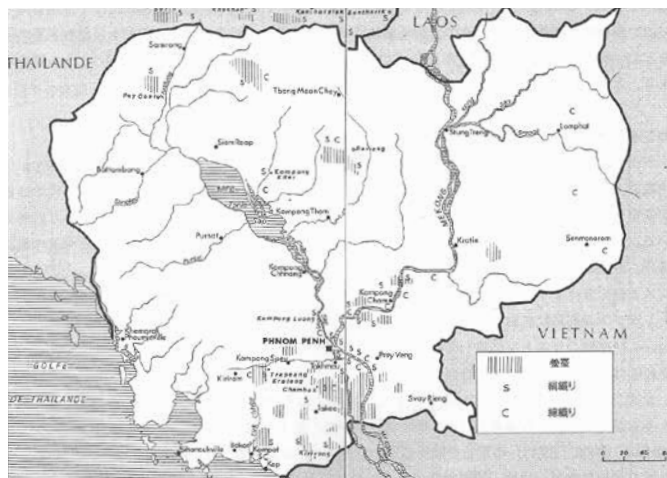


地図1 カンボジア言語民族分布図 出典：Delvert (2002: 752-753)

イスラーム教を信仰する者も少数いる。メコン河やトンレ・サーブ河などの大河川の周辺は治水が難しく、クメール人は大河川から少し離れたところに居住していたが、地図1に見られるように17、18世紀以降に移住してきたチャム人やヴェトナム人の多くは河岸に移り住んだ。チャム人は漁業や機織りを、ヴェトナム人も漁業や養蚕などを行った。地図1には見られないが、華人もまた、他の東南アジア諸国よりも都市部のみならず、農村地域に商人、農民として定着した者が少なからずおり、中でも河川沿いや河川の中州を治水の技術を用いて畑地として開拓し、綿花やゴマ、トウモロコシなどの換金作物栽培を行った。さらに、河川交通に携わったり、機織りなどのさまざまな手工業生産を行い、現金経済化以前には華人の換金作物や手工業製品とクメール人の生産した米との物々交換も行われていた。

3-3. 絹織物業の担い手とエスニシティ

カンボジアにおいて、すでに1940年代のフランス保護領時代には、安価な輸入布などの影響により日用品としての織物生産は衰退していた。1970年にはじまる内戦期以前には、まだ養蚕や綿花栽培は全土で広く行われていたが、Dupaigne (1980)の調査時点で、すでにそれは商業的な生産地域、あるいは山岳地域の少数民族に限定されるようになっていた。それでも地図2のように、養蚕、絹織り、綿織りの産地が各所に点在していたことが記録されている。とくに、養蚕、綿花の栽培に必要な大量の水を擁するメコン河、バサック河の流域では盛んに主に行われていた。



地図2 カンボジアにおける養蚕および絹織り、綿織りの分布図
出典：Dupaigne (1980: 334-335) (凡例部分のみ筆者訳)

1979年にポル・ポト政権が崩壊して以後、カンボジアの絹織物業は徐々に復興したが、首都プノンペンを中心とする近郊諸州（コンダール州、プレイ・ヴェーン州、コンボン・チャム州、タカエウ州）の限られた地域で主に行われている。ほとんどの織物産地で養蚕の伝統はすでに消失しているが、かつての養蚕地帯と重なっており、その名残が指摘されている (Delvert 2002)。今日、絹糸の約9割がヴェトナムから輸入され、化学染料の大半は、タイから輸入されている。絹織物の生産者は、こうした絹糸や化学染料を仲買人から購入して、使用している。

絹織物業の生産工程は、主に養蚕、製糸、染織に大きく分けられる。それぞれの担い手を見ていくこととする。養蚕・製糸業は、フランス植民地期後半以降衰退したものの、カンボジア南部バサック河沿岸部に居住する主にヴェトナム人、遠隔地のクメール人によって生産されていた。Delvert (2002: 301) は、とくに1930年代～1940年代の仏領期における仏教の信仰の強化により、上座部仏教を信仰するクメール人、華人系クメール人が蚕の殺生を忌避するようになり、その後は主にヴェトナム人によって担われてきたとする²¹⁾。

また絹糸の流通は、主にヴェトナムから輸入する商人とそれを国内の主要都市で販売する商人、織物産地の中心的な村落市場町（プーム・プサー）で販売する商人がいる。いずれも華人系クメール人が多い。織り手もまた、河川沿いの畑作地帯の華人系クメール人が多い。タカエウ州の産地場合、河岸ではないが、織り手の多くは華人系であると考えられる。またコンボン・チャーム州のメコン河沿いやその中洲には、チャーム人の織物集落もある。現代では、チャーム人は華人系クメール人とほぼ同種の織物を制作している²²⁾。岩永（2003、2005）は、カンボジア国内の織り手の中でも、チャーム人織り手の役割に着目するが、チャーム人以外の織り手は「クメール人」と記しており、「華人系」であることについてはとくに言及されていない。イスラーム教徒として独立したコミュニティを保つ者が多いチャーム人に比べ、クメール人と通婚し、土着化した華人系クメール人の絹織物業における役割についてはこれまで個別に論じられる機会が少なかった。

4. 華人系クメール人の役割

4-1. カンボジアにおける華人系クメール人

カンボジアに暮らす華人の大半は、東南アジアの他の国々と同様、広東、福建両省を中心とする華南（南中国沿岸部）からの移民を中心とする。周達観の記録によれば、アンコール王朝時代より、すでにカンボジア国内に居住し、商業活動などに従事していた（周 1989）。本格的に移住者が押し寄せたのは、フランス保護領期の植民政策による。労働力「苦力」（クーリー）や商人として多数移住した。表1に見られるように、仏領期初期には、年間2,000人～5,000人の移住者があったが、とくに1946年以降、中国大陸が日本占領下から解放後の内戦下で、大量の移住者が到来したことが読み取れる。フランス保護領期には、方言・同郷集団としての5大幫（潮州、広東、海南、客家、福建）が存在し、そのうち潮州系が約8割を占めていた。幫の役割としては、華人学校、廟などの宗教施設や共同墓地といった文教ならびに互助・福利組織を運営することであった。

カンボジア語では、華人およびその子孫について表2のとおりと呼称がある。現在、華人系の住民は、推定70万人いるとされ、主な言語は、中国語（主として5つの地方言語）であるが、実際には内戦終結後に来訪したニューカマーでない華人系住民の多くは、カンボジア国籍のクメール語話者が大半で、華人学校への通学経験がない者は基本的に華語の読み書きができない。宗教も中国式の祖先崇拜の伝統を保ちつつ、オールドカマーの多くは、クメール式の上座部仏教寺院の信徒としての生活を送っている。居住地域は、首都プノンペンを中心に、地方都市、農村部（中でもプーム・プサーと呼ばれる主要道路の結節点にある市場町に多い）である。生業は、金融業、商業、運搬（流通）業、工業などの事業、農業（換金作物栽培）を主とする。歴史的に、カンボジアの市場ネットワークの大部分を握りながら、1960年代に反華商暴動が起きたり、内戦後の1980年代の社会主義時代においても、親ヴェトナム政権下で華人としてのアイデンティティを強く打ちだせない時代もあった（野澤 2003）。また一方で村嶋（2004）によれば、カンボジアの華人は祖先崇拜や中国正月を中心に、清明節など中国式の行事を維持しており、タイの華人よりも中国式伝統文化が比較的維持されていると記している。1970年代の内戦以前には、カンボジアの華人たちはあまりクメール正月を祝う習慣がなかったともいわれるが、現在では、とくにオールドカマーは、中国正月、クメール正月の両方を祝う習慣があり、大変な散財をしても両方の

文化的アイデンティティを体現している人々が大半である。現在のフン・セン首相政権下での華人系組織への締め付けは比較的緩やかであり、華人学校や華人組織は復活傾向にある。また改革開放が進む中国本土からのカンボジアへの企業の進出もあり、華語学習への意欲も以前より高まっている。

表1 1890年以降にカンボジアに移住した華人の推計

| 期間 | 年間入国者 | 年間出国者 | 年間入植者数 | 華人人口(期間末時点における) | 全人口のおおよその割合 |
|-------------------------|--------|--------|--------|-----------------|-------------|
| 1890 | | | | 130,000 | 9.7 |
| 1891-1905 ^{**} | | | 2,500 | 170,000 | 8.9 |
| 1906-1920 ^{**} | | | 1,600 | 200,000 | 8.3 |
| 1921-1925 ^{**} | 14,500 | 9,100 | 5,400 | 230,000 | 7.9 |
| 1926-1930 ^{**} | 22,400 | 13,900 | 8,500 | 275,000 | 9.8 |
| 1931-1934 ^{**} | 14,400 | 17,500 | -3,100 | 260,000 | 8.7 |
| 1935-1942 ^{**} | | | 5,500 | 300,000 | 8.7 |
| 1943-1945 | N | N | N | 300,000 | 8.3 |
| 1946-1949 | 35,000 | 5,000 | 30,000 | 420,000 | 10.8 |
| 1950-1952 | 3,000 | 1,000 | 2,000 | 425,000 | 10.3 |
| 1953-1962 | N | N | N | 425,000 | 7.4 |
| 1963-1968 | N | N | N | 425,000 | 6.5 |

・※のデータは、Wang Wen-Yuan 1937, *Les Relations entre l'Indochine Française et la Chine*, pp. 15-23より引用。コーチシナへの移住者の3分の2もしくはインドシナ全域への移住者の3分の1になるように推計している(原文注)。

・N = 微小な人数(原文注)

出典: Willmot (1970: 6)

表2 カンボジア語における主な華人の呼称

| カンボジア語での呼称 | 意味 |
|-------------|---------------|
| チェン | 中国人全般、中国人一世 |
| コーン・チェン | 華人二世(中国人の子ども) |
| コーン・チャウ・チェン | 華人三世(中国人の孫) |
| コーン・カット・チェン | 中国人との混血 |
| クサエ・チェン | 中国(華人)系 |

出典: 筆者作成

4-2. 仲買人としての華人系クメール人

Ter Horst (2011)の研究はそれまで、単純に「クメール人」としてしか描かれてこなかった絹織物業従事者の華人としての出自やその商法の特質に光を当てた点で、画期的であった。華人系クメール人絹織物生産者、仲買人の出自のひとつとして、中国南部の養蚕地帯であった珠江河口の広州、香港、深圳市、東莞市、マカオを結ぶ三角地帯を中心とする地域を挙げている。このデルタ地帯に居住していた絹糸の中間業者や養蚕業者が、中国国内での絹糸価格の下落や戦乱からの亡命のため、17、18世紀以降に東南アジア地域に移住したのが、養蚕技術をもつ華人がカンボジアに土着化した契機であったことを、Willmot (1970)の研究により明らかとなったタカエウ州の絹織物産地の墓石から、その出身地に珠江河口地域が多いことを根拠に挙げている。タカエウ州以外の華人系の絹織物業従事者も同様の出自であるのか、また、ポスト・アンコール王朝期の王宮の織り子との関係については、今後の課題である。

現在カンボジアの絹織物業の仲介を行う、仲買人、卸業者の大半は華人系クメール人が担って

いる。その多くは村落部に住んでいた元織り手が首都に住む親せきなどを頼って、仲買人として起業したり、別の業種の商店経営者が絹織物の需要の高まりに応じて分野替えをしたといった例が見受けられる。各産地で生産された絹織物は、仲買人によって一旦首都プノンペンの5大市場（オリンピック・マーケット、オールッセイ・マーケット、オールド・マーケット、セントラル・マーケット、ロシアン・マーケット）に運ばれ、そこから卸売業者に買い取られて、さらに全国各地の店舗へと販売される。

Ter Horst (2011) は、華人系クメール人の絹織物仲買人へのインタビュー調査をする中で、なぜ彼らが華人系であることを主張せず、「クメール人」であろうとするのか、という疑問を抱いた。調査の結果、その理由として、自発的というよりも、植民地期およびその後の華人に対するクメール・ナショナリズムによる同化圧力の結果ではないかと分析している。また、近年の国際観光客相手の商売においては、オーセンティックな「クメール」の商品が選好されるので、自らも戦略的に「クメール人」であろうとする意識が働いているため、としている。たとえば、プレイ・ヴェン州の織物産地出身の仲買人 Yuon 氏の事例では、自らを、他者に対しては、「クマエ・ユーン」（われらクメール人）と語る一方で、クメール人に対する優越意識も同時にもっている。実際、商売上の経験でクメール人に借金を返済してもらえなかったという経験から、警戒もしている。華人には独特の水平的な金銭貸借のシステムがあり、商売上有利であるとも考えている。一般にカンボジアの農村地域では、低金利の金融機関はほとんど存在せず²³⁾、華人系の高利貸しに借りたり、掛け買いで商店から生活必需品や、農業や手工業に必要な物品の購入をしたりしているが、利子は富裕層に有利で、貧しく返済の信用が足りない場合には、返済期間や利子がより不利に設定されている場合が多く、起業や事業展開のための自己資金を貯蓄することが難しい。

Willmot (1970: 108) は、カンボジアにおける華人の起業のための資本について、以下のとおり述べている。ほとんどの中国人のビジネスの資本は、経営者自身の貯蓄によって賄われている。プノンペンで中国系実業家の半生について調査した51件のうち25件は、資本は自分自身で貯蓄したものだ。ある人は15年間従業員として働いて貯めたという。また、その他の資本蓄積の方法として、同族 (kinsmen) やすでに自分のビジネスを確立した家族から得られた事例 (10件)、もしくは妻の両親からの事例 (9件) を挙げている。資本を増やすほかの方法として、トンチン (tontine) がある。しかしトンチンの本質は、初めの会社を設立するためというよりも投機が目的である。急に多額の金が必要になった企業家が、彼とトンチンを組んでもよいという9人から11人の他の人に声をかける (トンチンは通常10人か12人のメンバーで行う)。各参加者は初回の会合で金額を決め、すべてのお金が主催者に行くことを合意する。トンチンはそれから毎月集まり、参加者が同額を拠出するのである。トンチンは、カンボジアに限らず、中国人社会のあらゆるところで見られる慣習であり、掛け金も10~100,000リエルと幅があると柔軟な慣行であることも指摘する (Willmot 1970: 108)。

一方で Willmot (1970: 107) は、華人は方言・同郷集団をつくっているものの、方言グループによる職業の特化は彼が調査したインフォーマントからはあまり表れてこなかったと述べる。たとえば、華人の中で最大人口の潮州系は、いくつかの例外を除いてほぼすべての職種におり、海南系は、レストランやホテル、客家系はパン屋や伝統的薬屋、歯医者、福建系は金物商、広東系

は大工や修理工といった具合である。さらに、「プノンペンで中国人の貿易組合や職人組合（ギルド）は少ない。肉屋や廃車の組合がある位であり、たとえ組織をつくってもその時だけですぐなくなってしまう。インフォーマントは様々な職人組合の存在について言及はするが、実際には存在しないようだ。プノンペンにおける中国系の各会社は、大方自立的に運営されている。」と記している（Willmot 1970: 108）。

このように華人は、必ずしも実際には強固な組織をもって同族集団の経営ネットワークを持っているわけではないが、経済以外の社会関係が、経済的交流の強化や信用に関係するという点では、華人としての社会的慣習の共通性が、華人同士の商取引のつながりに結びついている可能性がある。絹糸の取引には、多くの資本金が必要となり、農村地域で絹糸および絹織物の仲買人になるには初期の資本と信用が欠かせない。仲買人には華人系ではないクメール人もいるが、圧倒的多数は、農村の市場町に暮らす余剰資金を有する華人系クメール人である。

4-3. 生産者としての華人系クメール人：絹織物生産地の事例

上記のように、カンボジアにおける華人の特質を踏まえたうえで、絹織物業における生産者としての華人系クメール人の役割についても検討する。ここでは華人系クメール人の生産者の事例として、筆者が2005年以降調査したカンボジアを代表する絹織物「ホール」の2大産地であるプレイ・ヴェーン州、シトー・コンダール郡、PL村の事例を挙げる²⁴⁾。カンボジアの村落の類型は、主な生業（地理的環境が大きく影響する）により2つの村落形態に分けられる。すなわち、稲作（雨季田）を主な生業とする「スロック・スラエ」（稲作村）と河岸沿いの畑作を主な生業とする「スロック・チョムカー」（畑作村）である。後者には華人系クメール人が多く住むという特徴もある。PL村は、畑作を主な生業とする典型的な「畑作村」（スロック・チョムカー）で、メコン河支流のトーイッ川の自然堤防上にある列状村落である。トーイッ川の小高い自然堤防を離れ、川から距離が遠くなるとともに土地は低くなり「稲作村」（スロック・スラエ）が広がっている。絹織物を生産しているのは、「モアット・トンレー」（川岸）にある村々であり、そこから離れた村ではかつて日用品の綿織物は生産されていたが、高度な絹織物の技術は基本的に保持していない（朝日 2012）。

PL村は、2008年の統計で292世帯あり、総人口は、1,481人（男性：670人、女性：811人である²⁵⁾。同年の村長へのインタビューによれば、村内の民族構成は、約8割が華人系クメール人、その他、クメール人、チャーム人2家族ということであった。日頃数km先のメコン河中州においてホールを生産するチャーム人との交流はない。またタカエウ州のホール生産者（その多くは華人系クメール人）との通婚もほぼ見られない。

PL村のマジョリティである華人系クメール人は、日常的にクメール語を用いており、中国語の読み書きができる者はほとんどいない。祖先祭祀の棚や、中国正月、清明節などの中国式行事を維持しつつ、上座仏教徒としても地域の寺院を建立、維持し、深く信仰に帰依している。華人系子孫の言語グループについて尋ねたところ、ほとんどが100年以上前に先祖が移住したため不明との回答であった。曾祖父母の代に移住してきた人は稀にわかる場合があり、2010年に対面で行った100世帯の調査対象者のうち父方もしくは母方、双方が潮州系とする回答者が7例、父方もしくは母方、双方が広東系とする回答者が4例であった。Ter Horst (2011) によれば、前述

のとおり、タカエウ州の絹織物産地に移住してきた養蚕、機織の技術をもつ華人の人々は広東系が多かったとされている。

元僧侶で村の知識人（ネアック・ダン）として尊敬を集める K 氏による村の縁起²⁶⁾ では、19 世紀初頭に現在の市場近くに Miah（金）という夫婦が住みついたことが開村の起源である。PL 村のあるメコン河沿いの地域は、15 世紀半ばのアンコール王朝崩壊後、王都が変遷した地域でもあり、15 世紀から 18 世紀にかけても人の居住はあったと考えられるが、Delvert（2002）の指摘にもあるとおり、今日 PL 村のある自然堤防近くの畑地は、治水技術をもつ華人が 18 世紀以降に移住して開墾したことに始まると考えられ、おそらく金夫婦もそういった華人の移住者であったと想定される。華人らは、天水でまかなわれていた雨季田とは異なり、河川にブレックと呼ばれる掘割をつくり、水を自然堤防の外側にある畑地に引き、綿花や豆、トウモロコシなど換金作物を栽培した。乾季田も多少所有していたが、一家の食を賄うには足りず、周辺の稲作村のクメール人の米と作物を交換していた。絹織物のような比較的高価な商品は、仏領期から物々交換ではなく、金を介して取引きしていたといわれる。華人たちは当初は、地域の市場の中心に住み、そこから川沿いに周辺地域へとクメール人との通婚をしながら徐々に土着化していったと考えられる。現代においても、クロマー（主に綿でできた万能布）などの日用品の生産技術は川沿いに限らず、川から離れた水田地帯のクメール人集落の人々にも内戦以前は広く所有されていたが、高度な絹織物の技術は川沿いの中でもとくに金夫婦が定住したという市場がある村の近くに最も集約されており、市場から離れるにつれ、高度な絹織りの技術を内戦以前から知っていたという人は少なくなる。絹織物生産自体は、内戦以前から行われていたが、その技術は一部の家族に限定的な秘儀とされており、内戦後、農地の接収により困窮したそのほかの人々が生活のため、下請けとなって生産技術を徐々に学んでいったことが、現代における技術拡散の大きな経緯となった。

PL 村の周辺の稲作村の住民には、華人の子孫は比較的少なく、PL 村との婚姻関係もかなり限られている。PL 村は絹織物のほかにトウモロコシやゴマ、タバコの葉など換金作物を主に販売しているが、乾季田も少し所有している。この乾季田の収穫の繁忙期には、内戦前から周辺の稲作村の働き手を毎年雇用する慣行があり、村外からの雇用者は地域の名望家の家に寝泊まりし、呼ばれると作業に赴いたといわれる。現在でもこうした慣行は行われており、親戚関係にはないものの、河川沿いの華人と河川から離れた平地で暮らすクメール人との間に「顔見知り」（ネアック・スコアル・クニア）がいることの背景となっている。2000 年代以降、絹織物業が発展し、その準備工程に人手が必要となった際に、当初は PL 村内の技術を持たない人々（その多くはクメール人）に依頼していたが、飽和状態となり、また当初依頼していた人々が独立して自分の織機を持つようになったため、村外の周辺のクメール人の村々に委託するようになった。PL 村をはじめとするホルの生産技術をもつ川沿いの村（華人系クメール人が多数を占める村）と技術を持たない周辺の稲作村（クメール人が多数を占める村）との間で、機織りの前の準備工程「チョーン・ソー」（緯糸の括り）の委託雇用（チュオル・ケー）が、2003 年頃から急増し始めた（朝日 2012）。PL 村の住民とスロック・スラエのクメール人とは、こうした関係を維持しているほか、仏教行事においても周辺の寺院への参拝もあり、婚姻関係は少ないものの互いの人的交流は折にふれてあることが判明した。

おわりに

冒頭でも述べたとおり、カンボジアにおける絹織物業は、さまざまな民族的背景をもつ人々によって支えられてきた。オーセンティックなものづくりのすばらしさは、「伝統文化」が消えゆく中で再評価され、保持される対象として賞賛されるが、一方で、カンボジアとその領域を超えたアジア地域内の歴史的な文脈を踏まえた、さまざまな文化的背景を内包した多重な様相にこそ、カンボジアの文化研究としての意義があり、より詳細な研究をしていく必要があるのではないかと。

本稿では、まずカンボジアにおける絹織物のモノとしての文化的重層性について検討した。その結果、歴史的にインド、中国、マレー系の文化の影響を受けつつも、それを取捨選択し、とくにポスト・アンコール期において、東南アジアに数多くある絁織りのなかでも、カンボジアは独自の文様、生産技術を編み出していった。たとえば、インドのパトラの文様を模倣しつつも、技法的にはパトラのような経緯絁より手間の少ない緯絁を選択し、一方で地組織においては、東南アジアの絁織で一般的な平織ではなく、括り染めした緯糸が経糸より表面に多く表れるため、文様がより美しく見える技術を確認した過程が明らかとなった。一方で、こうした技法の確立を支えた、とくに現在に連なるポスト・アンコール期における生産者の人的移動については推測の域であり、宣教師や探検家などの西欧人來訪者の記録なども含めた同時代資料などからのさらなる検証が必要となる。

次に現代における絹織物業者のエスニシティについて、華人系クメール人の役割を中心に分析した。華人系クメール人の「クメール人」アイデンティティ、「華人系」アイデンティティは相反するものではないが、とくにオールドカマーにとっては政治的な外圧を受ける中で、その表出について苦慮してきた経験があり、文化的にもフランス保護領からの独立後のクメール化政策の中で同化をし、クメール語話者、上座仏教徒として暮らしてきた背景がある。また華人系の商工組織は、都市部では明示化されているものの、農村部では対仏独立以降は目立った活動はなく、ゆるやかな親族としての信頼関係で結ばれている。また、華人系独自の中国正月をはじめとする年中行事や、トンチンなどの商慣行は残されている。これまでカンボジアの絹織物業へのインド、マレー文化の文様、技術的影響は強く指摘されてきたが、一方で華人系クメール人が生産する織物自体に Ter Horst (2011) が指摘するような、華南の特定地域の染織文化が反映されているのかは、まだ明らかとなっていない。

最後に、カンボジアの絹織物業の文化的重層性に関する残された課題として、華人系クメール人以外のチャム人や山岳地域に居住する少数民族など、平野部のマジョリティ以外のエスニック・グループによる絹織物業生産に関する研究が少ないこと²⁷⁾、絹織物業をめぐる各エスニック・グループ間の関係についてのより詳細な研究などが挙げられる。これらの研究が進めば、カンボジアにおける農村手工業の歴史的変遷や担い手の特質についてより動的に捉えることができるようになることが期待される。

参考文献

- 朝日由実子 (2008) 「カンボジアにおける消費社会の到来と高級染織の興隆：衣服として的高级絁絁ホールの変遷と衣装カタログ雑誌の誕生」『カンボジアの文化復興』第21号、pp. 89-106.
—— (2012) 「カンボジア、メコン河支流沿いにおける絹織物業生産と地域社会：スロック・チョムカーとスロック・

- スラエの関係を中心に」『社会情報研究』第10号、pp. 65-78.
- 稲村務 (2011) 「カンボジア華人のエスニシティ」鈴木規之、稲村務 (共編) 『越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球』、pp. 327-352、東京：彩流社.
- 井上絃一 (2006) 「民族」石川栄吉他 (共編) 『文化人類学事典』、pp. 749-751、東京：弘文堂.
- 岩永悦子 (編) (2003) 『カンボジアの染織』、福岡：福岡市美術館.
- (2005) 「東南アジアの織物文化におけるカンボジア：チャム・マレー人の技術を中心に」『季刊民族学』112号、pp. 94-97.
- 植村和代 (2003) 「カンボジアの染織文化」『カンボジアの染色』、pp. 124-130、福岡：福岡市美術館.
- 北川香子 (2006) 『カンボジア史再考』、東京：連合出版.
- 小泉順子 (2006) 『歴史叙述とナショナリズム：タイ近代史批判序説』、東京：東京大学出版会.
- 荒神衣美 (2004) 「カンボジア農村部絹織物業の市場リンケージ：タカエウ州バティ郡トナオト行政区 P 村の織子・仲買人関係」天川直子 (編) 『カンボジア新時代』、pp. 223-273、千葉：日本貿易振興会・アジア経済研究所.
- 周達観 (著)、和田久徳 (訳注) (1989) 『真臘風土記：アンコール期のカンボジア』、東京：東洋文庫.
- デルヴェール、ジャン (著)、石澤良昭 (監訳)・及川浩吉 (訳) (2002) 『カンボジアの農民：自然・社会・文化』、東京：風響社 (原著： *Le Paysan Cambodgien*, 1994 [1961], Paris: L'Harmattan).
- 野澤知弘 (2003) 「カンボジアの華人社会」『地理』48巻8号、pp. 29-34.
- 松井生子 (2008) 「カンボジアにおけるマイノリティ研究：その位置付けと現状」『民族社会研究』第5号、pp. 73-102.
- 村嶋英治 (2004) 「ナショナル化に呑み込まれるエスニシティ：クメール人とは誰か？」『アジア太平洋討究』vol.6、pp. 55-71.
- 山下晴海 (2003) 「華人社会を知る：その見方、歴史、現状 (特集 華人社会を学ぶ)」『地理』、48巻8号、pp. 8-15.
- リード、アンソニー (著) 平野秀秋・田中優子 (共訳) (2002) 『大航海時代の東南アジア〈1〉貿易風の下で』、東京：法政大学出版局 (原著： *Southeast Asia in the age of commerce, 1450-1680, vol. 1: The lands below the winds*, New Haven: Yale University Press, 1988).
- Asahi, Y., 2010, "The Traditional Silk Weaving Industry in a Transitional Economy: *Hol* Production in the Prey Veng Province of Cambodia", *Sophia Cambodia Studies, The Journal of Sophia Asian studies*, No.28, pp. 49-80.
- Dupaigne, B., 1980, "Répartition des Tissages Traditionnels au Cambodge", *ASEMI*, Volume XI No. 1-4, pp. 327-337.
- , 2004, "Weaving in Cambodia", Jane Puranananda (ed.) *Through the Thread of Time: Southeast Asian Textiles*, Bangkok: River Books, pp. 10-25.
- Edwards, P., 2001, "Restyling Colonial Cambodia (1860-1954): French Dressing, Indigenous Custom and National Costume", *Fashion Theory*, Volume 5, Issue 4, pp. 389-416.
- Green, G., 2003, *Traditional Textiles of Cambodia: Cultural Threads and Material Heritage*, Bangkok : River Books.
- , 2004, "Textiles at the Khmer Court, Angkor", Jane Puranananda (ed.) *Through the Thread of Time: Southeast Asian Textiles*, Bangkok: River Books, pp. 10-25.
- Ly, S., 1998, *Viti Thve Hol robob Sattrei Khmae*, Phnom Penh: Cambodian Institute of Human Rights [Method of the making *Hols* by Khmer women].
- Maxwell, R., 2003, *Textiles of Southeast Asia: Tradition, Trade and Transformation*, Hong Kong: Periplus Publishing.
- Morimoto, K., 1995, "Research Report Silk Production and Marketing in Cambodia for UNESCO Cambodia Revival of Traditional Silk Weaving Project", Phnom Penh: UNESCO.
- Peycam, P., Ogawa N. and Nishikawa J. (eds.), 2004, "A Blending of Two Esthetics: the Khmer and Cham Senses 'Hol' the Art of Cambodian Textiles", Seminar Proceedings 12-13 Dec. 2003, Siem Reap: Institute for Khmer Traditional Textiles and Center for Advanced Studies.
- Ter Horst, J., 2011, *Ikat Weaving and Ethnic Chinese Influences in Cambodia*, Bangkok: White Lotus.
- Victor-Pujebet, B. and A. Peyre, 2001, "Options for Establishing a Full Production and Marketing Chain for Silk

Products in Southern Cambodia”, Phase-II, Phnom Penh: PRASAC.

Willmott, W. E., 1970, *The Political Structure of the Chinese Community in Cambodia*, London School of Economics Monographs on Social Anthropology: No. 42, London: The Athlone Press University of London.

統計資料

National Institute of Statistics, Ministry of Planning of Cambodia, 2008, “General Population Census of Cambodia 2008 Final Census Results Figures at a Glance”, Phnom Penh.

—, 2013, “Cambodia Inter-Censal Population Survey 2013 Final Report”, Phnom Penh.

注

- 1) カンボジア王国計画省統計局が2008年に実施した国勢調査結果では、総人口1,340万人のうち都市人口率は、19.5%であり、産業別人口割合は、第一次産業（農林水産業）が72.3%、第二次産業（鉱工業）が8.5%、第三次産業（サービス業）が19.2%であった。2013年に同局が実施した2013年中間年人口調査結果では、総人口1,468万人のうち都市人口率が21.4%、産業別人口割合は、第一次産業が64.3%、第二次産業が11.5%、第三次産業が23.8%であった。すなわち2008年からの5年間に都市化が徐々に進む一方、農林水産業に従事する人口が急激に減少していることが明らかである。一方でカンボジアは東南アジア諸国の中では都市化率が低い方である。村落地域では耕作地の世代間での分与が進む中で、農林水産業のみでは現金収入が足りず、都市・国外への出稼ぎや、村落部での家内制手工業やサービス業が増加している。
- 2) クメール人は、言語学的分類上モン・クメール語族系のクメール語話者である。そもそもクメール人自体が、インドシナ半島の原住民および中国南部地域から南下してきた人々たちによる複合的な民族移動を元に形成された集団である。たとえば村嶋（2004）は、タイにおけるクメール人のアイデンティティの問題を通して、そもそもクメール人とはどのような集団を指すのか問うている。1953年のフランス植民地支配からの独立後の国民国家建設のための近代化政策の中で、「カンボジア国民」としての枠組みが強化され、クメール人アイデンティティが醸成されてきたが、その後もカンボジア王国国民である「カンボジア人」と主要民族を指す「クメール人」は、日常会話のうえではほぼ同義として使用されているため、そもそも「クメール人」という集団の定義についての議論は未だ十分とは言えないし、曖昧になっていることが、むしろその特徴のひとつであるとも言える。
- 3) たとえば、Dupaigne（1980: 332）は、「クメール人女性によって着用されていたカンボジアの最も美しい『伝統的な』サンポット（スカートの意；筆者注）も、やはりコンボン・チャーム（州）のチャーム人によって制作されたものだった。土地を持たない集団に閉じ込められていたがゆえに、クメールの織物の古い伝統をもっともよく保持していたのは、チャーム人の女性であった」と述べている。
- 4) 山下（2003）は、世界における中国人移住者およびその子孫について、かつては一時滞在者を意味する「華僑」という言葉を用いていたが、実際には土着化する者も多く、現在では「華人」という呼称が一般的になっていると記している。
- 5) 野澤（2003）は、カンボジアにおいて華人の移住の歴史は古代にまでさかのぼり、またクメール人との通婚も多く、土着化した子孫の多くはカンボジア国籍を取得していること、農村地域まで広く居住し、もはや算出できないほど拡散していることから、「マイノリティ」とは言えないのではないかと指摘する。
- 6) フランス保護領時代には、すでに輸入布の増加やエリートの西欧化によって減産した手織物業の復興を、美術学校における教育で振興しようという試みもあった。また1930年代、1940年代にヴェトナムに留学したカンボジア人エリートたちが、仏領インドシナ連邦各地からの学生とともに学ぶ中で、自らのアイデンティティの拠り所としてカンボジア式の衣服を敢えて着用したことも記録されている（Edwards 2011）。
- 7) こうした「伝統の創造」は、主に絹織物の販売業者自身が客の期待に応えるために戦略的に行う日々の実践でもある（Ter Horst 2011）。
- 8) 2世紀にインドシナ半島南東部、現在のヴェトナム中部にオーストロ・ネシア語族系のチャーム人の建てた

王国。中継貿易で繁栄し、14世紀には陶磁器や綿布などの手工業品の輸出も開始した。17世紀末に南進を進めるグエン（阮朝）によって国の一部が属領とされ、その後もグエン朝の攻撃により1835年に滅亡した。その後、チャム人は、ヴェトナム中南部とカンボジアなどの周辺諸国に亡命した。

- 9) 元フランス政府の援助機関で現在は民間企業である Artisans D'Angkor の監修による。Artisans D'Angkor は、アンコール遺跡群があるシェムリアップ地方に拠点を置き、木工や彫像、絹織物などカンボジアの手工芸技術者の養成を伝統産業の保存と活性化として実施している。国際観光客を主な対象として工房の見学や、販売などを積極的に行っている。販売戦略のひとつとして、古代アンコール朝からの連面性は、消費者にとって魅力的であり、商品の正当性やブランド力の創造に利用されていることが伺えた。
- 10) 岩永（2003: 140）によれば、制作年代が判明している現存するカンボジアの染織品はもっとも古いもので19世紀半ばのものであり、イギリスの V & A 美術館に3点、アメリカ歴史博物館に2点収蔵されており、いずれも緋織である。
- 11) 「暹」はタイ、スコータイ朝の中国名。「暹羅」は、14世紀以降タイ、アユタヤ朝の呼称となった。後世に筆写する際、当時の呼称に従って「羅」の字を付加したと考えられる（周 1989: 89）。
- 12) チャンパー王国の中国名。
- 13) インドのグジャラート州で制作された絹の経緯緋であるパトラは、広く東南アジア諸国で権威の象徴として珍重されてきた。パトラそのものが尊ばれただけではなく、その文様が、東南アジアの染織の文様に絶大な影響を与えた。パトラの多くは、中央部に幾何学模様が菱格子状に配置される。カンボジアの染織が、基本的に菱格子状にモチーフを配することは、ナーガ（龍）の鱗を象徴するとともに、パトラの文様構成からの影響でもある（岩永 2003: 152）
- 14) ウードンは、現在の首都プノンペン北西約40kmの地。1620年から1866年まで王都が置かれた。ウードンには、城壁の中に2人の王の王宮が別々にあり、第一王の王宮には、王の妻たちの住居である粘土壁・草葺きの小さなコテージが100戸ほど建ち、湖畔に広がる石灰塗や竹造りの建物や、アンナム（ヴェトナム）人の織り子がいるアトリエ、宝物庫、倉庫、中二階の王宮があった（北川 2006）。
- 15) 岩永（2003）はこれを「ホール」という名ではなく、「ピダン」という主に寺院の天盖用布の名称と、衣服として着用した際の名称である「チョン・クバン、サンボット」と並記しているが、現代では緯緋織物が、後者として用いられる場合は、その布地を「ホール」と呼ぶのが一般的である。
- 16) カンボジア王国のマジョリティであり、クメール語を話す。宗教的には、上座部仏教、精霊信仰者が大半を占める。居住地域は、農村部を主として、都市部にも住む。カンボジア国外では、タイ東北部、ヴェトナム南部、ラオス南部などにも居住。主な生業は、公務員、農業（稲作）、漁業である。
- 17) この中には、内戦期以前から暮らし土着化したオールドカマーもいれば、1990年代半ばの市場経済化以降に中国、香港、台湾、シンガポールなどから移入した新来のニューカマーも含まれる。詳細は、第4章を参照のこと。
- 18) ヴェトナム人は、宗教的にはヴェトナム本国で信仰されている大乘仏教、キリスト教、カオダイ教を中心とするが、土着化したヴェトナム人の中には、上座部仏教を信仰する人もいる。言語は、ヴェトナム語を話し、居住地域は都市部、河川沿岸部が多い。主な生業は、事務員、職人、技術者、漁業などである。1970年代には、反ヴェトナム人運動がおこったほか、ボル・ポト時代にも多数のヴェトナム人が殺害され、内戦前に居住していたヴェトナム人のうち本国に帰還したのも少なくない。植民地期を通じて、フランス支配のステークホルダーとしてヴェトナム人とカンボジア人は反目し、独立後もナショナリズムの過程で、しばしば敵対国として取り上げられてきた。1980年代以降のヘン・サムリン政権では、ヴェトナム共産党を後ろ盾にしているため、国民感情として反ヴェトナム観は残留しているものの、政策的にヴェトナム人に対する弾圧政策は表立っては行われていないものと考えられる。
- 19) 別名、「クマエ・イスラーム」とも呼ばれる。オーストロ・ネシア語族系で、イスラーム教徒を信仰する人々を、カンボジア国内では、チャムと呼ぶ傾向があるが実際にその出自は、下記のとおりさまざまである。
 - ① 2世紀～15世紀にかけて現在の中部ヴェトナムに強大なインド的国家であるチャンパー帝国を築いた民族の子孫で、19世紀にヴェトナムに滅ぼされてから、カンボジアに数多く移住した「チャム・チャンパー」。
 - ② インドネシアからの移住者である「チャム・チュヴィア」とマレー半島から移住した「ムラユ」。チャム・チュヴィアとムラユの大部分は混血している。

「チャーム・チャンパー」の人口は約30～40万人で、言語は、チャーム語（オーストロ・ネシア語族系）を話す。宗教的には、イスラーム教、チャーム・バニ教の信仰者が多い。カンボジアにおける主な居住地域は、メコン河およびトンレ・サーブ河沿岸部であり、とくにコンボン・チャーム州に多く住む。主な生業は、漁業や牧畜業、織物業である。

- 20) 総称して「クマエ・ルー」（高地クメール人）と呼ばれる。マラヨ・ポリネシア語族系のジャライ人をのぞき、大多数はクメール人と同じモン・クメール語族とされるが、独自の文字は持たず、民族ごとに口頭言語は異なる。人口は約7万5,000人といわれ、宗教は、精霊信仰、キリスト教などを信仰している。居住地域は、国土の周縁にある山岳地域である東北部のラタナキリ州、モンドルキリ州、ストウン・トラエン州、クロチエ州、タイ国境付近（プレア・ヴィヒア州、コンボン・トム州）、ポーサット州の一部などである。主な生業は、狩猟・採集、焼畑移動農耕である。
- 21) 現在でも NGO などの支援の下、カンボウジュ種と呼ばれる野蚕に近い多化性品種の生産が続けられているが、タイ国境のバンテアイ・ミアンチャイ州など非常に限定された地域で行われている。
- 22) チャーム人とクメール人のつくるホルの差異の問題については、Peycam, P. and others (eds.) (2004) を参照のこと。ホル以外にも、チャーム人（多くは、メコン河岸やトンレ・サーブ河岸に居住）は、クロマー（手ぬぐいのような万能布）やサロン（腰布）などクメール人と同様の製品を生産している。現在では、クメール人の作るサロンは「サロン・クマエ」、チャーム人のつくるサロンは「サロン・チャーム」と呼ばれ、それぞれ色使いが異なる。
- 23) 2000年代になり、ACLEDA、PRASAC といったマイクロファイナンス機関が、地方地域の支店を増やしている。しかし集団責任制をとる貸付の場合、金融機関が要求しなくてもグループ内で各自の担保を条件に集団を組む場合があり、担保を出せないより貧しい人々には結果的に利用しにくいとの声も聞かれる。
- 24) Ter Horst (2011: 18) によれば、カンボジアにおいて絹織物生産に使用される織機は、タカエウ州で10,486台、コンダール州で6,365台、コンボン・チャーム州とプレイ・ヴェーン州（産地が隣接しているため合算されている）で2,461台存在する。このうち、コンダール州では、紋織りが盛んであり、緋織り（代表的なものはホル）が盛んなのが、タカエウ州とコンボン・チャーム州およびプレイ・ヴェーン州の州境にまたがる地域の2カ所である。
- 25) PL 村を含む PL 行政区 (*khum*) 内には、5つの村 (*phum*) が存在する。世帯構成は、カンボジアの一般的な村落同様、婚姻後の妻方居住婚を基本とするが、核家族世帯が半数程度を占める。
- 26) 2009年3月の筆者インタビュー記録による。

カンボジア北東部の地下式窖窯を用いた焼き締め陶器製作 —変容・喪失した窯業民族誌の再構成—

岡山理科大学
徳澤啓一
プノンペン国立博物館
Chhei VISOH
ウボンラチャタニ大学
Sureeratana BUBPHA

1. はじめに

筆者らは、東南アジア大陸部における伝統的焼き締め陶器製作（以下「焼き締め陶器製作」と略記）に関する窯業民族誌の現地調査を継続してきた。このうち、インドシナ半島東部では、メコン本支流に沿って掘り抜き式の地下式窖窯（以下「窖窯」と略記）を用いた焼き締め陶器製作の民族誌を見ることができる。

しかしながら、近年、さまざまな要因によって、これらの民族誌が喪失している。とりわけ、ラオス南部からカンボジア北東部で低調になってしまっている。本来であれば、メコン本支流の水運を利用して、焼き締め陶器製作の流通にきわめて有利な立地にある。また、コーンの滝が介在し、メコン本流を南北に分かつとおり、ラオス南部産とカンボジア北東部産では、それぞれの流通圏を侵食しない産地間関係にあったはずである。

ところが、多くの焼き締め陶器製作の世帯において、所得程度を増大させるために、世帯生業や世帯成員の職業選択が見直された結果、焼き締め陶器製作を停止してしまったと考えられる。

一方、こうした状況を改善するため、開発援助等に伴う現代的な製作技術の移植が行われたものの、伝統的な製作技術との連繋や市場規模に応じた需給関係を構築できないまま、焼き締め陶器製作を停止した事例も少なくない。

また、土地所有に関する権利（占有権、使用権、受益権等）が確立し、森林減少劣化防止政策等によって、粘土や薪等の原材料調達に支障をきたすようになり、ほとんど無償に近かった原価が急騰した。さらに、現代的な生活様式が波及・浸透していく中で、農村部においても生活環境の衛生意識が芽生えてきた。窯焚きに伴う煙害が敬遠され、窯場の閉鎖と移転が迫られるようになった。こうした多様な要因によって焼き締め陶器製作が停止に追い込まれるようになったようである。

本稿で取り上げるカンボジア東北部ラッタナキリ（Rattanakiri）州パカラ（Pakara）村（図1-1）では、雨季の多雨によって、トンレサン（Tonle San）川が増水し、窖窯の浸水に伴って、天井が崩落したことによって、窖窯を用いた焼き締め陶器製作を停止することになった。そのため、現況の観察とインタビューによって、パカラ村の焼き締め陶器製作を記述するとともに、窖窯の構造等を再構成することにしたい。

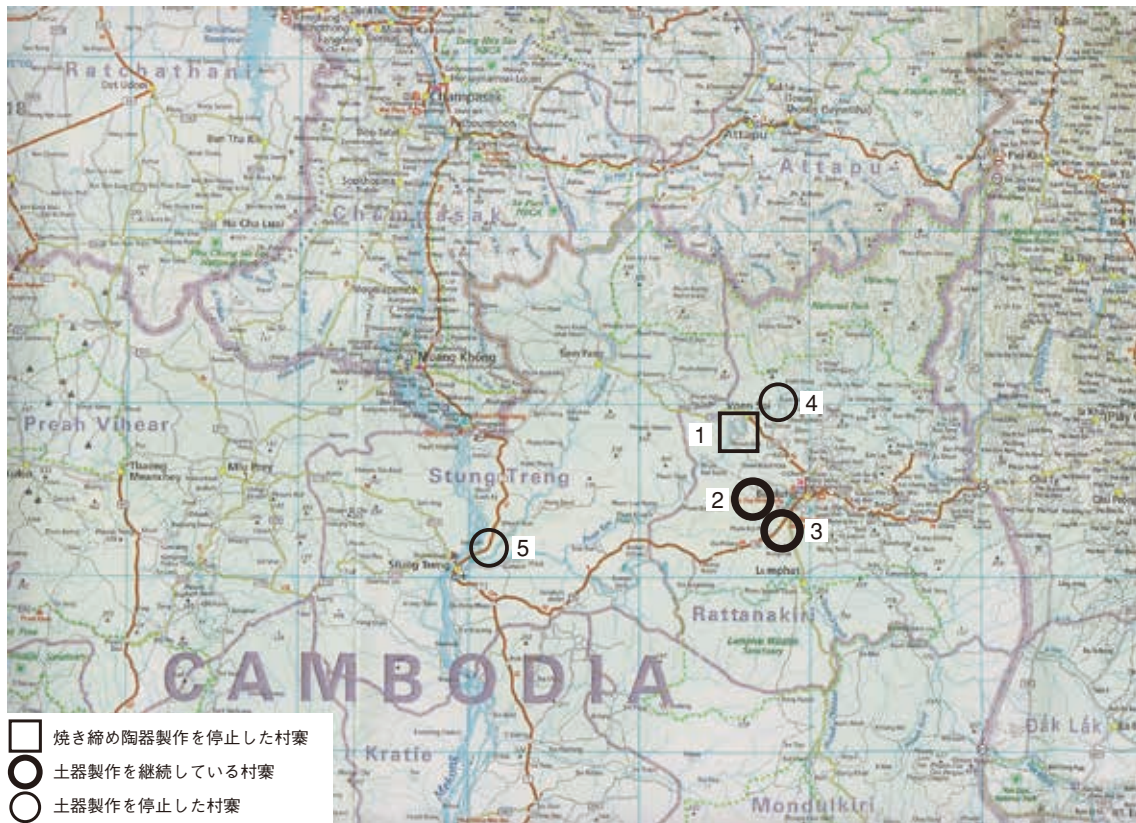


図1 ラッタナキリ州およびストウントレン州における焼き締め陶器製作および土器製作の村寨の位置
(The Rough Guide Map Vietnam, Cambodia and Laos 1/1,200,000 抜粋一部改変)

2. カンボジア北東部の窯業民族誌

当該地域の窯業民族誌に関しては、パカラ村の焼き締め陶器製作とともに、ラッタナキリ州では、土器製作の村寨3カ所、そして、隣接するストウントレン (Stung Treng) 州では、土器製作の村寨1カ所が見られる。

これらのうち、ラッタナキリ州バンルン (Banlung) 町近郊のラーンスラエ (Laen Srae) 村 (図1-2)、ラーンチャムカー (Laen Cham Kar) 村 (図1-3) では、きわめて低調ながら土器製作を継続しているものの、コベック (Kohpeak) 村 (図1-4)、ストウントレン州チャンターノイ (Chan Ta Ngoy) 村 (図1-5) では、すでに土器製作を停止している。ただし、ストウントレン州のシェムバン (Siem Pang) 付近において、2カ所の村寨で土器製作を継続しているという未確認の情報もある。

3. パカラ (Pakara) 村の焼き締め陶器製作

位置 本村寨は、ラッタナキリ州ブンサイ (Veun Sai) 郡パカラ村であり、北緯13度56分1秒、東経106度45分26秒に位置する。ブンサイ町近郊の焼き締め陶器製作の村寨である (図1-1)。

製作者 ラオ族が居住し、近年まで焼き締め陶器製作を継続していた。男性が成形し、女性が補助するものの、女性の役割は、粘土紐の作出、回転台の旋回等に限定されており、成形の主体的役割は男性にあったという。直近では、EUのNGOの支援によって、ベアリング入りの手回し



図2 ベアリング入りの手回し有軸回転台



図3 蹴轆轤



図5 細身のハイ・ナム (Hai Nam)



図6 伝統的な有軸回転台



図4 *Hai Padek* (1/4)
 (外口径18.5cm、内口径9.2cm、最大径
 22.7cm、底径14.2cm、器高25.2cm)



図7 成形道具 (1/4)

1 : Vi (幅9.6cm, 長さ4.7cm, 厚さ4mm, 重量11g)、2 : Vi (幅8.7cm, 長さ5.3cm, 厚さ4mm, 重量12g)、
 3 : Vi (幅7.8cm, 長さ6.0cm, 厚さ6mm, 重量21g)、4 : Vi (幅9.0cm, 長さ5.2cm, 厚さ9mm, 重量19g)、
 5 : Me (長さ24.0cm, 幅4.7cm, 厚さ4mm, 重量33g)、6 : Me (長さ11.2cm, 幅2.7cm, 厚さ6mm, 重量13g)、
 7 : Me (長さ17.4cm, 幅4.5cm, 厚さ6mm, 重量20g)、8 : Me (長さ15.7cm, 幅4.0cm, 厚さ11mm, 重量25g)、
 9 : Me (長さ11.8cm, 幅4.1cm, 厚さ5mm, 重量16g)、10 : Me (幅7.1cm, 長さ4.7cm, 厚さ4mm, 重量12g)

回転台 (図2) や蹴轆轤 (図3) が提供されたことにより、男性一人だけで成形するようになったという。また、近年の多雨によって、窯窯の天井が崩落し、使用不能になってしまった。近在では、すでに窯掘り職人も不在となっており、これによって、「伝統的」な焼き締め陶器製作を停止することになってしまった。そして、欧米の NGO の支援によって、地上式の煉瓦積みの昇炎窯の導入が試みられたことで、現代的な陶器製作に移行してしまった。

製作器種 酒甕ハイ・ラオ (Hai Lao)、発酵食品用のハイ・パデック (Hai Padek・図4) に加えて、水甕用途のハイ・ナム (Hai Nam・図5) を製作している。これまで無文のハイ・チュー (Hai Chu) が主体であったが、NGO の助言や指導によって、文様装飾の華やかなハイ・トン (Hai Tong) が製作されるようになった。

素地製作 トンレサン川の水辺の近くから粘土を採掘し、天日で乾燥させて、踏臼で粉碎していた。これを篩掛けし、数日水漬けしてから手足で混練していた。

成形 木製の有軸回転台の上で粘土円盤を作出し、この上に粘土帯を積み上げる。粘土紐および粘土帯等の粘土紐積み上げ技法の詳細は聴取できなかった。粘土紐積み上げ技法で作出した匣鉢形状原型の上端をナデ挽いて、口縁部を成形する。原型の体部を木製のヘラ状工具でコテ当てし、体部を膨らまして、胴部を成形する。体部の拡張程度は確認できていない。製作道具の名称は、有軸回転台がピエン (Pien) であり、台面の直径38cm、台面の厚さ4.5cm、四角柱状の軸受が一辺16cm、高さ16cm を測る (図6)。コテ当てに用いるヘラ状工具はヴィー (Vi) である。ヴィ



図8 トンレサン川から1号窯跡および2号窯跡を望む

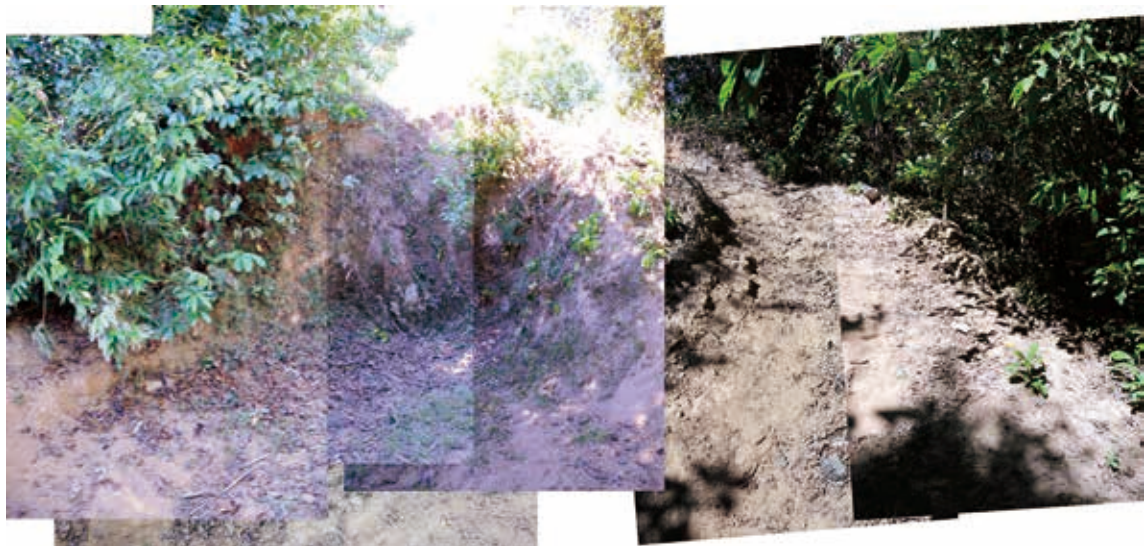


図9 1号窯跡 正面

一は、内面用のもの（図7-1～4）と外面用のもの（図7-5～10）、内面用は刃部が凸状の曲刃を呈し、外面用は、刃部が平状の直刃を呈する。なお、ヴィー中央の握り込み用の指穴は最近の改変である（図7-1、2、10）。しかしながら、ランスラエ村およびランチャムカー村と同じように、パカラ村では、ベアリング入りの手回し回転台や蹴轆轤等が導入されているとおり、焼き締め陶器の製作技術に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

焼成 成形は、製作者の住宅の敷地内で行われるものの、窯場に関しては、パカラ村の集落がトンレサン川の崖線沿いに集住しているとおり、煙害を嫌って、住宅地から離れた場所にある。掘り抜き式の窖窯は、舟で10分程度の下流にあり、トンレサン川北岸の段丘崖を切り土して築窯されていた（図8）。しかしながら、近年の多雨によって、天井が崩落したことから、すでに廃絶されていた。また、事故が起きないように、焚き口部が埋め戻され、段丘崖上段の排煙口が塞がれていた（図9）。現地調査は、雨量の比較的多い8月であったものの、焚き口から川辺までの



図10 1号窯跡の排煙坑からトンレサン川を望む



図11 1号窯跡 排煙坑

前庭部が8 m程度しかなく、水面との比高差が2 m未満であった。このように、1号窯跡は、雨季の水位の上昇に伴って、窯が相当の影響を受けていたと考えられる(図10)。また、焚き口は、水辺から8 m程度、崖線から5 m程度奥まっており、本来の崖線を塵取り状に切り土し、築窯時の排土とともに、衝立状の風防兼スロープを構築している。この5～8 m程度の奥行きが前庭部にあたり、焚き口から川辺までの距離が短いこともあり、トンレサン川に掻き出し、灰原・物原ともに、川底に堆積しているという。

また、窯体内部に関しては、天井が崩落し、焚き口が埋め戻されていることから、まず、現況の観察によって、本来の窯構造を推測してみた。1号窯跡は、段丘崖法面がほぼ垂直に切り土され、この段丘崖法面下部を横方向に掘り抜くこと

で焚き口が設置されている。現在の地表面から数10cm程度下部に焚き口があるという。天井崩落後、開口していた焚き口を閉塞し、また、段丘崖法面が地滑りし、前庭部は数10cm埋積されている。焚き口から差渡し5 m程度のところに、直径60cmの煙道が位置することから、窖窯の全長は5 m程度であると推測できる(図11)。さらに、段丘崖上段と前庭部の地表面の比高差が4 mであり、焚き口の上面と焼成部床面がほぼ同じ高さと考えると、焼成室から燃焼室にかけての土被りは、火前側で少なくとも4 m以下、3.5m程度の厚さであったことになる。

次に、インタビューによって1号窯跡の構造と計画寸法を聴取したところ、現況の観察で推測した数値をほぼ裏付ける証言が得られた。ホワイトボードに図示された模式図によると、全長5 m、最大幅6 mである。このうち、焼成部は、全長3.5m、最大幅3.5mであり、火前側が広い三角形状を呈する。焼成部床面は、窯尻にかけて尻上がりとなり、直立する煙道に至るという。焼成部と煙道の括れは、高さ50cmに窄まる。天井は比較的高いアーチ形状を呈するというが、詳細は不明である。またホワイトボードに描かれた床面が急斜度であるものの、実際の床面傾斜の程度は定かでない。土被りは、厚さ4 mである。となると、前庭部の埋め戻しの厚さは、50cm～1 m程度と見積もられる。燃焼部は全長1.5m、最大幅6 mを計り、焚口の開口部は、高さ50cmであったという(図12)。

また、焼成温度に関しては、測定者・測定方法等が定かでないものの、午前6時に点火し、午前9時30分300℃、午前10時30分460℃、午前11時30分620℃、午後1時30分750℃、午後2時30分820℃、午後4時45分900℃に達したという記録が遺されていた(図13)。

なお、トンレサン川北岸の崖線には、複数の廃絶された窖窯が放置されているという。1号窯

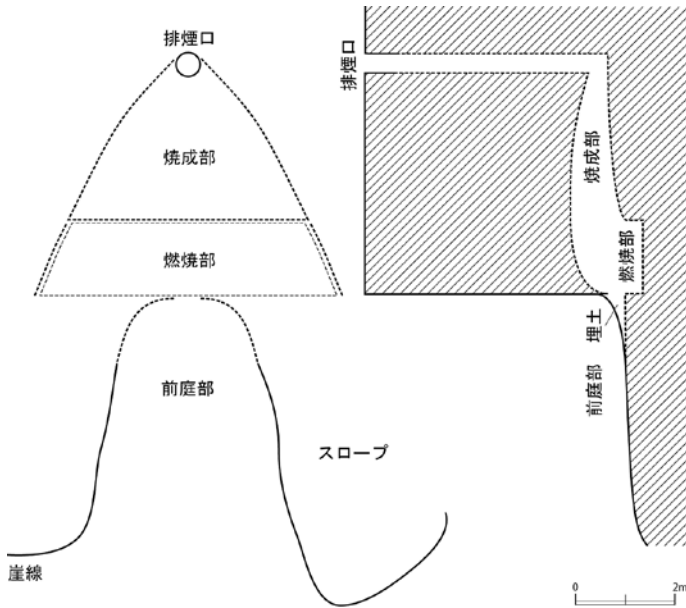


図12 1号窯跡の窯床平面と断面の模式図 (1/150)

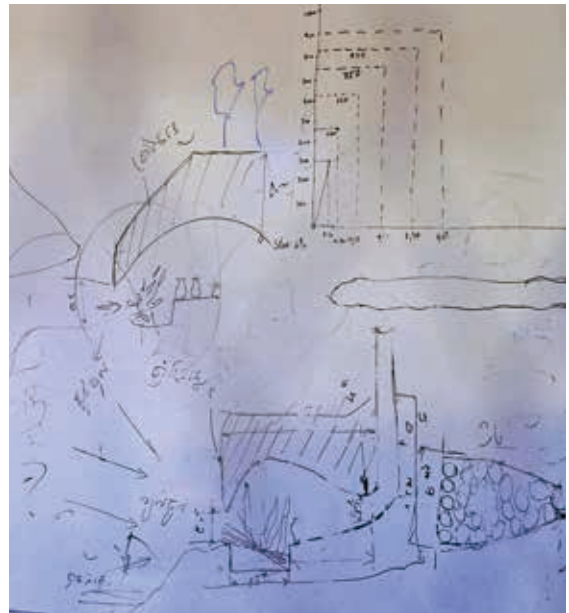


図13 1号窯跡の計画寸法と焼成温度変化

跡の東隣には、別の窖窯に伴う排煙口を確認することができた（2号窯跡）。2号窯跡は、1号窯跡と同じように、崖線から5m程度奥まったところに排煙口が位置するとおり、1号窯跡と同じような規模であったと推測することができる。

5～6年前、まだ窖窯を用いて焼き締め陶器製作をしていた頃、NGOの支援で煉瓦積み of 地上式窯が築窯されたことがある（図14）。高天井で床面傾斜の長い長楕円形状を呈する高容量の地上式窯であったものの、ほとんど使用されないまま廃絶されてしまった。また、窖窯の操業を停止してから、耐火煉瓦積み of 昇炎構造体を下部にもつ地上式窯が導入され、焼き締め陶器というよりは素焼きの土器に近い焼き上がりとなった（図15）。

4. 窖窯の地域差とパカラ村1号窯跡

インドシナ半島東部では、2016年2月時点で焼き締め陶器製作の民族誌13カ所を数えることができる（図16）。このうち、焼き締め陶器製作を継続している村寨はわずか5カ所にすぎない。筆者らは、焼き締め陶器製作を停止した村寨を含めて、平板等を用いた簡易的な測量を行うことで窯構造を通覧してきた。その結果、下記のような分布が明らかとなった。

ベトナム北部のソンラー省ムオンチャイン（Muong Chanh）村（図16-1）、ラオス北部のサムヌア県バーン・ルー村（図16-2）、ルアンパバーン県バーン・チャン村（図16-3）、ルアンナムター県バーン・ヨー村（図16-4）では、焼成部から燃焼部にかけての平面形が長楕円形状を呈し、窯体の全長が長大な窖窯（以下「長楕円形状窖窯」と略記）が見られた（徳澤・平野ほか2012）。

一方、ラオス中部のタケーク県バーン・ノンボック村（図16-5）、サバナケット県バーン・ノンラムチャン村（図16-6）、バーン・ナタイ村（図16-7）、そして、パカラ村（図16-13・図12）等で焼成部から燃焼部にかけての平面形が三角形形状を呈し、三角形の底辺にあたる焼成部の火前側とそこに接続する焼成部に最大幅をもつ窖窯（以下「三角形形状窖窯」と略記）が見られた。



図14 煉瓦積みの地上式窯



図15 耐火煉瓦積みの昇炎式構造体をもつ地上式窯

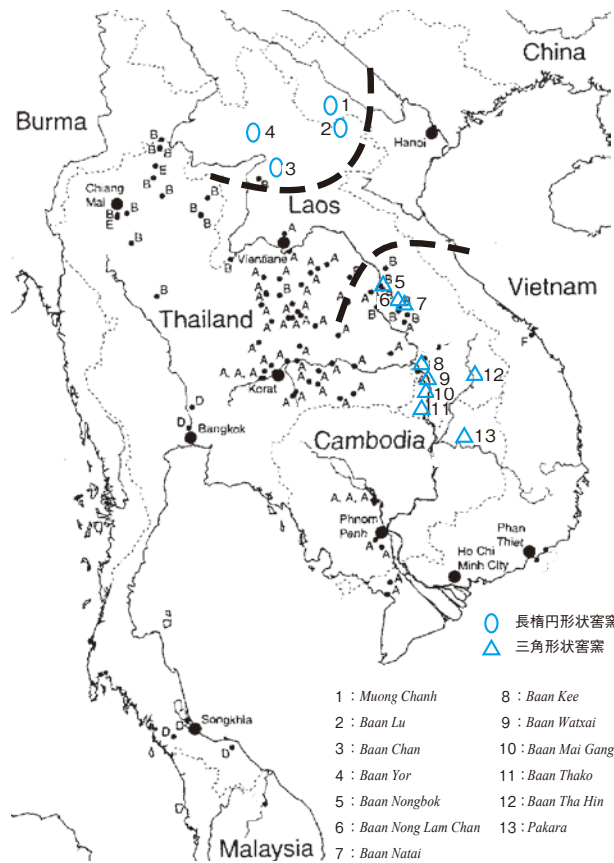


図16 窯窯の分布と地域差
(徳澤ほか2016抜粋一部改変)

以上のように、インドシナ半島東部の窯窯を縦覧すると、ベトナム北部からラオス北部にかけての地域とラオス中部からカンボジア北東部にかけての地域では、窯床面の平面形態によって、明確な地域差が存在することを明らかにすることができた (図16・徳澤ほか 2016)。

こうした中で、パカラ村の事例を見ると、現時点において、三角形状窯の最南部の窖窯であるとともに、インドシナ半島東部における地下式窖窯を用いた焼き締め陶器製作の南限ということになる。

また、こうした地域差に関しては、まずは、窖窯の立地条件に大きく左右されたことが想定される。すなわち、窖窯を掘り抜く地盤の性質、燃料等の原材料調達の事情、そして、販売にかかわる船や車（牛馬によるものを含む）等の輸送手段、流通圏や市場規模等の差異によって、窖窯の性能差が惹き起こされたと考えられる。

本来であれば、窯炊きのプロセスやカンボジア北東部産焼き締め陶器の需給関係の調査を通じて、こうした差異が生成された背景を詳細に整理しなければならないものの、すでに、パカラ村では、地下式窖窯を用いた焼き締め陶器製作を停止しており、これ以上、具体的な内容を聴取し、全体像を再構成することがきわめて難しい現状がある。

5. おわりに

パカラ村の焼き締め陶器製作の内容を掘り下げるには、文字どおり、天井が崩落した1号窯跡および2号窯跡を発掘調査するしかない。これまで、ラオス北部や中部において、廃絶した窯跡の発掘調査を通じて、変容・喪失した窯業民族誌を再構成してきた。同じように、パカラ村において、窯床の平面形や床面傾斜等の詳細を明らかにしたいと考えている。また、ストゥントレン町付近において、焼き締め陶器製作が継続されている可能性があるという証言があり、今後、これらを含めて、カンボジア北東部における焼き締め陶器製作の再調査を期したい。

謝辞

カンボジア北東部の現地調査を実施するにあたり、上智大学の石澤良昭先生、丸井雅子先生にご指導・ご援助をいただきました。深くお礼を申し上げます。

なお、本調査は、2012年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B・海外）「西南中国及び東南アジア大陸部における伝統的土器製作の比較研究」（研究代表者：徳澤啓一）の成果の一部であり、本稿の文責は、徳澤にある。

主要参考文献

- Louise Allison Cort and H. Leedam Lefferts Jr. 2000 'Khmer Earthenware in mainland Southeast Asia; An Approach through production,' *Journal of Khmer Studies*, APSAEA authority, pp. 49-68
- Leedam Lefferts Jr. and Luise Allison Cort 2003 'A Preliminary Cultural Geography of Contemporary Village-based Earthenware Production in Mainland Southeast Asia,' In Miksic J. N. (ed.) *Earthenware in Southeast Asia*, Singapore: Singapore University Press, pp. 300-310
- Leedam Lefferts Jr. and Luise Allison Cort 2010 'Pots and How they are made in Mainland Southeast Asia,' *Transactions of the Oriental Ceramic Society*, The Oriental Ceramic Society Vol. 75, pp. 1-15
- 徳澤啓一・平野裕子・Do Kien 2009 「ベトナム中部におけるチャム族の伝統的土器製作—東南アジア大陸部の伸ばし成形の比較を通じて—」『東南アジア考古学』29号, 東南アジア考古学会, 37-60頁
- 徳澤啓一・Sureeratana BUBPHA 2012 「ラオス南部における焼き締め陶器製作及び土器製作の展開—土器様式及び技術様式の地域間交流関係の整理にむけて—」『社会情報研究』第10号, 地域分析研究会, 101-152頁

- Bubpha SUREERATANA and Keiichi TOKUSAWA 2012 “U-NAM, Ang Nam, and People in Prespective of Ceramic Ecology in Salavan Province, Lao PDR”, in Proceedings of the 2nd Mekong Studies Conference, Salavanh, Lao PDR. Vol.1, ed. By Sommai Chinnak. Ubon Ratchathani University Press, pp. 205-234. (In Thai)
- 徳澤啓一・Sureeratana BUBPHA 2012 「ラオス南部における焼き締め陶器製作及び土器製作の展開」『社会情報研究』第10号, 地域分析研究会, 101-152頁
- 徳澤啓一・平野裕子・北野博司・中村真里絵 2012 「ベトナム北部からラオス北部にかけての焼き締め陶器及び土器製作の展開—焼き締め陶器製作の地域差と変容を中心として—」『東南アジア考古学』第32号, 東南アジア考古学会, 43-57頁
- 北野博司・徳澤啓一・中村真里絵 2013 「ラオス・ルアンパバーンの地下式窖窯による焼き締め陶器生産—その技術と変容—」『歴史遺産研究』No.8, 東北芸術工科大学歴史遺産学科, 12-32頁
- 平野裕子・Nguyen Phuong Thuy・徳澤啓一 2014 「ベトナム北部における伝統的焼き締め陶器製作の民族誌」『社会情報研究』第13号, 地域分析研究会, 129-146頁
- 徳澤啓一・北野博司・Chhei VISOH・Sureeratana BUBPHA・平野裕子・中村祐一 2016 「インドシナ半島東部における焼き締め陶器製作と窯構造の地域差」『日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 236-237頁

Factors that Led to the Change of the Khmer Capitals from the 15th to 17th century¹

Nhim Sotheavin

Research Fellow, Institute of Asian Culture, Sophia University

Introduction

The change of location for a capital is never an easy decision. It most often involves massive mobilization efforts, expense, and time. The deciding factors for capital re-location are what most often interest historians. Cambodia, which has undergone several capital location changes, is by no means an exception to this consideration, and provides fertile ground for examination and contribution to historiography.

A powerful political unity whose territory included present-day Cambodia and the southern Mekong Delta is the Chinese-named “Funan,” which had existed before and emerged later within Cambodia.² Its principal city, Oc-Eo (also known as a famous port in Southeast Asia), was established on the coast, because Funan drew its strength from regional and international maritime trade. Funan was a central location of the trade route between India, China, the Mediterranean, and Southeast Asia. The state of Funan and its trade activities have been dated back to around the 1st and 6th century. The belief in the link to trade activities resulted from the evidence of material cultures, which were discovered at the site during an excavation in the 1940s.³

This trade was primarily based among other factors on agricultural and forest resources provided by the hinterland. The “Funanese” irrigation system was built to take advantage of the tributaries within the delta for agricultural production, and they were subsequently transformed into a network of channels to increase transportation, communication, and inland trade depots. Oc-Eo was therefore connected to another city further north, quite to the interior, but with river navigation access, namely the city of Angkor Borei located in a region that was one of the birthplaces of Khmer art and creative culture.⁴

According to Bernard-Philippe Groslier, the end of that state or rather its partial merger in the

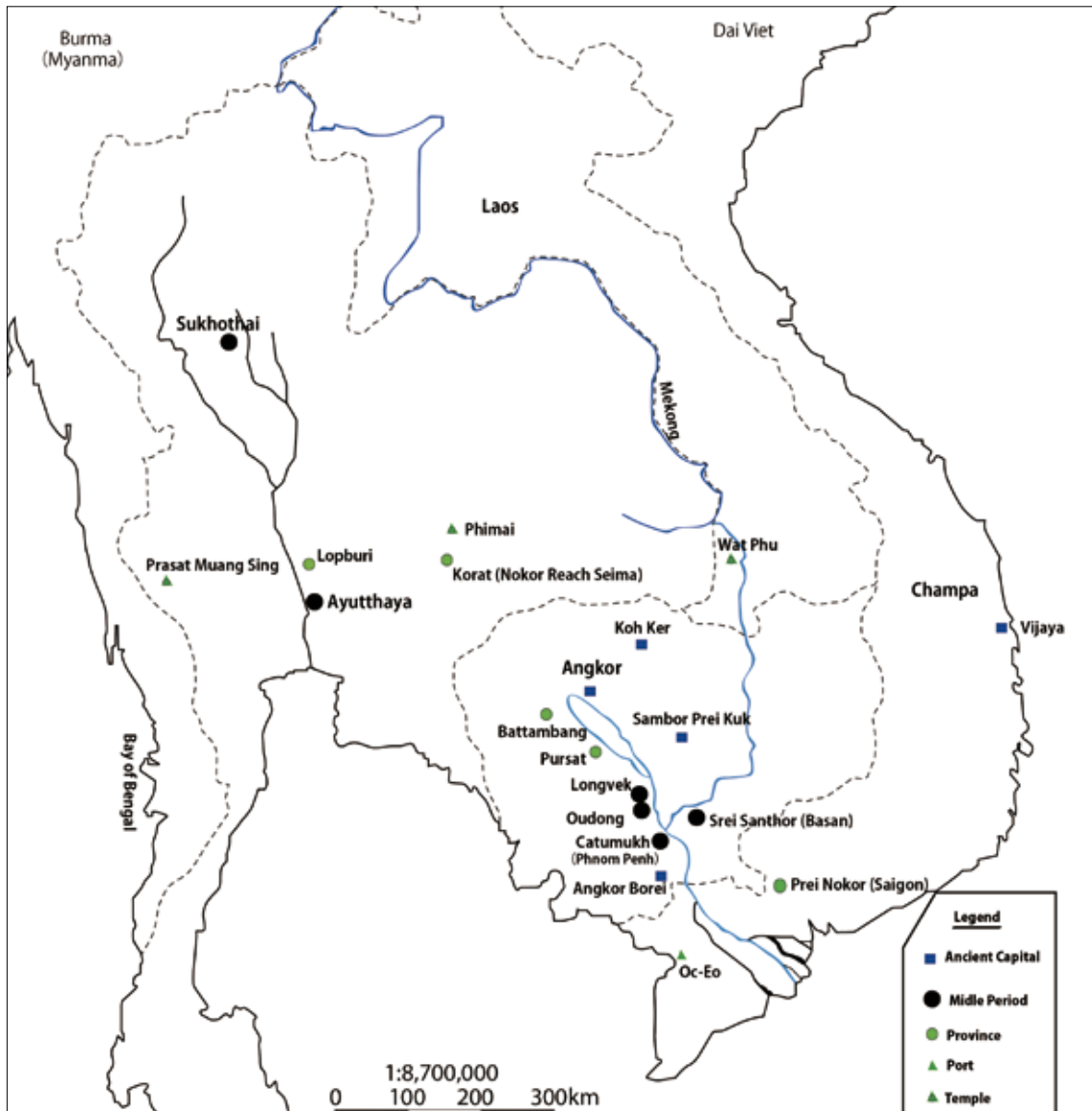
* For the enhancement of my knowledge in Japan, I owe an immense debt of thanks to my Professor Yoshiaki Ishizawa, for his immeasurable advice and support. Heartfelt thanks are due to Professor Cyril Veliath, Professor Masako Marui, and Professor Ang Choulean for their value advice, comments and editing my thesis, and help over the years. I would also like to thank to my seniors and friends for their help with regard to my thesis in commenting and accompanying me on-site field research. They are: Yukitsuku Tabata, Kong Vireak, Siyon Sophearith, Kim Samnang and others.

1 This article is a revising of a part of the author’s Ph. D dissertation, which submitted to the Sophia University in 2013.

2 We estimate that it emerged as a state worthy of the name around the beginning of the Christian era. The name “Funan” first appears in the Chinese annals of the beginning of the 3rd century. For a critique of the date from the Chinese original sources, see Ishizawa 2007b: 195-209, and for details regarding the question of Funan, see Cœdès 1968 and Vickery 1998.

3 For the first comprehensive archaeological research on the city Oc-Eo, see Malleret 1960.

4 The recent researches on the city of Angkor Borei, see Stark 2001.



Map 1 General Map of the Indochinese Peninsula and Khmer Capitals in the Middle Period

history of Cambodia, occurred around 550 AD. As a determining factor, he noted the correlation to an interruption of the great maritime trade flow across the Bay of Bengal.⁵ Moreover, according to Chinese texts, the new powerful state of Chenla⁶ conquered Funan around the second half of the 6th century, and hereafter the name of Funan was not mentioned anymore in the Chinese texts.

In the 7th century, one of the great Khmer centers of power was in Sambor Prei Kuk. It was only however one of the capitals, and certainly the most brilliant of the time. Other power centers were scattered throughout the Khmer territory, in the present day provinces of Takeo, Prei Veng,

5 Groslier 1985-86: 37.

6 The name Chenla (or “Zhenla, or Tchenla” as it is sometimes written by researchers) appears only in Chinese texts, but we do not find any word in the Khmer or Sanskrit inscriptions corresponding to the Chinese pronunciation “t’sien-làp,” Cœdès 1968: 65. The Chinese envoy Zhou Daguan who visited Angkor in 1296-97 again used the name Chenla. See, Zhou Daguan 1967.

and the area north of the Dangrek mountain range, in northeast (Isan) of present-day Thailand.⁷ This indicates that the Khmer power was not yet a consolidated, centralized power.

It was not until the early 9th century that a “Khmer Empire,” or a powerful centralized Khmer kingdom appeared in what is now known as the Angkor region. The capital was finally established and centered in the Angkor region from the 9th to the 15th centuries. The extent of time that the capital remained in the same location is extraordinary, considering the fact of the earlier centuries of instability and re-location. Those involved with the historiography of the region mark the “Angkorian Period” as coming to an end at around the early 14th century, and followed by the “Middle Period.” However, the capital did not officially transfer to the south until almost a century later. It conventionally served as the capital of the Angkor region for almost five and a half centuries, and this means the end of the Angkorian period does not match with the end or re-location of the Angkor capital city.

The following is a chronological summary of the history of Cambodia:

- Ancient period: lasted from the 6th century to the 14th century
 - Pre-Angkorian period: 6th century – 9th century
 - Angkorian period: 9th century – 14th century
- Middle period: 14th century – 19th century
- Modern period: 19th century – present day

Chronological History and Royal Capitals:

| PERIOD | CAPITAL |
|---|---|
| Period “Funanese” AD 1 st century – mid-6 th century | Oc-Eo (Mekong delta) in relationship with Angkor Borei (South of Cambodia) |
| Pre-Angkorian (6 th – 9 th century) | Many capitals and cities reflected the fact that a Khmer power had not yet become centralized, but were divided in political unities. The most glamorous was Angkor Borei (especially in the 6 th century) and Sambor Prei Kuk (especially in the 7 th century) |
| Angkorian (9 th – 14 th century) | In general “Angkor” [Mahendraparvata (Phnom Kulen), Hariharalaya (Roluos), Yashodhara] with a brief period in Chok Gargyar (Koh Ker) |
| 14 th – mid-15 th century | Angkor |
| Mid-15 th century – mid-16 th century | Srei Santhor (Basan), Chaktomukh (Phnom Penh), and Srei Santhor |
| Mid-16 th century – 1594 AD | Longvek, with a royal sojourn at Angkor |
| 17 th – 19 th century | Oudong |

From the table above, we see that in the Angkorian era, the Khmer capital and power exercised by a centralized government became located physically and functionally in the same area. It is indeed in 802 AD that king Jayavarman II (802-834) completed the unification of the country under his rule. According to the inscription of Sdok Kak Thom, the king proclaimed himself a universal monarch (or Chakravatin) and declared Cambodia’s independence vis-à-vis Java by instituting a new religious cult, namely Devarāja⁸ on Phnom Kulen, represented by a sacred Linga. He stayed

⁷ For this was the limit of Khmer occupation in the northeast of present-day Thailand at the end of the 6th century (during the reign of Bhavavarman and Citrasena), cf., Groslier 1980: 40.

⁸ The term was translated as “king of the gods,” and it appears in later inscriptions written in Khmer as “kamraten jagat ta rāja”.

at the city on the top of Phnom Kulen. Then, he founded many villages in the Angkor region, and the Royal Palace where he actual resided was in Hariharalaya, present day Roluos.⁹ He himself and his two successors, namely king Jayavarman III (834-877) and king Indravarman I (877-889), lived there. This is the first Angkorian capital of the 9th century. At the end of the 9th century, king Yashovarman I (889-910ca) moved the capital somewhat to the northwest, namely Yashodhara. It is not a change in capital, strictly speaking. Yashovarman I who made the transfer had in fact founded in Roluos a temple of Lolei, dedicated to his parents and maternal grandparents. This displacement of a very short distance was in response to a double motivation, namely colonizing new lands nearby and appropriating a space more suited to symbolically mark the capital, with Phnom Bakheng as the center. The king had also built a roadway embankment joining the Baray of Roluos to Phnom Bakheng, showing that there is no break between Roluos and Yashodhara.

Worthy of note is the fact that the period of Angkor itself, at least from the 9th to the 13th centuries, was parallel to the great buildings constructed in the great Angkor region alongside marvelous sites such as Banteay Chhmar in the west and Bakan¹⁰, Wat Phu in the east, and Preah Vihear, Phimai, Phnom Rung in the north. In the southern areas, Angkorian buildings are much less impressive in size, meaning that different corresponding communities were demographically smaller. Throughout the history of Angkor, from the early 9th century to the middle of the 15th century there was only one change of capital, and it was moreover momentary, obviously due to internal political reasons (probably infighting along with the change of reigns). Between 928 and 944 AD king Jayavarman IV relocated the capital of Angkor, Yashodhara, to about 80 km northeast to Koh Ker (the ancient capital named Chok Gargyar). However from 944, Yashodhara, which had never been actually abandoned, became once again the capital city. Overall we see that surprisingly there was stability despite the relocation of the capital.

It should be noted that the “Angkorian Period” began when the capital “Angkor” became the cultural and political center. While the era ended and gave way to a new “Middle Period,” the capital remained the same for almost another century and a half. There are several criteria that need to be considered for researchers to determine the change of a “period”, which amounts roughly to one concept, namely the change of a civilization. All the factors contributed to a significant drop in the Cambodia’s political power, leading to a gradual change in land use and a decline in agricultural production. However, a determining factor seems to have been the rise of the Sukhothai (later Siam), which challenged Cambodia’s political and military domination, and in particular its domination over the religious orthodoxy, where Brahmins hitherto exerted their influences. It was during the “Middle Period”, namely from the 14th to 19th centuries, that Cambodia adopted Theravada Buddhism that came from Siam, giving rise to changes in Cambodia’s philosophical and religious orientations. That is to say, it gradually transformed the beliefs, practices, and culture of Cambodia, and with it the civilization and daily life of the people as well.

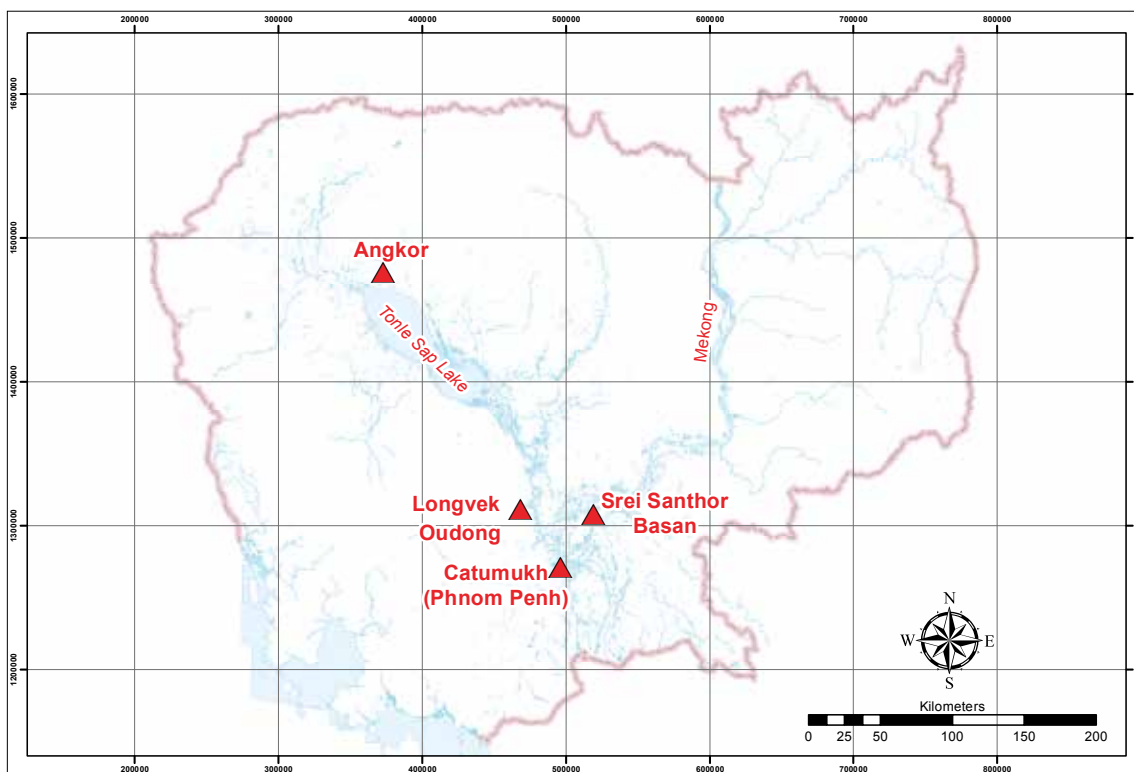
Added to this is the very important fact of the continued incursions made by the Siamese in Angkor. As to the issue of whether there was a final debacle in the war in Cambodia, leading the

9 Stele of Sdok Kok Thom, K. 235, face 3, lines 64-80. Cf. Cœdès et Dupont 1943-46.

10 It was called “Preah Khan (de Kampong Svay) by French scholars.”

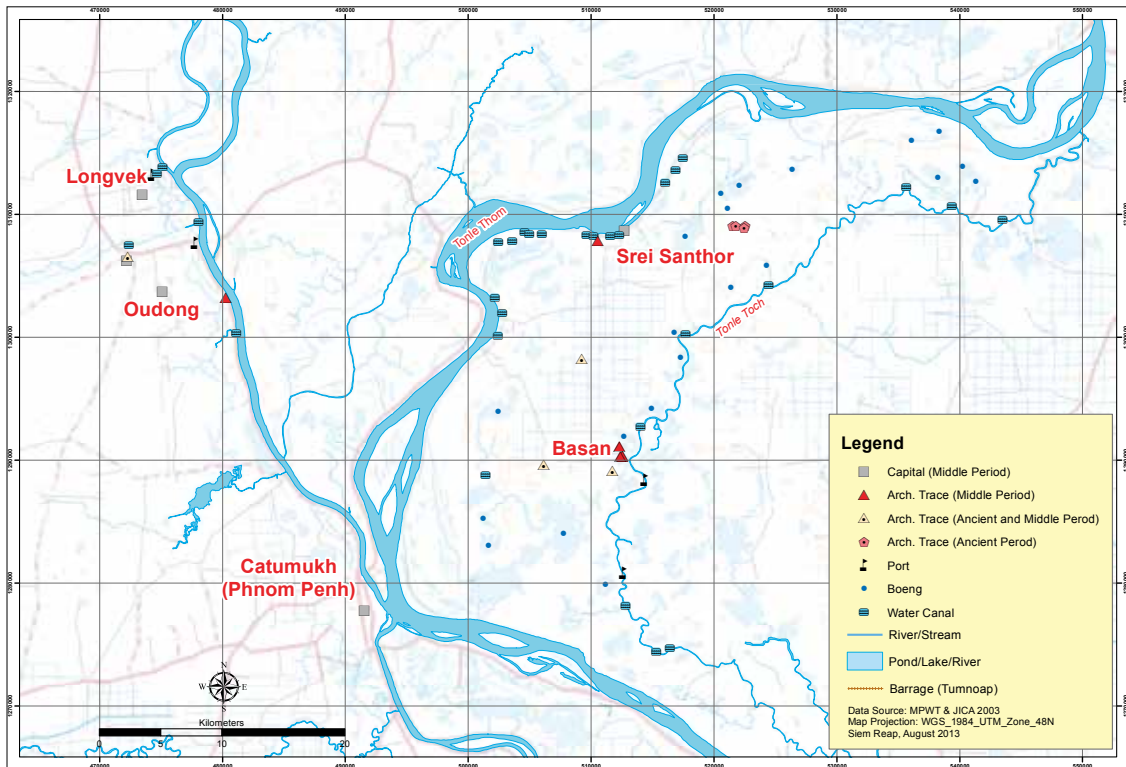
inhabitants to flee from their prestigious capital if the conflict was not yet settled, there are indeed proponents of this study; but there are others who see rather economic reasons. M. Vickery, in his Ph. D dissertation in 1978, hypothesized that the purpose of shifting the capital to a southward region was a more convenient place in order to have access to the sea and to seek an opportunity for trading with China and for involvement in the international maritime trade.¹¹ In addition to earlier hypotheses, this study attempts to consider other factors that can contribute to the reconstruction, among which agriculture is a main factor. It could be suggested that the movement to the south was primarily motivated by a desire to seek “new” land for agricultural production, and to acquire the places best suited to regional and international trade.

Moreover, the present work tries to explore all possible reasons, not only of this the first and decisive transfer of the capital leading to the final act of abandonment of Angkor, but also the successive changes in the capital after Angkor. This work also is limited to the establishment of the capital at Oudong, early in the 17th century. It will not deal with the transfer of the capital in the second half of the 19th century to Phnom Penh, as the reasons are too well known and have already been studied. In brief, this work focuses on the changes of the capitals in the 15th to 17th centuries: Srei Santhor, Longvek, and Oudong (Map 2, 3). The fact of these being cities in themselves, that is to say “urban areas,” one assumes that they possess certain elements worthy of investigation, but they will also not be the objects of our study. Rather, the land management, geography, and regional situation are what attract attention and are the focus of the study. Indeed, there is interest



Map 2 Angkor and Khmer Capitals in the Middle Period

¹¹ Vickery 1978: 509-522.



Map 3 General Map of Srei Santhor (Basan), Longvek and Oudong

in the potential (or lack of potential) of agriculture and commerce, which is a key to assessing the complexity in factors that led to the abandonment of one capital in favor of another. It then takes on newer nuances, and careful handling of the political motivations that influence the decisions.

This study is principally based on information gained primary source material from the Cambodian Royal Chronicles, in the Khmer Rājabañsāvātār, with reference to a variety of external sources. On the other hand the Rājabañsāvātār, which is the main source for setting Cambodian history in the middle period, needs support from inscriptions that provide more accurate information. For the interpretation we use our background knowledge of Khmer language and society in order to examine these texts, which are rich in metaphor and literary allusions. This is to see to what extent the data can be used to substantiate interpretations of what was happening in this historical period. Also, reflections from the perspective of other disciplines, such as ethno-archaeology, are also applied for conducting a field research to discover examples of oral traditions, archaeological remains, and geographical aspects. The argument on the Khmer mode of culture is based on the fundamental nature of land use and water control in the Khmer way of thinking.

Note on the Transliteration

Since this study is concerned with the written names of places and names of persons, we basically use the system of transliteration. The system of transliteration has been adopted to reproduce in roman letters, commentaries written in Khmer, Pali, and Sanskrit. The system of transliteration adopted for the Khmer scripts was created by Saveros Pou, who concluded the former works begun by G. Cœdès and F. Martini on this system of writing. The system of transliteration written in this

thesis adopted: Saveros Pou, “Note sure Translittération du Cambodge”, *BEFEO*, LV, 1969, pp. 163-169, and the late revised in the Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais, *Cedoreck*, Paris, 1992.

For the often used and well-known names of persons and places, we use the phonetic transcription. For example, the place name “Phnom Penh”, which is written in transliteration as Bḥnaṃ Beñ; and the person name of king Ang Chan, which is written as Aṅg Cand.

I Sources and Critique

The history of Cambodia from the 14th to 19th centuries was a difficult period that remains much debated as an academic research topic, and it hence requires a through re-examination as to its historical consideration. As such, these stages in Cambodian history can together be thought of as a “critical period”. The existing murkiness is due to the relative lack of documentation compared to what is available from the ancient periods (namely pre-Angkor and Angkor). Great monuments like those built in the Angkor period were no longer being constructed, Sanskrit epigraphy had become obsolete, especially beginning from the first half of the 14th century, and even Khmer inscriptions were absent until the middle of the 16th century. So far, the reconstruction of history from the middle of the 14th to the beginning of the 16th centuries is locked within a sort of unsolved mystery, since local sources prove inadequate and references from foreign sources are of little use.

It has been the lack of source material coupled with a general shortage in research that has limited access to subjects of interest from this period. For a long time in the study of Cambodian history, scholars had focused primarily on the ancient period, namely from the 6th to the 14th centuries, and mainly through archaeology as the jewel of Khmer civilization, particularly the monuments of Angkor. Such monuments reveal reams of information from which one may study the evolution of arts and architecture, conduct systematic analyses of archaeological finds, and obtain the chronologies that help to place the succession of kings through analyses of stone inscriptions (in Sanskrit and Khmer).

Without doubt, the ancient period epitomizes some of the most significant milestones and highpoints of Khmer civilization. Methodologically, studying these things is made easy by the organization of evidence from these periods in political, religious, linguistic, geographical, and historical contexts. During the French protectorate, the scholars who were involved in refining early academic query on Khmer history, spent most of their time studying the many primary works rooted in the ancient periods. Consequentially, less time was spent on the full breadth of the region’s history, since the main focus was to study everything connected to the fascinating original pre-Angkor and Angkor sources, and all their own firsthand knowledge. As Bernard-Philippe Groslier noted: “The bulk of this documentation – epigraphic and plastic – belongs essentially to the classical age of Khmer culture, the pre-Angkor and Angkor periods, that is to say from the 6th to 14th centuries. Before – and for that matter after – we know practically nothing.”¹² As a matter of fact, an in-depth

12 Groslier 1960: 3, 1997b: 9.

investigation or systematic study of the period from the 14th to 19th centuries has yet to be seriously attempted, except for a handful of very limited researches that have been done and conducted on the topics.¹³

Hence, research and scholarship concerning the middle period is insufficient, and this is not only because of the shortage in documents, but also due to a lack of organized strategy in conducting archaeological field research.¹⁴ An authentic primary document known as the “Royal Chronicle or Rājabaṅsāvātār” provides us with some valuable insight, but it is a bewildering source of information on the middle period. Its dependability is problematic since it was copied and revised many times. In some cases, the chronicle may distort the names and titles of the kings and dates, it seems to be in lack of source evidence, and the amount of research on these topics is very limited. Hence, the topic remains a challenge to reconstruct several missing parts that are essential to gaining a better view of Cambodian history in its entirety.

As mentioned above, the principal sources for the reconstruction of the history of the ancient period such the inscriptions and monuments, were either less in numbers or had ended. Therefore, the reconstruction of Cambodian history in the “middle period” needs to be drawn from other available primary sources, namely the Rājabaṅsāvātār or Rapā Ksatr (Royal Chronicle), the IMA (Inscriptions Modernnes d’Angkor), and other inscriptions of the middle period.¹⁵

Generally these types of source materials provide not only historical events, but also socio-political and cultural pictures of the periods. Even though the writings are not necessarily very objective in presenting history or society as it really was, yet they offer so much more in terms of records that can be cross-referenced to help fill in the gaps. Though these written materials are linked through those who read and study them in the present period, they nevertheless require interpretation in order to make sense of the past. So it can be said that these writings are reconstructions of important events, and thus are subject to limitations in terms of fairness and constraints of historical methodology.

In this study, Rājabaṅsāvātār is being utilized as the primary source for comparison with the inscriptions from the middle period. The secondary sources being considered are records from the European, Chinese, Japanese, and other neighboring countries. Those sources are also used in order to fill in the points lacking in the Cambodian source materials.

1. Rājabaṅsāvātār or Rapā Ksatr (Royal Chronicle)

This set of manuscripts, written in the Khmer language on *slek rit* or *krāmṅ*¹⁶ or modern paper

13 We see that the works of for example art history and iconography were studied by M. Giteau 1975; philological and linguistic study has been conducted by Pou Saveros (in various articles of the *EFEO* and *JA*); and many articles and books related to the historical event and chronology of the kings were published by Mak Phoeun, Khin Sok, and Michael Vickery.

14 Recently, some institutions have begun in conducting the archaeological excavation at Longvek area. We expect the new discovery will be unlocked this critical period.

15 There are at least about 100 inscriptions that were inscribed not only in the Angkor region, but also in the whole country of Cambodia; See, Pou 1989, 2001.

16 *slek rit* are the manuscripts written on palm leaves bound together in bundles. *Rit* (in Sanskrit *rikta*) is also shown in the old Khmer language on the ancient texts in form *rikta* or *rit*, See., S. Pou 1992. And *krāmṅ* is the

(European paper), described Cambodian history from the 14th century to the beginning of the 20th century.¹⁷ There are many different chronicles written from the 18th century to the beginning of the 20th century, but these records are available today only in the form of copies written in Khmer and Latin transcriptions, that are now preserved in the Bibliothèque National de France (BNF) and the library of the École Française d'Extrême Orient (EFEO),¹⁸ the Société Asiatique library, the Missions-Étrangère library, and a few texts are preserved in the library of the Buddhist Institute in Phnom Penh.

There are two Khmer terms used when referring to the Royal Chronicle texts: *rājabaṅsāvatār* or *rapā Ksatr*.

- *rājabaṅsāvatār* can be divided as follows: *rāja* = “king or royal”; *baṅsa*, *vamṅa* = “ancestry, lines”; and *avatāra* = “descendant, incarnation”, or *sāvatār* is derived from *baṅsāvatār* or *sauvatār* which means “history”. In the Cambodian language, the roots combine into *rājabaṅsāvatār*, meaning “history of the royal ancestries” or “history of the kings.”

- *rapā ksatr* is also called *rapāl ksatr* or *lpār ksatr* (derivative of *rapā ksatr*) or sometimes *ampāl ksatr*, “all the kings”. It can be divided as follows: *rapā* = *jumbuor*, *juor*, “lines” and *ksatr* = “prince, king”; therefore, *rapā ksatr* or *rioen rapā ksatr* would mean “history of the lines or ancestries of the kings.”

However, the meaning of *rājabaṅsāvatār* or *rapā ksatr* can be translated as “annals” or “royal chronicles,” writings that are related to the history of the kings. The royal chronicle texts mention the chronology of the kings, liaisons with the neighboring countries, scandals within the royal families, etc.

In fact, those types of documents had already existed since the Angkor period. As the evidence of this, in the inscription of Preah Vihear (K. 380) that is inscribed on the doorframe of the south gate dated AD 1037-38, mention is made about members of a particular family as being the guardians to serve the annals of the family of Kambu, and other documents of the royal services. The inscription also provides the name of those annals as being “Vraḥ Likhita or sacred (or saint) writings, which are inscribed on the *vraḥ rikta*.¹⁹

As mentioned above, the Royal Chronicle is the manuscript used as the setting for the historical framework of Cambodian history in the middle period. However, to study about Cambodian history in this period, one cannot use the Royal Chronicle alone without any support from other sources. There are difficulties in charting the chronology as of the dates and the names of the kings, because all the chronicles began with different dates in history, especially from the 14th to the beginning

manuscripts written on strips of stiff paper pleated in the form of an accordion.

17 Some historians have tried to divide the royal chronicle texts, of which remain many versions, into two groups: (1) Legendary parts: here the texts contain the complete history of Cambodia from the original legends until the reign of Norodom (1860-1904). These stories are mentioned in history as legends, as for example, the legend of Praḥ Ketumālā; (2) Historical parts: Here the texts began around the middle of the 14th century. They mention the first reign of a monarchy as a “historic event,” the reign of king Nibbānapad (1346-1351). The legendary portion is not considered as true history, so the historians normally do not use them for reconstructing Cambodian history.

18 Au Chhieng 1953, Mao Reasey 1996.

19 Cœdès 1954: 261.

of the 16th centuries. Besides, the texts were recopied and revised many times from generation to generation, and were kept in different places. So the chronologies of the dates shown are sometime conflicting.

The royal chronicle texts generally mention the chronology of kings, relations with the neighboring countries, conflicts within the royal families, etc. Normally, the texts do not mention much about the society. It is said that most of the texts were created and arranged to become historical records, but sometimes left out unsuccessful kings. However, the chronicles do describe actual events. For example: they mentioned Longvek's fall caused by the betrayal of the king, the loss of cooperation among royal family members and mandarins, and about how the king changed his religion to Islam when he fell in love with an Islamic woman, and how he thereupon ordered all his ministers to dress according to Islamic custom, an order that contradicted the religion of country at that time, which was steeped in Buddhism. Another example was when the king married the daughter of a Vietnamese king, an act that led to the great loss of Khmer territory in the 17th century of Prei Nokor (present day Saigon, Vietnam), etc.

On the other hand, Cambodian Royal Chronicle texts explain that generally it was the contemporary rulers who determined the chronicles of past rulers, and the deeds of the past rulers formed the basis for judging whether they could be viewed as great kings or condemned as incompetent and evil. However, sometimes in Cambodian history the chronicles selectively omitted facts deemed unworthy of the royal family, and also certain other events concerning the kingdom such as serious military defeats, misjudgments, or scandals. All such things tended to be underplayed or ignored all together.

If one compares these chronicle texts with the stone inscriptions, they are obviously diverse. The inscriptions were in stone and provide the exact place and date, and each event was carved with one inscription. The characteristic of the inscriptions differed from the chronicles, because the inscriptions were not copied from one to another like the chronicles that were made in numerous volumes and kept in different pagodas. Therefore the inscriptions provide more exact dates and have more value than the royal chronicles, because no one can change the contents of the inscriptions.

The oldest fragmented chronicle, dating to 1796, was also translated into the Thai language. This fragment was sent to the king of Thailand by the Khmer king Ang Eng, and was later translated into French by G. Cœdès.²⁰ There are also many other chronicles that have been frequently used and are considered useful by Cambodian historians focused on this period. Examples of these are the chronicle of Ukañā Vañsā Sārbejñ Nañ²¹ (or Nañ in short), the chronicle of Samṭec Cauvā Vāṃṇi Juon²² (or VJ in short), the chronicle of Vatt Kok Kak (KK)²³, and the Ampāl Ksatr.²⁴ The chronicle of Nañ is complete and is the oldest one, written in 1818. This chronicle was ordered by king Ang

20 Cœdès 1918 : 15-28.

21 Ukañā Vañsā Sārbejñ was the second highest-ranking functionary of the Legal Order after Ukañā Yamarāj (a grand judge of the kingdom). See, Garnier 1871: 336-385 (especially the note, p. 340).

22 The minister of the royal palace, named Juon.

23 This chronicle was written in 1869 by order of King Narattam (Norodom). The dates of this chronicle are very different in Nañ and Juon.

24 The text in the Latin transcription provides the list of the Khmer kings from 1346 to 1860. It was copied by Col de Monteiro, secretary of king Narattam (Norodom), in 1866. Cf., Au Chhieng, *op. cit.*, p. 2-3.

Chan II (1797-1835) in order to rewrite Khmer history. This chronicle later was copied and revised into at least 4 versions: They were registered into inventoried codes such as DL/2 (in the library of EFEO), B39/5 and B39/12/B (in the library of Société Asiatique de Paris).²⁵ Another version of Nan's chronicle was copied and revised by prince Nopparat (son of the king Ang Duong) in 1878, and it is called the "Chronicle of Nopparat." This version was registered as P/48 (II), and it is also available in the library of the EFEO in Paris.

The two oldest fragments, dated 1796 and 1808 for example, were sent to Thailand by the Khmer king, and were eventually studied by M. Vickery.²⁶ One of these entitled "The Fragment of Ang Eng", is a short chronicle that only described the period extending from the reign of Param Nibbānapad (or Mahā Nibbānapad) in 1346-1351, to the reign Bañā Yāt (Paramarājā I) in 1434-1438. Professor Mak Phœun and Professor Khin Sok studied some other fragments. These were translated into French with cross-references to different versions and commentaries, and published by the l'École Française d'Extrême Orient. According to their publications, Professor Mak Phœun and Professor Khin Sok had spent a tremendous amount of time and made great efforts in researching the Cambodian Royal Chronicles, for over 25 years. The study of the Cambodian Royal Chronicles is obviously no small task, and requires a great deal of scholarship to properly organize and interpret the valuable information to be found within.

For the purpose of this study, we have chosen chronicles, namely "The Chronicle of Vāṃṇ Juon or in short VJ", which is a complete version. We use this chronicle as a base source by comparing it with other chronicles to fill in the gaps in information, especially the chronicle of Nan from the middle of the 14th century to the beginning of the 16th century.²⁷ We have also relied on the use of sources written by former researchers. The chronicle of VJ is available in the library of Sophia University, in Tokyo, Japan (this version was copied from the Thai library by Professor Yoneo Ishii). This chronicle was republished as a new translation from the original version of Samṭec Cauvā Vāṃṇ Juon, written in 1934.

Previous Studies of the Rājabaṅsāvātār or Royal Chronicles:

French researchers had already studied the Cambodian Royal Chronicles since the second half of the 19th century. However, the study was either elaborated for the translations, or it followed the Khmer version. The chronicle aroused interest and was translated for the first time by Doudart de Lagrée, and F. Garnier (*Chronique Royal du Cambodge*, in *Journal Asiatique*, 1871-72), later published his work.

In 1880, other chronicles were translated and published by E. Aymonier, such as for example the articles: "Chronique des Anciens Rois du Cambodge", *Excursions et Reconnaissances*, Tome 2, 1880; and "Chronique Royal du Cambodge", in *Revue de Cochinchine*, 1880. Then, in 1883, J. Moura published two volumes of *Royaume du Cambodge* from translations of different versions

25 For the description of each chronicle., See, Mak Phœun 1995. For the inventory registrations, see, Au Chhieng, *op. cit.*, pp. 1-4.

26 Vickery 1978.

27 The events and dates of Nan's chronicle are more accurate than other chronicles at the beginning of this historical period, and are closer to the information found in Chinese sources. See, Wolters 1966: 44-89.

of the royal chronicles. In 1904, E. Aymonier published again his study on the royal chronicles, by comparing them with Chinese chronicles and the European sources from that period.²⁸

Apart from French researchers, the history of Cambodia had been a topic of interest also to the Cambodian researchers, from the 1930s until the 1970s. Among those works, Tran Ngia wrote the study of Cambodian history through chronicles.²⁹ There are two volumes in the Khmer language that were published. The first volume published in 1973 concerned *Khmer History* from “the origin of the Khmer until the abandonment of Angkor,” and the second volume that was published in 1974, began from “the second half of the 15th century until Cambodia came under the French protectorate in the 19th and 20th centuries.”

Professor Mak Phoeun and Professor Khin Sok studied many fragments of the Cambodian Royal Chronicles. These were translated into French along with comparisons with different versions and introductions, in the publications of the l'École Française d'Extrême Orient. According to their publications, Professor Mak Phoeun and Professor Khin Sok had spent more than 25 years researching the Cambodian Royal Chronicles. Hence, researching the Cambodian Royal Chronicles is a task, where one cannot do the research in its entirety within a brief space of time, in order to accurately write the history of Cambodia in the middle period.

2. Middle Period Inscriptions

As mentioned above, the characteristics of the inscriptions differed from the manuscripts of the royal chronicles, because the inscriptions were not copied from one to another like the royal chronicles that were created into numerous volumes and preserved in different pagodas. Therefore, the inscriptions provide more exact dates than the royal chronicles.

There are around 100 stone inscriptions that belong to the middle period, but the most important ones are the inscriptions at Angkor Wat. All these inscriptions were translated and studied by E. Aymonier, who provided the name “IMA, Inscriptions Modernes d'Angkor.” There are 40 inscriptions in Angkor Wat and these are named by means of registered numbers “from IMA 1 to IMA 40.”

Most of the inscriptions here are called *satyapranidhān*, “wishes of the truth.” The inscriptions never mention about selling or buying land or about the disputes, but rather describe the merits (*phalānisans*) of Buddhist belief. For example the inscriptions state, “I would like to respect the truth, I wish to live until Braḥ Seāmetri,³⁰ I wish to reach Nipean.”³¹ Another example is when the king's child was born, and he took him to worship at Braḥ Bisṇulok (Angkor Wat) to become a monk and prayed saying, “I wish to get merit and to reach Nipean.”

For example, one inscription in the 18th century (1623 śaka, or 1701 A.D) was inscribed by *uk ṅā Jayanand*, who was a minister at that time.³²

28 Aymonier 1904.

29 Tran Ngia, *History of Cambodia*, original version was published during 1973-74, and republished by the Ministry of Education, Youth, and Sport, in 2003 (in Khmer).

30 There are five Buddhas in Theravada Buddhism (Prah Sasna): (1) Kok Santho (2) Neak Mono (3) Kas Buo (4) Samana Kodom (5) Prah Sri Ariya Metri (in Thai Prah Seāmetri), who is not yet born.

31 The word Nipean is the pronunciation in Khmer of the Pali ‘Nirvana’.

32 Pou 1975: 283-353.

19.....

20. sūm dan braḥ śrīāryy mān paribā cren krās krai

Jā rray bān' hīmn nai l-a prabaiy toy prāthnā

“I ask for rebirth in the time of Preah Srei-Arya, to possess the rest of countless, the hundreds and the thousands of servers, and I also will deserve virtue and beauty.”

These kinds of inscriptions are called “votive inscriptions,” and they never speak of the fights with Champa or give praise to the kings and so on, like the ancient inscriptions. The kings considered themselves the same as ordinary people, and their wishes were the same as well, because the middle period society was somehow different from the Angkor period. Therefore the inscriptions are also different in the “substance of contents,” even though the inscriptions were engraved on the same materials. In summary, the inscriptions of the middle period all had the same purpose of wishing for merit.

However, the inscriptions of the middle period not only mention religion but also provide information concerning the names of kings, dates, and certain events. Particularly from the 16th century, Cambodian history provides clearer accounts when compared to previous centuries, with the help of inscriptions and other European sources.³³ Although, each chronicle provides information about different dates,³⁴ they can be compared with the inscriptions. As mentioned above, the writers of the inscriptions of the middle period had no incentive to re-write history, so the dates and the names of kings can support the chronicles. For instance, there are many events related to king Ang Chan's³⁵ activities with regard to the rehabilitation of the country and his struggles with the neighboring countries.³⁶ In two inscriptions on the reliefs of Angkor Wat, mention is made about his work of restoration of the northeast gallery of Angkor Wat, that had begun in 1546 and was finished in 1564, and also some other areas in Angkor.³⁷

The inscription IMA 2 of the queen mother Mahākalyāṇavattī Śrīsujātā, written in 1499 *śaka* (AD. 1577), describes the honor given to her king son who had a great devotion towards restoring the ancient temple of Braḥ Bisṇulok³⁸ (Angkor Wat). The inscription also mentions her participation in the restoration works by providing the Buddha images for honoring in the gallery of Bakan.³⁹ As recorded in the inscription of IMA 3, king Saṭṭhā⁴⁰ intended to restore the wall enclosure of Braḥ Bisṇulok by keeping to the traditional way from this period of his reign. The inscription also

33 A European came to Cambodia around 1550, named Diogo de Couto. He mentioned the king of Camboja and the rediscovery of the ancient city of Angkor.

34 For example the chronicle Nañ (P48, II) and the chronicle Vāṃṇ Juon or Veang Thiounn (1933) give different dates, particularly regarding the death of king Ang Chan in the 16th century. The chronicle of Nañ mentioned that king's death in 1502 (p. 56) and Vāṃṇ Juon in 1566 or 1567 (p. 202). Most of researchers noted that Vāṃṇ Juon's chronicle is more accurate than other fragments or versions.

35 Ang Chan was the first king who reoccupied the ancient city of Angkor in the 16th century, since Angkor had been abandoned as a capital city in 1431.

36 Groslier 1958: 76.

37 Cœdès 1962: 235-248.

38 The posthumous name of king Sūryavarman II who built Angkor Wat in the 12th century.

39 Pou 1970: 99-124.

40 Saṭṭhā (Paramarājā IV) was suggested by S. Pou in IMA 3 as king Jayajetṭhā. The discussion of the name Saṭṭhā and Jayajetṭhā, see., Mak Phœun 1995: p. 34.

mentioned the birth of the king's son in 1501 *śaka* (AD. 1579). The king took his son to present him to the Buddha and other divinities at Braḥ Bisṅulok.

The result of our discussion centers on the fact that other sources as well as cross-referential analysis can allow new informational routes of study from which to open new windows into Cambodian History. The evaluation and careful consideration of the chronicles, inscriptions, other primary sources and secondary scholarship in gaining access to the understudied “Middle Period,” will help to clarify its position as a transitional feature of Cambodian history.

II

A General Consideration of the 14th – 15th centuries and the Abandonment of Angkor as Capital

This chapter attempts to explore the historical contexts before the relocation of the capital from Angkor to a southward region. It starts by paying attention to the political, military, and social situation in Angkor, especially in the 14th and 15th centuries. This chapter also aims at considering all possible factors that lie behind the course that led to the abandonment of Angkor in the 15th century.

1. Political and Military Setting

1.1. Relation with Cham

Prior to the 14th century, the Khmer had been characterized in part by the longstanding historical struggle with the Cham over many centuries. During the entire 12th century, the Khmer and Cham frequently had wars with each other. In the first quarter of the 12th century, king Sūryavarman II, a founder of Angkor Wat, who ascended the throne in the year 1113,⁴¹ engaged in a military campaign both to the east and west. He was a very great and powerful king who led the armies himself and never lost a war. It is said that he was a great conqueror who extended his territory and made it larger than the previous kings.⁴² He marched his armies further to the east against the Dai Viêt as well as Champa. In the year 1145, he defeated the Cham king Jaya Indravarman III who disappeared during the war, either because he was captured as a prisoner or died in the fighting.⁴³ The battle between the Khmer and Cham in the second half of the 12th century was narrated in detail by G. Maspéro in his classical book of “Le Royaume de Champa”, particularly in chapter VII, entitled “Luttes avec les Khmèrs.”⁴⁴

After the year 1145, no inscription mentions the activities of king Sūryavarman II.⁴⁵ Under his

41 The date 1113 for the coronation of king Sūryavarman II is a concrete date, evidenced from the inscription of Wat Phu (K. 366) which was recovered by the Thai Prince Damrong at Ubon in 1930, and brought to the National Museum of Bangkok, see Cœdès 1929: 297-330, esp. 303-304.

42 Cœdès 1968: 159.

43 Maspéro 1928: 153-156.

44 Maspéro 1928: 153-169.

45 Cœdès 1929: 304. The historians, especially G. Cœdès suggested extending the reign of king Sūryavarman II till the year 1150, since his mysterious death has not yet been confirmed and the Khmer occupation of northern Champa lasted until 1149. Moreover, for some reason Cœdès asserted that in the year 1150, king Sūryavarman

reign the Khmer territory, which is recorded in the History of the Sung, expanded to the border of Champa in the north, to the sea in the east, to the kingdom of Pagan (Burma) in the west, and to the Malay Peninsula in the south.⁴⁶ After the obscure death of king Sūryavarman II until the beginning of the reign of king Jayavarman VII, there are few sources mentioning the successive reigns of king Dharanindravarman II and king Yaśovarman II. During these two reigns, especially under the reign of king Yaśovarman II, Cambodia was struggling with Champa.

The attack on Cambodia by Champa was in the reign of the Cham King Jaya Indravarman IV. The Cham king made the expedition to Cambodia in the year 1177, and was successful in conquering and burning down the capital of Angkor. The Chinese guided this successful attempt. They were skillful in using warships to come upstream over the Mekong River to the Tonle Sap River, and they reached the Khmer capital of Angkor. This incident was recorded in the Chinese account “the king of Chan-ch’eng attacked the capital of Chenla without warning with a powerful fleet, pillaged it, and put the king of Chenla to death without listening to a single peace proposal.”⁴⁷ The sack of Angkor by Cham in 1177 has been marked as a catastrophic event in Cambodian history.

This culminated in the occupation of Angkor for 4 years from, (1177-1181) AD, followed by a retaliation in the form of conquest and occupation of Champa led by the Khmer king Jayavarman VII. At the time the Chams invaded Cambodia, the future Khmer king Jayavarman VII was at Vijaya (Champa) for his military campaign. He was late in returning to help king Yaśovarman II,⁴⁸ who was stripped of power by the usurper Tribhuvanātiya. There is very little information related to the situation of Cambodia after the incident of the Cham attack on Angkor in 1177, until the year 1181. Based on the inscription of Phimeanakas K. 485, most of historians and especially M. Vickery suggested that king Jayavarman VII was for sometimes still in Vijaya (Champa), until he claimed the throne in the year 1181.⁴⁹ According to the inscription of Ta Prohm, king Jayavarman VII killed the Cham king, probably Jaya Indravarman IV, “...Prince Sri Jayavarman who found himself in the law, killed in combat the enemy chief with a hundred million arrows to protect the land”.⁵⁰

In 1193, king Jayavarman VII sent an army to Champa, and King of Champa Sūryavarman was defeated. Later, king Sūryavarman sent an envoy to China and paid tribute to Dai Viêt while asking for help and protection for his kingdom. The situation of the kingdom of Champa was not good during this period, and for about 20 years Champa seems to have been under the domination of Cambodia. The Cambodian army remained in Champa and waged war many times with the Annamites. Maspéro stated that until sometime before 1218, Cambodian troops seem to have withdrawn from Champa.⁵¹ Cambodia gave the throne of Vijaya to the Cham prince who had been

II undertook another campaign against Tonking. That is to say, at least his reign lasted to this date. Cf., Cœdès 1968: 162.

46 Cœdès 1968: 161.

47 Ibit., p. 166.

48 King Yaśovarman II was a second cousin of king Jayavarman VII, and he succeeded to the throne after king Dharanindravarman II (father of king Jayavarman VII).

49 Vickery 2005: 60.

50 Cœdès 1992: 19, 39.

51 Maspéro 1928: 166-168.

raised by king Jayavarman VII.⁵²

In Cambodia, king Jayavarman VII reigned several years in peace and made his kingdom prosperous. Many inscriptions of the Khmer and Cham often mention him as a great warrior, and many great temples, 102 hospitals, 121 rest houses, roads, and so on were constructed all over the kingdom during his reign. After 1218, there was no clear information about king Jayavarman VII, and so historians have suggested that he probably died in the years 1218 or 1220. Who his successor to the throne was is very unclear, since he had at least four sons, and after his mysterious death the Khmer kingdom seems to have gradually started to decline.

There is, however, no indication that during the 14th and 15th centuries the Chams could have posed any considerable threat to the Khmer Kingdom. The Chams themselves were frequently engaged and under threat of attack by the Vietnamese. In the 15th century, there was some information though it was not very clear, related to the relationship between Cambodia and Champa, mentioned in the Cham inscription of Bien Hoa. The inscription is in a ruined condition and so it is difficult to know the exact date, but it mentions the fact of frequent wars between Khmer and Cham.⁵³ From the same inscription of Bein Hoa, G. Cœdès asserted that in 1421 the Cham king commemorated his victory over Khmer, and he suggested that Bañā Yāt, who was one of the last kings of Angkor, governed Cambodia at that time.⁵⁴

This event of the war between Champa and Cambodia in the 15th century is also described in the Chinese source *Ming Shi-lu*. The source states, “in 1414 Ming imperial orders were dispatched to Cambodia and Champa requiring them to cease fighting, to look to their own affairs and develop friendly relations.”⁵⁵

1.2. Relation with Siam (Thai)

Before the 13th century relations with Siam did not feature very much, since this new state was established just in the 13th century. From the 13th century onwards, the Khmer Kingdom had faced trouble with the Siamese. The kingdom of Siam, which is present-day Thailand, was first at Sukhothai, and then the political center was moved to Ayutthaya. The first Kingdom of Sukhothai existed from the middle of the 13th century to the first half of the 14th century, though the exact date of its establishment is not known. G. Cœdès suggested that it was probably in 1257 or 1259, and the founder of the kingdom was probably king Sri Indraditya.⁵⁶ Later this new powerful kingdom quickly extended its territory by conquering the neighboring countries as far as the Malay Peninsula, until its formation as the Kingdom of Siam. The information related to the foundation of Sukhothai was based on a very famous inscription of king Rāma Gamheñ (or Rama Khamheng), which was written in 1292 AD.⁵⁷

At the time this new kingdom became powerful, the Khmer Kingdom had gradually started its

52 Cœdès 1968: 181.

53 Aymonier 1891: 84-85.

54 Cœdès 1968: 238.

55 Wade 2005: 24.

56 Cœdès 1921: 1-11.

57 Cœdès 1924. See also, Griswold A. B and Prasert ōa Nagara 1971: 179-228.

decline, though in the eye of the Chinese envoy Zhou Daguan who visited Cambodia in 1296-97, the kingdom was still prosperous.⁵⁸ In this regard, it is of value to take in the regional context of the time. At the time Zhou Daguan came and stayed in Angkor, despite the magnificence that was the Angkorian Empire, the kingdom was showing signs of burgeoning decline. If Zhou Daguan spoke of wars with the Siamese, it was because Sukhothai, the first Thai kingdom, was rising rapidly in power at that time.

When the Khmer empire became weak, the new kingdom had an opportunity to extend its territory. That is to say, when the old kingdom declined the new one became strong. As the record of Zhou Daguan mentions, the war between Cambodia and Siam occurred many times. According to the Royal Chronicles, before king Bañā Yāt moved the capital city to the south, Angkor was attacked at least twice by Ayutthaya.⁵⁹ However, the Siamese occupations of Angkor were short-lived. The dates of the wars are very different in the chronicles of Nañ and VJ. According to the chronicle of VJ, in the year 1352 (1353 according to Nañ), the Siamese king Rāmādhpati (Ayutthaya) invaded and captured Angkor city. The chronicle of VJ declares that during the period spanning (1353-1354), the Khmer royal family escaped separately from the city to different areas.

Since then, the three of Khmer provinces (Nagar Rāja Semā, Pascim Purī, and Cand Purī)⁶⁰ were controlled by Ayutthaya. In 1354 the Khmer king reclaimed power, but wars between the Khmer and Siam were still swinging back and forth. According to the chronicle of Nañ, the Siamese invaded again in 1372, until Angkor was conquered in 1373 (VJ states that the invasion was in 1416, which differs 33 years from what is stated by Nañ). For a short time in 1373, the Khmer king Bañā Yāt pushed the Siamese back from Angkor (VJ states that king Bañā Yāt⁶¹ took the city back in 1417 at 21 years of age). According to these two chronicles, the dates of the invasions from Siam were 1351-2/1353 and 1372/1416. In 1384, he ordered the ministers to conduct his coronation ceremony, and was crowned and took the name of king Paramarājā I. He stayed at Angkor until 1388, and then decided to move the capital to Basan and then Phnom Penh (Catumukh).⁶²

The date 1431 that most of scholars marked as the event that punctuated the fall of Angkor after a final battle against Ayutthaya, is only mentioned in the Annals of Ayutthaya “Hluong Prasoat.”⁶³ However, the Khmer chronicles do not mention this date as the time when the city of Angkor was attacked and taken by Ayutthaya. The Cambodian Chronicles only state that the king Bañā Yāt decided to move the capital city to Basan (Srei Santhor), because the city was invaded very often by

58 Zhou Daguan 2006.

59 The foundation of Ayutthaya was about the period 1350-1351. See, Frankfurter 1909: 1-21. There were frequent wars between Siam and Khmer, and the Siamese in particular attacked Angkor before 1430, See, Briggs 1948-49: 3-33.

60 In Thai, the name was Korat for Nagar Rāja Semā, Prachin for Pascim Purī and Chantabun for Cand Purī.

61 King Bañā Yāt was born in 1397, the son of Srī Sūriyovañs (VJ). He was born before his father acquired the throne.

62 According to Chinese sources, there was a king named Po-pi-ya who was a king in Angkor. The name of the King Po-pi-ya has been suggested as the name of king Bañā Yāt. The Chinese reports mention that in the year 1404 king Po-pi-ya was still in Angkor. So the date is about 16 years different from the year mentioned in Nañ, but it is quite different from what is in VJ; For the Chinese source, see, Wolters 1966.

63 The year 1431 is also mentioned in the Annals of Ayutthaya “Hluong Prasoat,” as the date when Ayutthaya assaulted and sacked Angkor. Cf., Wolters, *op. cit.*, p. 44.

Ayutthaya, many of the Khmer people were taken to Ayutthaya, and some important provinces of the west were occupied by Siam. The Khmer people became weakened and oppressed by the effects of war, and the Khmer king thought that if he still stayed at Angkor, he and his people might face continued threats and domination. Therefore, the supposed date of 1431 as being the time when Angkor was sacked by Ayutthaya seems to have been influenced by the Siamese chronicle.

Although, the setting of the date 1431 is confusing when one compares the Khmer chronicles and Siamese chronicles, the date has been conventionally used as the date of the shifting of the capital southwards. As mentioned above, the relentless Siamese invasion is one of the main factors for the decline, and it led to the relocation of the capital to the south. Most of the historians and other researchers in the different fields of study of Cambodia accept this theory. The Siamese sacking Angkor in the 15th centuries is marked as a cataclysmic event in Cambodian.

1.3. The Last Kings who Reigned at Angkor

According to the chronicle of Nañ, king Param Nibbānapad reigned from the year 1346 to 1351. The chronicles tell us very little about king Nibbānapad, and there has been little information with regard to the last king Jayavarmādiparameśvara (or Jayavarma-Parameśvara) mentioned in the last ancient inscriptions of Angkor.⁶⁴ Consistent with the legend, it is said that the king Nibbānapad was a son of Ta Trasak Pha-em (Sweet cucumber), who was a usurper of the Angkorian throne.⁶⁵ This legendary account was mentioned in the chronicle of VJ. However, it is said that the history itself is very antiquated and was most likely subject to historical exaggeration. The creator of this legend most likely fabricated the report during the time when Angkor became powerless, or during a strain in Angkorian supremacy.

The history of Cambodia between the reigns of king Jayavarmādiparameśvara and king Nibbānapad is very unclear. We know very little about this transitional period from descriptions in the chronicle of Laos. The chronicle of Laos states, “in circa 1320-1330 a king of Laos Phoa Phi Fa was driven out of Mounng Swa (future Luang Prabang) by his father because of his loose living. Phao Phi Fa with his young son Fa Ngum sought refuge in Cambodia. And in circa 1338, Fa Ngum at the age of sixteenth was married to the Khmer princess Nang Keo Lot Fa. Then the king of Cambodia placed Phi Fa and Fa Ngum at the head of an army for the purpose of imposing the right to the throne of Muong Swa.”⁶⁶ However, we have not found any of these stories from the chronicle of Laos in the Cambodian chronicles or other inscriptions.

According to the chronicle of Nañ, king Nibbānapad reigned over Angkor until his death after five years on the throne. The same chronicle listed some 6 Khmer kings and 4 Siamese kings who had reigned at Angkor, until the capital city was moved to the south by king Bañā Yāt, first to Basan (Srei Santhor), then to Catumukh (Phnom Penh).⁶⁷ The chronicle of VJ listed 8 Khmer kings,

64 Cœdès 1942: 187.

65 The legend is not only known in Cambodia, but it is mentioned in the Burmese chronicles. In the Burmese chronicles it is mentioned that a farmer became a king after he killed a king named “Thy” when the king ate his cucumber. His name is Nyaung-u Sawrahan who reigned from 931-964 AD, Clef. Pe Maung and Luce 1923: 58.

66 René de Berval 1959: 34.

67 Names of the kings listed in Nañ’s chronicle: Khmer Kings were Baram Nibbānapad, Siddhāna(rājā), Param

including king Sūriyodai and Baram Sokarāj.

2. Emergence of Theravada Buddhism

The pillars of the Angkor civilization were supported by the religious beliefs of Hinduism and Mahayana Buddhism. The monarchs being regarded as god-kings were able to command the dedication and loyalty of subjects to serve the throne as a divine obligation. The introduction of Theravada Buddhism in the 14th century to the Khmers had turned out to hurt sublimely the basic foundation of the Angkor Empire in the long run. The adoption of Theravada Buddhism had also a great effect on the language, literature, art and architect, and the political systems guiding the society. It is said that it also had a great effect on the society, because it was not only a question of belief, but also something that rules the lives of people. So far, the change of religion in favor of Theravada Buddhism was a very profound change, as it marks the end of Brahmanic culture and Mahayana Sanskrit. In this regard, let us take a look at the inscriptions.

Early in the 14th century came an end to the Sanskrit epigraphy and the first Pali inscription appeared, that is the inscription of Kok Svay Chek.⁶⁸ Here, the ending of the one and the beginning of the other, are not merely a coincidence. That is, it was the tilting of religious ideology in favor of another. Everything fitted together. It was in the late 13th century that the last Brahmin temple was built at Angkor, and it was rather small. This temple, which the researchers called Mangalārtha (Ph. 1), was almost an anomaly in Angkor, because the new faith there was already widespread. It is clear that in 1308 AD, a king ordered the erection of a Buddhist monastery. Now the Brahmanic cult clearly became a minority. Certainly there could have been here or there Brahmins who continued their religious tradition and ritual,⁶⁹ but it was soon to be totally eclipsed.

It is probably from the 14th century that the construction of modest monasteries at Angkor and elsewhere began, and these remain today as the foundations of Vihear (sanctuaries) commonly referred to as “Buddhist terraces.”⁷⁰ As a word of caution however we must say that much has been stated with regard to the adoption of Theravada Buddhism, as being due to the urge for expansion and domination of power from the outside. This however is not certain, but Sukhothai was beginning to impose its weight on Angkor, and through it came the Theravada religion.



Ph. 1 Mangalārtha, a last Brahmanic temple in the 13th century

Lambañrājā, Srī Sūriyovaṅs, Param Rāmā, Dhammasokarāj; the 4 Siam kings were Cau Pā Sāt, Cau Pā Āt, Cau Ktuṃpañ Bīsī (Cau Ṭaṃpañ Bīsī), and Indarājā (Bañā Kraek).

68 Cœdès 1936: 14-21.

69 Inscription K. 470, found at Bayon temple, mentions an offering to one or many Brahmins. If the lecture of G. Cœdès is exact, the rite was done in 1327 AD. Cf. Cœdès 1942: 187-189.

70 Marchal 1918: 1-37. Those “terraces” which were made into the foundation of the Vihear, were seen everywhere in the Angkor Thom complex. All the terraces are not dated to the same period.

3. Constructions

Buildings are one of the external signs of power and wealth. The decline has also been explained as being due to the fact that during the reign of king Jayavarman VII, too much wealth was used to construct numerous great temples and carry out other programs. As a Buddhist believer, the king had to consecrate offerings to his god and people by building great temples, hospitals, rest houses, and roads. One inscription speaks of his generosity in the following words, “It is the public pain that makes the pain of the kings.”⁷¹

On the other hand, for the construction of roads during the reign of king Jayavarman VII, the motives were such as to spread out the religion, to control political stability, and to facilitate the transports of products and trade all over the country. However, these roads constructions brought danger to Angkor. First, the people in the remote areas could easily have access to the city. They learned everything about it, and also the smaller states that were under the supervision of the great Angkor, obtained the knowledge necessary to carry out a revolution in order to gain independence. Second, when Angkor became weak, the invaders could easily march with their troops via these road networks, to attack the city. As the result from the 13th century, Siamese troops repeatedly made war against Angkor.

When Theravada Buddhism had penetrated Khmer society in the 14th century, many Buddhist structures were erected on the old Brahmanic temples. For example, many Buddhist Terraces, in Khmer “Khoeun Vihear” (Ph. 2), have been discovered in the Angkor Thom compound, and they were mostly constructed on the ancient temples of the Angkor period. It is suggested that these terraces were probably built from around the 14th century onwards, and most of the terraces were reused, by utilizing blocks of stones from the Angkor period temples.

These “Buddhist terraces” show that Angkor was not completely abandoned but there were communities of people still living in Angkor. They suggest that Angkor certainly had no means of raising imposing buildings. Certainly one could argue that Theravada Buddhism does not require such great effort for temple building as in the case of Brahmanic Angkor, but the case of Spean Prasat Keo (Prasat Keo Bridge) is obvious (Ph. 3).⁷² For its construction they reused blocks of fallen temples, and this gave rise to two phenomena. Not only were the people far more willing to look for stones, but also, they no more restored monuments that were in disrepair.

Ang Chan, a well-known king in the 16th century founded the capital Longvek, but for a time he returned to the ancient capital of Angkor. The reoccupation at Angkor by king Ang Chan was evidenced in the account of a Portuguese named Diogo Do Couto who visited Angkor in the year 1550,⁷³ and in the two inscriptions completed in the northeast panels of Angkor Wat.⁷⁴ After king

71 Finot 1903: 18-33 (Eps. p. 25, 33)

72 We ignore of the exact period of the construction of the bridge, which crosses the Siem Reap River, prolonging the road of the victory gate of Angkor Thom and contouring Prasat Keo. However the gate is believed to have been built around the 14th-15th centuries.

73 The account of Diogo Do Couto mentions that the king of Camboja (Ang Chan) was in Angkor to hunt elephants and clean the vegetation and small trees that had grown up on the temple. The account also describes the condition of the Angkor temples, which was at that time called Angkor. Cf., Groslier 2006: 52-55.

74 The two inscriptions dated to 1546 and 1564 mention that King Ang Chan completed the two northeastern panels, which were left incomplete by H. M. Mahāvīṣṇuloka (posthumous name of king Sūryavarman II). Cf.,



Ph. 2 Wat Tep Pranam, Angkor Thom, or so-called “Buddhist Terrace”: these represent of the elements of the Theravada Buddhism, which is a sign of changes from the great monuments in Angkor period to these constructions in the middle period.



Ph. 3 Spean Prasat Keo, an old bridge was probably constructed in the 14th-15th century.

Ang Chan came king Saṭṭhā, who also returned to Angkor and restored some parts of Angkor Wat.⁷⁵ Other evidences are there, such as the reclining Buddha at Prasat Baphuon,⁷⁶ the trace of the Buddha image in the form of meditation at Phnom Bakheng, the inscriptions that were inscribed in the 16th century,⁷⁷ and Preah Ang Thom at Phnom Kulen.⁷⁸ All these show that the Khmer religious soul and the idea of Khmer greatness remained attached to Angkor. Therefore the question remains: why change the capital?

4. Possibility of Natural Calamity (?)

In living memory, Cambodia is not a land prone to natural catastrophes such as earthquakes or volcanic eruptions. It has been suggested that Angkor had been abandoned due to a natural calamity, which is certainly not altogether inadmissible. To reject the idea that disasters, serious and repeated in magnitude, could have ever happened, is possible, yet removing such ideas from the realm of possibility would go against any balanced inquiry.

With regard to the heart of the Angkor temples, as in the case of Spean Prasat Keo mentioned above, we have an indication quite palpable that certain very important irregularities occurred. It is precisely at the location of this bridge that the bed of the Siem Reap River collapsed, down to 6

Cœdès 1962: 235-248.

75 The inscriptions of IMA2 & 3 describe the fact that the king’s mother declared the meritorious act of the restoration of Angkor Wat (Brah̄ Bisnulok) by her son (king Saṭṭhā). Cf. Pou 1970: 96-126.

76 Although it is unclear regarding the precise date, it is suggested that the statue of the reclining Buddha was probably built in the 15th century.

77 The inscription K465, which is dated to 1583 AD, describes a high ranking religious man who came a long way, far from Cambodia, visited Phnom Bakheng, erected a column “satam” and restored 26 Buddha images, and then he went to Phnom Preah Reach Troap (Oudong), restored 50 Buddha images and a Vihear. Cf., Pou 1989: 20-27. See also, Khin Sok 1978: 271-280.

78 The inscription K715, which dated to 1586 AD, mentions the writer of the inscription named Cau Moha Kosal, who came to Phnom Kulen to repair the broken Buddha image. Cf., Khin Sok 1980a: 133-134. Also another inscription K1006 of Phnom Kulen states that a person who was entitled Brah̄ Rājamuni, came from Ayutthaya to see the statue of the Buddha, and then he came to see the god at Phnom Bakheng. Cf., Vickery 1982: 77-86.

meters below, so that today even the floods of exceptional magnitude on any given year can bring water to the level of its apron. Besides, subsidence has deviated from this very place the course of the river. This is an isolated example, but should be considered as a potential contributing factor, however improbable, yet not impossible. While there is no evidence of any large-scale disaster that could have uprooted the capital, yet if natural causes can achieve this magnitude in this region, they should not be disregarded.

It is not impossible that droughts, or conversely, repeated and consecutive floods, could have had a small part in the decision to abandon the Angkor region, which corresponds anyway to a web of factors. In the article related to the hydraulic city, Groslier suggested that one of the factors for the abandonment of the Angkor region was the collapse of the complex irrigation systems, which caused the construction of the huge Barays (reservoirs) to be stopped.⁷⁹ The water way and Baray filled, and blocked the irrigation during the dry seasons. That is to say, the economy of the Angkor Empire that was so far based on agriculture had failed, and both the political and economic power of the Khmer had become weak.

Recently, many researchers have confirmed and extended the theory of Groslier. For instance, in the recent research of the Great Angkor Project of Sydney University, they have speculated that the collapse of the irrigation system was due to climate change from the 13th to 16th century. If recent scientific research has proved that from the 13th to 14th century Cambodia had faced environmental problems due to climate change, then such a collapse is possible, since climate change was also mentioned in the account of the Chinese envoy Zhou Daguan who visited Cambodia in the 13th century. Zhou Daguan saw many lepers in Angkor, and he was told that the leprosy infection was due to climate change.⁸⁰ Such climate change occurred not only in Southeast Asia but also in Europe and the Maya kingdom, during the Little Ice Age from the 13th to the 16th century.⁸¹

5. Summary

Mentioned above are some factors that caused the decline of Angkor and which later led to the abandonment of Angkor, but there are still more hypotheses to be noted. The chief cause of the agricultural decline was also seen in its relationship to the high taxation on the land, which drove it out of cultivation, while another suggests taking a look at the issue of depopulation, but this is not very strong as a cause for the decline.

There is a feeling that researchers must still confront the decline and the abandonment of Angkor, though a current explanation is the collapse of the complex irrigation system and fact that the land was withdrawn from cultivation. It could also have been a direct result of the frequent attacks in the 14th and 15th centuries by the Siamese soldiers. Even though these two factors may prove satisfactory for the majority of scholars, yet we presume that one or two factors could not have led to the decline and abandonment of Angkor.

79 Groslier 1979: 161-202.

80 Zhou Daguan 2006: 51.

81 For climate change, see Penny 2010: 137.

III Towards the South and the Choice of Srei Santhor

According to the Cambodian Royal Chronicles and Chinese sources, the shift of capital from Angkor to Srei Santhor in the 15th century was not an accident, since it was already well thought out. Besides, the site of Srei Santhor was not a new place of settlement in the middle period, since it had already been occupied since the pre-Angkor and Angkor period. We have seen many archaeological traces from Angkor period, such as ruins that belong to the 10th and 11th centuries. In addition, many Chinese ceramics from the 10th to 12th centuries were found at the site.⁸² It appears as though Srei Santhor was a sacred point, and a place that was linked to the capital of Angkor and other places such as Phnom Penh, to Prei Nokor (present day Saigon, in Vietnam) via Ba Phnom (of the Prei Veng province), and also up to Laos through Mekong River.

Before shifting the capital to Srei Santhor in the middle of the 15th century, the site of Srei Santhor was already occupied by the Khmer kings in the 14th century. In a Chinese source, namely the *Ming Shi-lu* or the history of Ming dynasty, the name of a Khmer king *Hu-êrn-na* is recorded at *Pa-shan* (Basan) in the Kingdom of *Chên-la* (Cambodia), and Wolters asserts that during that times the king was not at Angkor.⁸³ Furthermore, the Royal Chronicles mention that during the threats to Angkor by the Siamese, Khmer kings had come many times to Basan (Srei Santhor) in the second half of the 14th and the beginning of the 15th centuries.⁸⁴

Although Srei Santhor was not a capital city of the Khmer for a long time in the Middle Period, it was an important place for political and economic base movements from the 15th to 17th centuries. This area was a place to move in or escape when kings and high-ranking people had trouble in other places. As the chronicles state, when the Siamese sacked Longvek in 1594, king Saṭṭhā escaped to Srei Santhor before fleeing to Laos.

The name Srei Santhor is also mentioned in various foreign records, especially in the Spaniard San Antonio's account of 1604. In that account it is declared, "the city of Sistor (Srei Santhor) is very important and has more than 50,000 inhabitants."⁸⁵ Phnom Penh, which is thought to have been a commercial place, had a population of 20,000 households, of which 3,000 were Chinese.⁸⁶ C. de Jaque, wrote the "Voyages aux Indes Orientales et Occidentales" that was published in 1840, and it was quoted by Groslier. It describes thus the palace of Srei Santhor: "the pagodas are made of gold or silver, with eyes made of rubies and teeth of diamonds".⁸⁷ Based on evidence from these accounts and the size of the population, at the end of the 16th century Srei Santhor was probably one of the concentrated areas for producing agricultural goods, especially rice products.

Before entering into the next discussion, we should briefly consider some ideas or hypotheses on the shifting of the capital to Srei Santhor (southwards), since it is a very crucial point for this chapter

82 Kitagawa 2000: 58.

83 Wolters 1966: 47.

84 See Chronicle of VJ, P. 48 (II).

85 San Antonio 1998: 6-7.

86 Groslier 2006: 116.

87 *Ibit.*, p. 122.

and the next. As I repeatedly mentioned above, most scholars on Cambodian history have strongly hypothesized the fact that the chief factor behind the changing of the capital southwards, was the Siamese invasion. This hypothesis is based on Siamese and Cambodian chronicles, since we have no other sources that can assure us of this event.

Moreover, Southeast Asian countries that used to be powerful kingdoms from the 7th to the 13th centuries, such as the Khmer kingdom (9th-13th), Pagan (9th-13th), and Sri Vijaya (7th-13th), were seen to undergo great changes in their political situations in the 13th century. This was due to the advance of the Mongol armies in the second half of the 13th century to China, and to some Southeast Asian countries such as Java, Burma, and Champa.⁸⁸ However, after the Mongols were defeated, trade activities rapidly flourished in Southeast Asia. In 1368, China changed its dynasty from Mongol to Ming. In the beginning of the Ming dynasty, some systems were changed, as for instance Chinese traders who used to be prohibited from trading in a foreign country, were now allowed to do so. So in the 14th century, many Chinese traders came to Southeast Asia. Also, many embassy missions from Southeast Asian countries were sent to China. In this context, it is suggested that Southeast Asian countries from the 15th to the 17th century experienced great changes in their political and economic situations, due to the links brought about by maritime trade between China and Southeast Asia. Anthony Reid, a scholar of Southeast Asian History, has designated this period as “the age of commerce.”⁸⁹

During the 14th and 15th century, Cambodia in particular noticeably increased its tribute missions to China. Directly or indirectly, the changing policies of the Ming dynasty are thought to have affected Cambodian politics and its economy, in that period. M. Vickery suggested that the purpose of shifting the capital to the south was to get close to the sea.⁹⁰ He presented evidence to show that there was a slow movement of the economic center towards the south. Between 1370 and 1420 there were many mission records from Cambodia, probably coming from ports on the Mekong, south of Phnom Penh. Since then, the political center of Cambodia had left Angkor, and it was moved from Angkor to new places in Southern Cambodia.

Although many scholars have emphasized the fact that the Siamese invasion of Angkor and expansion of maritime trade in Southeast Asia had exerted an effect on the relocation of the Khmer capital from the 15th century onwards, the role played here by agriculture, has more or less been neglected. In addition to earlier hypotheses, which simply take a look at the rise and decline of the Khmer kingdom, this study attempts to consider another factor that can contribute to filling in the gaps, and agriculture is one of the main such factors.

So far, the theory of the prosperity of the Khmer Kingdom’s economy as being based on agriculture has been considered in this study. Since they failed to control the irrigation management system, the huge Barays dried up, and along with the environmental degradation that was caused by climate change the agricultural rice production was reduced, and the Kingdom’s economy fell into trouble. When the country’s economic base became weak, the political authority became unstable, and this resulted in the decline of the Kingdom and abandonment of Angkor.

Hence, seeking a new place, as a facility for agriculture should be considered as another

88 For the expansion of Mongols to China and Southeast Asia, See, Stuart-Fox 2003: 52-72.

89 Reid 1988, 1993.

90 Vickery 1978: 509-522.

hypothesis among the regular factors, which are discussed below. This should also explain the process of the disturbance of the political authority, and it will explore the factors behind the cause by focusing on the political events and geographical elements.

1. The Region of Srei Santhor and its Description

1.1. Site Location

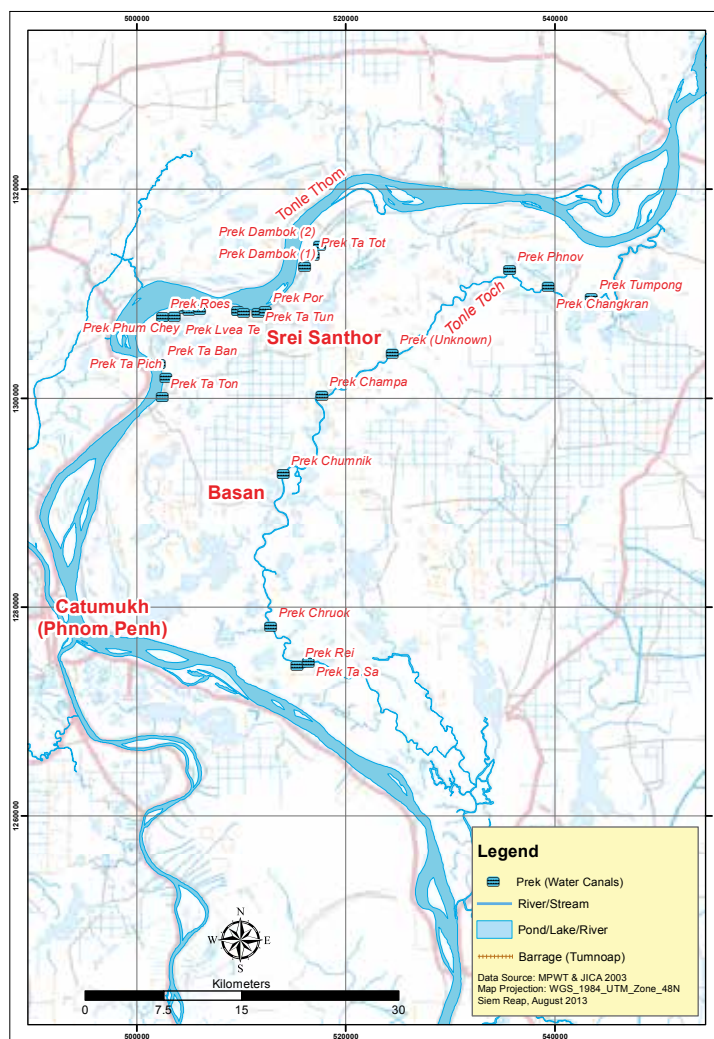
The region of Srei Santhor (Basan) is located on an island around 25 km to the northeast of Phnom Penh. In a record of the early 20th century, the region of Srei Santhor was listed in the province of Kompong Cham, which included the district of Srei Santhor and the area of Basan (Sithor), lying along the border of the Prey Veng province. However the district of Srei Santhor, which is in Kompong Cham, and the area of Basan, and belongs to the Kandal province, now separates it. In this thesis, we propose to use “Srei Santhor” for the general description to the whole region, and “Basan” when we specifically mention to the area of Basan (Sithor) itself.

Geographically, being an island, the site of Srei Santhor is situated in between the Mekong, called by the local people “Tonle Thom, or Grand river” to the west, and the waterway “Tonle Toch, or Small river,” to the east.

Tonle Toch is separated from the Mekong at Chi He, of the Koh Sotin district, in the Kompong Cham province, running through the Prey Veng province (close to Ba Phnom) up to the ancient city of Khmer Prei Nokor (present day Saigon, in Vietnam), while the Tonle Thom or Mekong runs to Catumukh (Phnom Penh). Situated in between the Tonle Thom and Tonle Toch, the region of Srei Santhor contains many natural lakes and water streams, which facilitate the preparation of “Prek, or man-made canals” for the irrigation system (Map 4).

1.2. Archaeological Traces

There are five important pagodas located in the area of Basan, namely Wat Prei Bang, Wat Mae Ban or Yiey Ban, Wat Sithor, Vihear Suor, and Wat



Map 4 Region of Srei Santhor, Tonle Thom, Tonle Toch and Preks

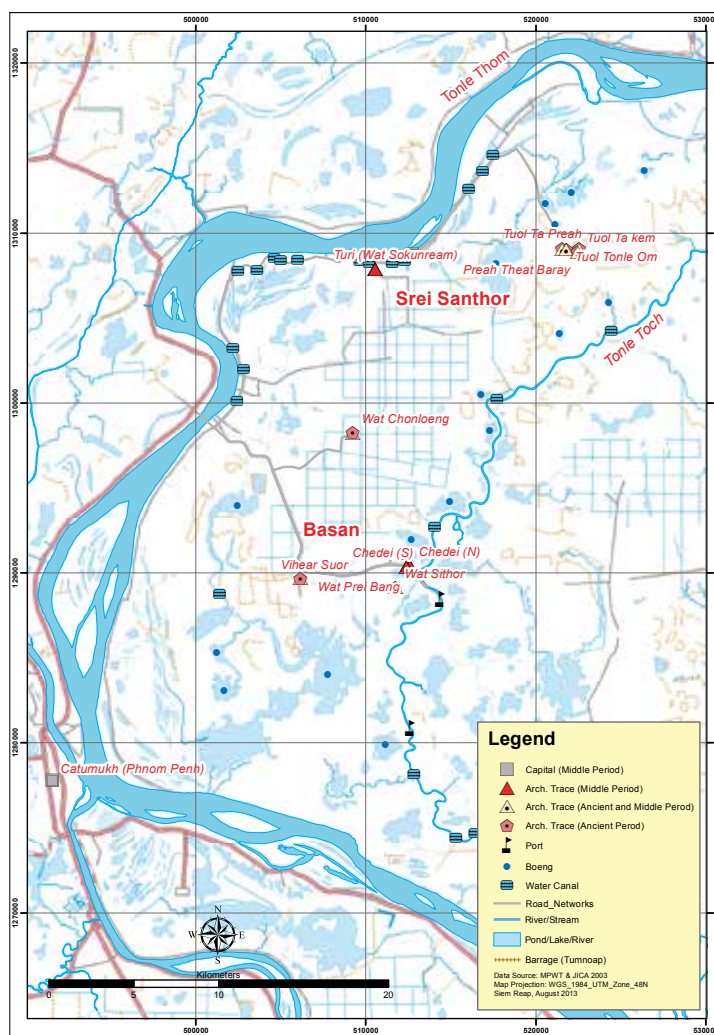
Ang Chonloeng (or Ang Janling) (Map 5). The Khmer kings and rulers built all of these pagodas after the decline of Angkor and when the capital was moved to the area from the 15th century onwards. Since Theravada Buddhism had begun to strongly penetrate Khmer society from the 14th century onwards, structures were erected for worship in the Theravada way, and there was not any influence of the Angkorian temple styles, although old traces of ruins the 10th, and 11th century have been found on the site. In the compound of the pagodas, the main building facing the east, called Vihāra (and pronounced, Vihear), was traditionally built and placed just in front of the stupas or the ancient temples of the Angkorian period. Also, most of the pagodas in the area of Basan have their own specificity that differs from that of other areas, and this compound of pagodas consists of two Vihears, placed on the same row or on the same platform. This style may be seen at Wat Mae Ban, Wat Sithor, Vihear Suor, and Wat Ang Chonloeng.

In my earlier field research of 2006, I found some fragments of Buddha images in sandstone and wood, and the local people restored some of the fragments. According to M. Giteau, who studied the iconography of post-Angkorian Cambodia, most of the Buddha images made of wood and sandstone were erected in the middle period.⁹¹ Many Chedei or stupas still remain in the pagoda compound, though they are in a severely ruined condition. We do not yet know exactly the date of each stupa, but H. Marchal suggested that most of the stupas were probably constructed between the 16th and 18th centuries.⁹² Besides these elements and Buddha images of the Theravada Buddhism of the middle period, some evidence of pre-Angkor and Angkor period constructions and inscriptions have also been discovered at the site. An inscription of Mahayana Buddhism was found at the site of Srei Santhor (at Wat Sithor), which dated to the 10th century when Buddhism was practiced there, especially in the reign of king Rājendravarman (944-968 AD).⁹³

91 Giteau 1975.

92 Marchal 1951: 581-590.

93 Stèle de Vat Sithor, K. 111, Cœdès 1954: 195-211; See also, Aymonier 1900: 261-270; and



Map 5 Monasteries and Ruin Sites of Srei Santhor (Basan)

Wat Prei Bang (Ph. 5)

Wat Prei Bang is located to the east of three other pagodas, that is, Wat Mae Ban, Wat Sithor, and Vihear Suor, close to Tonle Toch. We know very little about this pagoda, for there was no information from the earlier researches that were conducted. However, in the Cambodian Royal Chronicles it is mentioned that the king, Srī Sugundhabad (Srei Sukunthabat), who reigned at the beginning of the 16th century, built this pagoda for his wife Neak Mneang Pou, a sister of Sṭec Kan.⁹⁴ At present day we find very few traces of the pagoda, such as a basement with some blocks of laterite and Sīma (boundary stone) (Ph. 6). Besides, there are two old stupas made of brick and stucco, placed to the east of the temple compound (Ph. 7, 8). We still do not know the origin of these stupas, but according to the oral tradition narrated by the local people, Sṭec Kan erected them. In recent years, many new Vihears have been constructed in the compound, particularly replacing the old terrace of the Vihear basement.



Ph. 5 Wat Prei Bang, views from the South-East.



Ph. 6 Sīma of Wat Prei Bang



Ph. 7 Chedei, located to north-east of Wat Prei Bang



Ph. 8 Chedei, located to south-east of Wat Prei Bang

These two Chedei, or stupas were suggested to erect around the 16th -18th century.

the inscription was already published by E. Sénart in 1883 (cf., Cœdès, *ibid*).

94 Sṭec Kan was a local hero in the region of Srei Santhor. The royal chronicles mention him as a usurper king, after he killed a legitimate king Srī Sugundhabad. There are many stories related to Sṭec Kan both in the royal chronicles and oral traditions. Until now, his name has been well known by the local people, more than other kings who reigned at Srei Santhor.

Wat Mae Ban (or Wat Yiey Ban) (Ph. 9)

Wat Mae Ban is located to the north of Wat Prei Bang. Like Wat Prei Bang, we also have very little information about Wat Mae Ban. In the *Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge* created by Lunet de Lajonquière at the beginning of the 20th century, only the name of this pagoda is mentioned, and it is stated: “a group of three pagodas placed on the same line north-south, about 1 km distance from one another, Wat Sithor to the south, Wat Prei Bang at the center, and Wat Mae Ban to the north,” and he declared that the new Vihear was placed on the ancient construction.⁹⁵ The main Vihear of Wat Mae Ban is enclosed by a moat, and on the outside a large pond, which is connected to Wat Prei Bang, surrounds the moat.

To the east of Vihear a greatly ruined Chedei made of brick still remains (Ph. 10). In the Vihear there is seen a large sleeping Buddha measuring 10 meters in length, and the sole of the foot is 1.18 cm × 1.9 cm. Behind the Buddha image is a Chedei made of sandstone with a height of about 5 m (Ph. 11). M. Giteau noted that the comparable designs of the Buddhapada (or the sole of the foot)



Ph. 9 Vihear, Wat Mae Ban



Ph. 10 Chedei, located to the east of Vihear Mae Ban



Ph. 11 Chedei and Sleeping Buddha



Ph. 12 Preah Bat, or sole of the foot

⁹⁵ Lajonquière 1902: 167, 170.

with two symmetrical images representing Mount Meru encircled by the seven mountains in this Vihear, was also well attested in the tradition of Thailand and Burma (Ph. 12).⁹⁶

Wat Sithor

In history, the name “Sithor” was only recorded in European sources. The name Sithor probably derived from Srei Santhor (or Sri Sandhar), which G. Coedès suggested was the name that was originally altered from the name of the ancient capital of Angkor, Sri Yasodhara.⁹⁷ In the area of Sithor, another well-known name is Basan or Tuol Basan, which has been mentioned in various sources such as the Cambodian Royal Chronicles, Chinese records, and European sources.

In the compound of Wat Sithor, many important evidences from the Middle Period that are related to the elements of Theravada Buddhism, such as Chedei, Buddha images, and oral traditions, are to be found. At present we can still see some old grand Chedei made of bricks placed behind the Vihear, facing east (Ph. 13). To the east of the Vihear are five stupas made of bricks, concerning



Ph. 13 Chedei of Wat Sithor placed behind of the Vihear, facing to the east



Ph. 14 Inscription found inside of Vihear, Wat Sithor

96 Giteau 1975: 44-45.

97 Giteau 1975: 57.

which we still do not know the exact date, although Lunet de Lajonquière noted that those stupas were probably erected at the same time as the 10th century inscription discovered on the site,⁹⁸ and some fragments of Buddha images of the middle period have been preserved and may be seen in another Vihear, situated to the south of the main Vihear of Wat Sithor. Inside of Vihear, we found a very ruin stele of inscription (Ph. 14).

We have also found some traces of the basement of a 10th century temple, a part of which has now been replaced by a new construction of the Vihear. Based on the 10th century inscription found on the site and traces of the ancient construction, we may suggest that the site was already occupied in the Angkor period, and that the Khmer rulers reused it in the middle period. We can see some archeological traces of the Angkor period as well in Vihear Suor.

Vihear Suor

Vihear Suor is a site that was considered as being located in the region of Srei Santhor of the Kompong Cham province, but it now belongs to the Kandal province. In the middle period, the area was considered as a connecting gate between Srei Santhor and other areas such as Phnom Penh, Thong Khmum (Ba Phnom), and Prei Nokor (Saigon). Since ancient times, Vihear Suor has been regarded as a sacred place for the protection the capital and individual life, both in the belief of Buddhism and in the local spirit belief of “Neak Ta”.

At the present however, because of such strong beliefs, the site itself has been altered and almost all archaeological traces were demolished, due to the construction of many new buildings and Vihears on the ancient temples (Ph. 15). Now, we cannot view the sights that were described in the beginning of the 20th century by Lunet de Lajonquière, that is, “Dans le Vihear du N. est déposée une réduction de stupa taillée dans un seul bloc de grès laquée et dorée; cette pièce, qui mesure plus de 2 mètres de hauteurs, repose sur un pédestal...”⁹⁹ To the south of the Vihear about 1 km away, the structural basement of the ancient temple made of bricks that I used to see in 2006 and 2010, was replaced by a new construction. We found an ancient sandstone lintel and other fragments (Ph. 16, 17). The local people had kept those objects clean and put them in the shelter, and they have become part of the spiritual belief of the local people.

In the oral tradition, this place is connected to the well-known legends of Baksei Chamkrong (the Bird who shelters under its wing, Ph. 18) and Preah Ko Preah Keo (Sacred Bull and Sacred Gem). Many new statues that are related to the main characters narrated in the legend such as Ta Krahe, a young prince who was always accompanied by Ta Krahe (Ph. 19), and Preah Ko (a sacred bull) and Preah Keo (Preah Ko’s younger brother who formed as a human being) are seen at the site. All these statues are also believed to be powerful spirits protecting their villages and the local people.

98 Lajonquière 1902: 169.

99 Lajonquière 1902: 170-1, “In the Vihear of N. is filed a reduction of stupa, which carved in a block of lacquered and gilded sandstone; this piece that measures more than 2 meters of heights, lies on a pedestal”, translated by the author.



Ph. 15 Vihear Suor, new construction



Ph. 16 Basement, some fragment of bricks



Ph. 18 New statue, Legend of Baksei Chamkrong



Ph. 17 Old lintel is now believed as Neak Ta, a local spirit.



Ph. 19 Old lintel and statue of Ta Krahe

Wat Ang Chonloeng (or Ang Janling)

Wat Ang Chonloeng is located along the border of the Kandal and Kompong Cham provinces, and it lies at a distance from Vihear Suor, about 9 km to the north. Lunet de Lajonquière declared that Wat Ang Chonloeng was situated in the center of an island, and he mentioned the fact that the site had a majority of Chinese in its population.¹⁰⁰ Surrounding the site of Wat Ang Chonloeng, there are many mounds that still remain, some having fragments of roof tiles, bricks and other artifacts. Wat Ang Chonloeng has two Vihears on the same platform, and they were constructed just to be in front of the three towers ruin of the Angkorian period (Ph. 20). The three towers are north-south, facing the east. One of the three towers was now collapsed, while the other two towers are still in a good condition. The ruin was made of bricks, with the decorations of lintels, colonnades, and doorframes made of sandstone. The decorations and styles of lintels are quite similar to the lintels of Preah Theat Baray. It was probably built in the same period of Preah Theat Baray. However, we have no any information related to the Vihear (Ph. 21).

¹⁰⁰ Lajonquière 1902: 171.



Ph. 20 Wat Ang Chonloeng



Ph. 21 New Vihear of Wat Ang Chonloeng

2. Political Context

According to the Royal Chronicles, King Bañā Yāt had decided to abandon his capital of Angkor which was too close to the place of the Siamese attacks, and he decided to settle at Basan which was a place well suited to protect him from the Siamese threats. On the other hand, the site itself until the 17th century was a central point to control the territory to the east of the Mekong, and it adjoined the north and west of the country. Geographically, Srei Santhor can be easily accessed from Prei Nokor, Phnom Penh, Longvek-Oudong, and Angkor. Through the history of the middle period, we see that Srei Santhor was a stronghold capital once after the fall of Longvek in 1594. This event is described both in the chronicles and in the European sources.

2.1. Srei Santhor in the Historical Records

Royal Chronicles

As mentioned above, the sources for reconstructing the history of Cambodia from the 14th until the beginning of the 16th century are almost blank. However, since the inscriptions are inadequate, the Royal Chronicles are our best choice to reconstruct the history of the Cambodia in the Middle Period, though the analysis of the texts should be treated carefully, if possible with the support of inscriptions and foreign sources.

According to the Royal Chronicles, there are at least 10 kings, and Stec Kan, and Rām Joeñ Brai, who ruled at Srei Santhor and for a short time at Catumukh, from the middle of the 15th century to the beginning of the 17th century. Below is a brief chronological chart.

| No | Names | Times | Genealogies |
|----|---------------------------|-------------|---|
| 1 | Bañā Yāt (Paramarājā I) | 1373 - 1433 | His relationship to the earlier king is uncertain |
| 2 | Nārāy Rājā (Nārāy Rājā I) | 1433 - 1437 | His relationship to the earlier king is uncertain |
| 3 | Srī Rājā | 1437 - 1476 | His relationship to the earlier king is uncertain |
| 4 | Srī Soriyodai | 1438 - 1478 | His relationship to the earlier king is uncertain |
| 5 | Dhammarājā | 1468 - 1504 | Son of Bañā Yat |
| 6 | Srī Sugandhapad | 1504 - 1512 | Son of Dhammarājā |
| 7 | Stec Kan | 1512 - 1525 | Son of a low ranking minister |
| 8 | Rām Joeñ Brai (Rām I) | 1594 - 1596 | Son of Abhayadas |
| 9 | Bañā Nūr (Rām II) | 1596 - 1597 | Son of Rām Joeñ Brai |
| 10 | Bañā Tan (Paramarājā V) | 1597 - 1599 | Son of Saṭṭhā (Paramarājā IV) |
| 11 | Bañā An (Paramarājā VI) | 1599 - 1600 | Uncle of Bañā Tan |
| 12 | Bañā Nōm (Kae Hvā I) | 1600 - 1602 | Son of Saṭṭhā (Paramarājā IV) |

In VJ's chronicle, the year of the capital's shift is different from that of Nañ by 43 years, and this was in 1431,¹⁰¹ the date that most of scholars marked as the event that punctuated the fall of Angkor after a final battle with Ayutthaya. However, the Khmer chronicles do not mention this date as the time when their cities were attacked and taken by Ayutthaya. For example, VJ only stated that king Bañā Yāt decided to move his capital city to Basan, because the city was invaded very often by Ayutthaya, and many of the Khmer people were taken to Ayutthaya. Some important provinces of the west were occupied by Siam, and the Khmer people had become weakened and were oppressed owing to the effects of the war. The king thought that if he still stayed at Angkor, he and his people might face continued casualties and domination. Hence, the supposed date of 1431 as being the time when Ayutthaya sacked Angkor seems suspicious, since the Siam chronicle influenced it.

After the preparation for the establishment of the new city, in 1433 king Bañā Yāt abdicated the throne to Nārāy Rājā (known also as Nārāy (ṅ) Rāmā).¹⁰² King Nārāy Rājā reigned until his death in 1437, when Srī Rājā succeeded to the throne. During this period, there was internal conflict among the Khmer kings. The war between Srī Rājā, Srī Soriyodai and Dhammarājā (son of the king Bañā Yāt) took years, the outcome of which saw the country divided into three portions. According to Nañ's chronicle, until 1468, Dhammarājā had control over the throne at Phnom Penh.¹⁰³ In 1476, Dhammarājā asked the Siamese soldiers to attack Srī Rājā, and the throne was captured by Ayutthaya.

VJ recounts that during the reign of Srī Rājā, the country was more stable in social and economic matters than in previous reigns. The king also prepared to fight back in order to reclaim the territory of Nagar Rāja Semā, Pascim Purī, and Cand Purī. Military strategy utilized both land and water as means of approach (water through Kampot to Cand Purī, and land through Bodhisātv (or Pursat), Pātṭampañ (or Batdambang) and Srah Kaev to Nagar Rāja Simā). When the war between Siam and Khmer was raging in the western part of the country of Khmer, Srī Soriyodai betrayed Srī Rājā and took control of all the eastern provinces including Kampong Siem, Stung Stong, Choeng Prei, and Baray.

At the city of Catumukh, Dhammarājā knew about the situation, and he took steps to control the city and the western provinces from Samrong Tong up to the sea. Then, he asked a minister to inform Srī Rājā at Pascim Purī about the betrayal of Srī Soriyodai. Srī Rājā ordered the ministers to protect Cand Purī and Pascim Purī, and he decided to return back to the city (Catumukh). After he arrived at Pursat, in 1476, he crossed the river with troops to fight with Srī Soriyodai. So civil war began in the country. The war was not only between Srī Rājā and Srī Soriyodai, but also with Dhammarājā, after Srī Rājā found that Dhammarājā did not follow his orders.

Srī Rājā decided to control the western provinces from Rolea Pha-ie, Pursat, and Batdambang

101 The year 1431 is also mentioned in the Annals of Ayutthaya "Hluong Prosoath", as the date when Ayutthaya assaulted and sacked Angkor. Cf., Frankfurter 1909: 1-21, Briggs 1948-49: 3-33, Wolters, *op. cit.*, p. 44. It should be noted that the date 1431 in VJ's chronicle was probably influenced by foreign sources, since this publication was carried out during the period of the French Protectorate as noted in Chapter I.

102 In VJ's chronicle it is mentioned that Bañā Yāt abdicated in 1463 (he died in 1466) and gave the throne to Nārāy Rājā until his death in 1468, and his younger brother Srī Rājā succeeded him.

103 Dhammarājā has two sons, Bañā Ṭāmkhāt (Srī Sugandhapad, the name he had when he was crowned king) and Ang Chan, or Bañā Cand (Rājā), or Paramarājā II (the crowned name). In this study, we prefer to use the name of Ang Chan rather than Bañā Cand, or Cand Rājā, since the name of king Ang Chan is well known.

up to the Siamese provinces, the north from Kompong Siem, Choeung Prei, Kok Seh, Stung Stong, and Kompong Svay up to Kok Khan, Surin and the Laos border. In 1478, Srī Soriyodai was made the leader at Srī Sandhor. His territory spread from the province of Sambor, Tbong Khmum, Ba Phnom up to Duon Neay and Champa. In 1479, Dhammarājā took the throne at Catumukh and controlled the province of Samrong Tong, Thpong, Kampong Som, and Kampot up to Basak, Prah Trapeang, Kramuon Sar, Koh Slaket, and Peam. The war continued for almost ten years and the country was divided into 3 parts.

In 1485, king Dhammarājā asked the king of Siam for help to finish the conflict between Srī Rājā and Srī Soriyodai. The king of Siam Mahā Cakrabartti¹⁰⁴ led many soldiers to break down the soldiers of king Srī Rājā at Kampong Siem. Because the civil war in the country had been taken so long, many people were killed and the territory was diminished, so Srī Rājā decided to negotiate for peace with Dhammarājā and Srī Soriyodai, ending the war among the Khmer kings. In order to avoid future conflicts among Khmer kings, the Siam king asked king Dhammarājā to take Srī Rājā and Srī Soriyodai to Ayutthaya. A few years later, those two kings died of disease. A son of Srī Rājā name Pañā Uñ (or Siddhien Rājā, a name that was given by the Siamese king) was adopted as a son of the Siamese king, and he got married to the daughter of the Siamese king. In 1486, king Dhammarājā underwent a coronation ceremony to become king at Catumukh. King Dhammarājā continued to rule until his death in 1504, and his son Srī Sugandhapad ascended the throne at Catumukh and then moved to Basan.

Sṭec Kan (Sdec Kan)

Among the kings who reigned at Srei Santhor, Sṭec Kan¹⁰⁵ was a well-known ruler and is considered a hero in the area of Srei Santhor. In a legend, when his mother gave birth to him near a river, the baby who was just born was accidentally dropped into the river. Unfortunately, a short while later there was an enormous fish that swallowed the baby, and later the fish was caught by a fisherman. The fisherman then presented that fish to the pagoda, and fortunately the baby survived. The story related to the legend of Sṭec Kan's birth is also described in the chronicle.¹⁰⁶ The story of a fish that swallowed a baby is also described in the Indian scriptures, which is one from the Mahabharata and the other is from the Vishnu Purana. There is a story in the Mahabharata about a fish that gave birth to two little children. The story is as follows: Satyavati, was the great grandmother of the five

104 The name of the Siam king Mahā Cakrabartti given in VJ has no correspondence to the name of the Siam king of that period. It seems to have been given by the Khmers to the Siam king Rāme-suan (Baramtrilokanat), who reigned from 1448. See, Khin Sok 1991: 28. However, in G. Cœdès classical book mention is made about the Siam king Mahā Cakrabartti who ruled in 1549 and who was faced with an attack by Burmese soldiers. The king had to release two kings who were hostages, Mahadhammaraja from Ayutthaya, which was a part of Khmer territory. Because the king had to defend his city from the attack by the Burmese, Cambodia was slightly suppressed by Siam; G. Cœdès 1967: 139-171.

105 Sṭec Kan was a son of a low ranking minister named Braḥ Jai Nāga (Preah Chei Neak) and a lady named Nān Pān (Neang Ban), a slave of The Triple Jewels “in Khmer, Bal Braḥ Srī Rataṇa Trai” (or a person who serves at the pagoda). After the king got married to Nān Bau (or Preah Snam Ek Pau), a sister of Nāy Kan (Neay Kan), Nāy Kan became a bother-in-law to the king, and he had power in the royal palace. For details of the history of Sṭec Kan, see Khin Sok 1988: 102-103.

106 Among Khmer chronicles, only the chronicle of VJ mentions Sṭec Kan's birth story.



Ph. 22 Bayon relief, south gallery of the Bayon temple, depicted an enormous fish story in the Indian scriptures.



Ph. 23 The 10th century ruin, Preah Theat Baray, Srei Santhor

heroes of the Mahabharata (namely the five Pandavas). She was the daughter of an Apsara named Adrika, who, because of a curse, was forced to live as a fish in the Ganges River. One day, the semen of a King named Uparicaravasu fell into the Ganges River, and the fish swallowed this semen and became pregnant. A fisherman caught this fish, and when he cut it open, he found two little babies in it, one was male and the other was female. The female child later became Satyavati, who was the great grandmother of the five Pandavas.¹⁰⁷ There is also another story about a fish that appears in the *Vishnu Purana*. Pradyumna was a re-incarnation of Manmatha, the God of Love. He was born as the son of the God Krishna and his Queen Rukmini. When he was born, a demon named Sambarasura kidnapped him and threw him into the sea, where a big fish swallowed him. Some fishermen caught this fish. They brought it into the kitchen of Sambarasura's palace and cut it open, and they found a male child inside the fish. Mayavati, who was the chief maid of Samabarasura's Queen, raised this child as her own. This child was Pradyumna, who later became famous as the son of Krishna. When Pradyumna grew up, he killed Sambarasura and married Mayavati.¹⁰⁸ The enormous fish story is also carved on the wall of the south gallery of the Bayon temple (Ph. 22).

Even now, the legend of S̄tec Kan and his name still exist and are known very well by the people in Srei Santhor and the surrounding area, especially in the Khum Baray (Baray commune) around Turi village located on the bank of the Mekong, and around Wat Sithor and the surrounding area.

107 Vettam Mani 1984: 709.

108 Swami Harshananda 2008: 531.



Ph. 24 Lintel depicted the scene of Vishnu reclining on Naga



Ph. 25 Lintel depicted the scene of Shiva dancing



Ph. 26 Lintel depicted the scene of the Churning of the Sea of the Milk

In the area of the Khum Baray, there is to be found a ruin from the Angkor period made by bricks on the square mount, and according to E. Aymonier this ruin was built in the first half of the 10th century.¹⁰⁹ The ruin is called Preah Theat Baray (Sacred relics temple or reservoir) (Ph. 23). On the ground surrounding the temple, there are many fallen fragments of pediments and lintels made of sandstone (Ph. 24, 25, 26). There is one interesting lintel depicting the myth of Vishnu lying on a Naga. The villagers believe that the relief of the god Vishnu is representative of S̄tec Kan, who was born in the year of the Naga. Related to the Naga and S̄tec Kan, there are many stories written in chronicles and also narrated in the legend. In the chronicles, it is mentioned that when king Srī Sugandhapad tried to kill S̄tec Kan, the Naga came to protect him.¹¹⁰

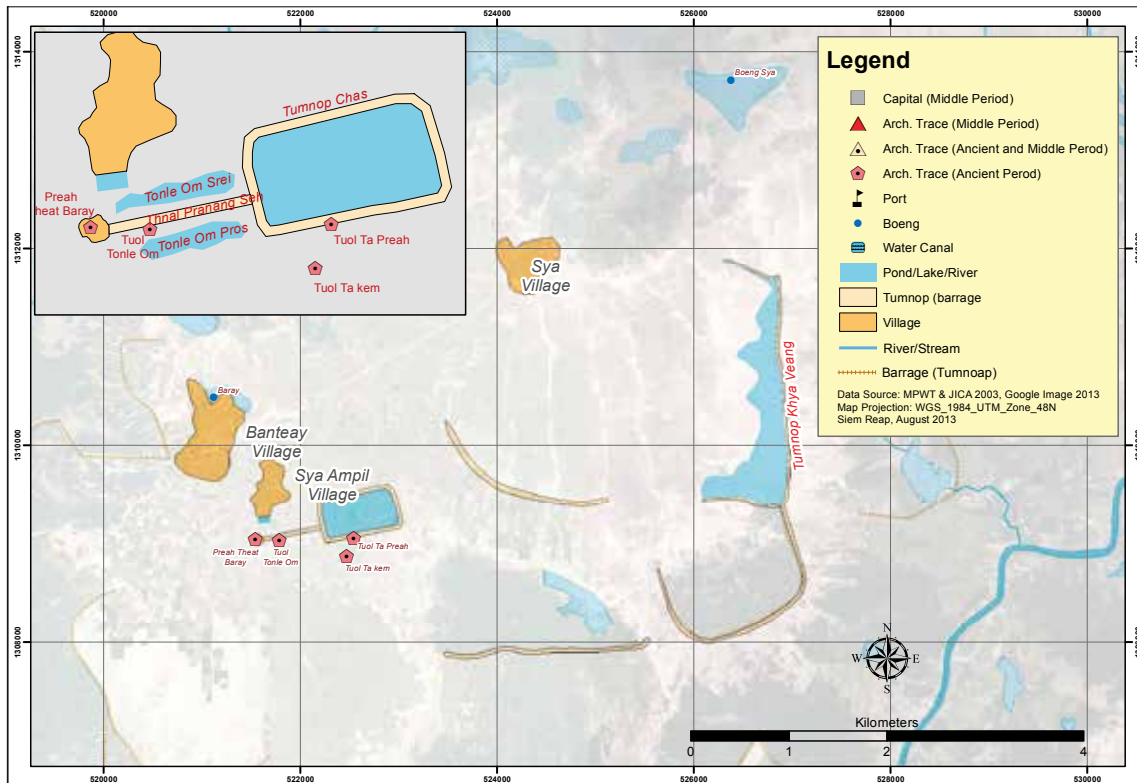
Beside the ruin, there is a long road just located in front of the Preah Theat Baray ruin, connected to Tumnoap Chas, called Thnal Pranang Seh (race-course road), and there are two ponds called Tonle Om Srei and Tonle Om Pros (boat race lake) (Map 6). All the places are related to S̄tec Kan. In the village of Turi, there is a pagoda named Wat Sokunream and inside its compound is a great stupa, called Chedei S̄tec Kan (Ph. 27), and in the pagoda of Sithor, as mentioned above, there are four stupas located to the east of the main Vihear, and among these stupas, one is said to have belonged to S̄tec Kan. Other pagodas such as Wat Prei Bang and Wat Mae Ban are accredited to the family of S̄tec Kan.

There are various episodes in the oral traditions narrated about S̄tec Kan, but less mentioned is the king Srī Sugandhapad, and as for the name of Ang Chan, it has never appeared in the narrations. However, the chronicles describe the fact that S̄tec Kan was involved a struggle first with Srī Sugandhapad, and then with Ang Chan. Below is a resumé of the event.

When Srī Sugandhapad ruled at Basan, in 1508 S̄tec Kan prepared to fight with him (according

¹⁰⁹ Aymonier 1900: 250-52.

¹¹⁰ See the chronicle of VJ, Tranet 2001.



Map 6 Ruin of Preah Theat Baray and Surrounding Area



Ph. 27 This new stupa is belived to build on the old stupa of Sdec Kan; the local villagers called “Chedei Sdec Kan”.

to Nan’s chronicle). In 1512 the king was assassinated at Stung Saen in the Kompong Svay province (the present Kompong Thom), while he escaped from the battle at Basan when he was attacked by Sdec Kan. Ang Chan, a brother of king Srī Sugandhapad, fled to Siam. After that, Sdec Kan ascended the throne and was named Srī Jetthā, reigning in peace over Basan for 4 years. His territory spread north to Laos, west towards Siam city, east towards Champa, and south towards the seaboard.

According to the VJ, during the reign of Sṭec Kan, the country was rich and prosperous, drawing many people to immigrate there due to its positive cultural influences and peaceful rule. He minted silver and gold coins for money, that is, “Prāk’ Sliṅ and Mās Sliṅ”¹¹¹ that were decorated with a Nāga image, for use in the country.¹¹² The chronicle did not describe the reaction of the populace towards Sṭec Kan during his reign, nor did it describe that of the mandarins or Brahmans. However, the revolt of Sṭec Kan was not justified when we consider the best interests of the nation, and besides it appears that a son of a slave of the pagoda becoming a king was something prohibited by law.¹¹³ Therefore, king Ang Chan made efforts to find a way to establish justice and for the integration for the land, and finally Sṭec Kan was arrested and killed.

Foreign Sources

Besides the Cambodian Royal Chronicles, the names and events related to Srei Santhor (Basan) were described first in the Chinese records of the 14th and 15th centuries, and in European sources of the middle of the 16th and 17th centuries. Even though the Chinese records provide little information about Cambodia, the Ming dynasty had treated Cambodia fairly and with respect. For example, in 1404 the Chinese imperial government released three Khmer troops and sent them back to Cambodia, and in 1414 the imperial government sent a message to Cambodia and Champa asking them to cease fighting and rebuild the relationship between the two countries.¹¹⁴ According to Wolters, the Chinese court sent at least seven missions to Cambodia in the second half of the 14th and beginning of the 15th centuries.¹¹⁵

The area of Srei Santhor was first mentioned as having the name *Pa-shan* (Basan) in the Chinese records, when Cambodia agreed to send tribute to China. Kuo Chêng who was appointed to announce to the people in Cambodia the recent king’s accession to the throne in the year 1371, used the name *Pa-shan* in the record.¹¹⁶ Around the middle of the 16th century, the area of Srei Santhor was mentioned once again by a Portuguese missionary. A Portuguese by name Gaspa da Cruz, who visited Cambodia in 1555, mentioned the name of three cities of Cambodia, of which the first was Srei Santhor, and then Longvek, and Catumukh (Phnom Penh).¹¹⁷ However, according to San Antonio’s account in 1604, the main cities are Anchor (Angkor), Churdumuco (Phnom Penh) and Sistor (Srei Santhor).¹¹⁸

In the account of San Antonio, he describes the war between Cambodia and Siam. The account states: “...the King of Siam wanted to force Apram Langaram,¹¹⁹ the king of Cambodia, to hand over

111 Sliṅ was an old coin worth about 25 cents. Cf., Franklin E. Huffman and Im Proum 1977: 136. As for the archaeological evidence, we have not found any of silver and gold coins in that period.

112 Throughout the history of Cambodia, in relation to monetary matters, we see that coins were not produced in Cambodia until the 16th century. If what is mentioned in the chronicle is reliable, the coins would probably have been minted during the rule of Sṭec Kan.

113 Khin Sok, 1991, p. 29.

114 Wade 2005: 21, 24.

115 Wolters 1966: 46.

116 Wolters 1966: 47.

117 Groslier 2006: 116; Briggs 1950: 5.

118 San Antonio 1998: 6.

119 That is the name of king Saṭṭhā who is mentioned in the Royal Chronicles.

the animal to him. For that purpose, he gathered together an army of thirty thousand men along with three thousand war elephants, and, although the king of Cambodia had set another army as powerful against them, Siam was victorious, they took possession of the white elephant and made one the king's brothers and three thousand men prisoners. ...As for king Apram Langara, he returned to the Kingdom of Laos, accompanied by his son" (this event is also mentioned in the Royal Chronicles, and the details of this event will be discussed in the next chapter).¹²⁰

Another description related to the area of Srei Santhor is mentioned in the reports of the Chinese Junks to the Nagasaki port authorities (Tokugawa Japan).¹²¹ Around 56 Chinese Junks passed by Cambodia before arriving at Nagasaki, and each Chinese junk reported to the Nagasaki authorities about the situation in Cambodia. In the Chinese reports, mention was made about the war between Cambodia and Siam, and the internal conflict between the two brother kings, referred to by the Chinese as "Mountain Kings" and "Water Kings". The reports were from the year 1679 to 1723, and during this period according to the chronicles, the "Mountain Kings" ruled at Oudong and the "Water Kings" governed at Srei Santhor. According to the chronicles, during this period the kings who reigned at Oudong were Aṅg Jī (Kaev Hvā II), Aṅg Sūr (Jayajetthā III), Aṅg Nūr (Srī Dhammarājā II). The "Mountain Kings" who ruled at Srei Santhor were Uphayorājā Aṅg Nan' (Padumarājā), supported by Nguyên, and Aṅg Im (Kaev Hvā III).¹²² The internal conflict between the "Mountain Kings" and the "Water Kings" was also studied by Japanese researcher Takako Kitagawa, who has often used the Japanese source called *Ka-i hentai*, for her reference to treat the history of Cambodia in the 17th century.¹²³

2.2. A Short Interlude in Catumukh (Phnom Penh)

According to the chronicle of VJ, after king Bañā Yāt moved the capital to Basan for a year, he decided to reside at Catumukh due to the inundation at Basan. Another king who reigned at Catumukh was king Dhammarājā, son of king Bañā Yāt. In the history of Cambodia, the reign at Phnom Penh was very short, and it had never been referred to as the capital of Khmer until the 19th century. The Cambodian Royal Chronicles provide very little information related to the area of Phnom Penh, though according to European sources Phnom Penh was a very active place for trading. Phnom Penh was a strategic and potential place for trade and it seems to have already been occupied by traders, but why could not the Khmer kings settle there for a long period? If they changed the capital to a southward location, it was possible to seek a commercial port and easily link up with international trade, but then why did the kings return to Srei Santhor? These are questions I still cannot answer.

120 San Antonio 1998: 10.

121 Ishii 1998. The Chinese Junk Trade is a translation from the Tōsen Fusetsu-gaki, which is an official report that the Tokugawa government in the Edo period tried to collect information from foreign countries. The report is not only from the Chinese Junk, but also from other foreigners who came to Nagasaki, like the Dutch report to the Nagasaki authority called Oranda Fusetsu-gaki, etc. There are many other reports from foreign traders to the Nagasaki authority.

122 For the details of the event mentioned in the chronicles, see Mak Phoeun 1995: 359-442.

123 Kitagawa 2000: 65-66; see also Kitagawa 2006: 116-118.

3. Motives for the Choice of Srei Santhor

3.1. Potential of the Agricultural Products

Historically, the development of the Khmer civilization was based on cultivation. The first state of Funan was not only experiencing a commercial boom at the famous port of Oc-Eo, but it attained agricultural resources from inland areas. From aerial map views, we see that the area of Funan, which is now located in the southern part of Cambodia and the Mekong delta (present day Vietnam), reveals a complex waterway network for draining and irrigation combined. Even though from the 6th century the sea trade route network was weakening, Chenla state became a strong agricultural base at the inland centers. M. Vickery suggested that Chenla and the Angkor periods appear as the prototypical inland agrarian state, until its decline during the 13th -15th centuries.¹²⁴

On the other hand, the Chenla state developed at the inland center, that had a subsistence-level economy based on the Mekong tributaries. B. P. Groslier asserted that from the 15th century onwards the Khmer abandoned Angkor not only geographically, but also with regard to the type of land use that had created it. However, a subsistence-level economy of Cambodia from the 15th to the 18th centuries was to take over once again, almost the same places and the same system of the pre-Angkorian period.¹²⁵

The first choice for the Khmer capital in the middle period was Srei Santhor, which was located along the belt of the Mekong. It was an area that could produce crops on the fields lying along the riverbank called “*camkār* or *chamkar*”, which contained fresh ground and soft soil, and by using which people could cultivate crops such as tobacco, corn, indigo, cotton, and various other plants and vegetation. Also, on the inland and surrounding area were “*Boeng*, or large ponds” which connected and shared water with the natural and artificial canals, and the area had paddy fields that were used for growing rice.

Records of early French researchers at the beginning of the 19th century stated that people in the area situated on the left of the Tonle Toch cultivated plenty of rice, and planted many palm trees to produce sugar palm. The people in this region also grew a lot of cotton, mulberry, and indigo along the riverbanks of the Mekong.¹²⁶ In J. Moura’s account of 1883, he states that almost everywhere on the bank of the river, the Khmer people planted a lot of corn, cotton, and indigo. The account mentioned that cotton was most important in Khmer culture and that it could be produced every year.¹²⁷ The *Monographie de la circonscription résidentielle de Kampong Cham*, and the article published by Peyrusset in 1880, stated that most of the population resided along the bank of the Mekong.¹²⁸

What the earlier explorers had seen in the area from the second half of the 19th century to the beginning of the 20th century remains the same today, both regarding the mode of culture called “*chamkar*” and the paddy rice cultivation. Even these days, Srei Santhor district can produce a lot of rice, not only to support the population in its area but also to satisfy the demand of the whole province

124 Vickery 1998: 257.

125 Groslier 1985-86a: 63-64.

126 Aymonier 1900: 258-59.

127 Moura 1883: 26-28.

128 Cf., Kitagawa 2000: 52.

of Kompong Cham. During the rainy season, the water level goes up and spreads all over the area, enabling easy access by boat to the interior of the villages, while during dry season, villagers can use oxcarts for their daily mobility. At present, most of the people who live along the belt of the Mekong can grow a lot of tobacco, corn, cane, and other vegetables. In inland areas, that is, areas lying at a distance from the riverbank of the Mekong down to the Tonle Toch, paddy cultivation is used.

Based on the situation we have seen today and the records of the European explorers of the second half of the 19th and the early 20th century, it can be suggested that the geo-environmental situation from the 15th to the 18th century was not very different.

3.2. Traditional Water Management Systems

Unlike in the case of the ancient periods (the pre-Angkor and Angkor periods), nothing is mentioned in the royal chronicles and other Khmer sources from the 15th century onwards, concerning agricultural products and terms related to irrigation or water supply for cultivation. Even though in the ancient Khmer inscriptions not much mention is made about them, yet there are at least a few records about agricultural products. In the inscription K. 505¹²⁹ dating back to the year 939, mention is made about “the products of over 228 areca and 140 coconuts served by over 32 workers. There was one and a half *sanre* of rice land and five *yoke* of buffalos, suggesting that it was just enough to supply the personnel tending the plantations, which obviously produced a surplus of fruits, which were perhaps destined elsewhere.”¹³⁰

Also, other inscriptions such as K. 44, K. 79, K. 115, mention the word “Sre”, which means “field, or rice field”, and “travañ” which means “ponds.”¹³¹ These two words mentioned in the inscriptions are related to each other. Professor Ishizawa Yoshiaki, in his work on the examination of historical inscriptions, asserted that the Khmer people in ancient times traditionally built their villages on the edge of waterways, such as Trapeang, Boeng, and Prek.¹³² Other inscriptions such as K. 138, K. 933, K. 299, and K. 754 mention the word “añcan”, which means “moat, or pond.”¹³³

As regards the systems of Prek (man-made water canals) associated with a river, Boeng (natural ponds) and Tumnoap (water barrage), we see that the system of Prek is not something spectacular like that of the Baray (reservoir) at Angkor, but perhaps at the level of the “country” it was infinitively more effective and durable (Ph. 28, 29, 30). Unlike the Baray at Angkor that needs a lot of human energy to build, Prek management systems use less labor, and people of their own village or community can manage them. The system of Prek and its terminology are mostly employed in the southern part of Cambodia, while Baray is mainly used at the northern part, especially in the Angkor region. For example in the Kandal province, from Sa-ang to the Koh Thom district, a distance of approximately 100 km, there are more than 60 Preks that share the water from Tonle Basak (another name for the Mekong River) to the plains.

Also, according to the 2003 topographical map of the Ministry of Public Work and Transportation

129 K505 was found in the area near Aranyaprathet province (present day Thai-Cambodia border).

130 Vickery 1998: 280-281.

131 Vickery 1998: 112, 199.

132 Ishizawa 2000b: 10, 11.

133 Pou 2004: 8.



Ph. 28 Prek Lvea Te flows from Tonle Thom (Mekong)



Ph. 29 Boeng Yiey Maov, water flows from Tonle Thom via Prek



Ph. 30 Prek Dambok flows from Tonle Thom to the Baray commune, the area of Preah Theat Baray ruin.

(MPWT) and the Japan International Cooperation Agency (JICA) of 1/100,000 scale, there are at least 9 Preks along the belt of the Tonle Toch, counted. Also, according to the 2003 topographical map of the Ministry of Public Work and Transportation (MPWT) and the Japan International Cooperation Agency (JICA) of 1/100,000 scale, there are at least 9 Preks along the belt of the Tonle Toch, counted from the break point of the Tonle Thom of Prek Tumpong at the northeast to Prek Ta Sa at the southwest (Map 7).



Map 7 Map showing the complex of water chanals and natural ponds

There are 15 big Preks from the new bridge of Spean Ta Meak to Prek Dambok in the district of Srei Santhor. Prek directly means “water break or fosse,” and it is a tributary or man-made canal that shares water from the rivers during the flood season, and keeps the water for being used during the dry season. Prek is also used to commute from one community to another. The mouth of the Prek is called Peam, and Prek is also called Chumnik, which is derived from a verb Chik meaning to “dig”. In the area of Longvek, what people call Peam Chumnik refers to a Prek, which was probably dug during the Ang Duong reign in the 19th century (r. 1840-1960).

Cambodia divides the year into two seasons, namely the rainy season that starts from

June and continues to November, and the dry season, which is from December to May. During the annual flooding period in August and September, the Mekong River rises and spreads the water into the plains via Preks, gradually retreating at the end of the rainy season in November, and in December and January the water runs off the fields into receding small canals, Preks, and Boengs.

In the dry season, the water is mainly stored in the Boeng, and it is then diverted to rice fields through small waterways. Other terminologies referring to water storage are Me Toek and Me Tumnoap, and villagers in different areas use them. For example villagers at the site of Longvek use the terms Me Toek or Me Tumnoap. The water storage in Boeng and Tumnoap (the barrage) is generally used for the Srov Prang (dry season rice field). The local community created the system of Tumnoap, to distribute the water through small canals to the rice fields. The system of Tumnoap or a bank earthen bund system has also been popularly used by Thai farmers since the early 20th century. The system and the term itself are probably originally from the Khmer.¹³⁴

The small tributary canals that convey water from the Tumnoap to the rice fields are called “chonlak”. In the Baray commune (at the site of the Preah Theat Baray ruin) for example, a great Tumnoap of Khya Vaeng can distribute or divide up to 46 chonlaks (or 46 small canals) from the Me Toek or Me Tumnoap (Ph. 31). The term “chonlak” is specifically employed in the area of Srei Santhor and Longvek (Ph. 32). General Speaking, the water control systems differ extensively, depending on their geographical or natural endowment.



Ph. 31 Tumnoap Khya Vaeng in the dry season



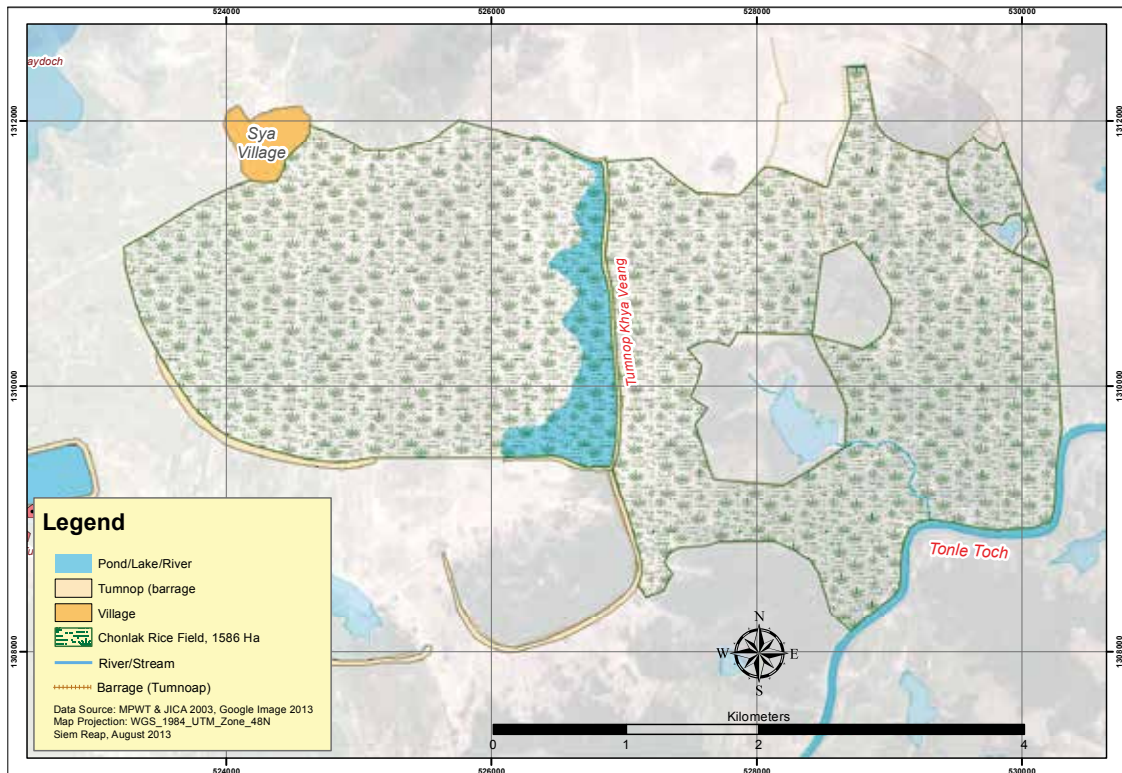
Ph. 32 Chonlak of Tumnoap Khya Vaeng in the dry season

3.3. Type of Cultivations

In Cambodia there are three basic patterns of rice production or cultivation: Srov Vossa, Srov Prang, and Srov Chamkar. Srov Vossa refers to the “rainy season rice field,” Srov Prang is the “dry season rice field,” and Srov Chamkar can be translated as “shifting cultivation.”¹³⁵ Srov Vossa is annually transplanted when the rainy season starts, but normally people begin to transplant the rice at the end of June and beginning of July, depending on whether the rainwater was enough in the rice fields. Srov Vossa is traditionally transplanted in the dyked fields, and the rice grows according to the rise in the rainwater. Srov Prang is mostly transplanted near the waterways of Prek, rivers, and the natural ponds “Boeng”. It is cultivated in the dry season when the water ebbs from the rice field, especially in the flooded areas. Also the water supply for the rice field was used from the Me Toek

134 Fukui 2000: 35.

135 The words Srov Vossa and Srov Prang are sometimes called Sre Vossa and Sre Prang.



Map 8 A pattern of Tumnoap and Sre Chonlak at Khya Vaeng

or Tumnoap, in case the water was not enough. Srov Chamkar refers to the practice of clearing land by cutting down trees and burning the groundcover. Srov Chamkar is called in English “shifting cultivation, and it is also known as swidden or slash-and-burn cultivation.” Here they traditionally planted the rice on the upper land or near the mountains.

In case of the Baray commune of the Srei Santhor district, at the low fields around the vicinity of the ruins of Preah Theat Baray, there is only one type of cultivation, namely Sre Chonlak (Map 8). The term Sre Chonlak is also referred to as “ended rice cultivation.” Sre Chonlak is annually yielded when the flood recedes from the upland fields in November, for then the farmers are able to start cultivating the rice. Compared to Srov Vossa, Sre Chonlak and Srov Prang¹³⁶ are more secure and sustainable types of cultivation. For Srov Vossa, the cultivation is done depending on the rainfall. If the rainwater is less or it rains too much, the productivity of rice becomes substandard and it also becomes less productive.

In November and December farmers could also begin to grow various kind of crops along the mouth of the Mekong. For the Srei Santhor district, the most favorable crops cultivated are corn, potatoes, beans, and vegetables such as cabbage and Chinese lettuce.

Up to around 10 years ago, when farmers had no tractors for managing the land and the harvest, they could develop the land using simple tools, animal power, and human labor. Ploughing was done using draft animals (cows or buffaloes) and simple ploughs, and reaping was done by hand, using

¹³⁶ Srov Prang and Sre Chonlak are the same type of rice cultivation, and the way they are referred to depend on the area. Most farmers who live along the belt of Mekong in Srei Santhor area traditionally use the term Sre Chonlak, and not Srov Prang.

sickles. Other simple tools employed for the farm and rice field operations were hoes, spades, harrows, and shovels. There were many types of traditional irrigation pumps, such as the Yong (a waterspout), Snach (a water shovel, or a kind of trough-shaped instrument that is normally used made of Bamboo), Rohat (waterwheel), etc. (Ph. 33). At present, most of these tools are not seen much in the rice fields.

Here, farmers could cultivate rice only once a year, and one hectare could produce 6 tons of rice.¹³⁷

Since the 1980s, one family could receive between half or one hectare of land, depending on the members of the family. The living standard of farmers in this area is much better than those in other areas in the upper lands, and this is because besides rice cultivation, they could produce other crops or catch fish from the Mekong River.



Ph. 33 Snach, or a water shovel, a traditional irrigation water pump.

IV

Longvek and Oudong

1. Site Description of Longvek and Oudong

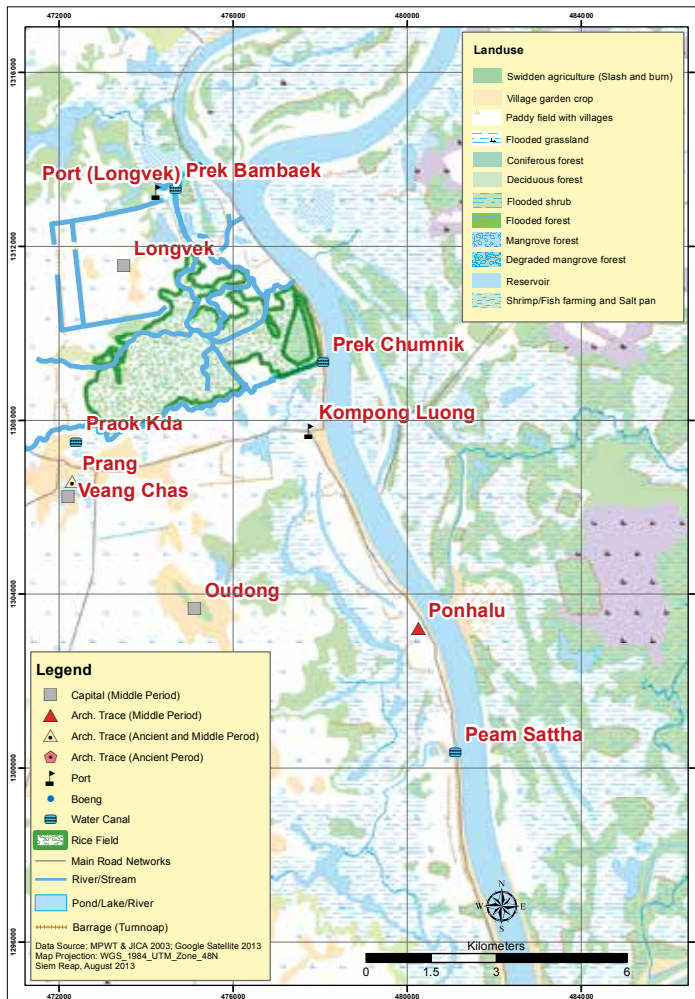
The regions of Longvek and Oudong are located to the northwest of the present-day capital of Phnom Penh, around 40 km distance from the Spean Chroy Changwa (Japanese bridge) along National Road No. 5, in the direction to the Kompong Chnang and Batdambang provinces (Map 1, 2). The sites of Longvek and Oudong are situated on the west side of the Tonle Sap River, with both sites facing the river. Both sites lie at a distance of about 7 km from each other.

There are some historical and archaeological traces remaining in this region from the pre-Angkorian period, up to the beginning of the 20th century. At the Longvek site there are traces such as Wat Tralaeng Kaeng, and two enclosures of the Khmer capital in the 16th century, namely Prek Longvek and the port of Longvek. In the case of the Oudong site there are some historical traces such as the names Peam Sattha (the water canal of king Sattha), Ponhalu, Kompong Luong (or Royal port), Prek Chumnik or Peam Chumnik, Veang Chas (or ancient palace), Prang or Wat Prang, and the mountain group called Phnom Preah Reach Troap (see., Map 9).

1.1. Description of the Site of Longvek

According to the Royal Chronicles, king Ang Chan established Longvek as capital in 1526 AD, and it was looted and burned down by the Siamese in 1594 AD during the reign of king Satthā, a grandson of king Ang Chan. During 68 years Cambodia prospered and was politically equal to Siam, and Longvek was a stronghold capital to protect it from threats by the Siamese. The

¹³⁷ Unfortunately we could not find any data related to the annual production of rice or the rice export in this area, from the government sector or NGO.



Map 9 General map of Longvek-Oudong

since the pre-Angkorian and Angkorian periods. According to the VJ chronicle, during the reign of king Ang Chan, many Buddhist temples (Vihear) and statues were erected throughout the country. The Wat Tralaeng Kaeng was built at Longvek, along with the installation of Buddhist statues. A big Buddha statue in stone was erected and installed on the peak of the mountain, namely Phnom Preah Reach Troap.

Wat Tralaeng Kaeng

In the compound of Wat Tralaeng Kaeng (the four-sided or cruciform temple) there are two Vihears on the same basement and one pond (Ph. 38). The present-day Vihears were renovated at the origin of the old basement, surrounded by sandstone Sīma. Inside the Vihear, we have the four sides of the Buddha statues made of wood, facing all directions, and fragments of Buddha's foot made of sandstone. The original of the Buddha statue was probably shattered in the 16th century when the Siamese invaded the capital. Information related to the origin of the Buddha statue is also mentioned

capital Longvek was established on the west side of the Tone Sap River, midway to the Grand Lake of Tonle Sap at the north, and at a confluence of the Mekong at the south where it joins it at Catumukh (Phnom Penh). Even though we have difficulty pointing out the exact place of the royal palace due to the site being in a very ruined condition and due to the lack of scientific excavation, we found some traces of the double enclosures or protected embankment of the capital, moat, old terraces, and some other laterite blocks, and Sīma (boundary stones) (Ph. 34, 35, 36, 37). Some ancient inscriptions were found at the site of Longvek.

According to the inscriptions of Longvek K. 136 & 137 that are dated to the 7th and 10th centuries,¹³⁸ it can be suggested that the site of Longvek was already occupied

138 Cœdès 1966: 96-97. See also Vickery 1998: 107. M. Vickery suggests that K. 137 may be related to K. 24 and K. 600 from Angkor Borei, which is dated to the 7th century.



Ph. 34 1st embankment of Longvek city



Ph. 35 Moat of Longvek city



Ph. 36 Basement of Vihear, laterite blocks



Ph. 37 Sīma, or the boundary stone, Wat Tralaeng Kaeng

in the VJ chronicle and chronicle 48 (II).

The VJ chronicle mentions the following: “one day when the king (king Ang Chan) strolled in the forest, he found a block of stone on a tree of Koki (*Hopea odorata*). The king ordered the ministers to bring the tree and the block of stone to the royal palace. The king ordered the artisan to sculpt the branch of the tree into four Buddha statues, arranged in cross, the backs attached each other, and facing the four directions. The stone was decorated as a pedestal to support the Buddha statues. Then the king ordered them to install the Buddha statues in a Vihear, and he gave them the official name of Wat Tralaeng Kaeng.”

According to M. Giteau, the name Tralaeng Kaeng was given to express the four faces of the Buddha statues, and the architectural plan of the temple was cruciform, which is also found to be of the same style as a temple in the northeast of Thailand, namely Wat Phumin.¹³⁹ The name of Tralaeng Kaeng was also mentioned in the middle period inscription of Angkor Wat, IMA 4. In the inscription, the name was written as “*prāsāt tralaenkaeñ*” made of stone by a minister. The temple was constructed to keep the four faces of the Buddha statues.¹⁴⁰

E. Aymonier, who came to the site at the end of the 19th century, also mentioned Wat Tralaeng

¹³⁹ For details of the description of Wat Tralaeng Kaeng, see Giteau 1975: 78-79.

¹⁴⁰ Pou 1971: 109.

Kaeng. He remarked as follows: “...Un massif de terre levée, haut de 15 à 20 mètres, en form de croix, dont la branche orientale était plus allongée, supportait, à l’entre-croisement de ses bras, un soubassement rectangulaire en limonite que surmontait vers son extrémité occidentale la quadruple statue de Buddha faisant face aux quatre points cardinaux...”.¹⁴¹ The description of E. Aymonier at the end of the 19th century about the cruciform terrace and the Buddha statues does not differ from their present condition, but the structure of the Vihear itself seems to be ruined or destroyed compared to what it was in the past.

Prek Longvek (Ph. 38)

Prek Longvek or the man-made canal of Longvek is a water break, which was dug to make a canal connecting the Tonle Sap to the capital of Longvek. It lies at a distance of about 1 km from the break point of the Tonle Sap to the port (Longvek?) (Ph. 39, 40),¹⁴² and from the port it is about 1.3 kms to the Wat Tralaeng Kaeng, and about 30 m wide at the mouth of the break point. The canal of Prek Longvek come to the connected point with other waterways, which is one connected to the Krang Ponlei River and another to Spean Po.¹⁴³ The joint place is called Prek Bambaek (Map 10). There is no doubt that this water canal was used for communication by the people in this area, a connecting route for merchants from other areas, and for the irrigation.

Even though we don’t know the exact date of this canal, it was perhaps dug during the establishment of the capital of Longvek, if we look at its geographical features. At present during the rainy season this canal is still used as a means of transportation, connecting between the Longvek area and other villages along the Tonle Sap River, and it is still functional regarding the irrigation system. According to the villagers, in the area to the east of Longvek site only Srov Prang can be cultivated, since this area is flooded during the rainy season. In one hectare of land, they could produce around 4 tons of rice. Besides cultivating the rice, this area can produce crops such as, corn, potatoes, and beans.



Ph. 38 Wat Tralaeng Kaeng, viewing from the east.



Ph. 39 Prek Longvek



Ph. 40 Port of Longvek; at the present day the villagers still use this port in the rainy season.

¹⁴¹ Aymonier 1900: 224.

¹⁴² The name of the port (Longvek) has been created by the author, since it has no name. At present during the rainy season this place is used as a port for communication between the people living in the Longvek area and those living along the Tonle Sap River, especially people living around Prek Longvek. This port was probably used since ancient times, based on the geographical area.

¹⁴³ Krang Ponlei River and Spean Po waterway are the water sources from the Oral mountains.



Map 10 Prek and waterway systems at the site of Longvek

1.2. Description of the Site of Oudong

According to the chronicles, Oudong became a capital of the Khmer in the Middle Period in the reign of king Jayajetthā II (1619-1627) after the sacking of the capital of Longvek by the Siamese, until the reign of Ang Duong (1840-1860). Compared to other Khmer capitals in the Middle Period, Oudong was for a long time a capital, for more than 3 centuries and a half. During the Oudong period, Cambodia was under the intervention of Siam and Vietnam, and internal conflicts among the Khmer kings. Also, it was a struggle period in terms of politics and economics among the Cham, Malays, and Europeans (especially the Dutch) in Cambodian territory. The capital Oudong is located about 7 km from the capital of Longvek, and opens to the Tonle Sap. At present, it is situated on the west side of National Road No. 5.

As mentioned above, the hill of Oudong was already used by king Ang Chan to erect a grand Buddha statue. Based on the chronicles, after the death of king Srī Suriyobarm (Paramarājā III, 1602-1619), king Jayajetthā decided to establish the capital and build a Chedei or stupa on the top of Phnom Preah Reach Troap,¹⁴⁴ namely Trai Troeng.¹⁴⁵ Besides a grand Buddha statue and Chedei Trai Troeng, which were erected in the 16th and 17th centuries, there are many stupas, ruins, and pagodas

¹⁴⁴ We can not provide the exact meaning of the proper name of Phnom Preah Reach Troap, but it can be translated as a “holy royal heritage hill,” which comes from a combination of the word Phnom meaning “hill or mountain,” Preah meaning “holy, sacred, divine”, Reach meaning “royal”, and Troap meaning “heritage, property”.

¹⁴⁵ Trai Troeng means “a residence of the god Indra”.

on the hill. There are at least 16 stupas on the hill,¹⁴⁶ and all belonged to the royal family, starting from the 16th to the 20 century. However, the stupas that can be identified are Chedei Trai Troeng, Chedei Preah Saṅṅhā, Chedei Preah Aṅg Eñ, Chedei Preah Ang Duong, Chedei Preah Sisowath, and the most famous is a grand stupa of Shakyamuni Chedei that was built under the orders of king Norodom Sihanouk.

There are also many historical and archaeological traces surrounding the area of Oudong. Those traces are for instance Peam Saṅṅhā (a canal of king Sattha), Ponhalu or Ponhea Lu (a place where there used to be a Japanese village or quarter in the 17th century, and which was recorded in the Dutch account),¹⁴⁷ Kompong Luong (a royal port),¹⁴⁸ Prek or Peam Chumnik (a water canal which is believed to have been dug during the reign of Ang Duong), Prang (a stupa that was built on the ancient temple),¹⁴⁹ and Veang Chas (the old palace) (Map 9).

2. Political Context of the Establishment of the Capital of Longvek

2.1. Foundation of the Capital of Longvek

In 1516, king Ang Chan returned to Cambodia after his exile in Siam for years, after Sṅec Kan had killed his brother king Srī Sugandhapad.¹⁵⁰ As mentioned in Chapter III, Sṅec Kan was very powerful and was considered a local hero in the area of Srei Santhor. During his rule, the territories under his control had no movement to oppose him. He led the country peacefully to prosperity. This fact is based on the chronicles. However, Sṅec Kan had no blood links to the royal family and he became a ruler without the law on his side, on account of which the chronicles describe him as a usurper. Since Sṅec Kan was not a legitimate king or ruler, king Ang Chan had a right to get the throne back, according to the law of the country. Hence, king Ang Chan prepared to attack Sṅec Kan in order to recover the throne.

When king Ang Chan escaped to Siam from the threat of Sṅec Kan, he asked the king of Siam to help him to fight Sṅec Kan, but it took too long for him to wait for the help. According to the VJ chronicle, at that time Siam was also busy fighting with the Mon (Burma). King Ang Chan decided to come back to Cambodia but it was not easy to ask permission from the king of Siam. At that time in Siam, to hunt a white elephant was very popular, since it was believed that a white elephant was strong and powerful for use in the war.¹⁵¹

Then, king Ang Chan played a trick. He promised the Siamese king to hunt a big white elephant,

146 Men 2007: 21.

147 Iwao 1995.

148 The name Kompong Luong appears in the chronicles (especially the VJ chronicle) when King Jayajetṅhā came to build the palace at Oudong in 1620.

149 We cannot identify the exact date but we found some fragments of sandstone around the area and its basement, which probably belonged to the Angkorian period.

150 The date of the return of king Ang Chan to Cambodia is quite close, in the VJ and Garnier versions, but it is 14 years different from the chronicle of P/48 (II). The date mentioned in P/48 (II) was 1530 AD. However, the event of the return of king Ang Chan and the war with Sṅec Kan was the same.

151 There is a well-known legend related to a white elephant, called “Sṅec ṅamrī sa” in Cambodia, Thailand, and Laos. This legend is always narrated with reference to the ancient temple in Cambodia, as well as in Thailand and Laos, and at present too the white elephant became a local spirit in the community living around the temples.

and when the Siamese king allowed him to hunt the elephant in the forest, he escaped to Cambodia. At first he came to Batdambang, and then established his residence at Pursat. With the help from Tā Mīoeñ,¹⁵² many mandarins and people returned to join with him in attacking Sṭec Kan. According to the VJ chronicle, the war between king Ang Chan and Sṭec Kan continued until 1525, when Sṭec Kan was arrested and killed. After the death of Sṭec Kan, king Ang Chan ordered his ministers to build a new city at Longvek. In 1529, he left Pursat and came to be crowned at Longvek, under the name Paramarājā II.

Here, with regard to the choice of Longvek as the capital of king Ang Chan and his not continuing to reign in Srei Santhor, there is no mention in the chronicle and other documents. However, when we look at the political circumstances between king Ang Chan and Sṭec Kan, it seems as though the decision to establish the capital at Longvek was politically motivated in order to avoid problems with the local people at Srei Santhor, because the area of Srei Santhor was a stronghold of Sṭec Kan, and since he himself had not yet ruled in the area. As mentioned repeatedly above, Sṭec Kan was a popular ruler in that region.

On the other hand, even though the capital was established in Longvek, in the history of Cambodia from the 15th to the 17th centuries, Srei Santhor had never been abandoned. Srei Santhor was still a strategic place for both politics and economics. For example, for the event of the fall of Longvek, when the king Saṭṭhā had trouble with the Siamese who attacked in Longvek, he escaped to Srei Santhor. As mentioned in the Chapter III, according to the European sources Srei Santhor was a very populated area, when compared to Longvek and Catumukh.

2.2. Situation during the Reign of King Ang Chan

Since king Ang Chan occupied the throne after taking it back from Sṭac Kan, he did not pay homage to Ayutthaya. The Siamese king was very displeased at this, since king Ang Chan had enjoyed his hospitality during his stay in Ayutthaya. Thus, in 1536, the Siam king ordered Siddhien Rājā (Pañā Uñ) to lead his soldiers and attack king Ang Chan in order to bring Srok Khmer (Cambodia) under Siam's suzerainty. However, the plan of the invasion failed and Siddhien Rājā died at Pursat. In the Siamese chronicles mention is made of a Cambodian raid on the Pascim in 1531, and that was the reason for the Siamese taking their revenge, with their attack by land and water. Also, it is mentioned that the Siamese soldiers won a great victory over the Khmer soldiers.¹⁵³ It seems as though the chronicles on each side have divergent accounts concerning the event.

However, Garnier's version and one Siamese chronicle (Hluong Prasoat Aksornit)¹⁵⁴ seem to have patched up the event, though the date is different. Each chronicle appears to confirm the fact that the date of the Siamese soldiers' attack was around 1555-56, and that Siddhien Rājā died at Pursat.¹⁵⁵ At that time Siam was also having trouble in their war with the Burmese, which led

152 Tā Mīoeñ was a servant close to king Ang Chan, and he became chief of soldiers after king Ang Chan got the throne.

153 According to B. P. Groslier, the date of the revenge was in 1532-33. Groslier 1958: 14.

154 Hluong Prasoat Aksornit (in short, Hluong Prasoat) was compiled in 1680 in the reign of king Narayana. Cf., Frankfurter 1909: 1-21.

155 Frankfurter 1909: 12. See also, Garnier 1871: 350.

Cambodia to have priority over Siam.¹⁵⁶ Since then, during the reign of king Ang Chan, Cambodia had been experiencing peace until his death in 1566.¹⁵⁷ It is said that king Ang Chan was a great king who ruled his country with peace, prosperity, and justice for at least 50 years. He was also the first king who occupied Angkor again, since the capital Angkor had been moved to the south. According to Garnier's version, it was in 1540 that he had defeated the Siamese at Angkor.¹⁵⁸ During his occupation, it would appear as though he had made a wall carving at the northeast gallery of Angkor in 1546 and 1564.¹⁵⁹ Another evidence comes from the European sources of Diogo do Couto (a Portuguese), who came to Cambodia during the period 1543-1616. Diogo do Couto described the fact that the Khmer king came to find elephants and discovered Angkor Thom.¹⁶⁰

After the death of king Ang Chan, his son, king Paramarājā III¹⁶¹ succeeded to the throne at Longvek. According to the VJ chronicle, in 1569 (1570 in the Hluong Prasoat chronicle),¹⁶² the king had prepared his soldiers to proceed to Ayutthaya by way of both water and land. In the chronicle of Siam, the year 1569 had been marked by the fall of Ayutthaya owing to the conquest by the Burmese, who thoroughly looted the city and led thousands of prisoners, both commoners and nobles, away to captivity in Burma.¹⁶³ King Mahādharmarājā (1569-1590) was installed on the throne by right of conquest in Ayutthaya. Since then, it seems as though Ayutthaya was under the control of Sukhothai.

Khmer soldiers again controlled the western provinces of Cand Purī, Rayaan, Sāsien, and Pachim. At that time, because Ayutthaya was flooded by rain and the soldiers were unable to stand the fighting, they returned to Cambodia. In 1572, king Paramarājā III placed his son Saṭṭhā at Longvek, and he went to establish a place at Kompong Krasang (Sruk Nagar Vatt, present-day Siem Reap). King Paramarājā III raised soldiers to proceed to Nagar Rāja Semā, and brought back many prisoners.

In the same year, the king of Lāv (Laos) sent two ministers and 1,000 soldiers to Cambodia. The reason was to bring Cambodia under Lāv's suzerainty. With that the Lāv king forced the Khmer king to have a combat with elephants, because if one could attain victory by using an elephant, one would have to be recognized as a suzerain.¹⁶⁴ The combat took place at the south of Phnom Sanduk, which is now in the Kampong Thom province. In the combat, the Khmer elephant defeated the Lāv elephant, and the king did not allow the soldiers and elephant to return to Lāv. Hence, the king of

156 For details of the war between Siam and Burma, see Frankfurter 1909: 8-12.

157 See the discussion in detail below concerning the date of the king Ang Chan's death.

158 Garnier 1871: 349.

159 Cœdès 1962: 235-248.

160 Groslier 1958: 21, 69

161 Paramarājā was born when his father king Ang Chan was at the war with Sṭec Kan.

162 According to the Hluong Prasoat chronicle, in 1569, Ayutthaya fell into the hands of the king of Pegu (Burmese king). But then the king of Pegu returned to Pegu, and just a year later the king of Longvek raised an army to proceed against Ayutthaya. Frankfurter 1909: 14.

163 Wyatt 1984: 100.

164 Juon's chronicle mentions the fact that the Laos king's name was Sīsatt Nakhun Hut, but there was no king by this name in the history of Laos in this period. During this period, Laos was under the control of General Bañā Saen who recaptured Vientiane after Lao's king Setṭāḍhirāt disappeared mysteriously during his campaign in the southern state. Bañā Saen proclaimed himself Regent (he reigned from 1571 to 1575). The Lao king who invaded Cambodia was probably Setṭāḍhirāt. Cf., Mathieu 1959: 31-49 (especially p. 37).

Lāv was furious that he could not bring Cambodia under his control, and in 1573 the king of Lāv prepared to invade Cambodia. The war between Cambodia and Lāv took two years, and finally his army was heavily defeated and the Lāv king mysteriously disappeared during the war.

3. Fall of Longvek

3.1. Political Context

According to the VJ chronicle, Paramarājā III died in 1579 (1576 in Garnier's version) and his son Saṭṭhā succeeded to the throne at Longvek under the royal title of Mahindarājā¹⁶⁵ (Paramarājā IV in other chronicles). Before king Paramarājā III's death, there had been negotiations to have peace between Cambodia and Siam. When king Saṭṭhā attained the throne, he decided to conclude a treaty between the two countries. At that time Siam was under the reign of Mahādhamarājā (1568-1590). During the reign of Mahādhamarājā, Siam was attacked several times by the Burmese with the joint forces of the Prince of Chiengmai.¹⁶⁶ After concluding a treaty, king Saṭṭhā sent an army under the command of Mahā Uparāja¹⁶⁷ Srī Suriyobarm, to assist in the attack on the Burmese. The Siamese army was led by Uparāja Naresūr,¹⁶⁸ the oldest son of king Mahādhamarājā.

With the cooperation of the Khmer army the Siamese defeated the Burmese, but the result was adverse. The VJ chronicle states that there arose a dispute between Naresūr and Srī Suriyobarm on the way back to Ayutthaya. Srī Suriyobarm was very upset at the impertinence of Naresūr in cutting the heads of Lāv prisoners in front of him. Srī Suriyobarm returned to Longvek and informed king Saṭṭhā about the bad manners of Naresūr. A consequent quarrel between the Siamese prince and the Cambodian prince worsened, and king Saṭṭhā decided to forsake his alliance with Siam. Naresūr was greatly insulted by the treatment and he started to prepare an army to fight Srok Khmer. However his father king Mahādhamarājā refused to make war on Khmer in this situation, because the Burmese armies had advanced upon Ayutthaya. Later, the Burmese again surrounded Ayutthaya. King Saṭṭhā had the advantage of raiding Ayutthaya, and he seized Nagar Rāja Semā and Pascim.

165 The name Mahindarājā is mentioned only in Juon's chronicle, and another chronicle mentions the name Paramahidarājā (the chronicle found in the library of Buddhist Institute, Phnom Penh, which is an unknown source, "Rājabaṅsāvatar Khmer". But A. Leclère had already used some parts of this chronicle in his book, *Histoire du Cambodge*, 1914, and other chronicles named Paramrājā. The middle period inscription called "IMA 3," speaks of *satyaprandhān*, "Wish of the truth," of the king name "samtec braḥ jayajetṭhādhirājaonkār paramarājā dhirāj rāmādhipatī cṛitrībhavanādityabarmm dhammīkarāj..." Cf. Pou 1970: 107. In the expression of the royal honorific the crown name follows the term Onkār. It means that the name of the king was Paramarājā and jayajetṭhā [dhirāj] was the name before coronation. Cf., Khin Sok 1991: 30. In the European source his name is "Apram Langara" which meant "lame." Since the king was lame they called him by that name. See San Antonio 1998: 10.

166 Cœdès 1967: 154.

167 Mahā Uparāja is the original Sanskrit word. Mahā means "grand", and in this case the term signifies the role of the high rank of a dignitary; Upa means "second", and Rāja means "king", so the compound means "the grand vice-king" or the term can be translated into English as viceroy. The king always gives this title. Prince Srī Suriyobarm was chosen as Mahā Uparāja by king Saṭṭhā after he got the throne. Prince Srī Suriyobarm was the younger brother of king Saṭṭhā, but of a different mother.

168 Naresūr is also known as Naret or the Black Prince in foreign records. The name Naresūr derives from the Sanskrit term "nara + īśvara", means "Master of Humans". The Siamese call him "Naresuon", in Khmer "Nores (translit. Nares)", or "Noreso (translit. Naresūr).

Wyatt emphasized the fact that the Khmer army attacked Siam at least six times (in 1570, 1575, 1578, 1582 (twice), and 1587).¹⁶⁹

In 1586 king Saṭṭhā made a decision to relinquish the throne to his two sons, Jayajetṭhā 11 years old and Cau Bañā Tan' (his name when crowned was Paramarājā V) 6 years old. He also decided to change the title of Srī Suriyobarm from Mahā Uparāja to Mahā Ubhayorāja.¹⁷⁰ However, this decision was not supported or encouraged by Srī Suriyobarm and other royal members and mandarins. The union of the royal family and mandarins had detracted from protecting the country, and Cambodia at that time was in turmoil and uncontrolled. This caused the Khmer to begin losing power and the mentality to protect the kingdom and country, and even resisting the Siamese received less consideration.

In contrast, Ayutthaya was well organized in protecting their territory by their king Naresūr. After the death of king Mahādhamarājā in 1590, Naresūr became king of Ayutthaya. It had been remarked that Naresūr was a great king for bringing Ayutthaya into a wider world, and for giving the kingdom advantages over its neighbors. He was capable of leading the army against Cambodia, and he also threatened to shake the powerful Burmese country apart. Since then, Ayutthaya has remained an important international trading center.¹⁷¹

According to the Cambodian chronicles, Naresūr never forgot his personal quarrel with Srī Suriyobarm, due to which he always attempted to attack Cambodia. In 1588, Naresūr led his army to seize Nagar Rāja Semā and Pascim, and again in 1592 he made the army proceed on a raid to Longvek.¹⁷² Within three months, Ayutthaya defeated the Khmer at the front line, and the Siamese controlled Batdambang, Pursat, and Baribo. Then, the Siamese armies proceeded to surround the city of Longvek. Some economic historians have suggested that the event of the Siamese attacked on Longvek as well as the invasion of the capital Angkor in the middle of the 15th century, was to control the port city.

However, if we look at the situation when the Siamese occupied Angkor, we see that it was not all that long. It seems that after their victory they left Angkor in the forest, since Angkor was perhaps not a beneficial place anymore. The evidence is that when king Ang Chan returned to Angkor in the 16th century, a fact that was recorded in the Portuguese document, Angkor Thom was in a ruined condition and covered by vegetation and the forest, and when the Siamese gained a victory over the Khmer at the capital of Longvek, king Naresūr did not march his army to Catumukh, which was a commercial city at that time. After he had sacked Longvek he returned to Ayutthaya and ordered only some soldiers to remain there (see the description below). If Naresūr's ambition was to take control of the port city of Catumukh, then he had to advance his troops towards it, and not stay for a short time in Longvek. Rather, it should be simply suggested that the Siamese invasion of Angkor and Longvek was to extend their power and territory, and it can also be related to the political

169 Wyatt 1984: 100.

170 Mahā Ubhayorāja was the title for the abdicated king.

171 Wyatt, *op. cit.*, p. 101-104.

172 According to Wyatt, in the same year of 1592 in October, Naresūr sent a mission to China, offering to send the Siamese navy against Japan. At that time, Japan under Toyotomi Hideyoshi had begun to expand its trade in Asia.

atmosphere at that time, but not the economic one.

The siege of Longvek lasted for three months. The Siamese were lacking in food, and with the well resistant armies led by Srī Suriyobarm, Naresūr ordered his soldiers to retreat. The Khmer king had prepared his soldiers again to protect the area at the fronts. The royal families and ministers led in each battle. According to the chronicle P/48 (II), at the end of 1593,¹⁷³ the Siamese armies invaded again on two fronts, by land and water. Naresūr organized his armies at Longvek through Batbambang, and a number of his soldiers came by Kompong Som, Preah Trapeang, and Kampot (in the VJ chronicle). According to the chronicle P/48 (II), it seems as though Batdambang and Pursat fell to the Siamese without any strong resistance. This opportunity offered the Siamese soldiers a means of entering very fast into the city of Longvek, with all their power. In the VJ chronicle it is stated that Mahā Ubhayorāja allowed the Siamese king Naresūr to enter Longvek, offering him a warm welcome.

Finally, Longvek was burned down and controlled by the Siamese in January 1594.¹⁷⁴ The fall of Longvek in 1594 has been marked as a catastrophic event in Cambodian history, and as the destruction of the last grand capital city after Angkor city. This disastrous event has some causes from the historical and socio-political viewpoints. One reason was the invasion of the neighboring country, which occurred while the royal family members within the country were embroiled in turmoil over the sharing of power. Factions began to form among the royal family members and the mandarins, and so they could not carry out their duties for the country. All of these cases have been noted as the principle causes that brought an end to the capital of Longvek.

This event also ushered in a dark age to the later Khmer period, because the capital was burned down, the sacred documents of the country were destroyed, and most of the Khmer scholars were taken to Siam. Moreover, the union of the king and the mandarins to protect the country had started to detract from the patriotic spirit. The country had continuously faced many troubles, not only among the Khmers but also with foreigners. The independent and prosperous time from the reign of king Ang Chan at the beginning of the 16th century for almost 50 years had ended. The later periods after the sacking of Longvek by the Siamese king Naresūr, mark for Cambodia its decline. The Khmer mind has never forgotten this event, and it remains alive for them until the present day. Many stories and oral traditions were created, that were related to this painful event.

3.2. The Situation after the Fall of Longvek

Chronicle P/48 (II) narrates the fact that king Saṭṭhā fled to Srei Santhor,¹⁷⁵ and then to Laos with his two sons. The Siamese soldiers arrested the rest of the royal families members. In the same

173 Other chronicles such as chronicle of VJ, Vatt Kok Kak, and others do not mention or reveal clearly the date of this event.

174 The date of the fall of Longvek in January 1594 was strongly concluded by B. P. Groslier, through his study of the European sources; Cf. Groslier 1958: 19. The chronicle P/48 (II) gives the date of the Siamese attack in the month of Bus, the year of Msāñ (serpent) 1515 *śaka*, which means that it was in December 1953 or January 1954.

175 The name Srei Santhor (or Srī Sandhar) seems to be an echo of an ancient name of Angkor city at the end of the ninth century and beginning of the tenth century, namely Srī Yaśodharapura, established by the king Yaśovarman I.

year as the Siamese victory at Longvek, Siam was attacked again by Burma. The Siamese king Naresūr had to return to Siam in order to resist the Burmese. In 1595, king Naresūr left his minister in place at Oudong and returned to Siam. When returning, Naresūr took Mahā Ubhayorāja Srī Suriyobarm and their families, and thousands of other Khmer families to Ayutthaya.¹⁷⁶ He made a promise to let Srī Suriyobarm go back to Cambodia.

During the occupation by Siamese soldiers at Oudong, a royal line Braḥ Vaṅs,¹⁷⁷ under the title-name Braḥ Rām Joeṅ Brai,¹⁷⁸ reunited the soldiers to attack the Siamese soldiers at Oudong. There was no information in detail related to Braḥ Rām Joeṅ Brai before this event. This information is mentioned in a few sources, such as in P57 that mentions that he used to be a son of a king at Treang under the title-name Abhayadas, and in the chronicle of Dik Vil (DV) he had the name Uṅ or Rāmādhīpatī Uṅ, a chief of the Braḥ Vaṅs.¹⁷⁹ He had been living in the Joeṅ Brai province, but the royal chronicles do not describe clearly where he originally came from. According to the VJ chronicle, his personal name was Jay and he got married to a daughter of a rich family in Joeṅ Brai province, name Sṭoeṅ. According to fragment 1170, Braḥ Rām Joeṅ Brai had two sons, named Nāk Noṅ (Anak Nan) and Nāk Nū (Anak Nū).¹⁸⁰

Before Braḥ Rām Joeṅ Brai took power and the throne, according to the VJ chronicle he came to visit king Saṭṭhā very often in order to get more power. When king Saṭṭhā escaped from the capital of Longvek with his family to Srei Santhor, Braḥ Rām Joeṅ Brai came to meet king Saṭṭhā and promised to help him in fighting with the Siamese. Then, king Saṭṭhā provided him more power and he became more popular in other areas. With his ambition, he had preferred not only to become a king, but also fancied all the king's consorts and concubines. He was rejected and blamed by king Saṭṭhā for acting dishonorably. Some chronicles (P/48 (I), and KK) describe his disgrace and disfavor. Particularly, P/48 (I) mentions the fact that Braḥ Rām Joeṅ Brai desired a grand consort (*aggamahestī*) of the king, which caused the situation to become worse with regard to the relationship between the king and Braḥ Rām Joeṅ Brai.

According to the VJ chronicle, after king Saṭṭhā rejected his desire and treated him as a betrayer, Braḥ Rām Joeṅ Brai was very displeased with the king. Then, he propagated among the people and his soldiers the fact that the king does not follow and respect the *dharma*, by destroying sacred

176 The Siamese capture of the Khmer and their being taken back to Siam is also described in the account of the Portuguese and Spaniards, who came to Cambodia during the Siamese invasion in Cambodia. Cl., Blair & Robertson 1973.

177 Braḥ Vaṅs are descendants who had exceeded five generations. They are not considered a royal family. Cf., Moura 1883: 325.

178 Europeans call him Huncar Prabantul, and in the correction of the transliteration “Okñā Brah Pantūl,” it is a title name. He is also called by the Spaniards Anacapan Prabantul “Anak Param Brah Pantūl”. San Antonio 1998: 11, and see also note No. 53. We propose to use the name Braḥ Rām Joeṅ Brai, since all Cambodian chronicles use it, and it is a well-known name that has lasted until the present. According to the VJ chronicle, people called him “Braḥ Rām Joeṅ Brai”, because he liked to walk cross the forest from one place to another.

179 There are different sources providing different information on his relationship to previous kings or his background before getting the throne. According to European sources such as that of Antonio de Morga, he was a mandarin, and for Père Diego Aduarte he was one of the chiefs of the kingdom, for Blas Ruiz he was a son of a brother of a wife of Paramarājā III. Mak Phoeun 1995: 48. He is also mentioned as a first cousin of king Saṭṭhā who took hold of the kingdom when king Saṭṭhā fled to Laos. See, San Antonio, *op. cit.*, p. 11.

180 Vickery 1978: 207.

Buddha statues, and that this led to the destruction of the country by the Siamese. He proclaimed that he would seek a good royal family member to be crowned. After such propagation, his followers believed him and joined his army to attack king Saṭṭhā at night. King Saṭṭhā and his family escaped to Stung Treng. In the VJ chronicle and P/48 (I) it is mentioned that king Saṭṭhā died at Stung Treng because of a disease. However, the description in other chronicles speak of the escape of the king Saṭṭhā from Longvek to other areas, and describe his death as having occurred in a different place.

Fragment 1170 (cited in Vickery, 1978), KK, P/48 (II), and Garnier's version, mention that king Saṭṭhā fled to Srei Santhor, and then to Laos, where he died. According to European sources it is said that the king died in Laos, and that two people, namely Captain Diego Beloso and Blas Ruiz, assisted the king's son to recover the throne. This information is presented in letters from the king's son to Governor Don Francisco Tello and Doctor Antonio de Morga, as follows.

"I, Prauncar,¹⁸¹ king of the rich land of Camboja, I, sole lord of it, the great, cherish an ardent love for Doctor Antonio de Morga, whom I am unable to keep from my thoughts, because I have learned through Captain Chofa Don Blas, the Castilian, that he, from the kindness of his heart, took an active part and has assisted the governor of Luzon to send to this country Captain Chofa Don Diego, the Portuguese, with soldiers to find king Prauncar my father. Having searched for him in vain, the two chofas and the soldiers killed Anacapan¹⁸², who was reigning as sole great lord. Then they went with their ships to Cochinchina, whence the two chofas went to Laos to find the king of this land. They brought me back to my kingdom, and I am here through their aid..."¹⁸³

Therefore, among the Cambodian chronicles, fragment 1170, KK, P/48 (II) and Garnier's version provide accounts similar to the European sources, while other chronicles like VJ and P/48 (I) are inaccurate, though VJ describes the event in more detail than other chronicles. Whatever, the escape of king Saṭṭhā to Srei Santhor and then to Laos was not the only thing caused by the Siamese attack, since it was also caused by the depression of Braḥ Rām Joeñ Brai.

After the escape of king Saṭṭhā to Laos, Braḥ Rām Joeñ Brai took all the king's property and gathered the people to become soldiers. In 1595, he drove all the Siamese soldiers out of the area of Oudong. After his victory and since the royal families were not in the country, and especially since Srī Suriyobarm's family was captured and taken to Ayutthaya, Braḥ Rām Joeñ Brai proclaimed himself king.¹⁸⁴ He restored the area of Srei Santhor and reigned there, and not in Longvek. The reestablishment of the capital at Srei Santhor by Braḥ Rām Joeñ Brai was geographically more secure to protect the capital from the threat of the Siamese, and perhaps the people were more familiar with him and he could exercise his power more easily, than the people in Longvek who still had a sense of loyalty to king Saṭṭhā. Moreover, the area itself was perhaps more strategic and facilities were better both politically and economically compared to Longvek, as we had described in Chapter III.

At the time when Braḥ Rām Joeñ Brai ruled at Srei Santhor, a Portuguese named Diego Beloso

181 In the Cambodian chronicle named Paramarāja V (Cau Bañā Tan'), the future king after Braḥ Rām Joeñ Brai.

182 The name used by Europeans for Braḥ Rām Joeñ Brai.

183 Blair and Robertson 1973: 136-37.

184 The event of Braḥ Rām Joeñ Brai anointing himself a king was mentioned in the account of San Antonio in 1604; See San Antonio 1998: 10-11, 17-18.

and a Spaniard, Captain Blas Ruis de Herman Gonzalez, arrived in Cambodia. The situation did not go well in the relationship between Braḥ Rām Joeñ Brai and the two foreigners, because when they learned about the new king's wish they tried to murder Braḥ Rām Joeñ Brai. Captain Blas Ruis tried to find a way to Srei Santhor to meet Braḥ Rām Joeñ Brai. Finally he got permission from the new king to present him with a gift at Sistor (Srei Santhor). Using this opportunity, Blas Ruis and another Diego Aduart decided to attack the king. In accordance with their plans the king's wife was hit by a bullet and died, when the king tried to flee from the palace.¹⁸⁵ After Braḥ Rām Joeñ Brai died, Diego Belloso and Blas Ruis went to Laos and met king Apram Langara (in the chronicle his name is Cau Bañā Tan'), and helped him to return to Cambodia and reign at Srei Santhor.¹⁸⁶

The information that Braḥ Rām Joeñ Brai was killed by the two foreigners was also described in the letter of king Cau Bañā Tan' to Antonio de Morga (who wrote about the "Event of the Philippines Islands"). In the letter of Cau Bañā Tan' it is mentioned that Blas Ruis and Diego Belloso went to Laos to find him and took him to Cambodia, after they had killed Braḥ Rām Joeñ Brai.¹⁸⁷ This event is also mentioned in the Cambodian Royal Chronicles, though the story in the chronicles describes no details and is slightly different from the European sources.

The chronicle of P/48 (II) mentions very briefly that there were two Barangs¹⁸⁸ who came to meet the king Saṭṭhā and his son in Laos, then after king Saṭṭhā died, the two Barangs invited the son to come back to Cambodia. In the VJ chronicle it is mentioned that the two Barangs met Cau Bañā Tan' in Thbong Khmum (presently in the Kompong Cham province), and not in Laos, after they came from Laos. The chronicle describes both of them as the adopted younger siblings of king Saṭṭhā. When they knew about the situation, they came to Srei Sa Chor¹⁸⁹ (Srei Santhor), and finally met Braḥ Rām (Braḥ Rām Joeñ Brai). Braḥ Rām Joeñ Brai learned that the two of them had a relationship with king Saṭṭhā, and so he wanted to kill them. But the two Barangs knew the situation and so they tricked Braḥ Rām Joeñ Brai by asking him to go hunting animals together with them in the forest. At night they killed Braḥ Rām Joeñ Brai, when he was sleeping.

After Braḥ Rām Joeñ Brai died, Cau Bañā Tan' who took the name Paramarājā succeeded to the throne in 1598 and reigned at Srei Santhor. King Cau Bañā Tan' reigned only 1 year and died. At that time there were two Cāms, named Po Rat and Laksmaṇa, who came to make war on king Cau Bañā Tan'. In the chronicles it is mentioned that the Cāms killed the two Barangs, and then assassinated the king. After the king died they controlled the area of Thbong Khmum. In the Cambodian Chronicles less mention is made about the event of the war between Cambodia and Champa, during the reign of Braḥ Rām Joeñ Brai. Referring to the European sources, Professor Mak Phoeun asserted that Cambodia was also attacked from the east, and that was by the kingdom of Champa.¹⁹⁰

185 San Antonio 1998: 21.

186 *Ibit.*, 30-31.

187 Blair and Robertson, *op. cit.*, 136-37.

188 All chronicles mention the word Barang, which is French, to refer to Europeans. Even today in remote areas in Cambodia when they see Foreigners, they call "Barang".

189 Srei Sa Chor is often used in the VJ chronicle to refer to the name of Srei Santhor. Srei Sa Chor means "a white lady stand."

190 For the details regarding the war with Champa see Mak Phoeun 1995: 64-66.

According to the VJ chronicle, after king Cau Bañā Tan' died, some religious dignitaries, Brahmans in the royal palace, and religious members invited prince Cau Bañā An (an uncle of Cau Bañā Tan'), princess Devāksatrā (the daughter of King Ang Chan), and prince Cau Bañā Ñom (another youngest son of king Saṭṭhā) who resided at Phnom Peam Cheang, to Srei Santhor. In 1599, Cau Bañā An succeeded to the throne at Srei Santhor, under the name Paramarājā (VI). King Cau Bañā An reigned at Srei Santhor for about one year and died. The death of king Cau Bañā An, according to the chronicles, was caused by an assassination. King Cau Bañā An ruled the country unjustly, and so during his reign there were a lot of revolts in the country. In the year 1600, Kaev Braḥ Phloēn who came from the area near Phnom Penh assassinated him. The chronicles describe differently his rank and his origin, but most of the chronicles describe him as a rebel or sometimes a rebel governor.

After king Cau Bañā An was assassinated, his nephew prince Cau Bañā Ñom ascended the throne at Basan (Srei Santhor) and his title was Samṭec Braḥ Kaev Hvā. During his reign, the country was in turmoil, because he ruled the same way his uncle did. In the second year of his reign, princess Devīksatrī tried to help the country to get back into stability, but it seems as though power was in the hand of Braḥ Kaev Hvā, and so that the situation was unchanged. Then, princess Devīksatrī decided to seek the former *ubhayorāj* Srī Suriyobarm who stayed as a hostage in Siam.

3.3. Total Debacle or Soft Transfer?

According to Gregory Mikaelian¹⁹¹ it is difficult to interpret the royal chronicles on this very important historical fact. Beyond what is said officially, this author seems to opt for the thesis of a soft assignment of power in Siam from Naresūr. The king Saṭṭhā had left Longvek quietly for Laos (where the king died), leaving his brother the viceroy Srī Suriyobarm, in control to ensure the physical preservation of the capital, not by fighting but by offering himself as hostage to the Siamese. Anyway, Srī Suriyobarm was indeed taken as a hostage to the court of Ayutthaya.

It must be said here that in the collective “memory”, or more exactly it is being said through the generations not only in Khmer but also among minorities such as the Pear, that the fall of Longvek was an absolute tragedy. So there is a phrase that every Cambodian (at least, minorities like the Pear) knows: *sṭem kier*,¹⁹² “deported by the Siamese.” Many associated the phenomenon with the fall of Longvek. The anthropologist Jean Ellul who conducted research among others in the Cardamom Mountain region, recorded in 1968 in the village of Peam Prus the words of invocation to the Neak Ta (protective spirit) of the place, at an annual ceremony. It contains a passage saying, “if we come to live in this region of forests and mountains, it is following a raid in which the Siamese have deported our brothers ...”¹⁹³ Even today, a few illiterate Suoy¹⁹⁴ who are ignorant regarding “history” associate their poverty and isolation specifically to the “fall of Longvek,” without their knowing of course when this phenomenon took place.

191 Mikhaelian 2009: 113-14.

192 The word *kier* means, “to deport.” It connotes “in mass,” that is, “to deport a mass of people” with all that it entails, both inhuman and atrocious.

193 Information communicated with Prof. Ang Choulean.

194 In the group of ethnic Pear? Living in the region of Oral Mountain.

Was the fall of Longvek a human disaster, an absolute tragedy or a prepared debacle? In other words was the capital Longvek taken or sacked by the Siamese? I dare not decide. Nevertheless I think that wrongly or rightly Cambodians and others talk either directly of the (“fall of Longvek”) or indirectly of being (“deported by the Siamese”). The fall was not without drama, in life and in psychology. Had everything been prepared, accompanied... to soften, it is not impossible either, because basically there is no contradiction.

4. Choice of Oudong and the Cambodian Recovery

4.1. State of the Region of Oudong

The inscription of Phnom Bakheng K. 465 / K. 285 dates from 1583 AD,¹⁹⁵ and its author is a devout Buddhist from afar, probably northern Cambodia, who came to restore a pillar and statues of Buddha that lay ruined on the top of Phnom Bakheng. It is stated in the listing that before, that is to say prior to 1583 AD, the same person had restored fifty piles of ruined statues on the hill of the Phnom Preah Reach Traop at Oudong. Since statues of Buddha, probably wooden ones, were in disrepair at this time, there is reason to believe they had already been built a long time ago. According to the VJ chronicle, as mentioned above the statue of Buddha was erected in the reign of Ang Chan in the 16th century.

In short, centered on the sacred hill of Phnom Preah Reach Troap, the region of Oudong was famous enough to attract pious Buddhists coming from afar,¹⁹⁶ and it was populated for a long time. Yet king Ang Chan chose to build his palace and his monastery not in the heart of Oudong, but about 7 km away, with an opening on the Tonle Sap. Probably in terms of “country,” Longvek and Oudong are one. But in the 16th century, socio-politically this country was distinct from Srei Santhor, and this enclave was formed by the Tonle Thom (Mekong) River, and its tributary the Tonle Toch.

As in the narrative history above, after the fall of Longvek, Cambodia was disorganized and lawless due to unjust and weak rulers, especially after Braḥ Rām Joeñ Brai had reigned as king for a short time. There are three weak kings who led the kingdoms into the state of disorder, and until the return of Srī Suriyobarm, after which Cambodia gradually recovered and obtained independence from Siamese control. From the reign of king Srī Suriyobarm in 1602 until his son king Jayajettḥā who had established the capital of Oudong, Cambodia could match Siam in military strength.

4.2. The Return of Srī Suriyobarm from Siam

Srī Suriyobarm and some members of the royal family were captured and taken as hostages to Siam, when the Siamese conquered Longvek in 1594. Srī Suriyobarm stayed for 8 years in Siam until he received a letter from princess Devīksatrī. As mentioned above, during the reign of Braḥ Kaev Hvā (Cau Bañā Ñom), the country was unstable due to the injustice of the ruler. Princess Devīksatrī decided to send a letter secretly to Srī Suriyobarm, who still stayed in Siam. In the VJ chronicle it is mentioned that at that time he stayed at Khak Khyay. After receiving a letter from princess Devīksatrī, Srī Suriyobarm sent the letter to the Siamese King Naresūr.

¹⁹⁵ Pou 1989: 20-27.

¹⁹⁶ The expression used in the inscription is “toer des,” which means “travel a long path.” Cf. Pou 1989: 25.

King Naresūr understood the situation and agreed to let Srī Suriyobarm come to Cambodia. However, king Naresūr asked Srī Suriyobarm to keep the two children at Ayutthaya, and promised to take care of them as though they were his own children. The VJ chronicle does not mention the names of his two children. The chronicle only mentions that the two children were born at Ayutthaya to princess Sūjātikṣatrī. From another version of the chronicle, Prof. Mak Phoeun stated that Srī Suriyobarm had four children, two daughters, namely Ekakṣatrī and Visuddhākṣatrī, and two sons, namely Jayajetṭhā and Uday.¹⁹⁷

After accepting the request of the Siamese king to keep his two children, he returned to Cambodia. The VJ chronicle mentions that he came back with 3,000 Siamese soldiers via the sea. He arrived at Basac and met the governor of Basac named Ukañā Adhikavañsā, and then he reunited the soldiers and people. Many people and soldiers were from other areas such as the province of Preah Trapeang, Kramuon Sar, Moat Chrouk, Banteay Meas, Bati, and Prei Krabas. The army led by Ukañā Kralāhom “Kaev” came to attack Kaev Braḥ Phloēñ, and during the fighting, Kaev Braḥ Phloēñ was killed by a bullet.

After Kaev Braḥ Phloēñ died, Srī Suriyobarm marched the army through the river. When he arrived at Koh Slakaet¹⁹⁸ and saw the beautiful scenery there, he ordered the ministers to build a palace at Koh Slakaet. Based on the VJ chronicle, in the year 1602, he ascended the throne at the age of 55, after Kaev Braḥ Phloēñ (Cau Bañā Ñom) at Koh Slakaet. After ascending the throne, king Srī Suriyobarm sent a letter with a lot of tribute to king Naresūr, and in 1605 he decided to transfer the capital from Koh Slakaet to Lvea Em, which was located at a place facing Phnom Penh. Based on the chronicles F1170 and P57, the moving of the capital to Lvea Em was in 1608.¹⁹⁹ King Srī Suriyobarm reigned until 1618/9, and then he abdicated the throne in favor of his son Jayajetṭhā. After his abdication, about 3 months later in the year 1619, at the age of 72,²⁰⁰ king Srī Suriyobarm passed away due to illness. The funeral ceremony was conducted at Lvea Em, but his urn was brought to be preserved in Chedei Traitroeng, Phnom Preah Reach Troap, and Oudong by king Jayajetṭhā in 1623. King Jayajetṭhā brought not only the urn of his father the king, but also the urns of his mother Braḥ Devīkṣatrī, grandfather king Saṭṭhā, and Braḥ Kaev Hvā to Phnom Preah Reach Troap.

During the reign of king Srī Suriyobarm the country still had rebels, as during the reign of Cau Bañā Tan’ and Cau Bañā Ñom. The rebels were in the first year of his reign, but he drove them away. The return of king Srī Suriyobarm was marked as bringing recovery and peace to Cambodia for years. Until the end of his reign there arose the Siamese threat again, and since the Siamese army was stronger than that of the Khmer, king Srī Suriyobarm sought the help of Vietnam.

At the end of his reign there developed his first relationship with the Vietnamese Nguyễn, by conducting the marriage of Prince Jayajetṭhā to a Vietnamese princess, namely Nguyễn’s daughter. The marriage was held on 1616/17 (based on the VJ). The VJ chronicle states that this relationship was to ask the Vietnamese for help in protecting the country from Siamese attacks. This relationship was distinctive, because in the later centuries Cambodia had begun to lose its territory piece by

197 Mak Phoeun 1995: 104.

198 Koh Slakaet is close to Kien Svay, near present-day Phnom Penh.

199 Mak Phoeun, *op. cit.*, p. 140.

200 In the chronicle P/48 (II), the death of king Srī Suriyobarm was at the age of 64.

piece, especially the city of Prei Nokor (present day Saigon, in Vietnam). This event still remains in the memory of the Khmers, and it has even developed into an oral tradition, similar to the event of the fall of Longvek in the legend of Preah Ko and Preah Keo.

4.3. Jayajetthā and the Establishment of the Capital Oudong

According the chronicles, after king Jayajetthā ascended the throne, in 1620 he decided to move the capital from Lvea Em to Oudong. The chronicle P/48 (II) mentions that king Jayajetthā took his Vietnamese wife along and gave her the title Samṭec Braḥ Bhagavatī Varaksatṛī.²⁰¹ He had 3 children, named Bañā Tūr, Bañā Nūr, and Bañā Cand. His name also appears in the inscription of IMA 3 as being of an age of around 40 years.²⁰² Professor Mak Phoeun and Professor Khin Sok designated him as king Jayajetthā II, and king Jayajetthā I was the son of the king Saṭṭhā, who died in Laos.

Before king Jayajetthā II came to build the palace and capital at Oudong, he still resided at Lvea Em for 6 months, based on the VJ chronicle. Around mid-1620, the king traveled to many places. When he arrived at the province of Samrong Tong, he stayed there for several days. The area of Samrong Tong has many waterways flowing from the Oral Mountain, of which the biggest waterway is Stoeng Krang Ponlei.²⁰³ The VJ chronicle mentions the fact that during the time king Jayajetthā II stayed at Samrong Tong, he reformed many legal codes of the kingdom, because the king saw that the kingdom was chaotic for many years, caused by the injustice and lawlessness of its rulers. Even though within 3 years of the beginning of his reign there were some disturbances caused by Siamese invasions in Khmer territory, until 1624 he reformed at least 24 codes completely, and promulgated them throughout his kingdom. The codes were to govern the administration and rule of the kingdom, and also to vanquish revolts and pro-Siamese threats in the northwest area of the kingdom.²⁰⁴

After staying at Samrong Tong, king Jayajetthā II came to the area of Oudong, which is located not far from Samrong Tong. He found a small hill and the nearby Sraḥ Kaev (or precious pond), and a beautiful village.²⁰⁵ Then, he consulted a royal astrologer about the place. The astrologer told the king that “based on the code of formulas this place was the land of victory “Jayabhūmi,” superb, powerful, and one which could triumph over the enemy from all the eight directions.” Then the king decided to build the palace and capital at Oudong. The palace and capital are located to the western side of the Tonle Sap River, and they both face the river and are situated about 7 km to the south of the capital Longvek.

201 Her original Vietnamese name was Ngoc Van/ Aṅg Cūv. Cf., Mak Phoeun, *op. cit.*, p. 157.

202 See the details of the discussion about the problem of the name of king Jayajetthā. Mak Phoeun, *op. cit.*, p. 159.

203 The Stoeng Krang Ponlei or Krang Ponlei River flows down to the area of Praok Kda, which is located between Longvek and Oudong. Praok Kda was an important place for agriculture. According to the villagers, the area of Praok Kda can produce rice twice a year. Villagers could cultivate Srov Vosa and Sre Chonlak.

204 For the detailed study of the legal codes in the 17th century, see Michaelian 1999: 65-167.

205 Concerning the trip of king Jayajetthā at Oudong, Mak Phoeun insisted that when the king found the site of Oudong, “in Sanskrit ‘Uttuṅga’ means ‘high or great,’ he was excited, because the area was in the center of a huge rice field, and also because of the 117 meters height of Phnom Preah Reach Troap, which is very significant place. Cf., Mak Phoeun, *op. cit.*, p. 162.

After his decision to establish the capital at Oudong, he ordered his minister Ukañā Kralāhom Kaev to construct the palace at Sraḥ Kaev. Ukaña Kralāhom Kaev ordered all the chiefs of the districts to cut wood to construct the palace, and then pile up dirt surrounding the palace to make the enclosure. He also ordered them to build many small residences and annexes. The construction works were completed after about 10 months. In 1620, king Jayajetṭhā II, his royal family, ministers, and mandarins came to reside at Oudong. He named the new capital “Oudong Lu Chei”, which means “Oudong that hears victory,” and in other chronicles it is called “Oudong Mean Chei,” which means “Oudong the victorious.” King Jayajetṭhā II reigned for 8 years and passed away in 1627 due to illness.

During the reign of king Jayajetṭhā II there were frequent wars with Siam, especially in 1622. After the Siamese king Naresūr died in 1605, the Khmer king Srī Suriyobarm declared Cambodia’s independence vis-à-vis the pressure from Siam. King Naresūr’s successor was king Ekathotsarot, who was considered as king Naresūr’s loyal brother. Following the death of the king Naresūr, Khmer and Siamese relations seemed to be quiet, and they were not seriously concerned in starting a war. This was until the reign of Song Tham²⁰⁶ (ca. 1611-1628), who sent an army to attack Cambodia. This event according to Khmer chronicles was in 1622/23, just after king Jayajetṭhā II established the capital at Oudong.

The event of the Siamese king Song Tham invading Cambodia again was in the interest of commercial relations with the Japanese. In the 1620s, many Japanese came to Southeast Asia countries, such as Luson, Siam, Cambodia, and Cochinchina. The Japanese merchants purchased mostly deerskins, fish skins, and Sappan Wood to supply the *Shuin-sen* ships from Japan.²⁰⁷ During that time, both Siam and Cambodia sent letters to the Tokugawa Shogunate asking for friendship and trade relations. Song Tham not only sent letters to the Japanese, but to European traders as well.²⁰⁸ Cambodia had sent letters to the Shogun since the beginning of the 16th century.²⁰⁹ During the 1620s, Japanese were very active in Cambodia, especially in the Khmer court.²¹⁰ During this period, Dutch traders were also interested in conducting trade with Cambodia, and with Siam as well. The Dutch were people who recorded many detailed events related to the Cambodia affairs.

The attempted invasion of Song Tham into Cambodia was not a success, king Jayajetṭhā II asked the Vietnamese to intervene in the Siamese attacks. Cambodia also had not profited by the war, and it was likely to fall into the Vietnamese trap. When the Vietnamese sent troops to fight Siam, they wanted to share the land of Prei Nokor for carrying out their trade. D. Chandler asserts that in the 1620s, the Vietnamese marched to the south and colonized the Mekong Delta. They controlled the Cambodian southern territory by first taking over the Cambodian city of Prei Nokor (present-day Saigon). Since then, during the later years under the Nguyễn administrators Cambodia was cut off from maritime access to the outside world, and under Vietnamese control that lasted

206 Song Tham was also called king Intharacha when he became king. He executed king Si Saowaphak who succeeded king Ekathotsarot. Song Tham was another son of Ekathotsarot by a concubine. See Wyatt, *op. cit.*, 106

207 Iwao 1995: iii-iv (English abstract).

208 For letters of Song Tham sent to Japanese and European traders, see Mak Phoeun, *op. cit.*, pp. 170-172.

209 Péril 1923: 127-130 (Appendices).

210 Ishizawa 1998.

more than 200 years, they eventually lost a large part of Khmer territory, and tens of thousands of Khmer people were removed from Cambodian jurisdiction.²¹¹

5. Motives behind the Choice of Longvek-Oudong

In the 16th and 17th centuries, especially from the period of king Ang Chan who reigned in the middle of the 16th century, Cambodia was conspicuous as it had been in the period of commerce. Many foreign merchants came to Cambodia, such as the Portuguese, Spaniards, Dutch, Chinese, Japanese, Malays, and from neighboring countries such as the Cham, Vietnamese, and Siamese. The information related to trade activities in Cambodia is basically based on foreign sources. Portuguese, Spaniards, Dutch, Chinese, and Japanese recorded the documents. By contrast, there has been no record in Khmer sources related to activities such as commerce and local products. Since there was no record related to commerce in the Khmer sources, so far we have worked on this issue by basing ourselves on records that were described in European sources and Chinese junk trades.

In the record of San Antonio in the 17th century, he describes various agricultural and rare products in the kingdom of Cambodia: “There is a lot of cotton in that kingdom, a lot of silk, plenty of incense, benzoin, an abundance of rice and all the lacquer which is sold across the world. There are also famous silver, gold, lead, copper and tin mines.”²¹² Also, in the account of a Captain Diego Beloso who came to Cambodia at the end of the 16th century, it is stated that the Khmer king sent a great deal of rice and wine to Malacca and Macan.²¹³

Moreover, in the report of the captains of the Chinese junks that sailed from China and stopped over in Cambodia, and which were given to the Nagasaki authorities from 1679-1723, it is stated that in Cambodia rice was much cheaper than other products such as sugar, lacquer, ivory, areca nut, and other natural drugs (Ship No. 69). In the reports it is also stated that agriculture is easier to carry out in Cambodia than in other countries, and so rice was extremely cheap (Ship No. 63 and 67).²¹⁴ In the beginning of the 17th century, around the year 1600, Cambodia could export about 7,000 tons a year, which usually supplied Patani, Pahang, and Brunei.²¹⁵ So far these historical records can be used to indicate that Cambodia in the 16th and 17th century was still a country whose economy was based on agricultural products.

It appears as though Southeast Asian countries including Cambodia in the 16th and 17th century was very active in trading with Asian and European countries. After the maritime growth took place due to the predominance of the Chinese network in Southeast Asia, European traders such as Portuguese, Spanish, Dutch, French and English who began their missions, were the first. For example, the Portuguese captured Malacca in 1511, and later they implanted their missions in the nations of Siam, Cambodia, and Burma.²¹⁶ At the beginning of the 17th century, Japan under the Tokugawa government had started to introduce the vermilion ship trade with Southeast Asia. At

211 Chandler 2000: 94-95.

212 San Antonio 1998: 6.

213 Blair and Robertson 1973: 161.

214 Ishii 1998: 170, 174, 175.

215 Reid 1988: 21.

216 Mantiene 1998: 55-84.

least 44 trade licenses were delivered to Cambodia, and around 1500 Japanese came to settle in Phnom Penh and Ponhalu (situated near Oudong, along the bank of the Tonle Sap). The Japanese settlements in Southeast Asia, as well as in Cambodia at Ponhalu, have been known as Nihon Machi (or Japanese Quarters).²¹⁷

Later Ponhalu was to become an active place of commerce for not only Japanese merchants and Christian's residents, but it also attracted European traders, and especially the Dutch. In the area of Ponhalu, close to the Japanese quarters, there was a mercantile office for Dutch traders, and it even had the name of a Dutch river.²¹⁸ It seems as though international exchange and trade between Khmer and foreign merchants from Catumukh to Longvek-Oudong, had to pass through Ponhalu.

Even in the 19th and beginning of the 20th century, Ponhalu was still an important place for merchants. According to the description of E. Aymonier at the close of the 19th century, Ponhalu produced a lot of tobacco, cotton, and mulberry, and about 4 km from Ponhalu, to the north along the Tonle Sap river, there was another important and well-known place called Kompong Luong (or royal port), which is located near the mouth of the Tonle Sap and situated in-between the sites of Longvek and Oudong. Kompong Luong was perhaps the Chinese merchant settlement during the 16th and 17th century. E. Aymonier noted that there was a market in Kompong Luong, and that Chinese people were in a majority. Kompong Luong was a place for foreigners to exchange exported products such as cardamom and gamboge (genus *Garcinia*). Kompong Luong is also located closed to Samrong Tong, which is mentioned in the chronicle as a province of Samrong Tong, where the capital of Oudong was established. Samrong Tong geographically consists of a lot of the water network canals, where it can produce a lot of rice, tobacco, gamboge, and sugar palm.²¹⁹

Based on the above description, it is obvious that the area of Longvek-Oudong could also be utilized for agriculture and commerce. Geographically the area of Longvek-Oudong was a suitable route for communication between the area itself and the commercial place of Catumukh, both via the water and land routes. Compared to the Srei Santhor area, the region of Longvek-Oudong was not so far to access, with regard to the commercial center of Catumukh.

Conclusion

The change of the capital from Angkor to the south in the 15th century was not completely abandoned, because there were still people living, if not urban, at least rural communities, as we have seen many Buddhist terraces in Angkor Thom and other Buddhist worship places in Angkor area. Although the capital cities afterwards were at Srei Santhor and Longvek-Oudong, Angkor had been never forgotten. One thing is certain and must now be stressed: in the consciousness of the Khmer, Angkor will forever remain the focal center of their culture and their identity. In brief, Angkor is their soul.

What is so-called the "Abandonment of Angkor" is simply the abandonment of a capital and not a culture. Also, later rulers came back to settle there at least for a time. Other material facts also point in this direction: the name Srei Santhor (or Srī Sandhara) is the mere reproduction of the name

217 Ishizawa 1998: 85-94., See also, Iwao 1995.

218 Iwao, *op. cit.*, p. 89-95.

219 Aymonier 1900: 220-221.

of the Angkorian capital Srī Yaśodhara (or Srei Yashodhara). This shows that the abandonment of Angkor was not the death of the Angkorian soul, but the transference of a cultural depth that stands the test of time. So far, the middle period of Cambodia is a bridge in connecting between the ancient and modern period.

The abandonment of Angkor as capital to southwards was to settle in a new place, which had potential for agricultural products. Through my on-site research and investigation at Srei Santhor, which was the first choice of the capital in the 15th century, was located along the belt of Mekong. It was an area that contained fresh ground and soft soil which people could produce various kinds of crops. The area has particularly consisted a system, namely “Sre Chanlak” that is referred to as “ended rice cultivation”, which is a secure and sustainable type of cultivation if we compare to other types of cultivation.

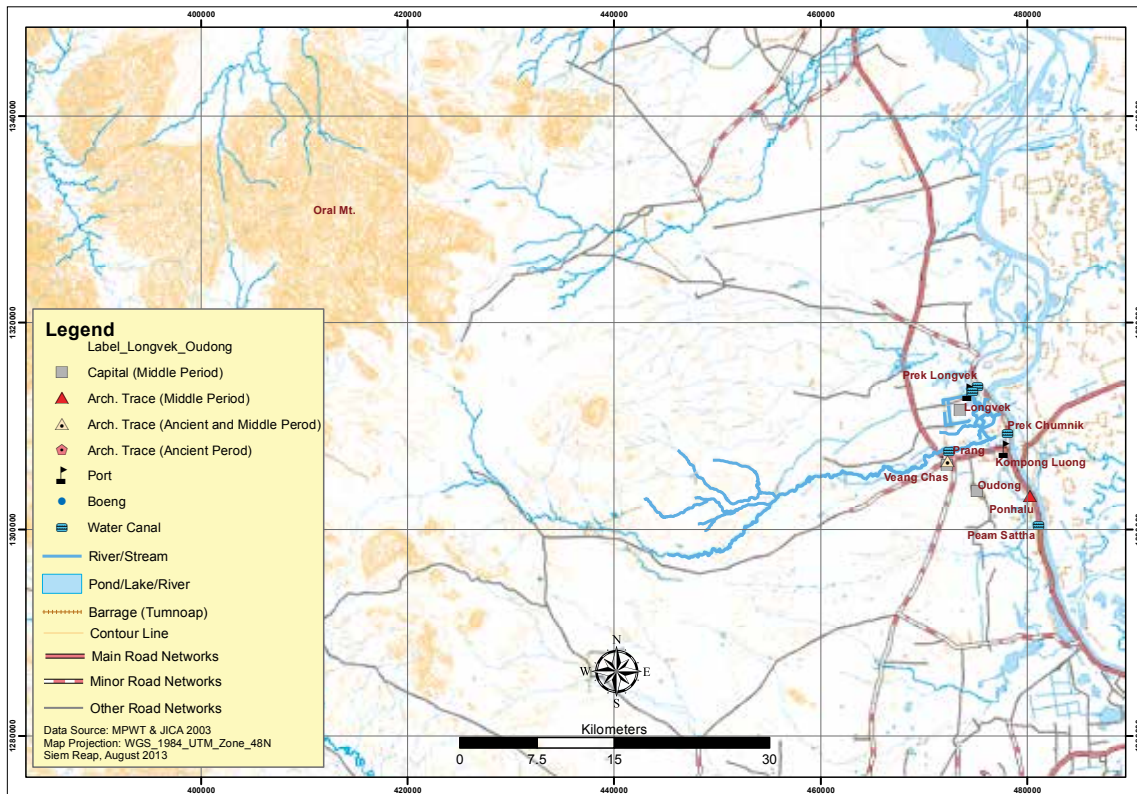
On the other hand, by comparing with previous records of the 19th century, it can be shown that the situation in the region of Srei Santhor was not much changed in terms of agriculture, and it was perhaps also not very different if we compared the potential of the economy in the 19th century, back to that of the 16th and 17th century. The potential of the agricultural products, especially rice production was recorded in European accounts of the 16th and 17th century. That is why several rulers from the 15th to 17th centuries occupied Srei Santhor. In that period, the region of Srei Santhor was a stronghold both politically and economically.

Moreover, the establishment of the capital at Longvek by king Ang Chan did not mean abandoning or even depopulating Srei Santhor. This region, we have seen, was too favorable with regard to agriculture and well equipped with agricultural infrastructure, for it to be deserted. Following the “capture” of the viceroy Srī Suriyobarm in Ayutthaya, a notable from Joeñ Brai proclaimed himself king under the name Braḥ Rām Joeñ Brai and reigned, not in Longvek but in Srei Santhor, thereby reviving the ancient capital.

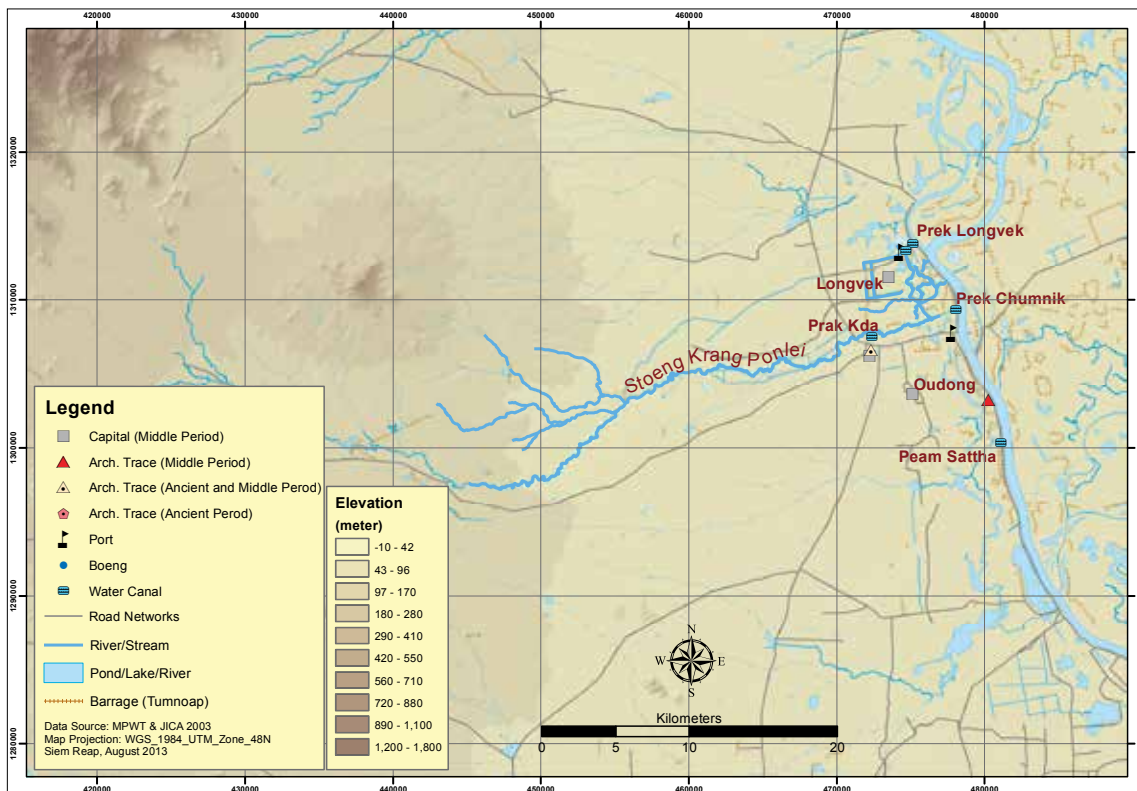
For the next re-locations at Longvek and Oudong, when we look at the map, one realizes that the region of Longvek and Oudong are quite close, since just 7 kilometers separated the centers of the two cities. One of them opens onto the Tonle Sap and is situated at the lowland plain that naturally exists, the volume of the river water flowing down from the Oral Mountains (Map 11, 12). A synchronic point of view suggests activities, agricultural areas, and movement, or that the socio-politico-economic-example of one overlapped that of the other.

Compared to Srei Santhor, the region of Longvek-Oudong was not too far-away, in order to have access to the commercial center of Phnom Penh, and furthermore it was close to the Tonle Sap (Grand Lake), which could lead to the production of not only agricultural products but also fisheries and other forest resource products.

On the other hand, the establishment of the capital at Longvek and not Srei Santhor by king Ang Chan, emphasizes the fact that it was related to the political atmosphere between king Ang Chan and Sṭec Kan. Srei Santhor was once controlled by Sṭec Kan, and he seemed to be respected by the people who lived there, and as we are aware even today he was very well known by the local community. For his kingly dignity, king Ang Chan perhaps decided to find a new place. So far, it can be suggested that it is necessary to address all factors, in order to create a better and well-formed hypothesis.



Map 11 Map showing the complex waterways between Oral Mountain and the area of Longvek-Oudong



Map 12 A potential of waterway system in the area of Longvek-Oudong

In sum, on the basis of these discussions, we see that the reasons for the changes of capital to Srei Santhor and Longvek-Oudong were political, logistic, and agricultural, or a mix of the three, and the reasons lean heavily on the subsistence level economic environment that increased agricultural productions would support. Therefore, the first factor is political, which is related to the invasion by Siam that caused the shift of the capital to the south. The second factor is that the need to change the capital was something logistic, and was based on a need to attain wealth through increasing the frequency and access to trade. The third is that increased agricultural output coupled with the resulting increase in the possibility of production of trade goods and specialty items was a good strategy for a growing population, regarding economy and wealth. In addition, with regard to governing, a decision had to be made about choosing a location where both farming and trade routes were more easily accessed.

Bibliographies

List of Abbreviations:

APSARA: Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap.

BEFEO: Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient.

BSEI: Bulletin de la Société des Études Indochinoises.

CEDORECK: Centre de Documentation et de Recherche sur la Civilisation Khmère.

EFEO: l'École Française d'Extrême-Orient.

IC: Inscriptions du Cambodge.

IMA: Inscriptions Modernes d'Angkor.

JA: Journal Asiatique.

JOSA: Journal of the Oriental Society of Australia.

JSAS: Journal of Sophia Asian Studies.

JSS: Journal of the Siam Society.

NUS: National University of Singapore (Press)

Dictionaries:

Franklin E. Huffman and Im, Proum.

1977. Cambodian Literary Reader and Glossary, New Haven and London, Yale University Press, 2 volumes.

Institute Buddhique.

1981. Dictionnaire Cambodgien, 5ème édition, 2 vols, Phnom Penh, (1^{ère} édition 1967-8).

Pou, Saveros.

1992 & 2004. Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais. *Cedoreck*, Paris.

Catalogues:

Au, Chhieng.

1953. Catalogue du Fonds Khmer, Bibliothèque National, Paris, 307p.

Bernon, de Olivier.

1996a. Inventaire sommaire des manuscrits Khmer conservés à Bibliothèques des monastères de Phnom Penh, *EFEO*, 36p.

1996b. Inventaire sommaire des manuscrits Khmer conservés à Bibliothèques des monastères de la province de Kandal, *EFEO*, 95p.

Mao, Reasey.

1996. *Manuscripts Traditionnels (I) (Olles et Krangs)*, New catalogue of Khmer manuscripts in the library of EFEO, Paris, 64p.

Documents in Khmer:

Code 3190/96,

Preah Reach Pongsavodar Khmer (Khmer Royal Chronicle), Library of Buddhist Institute, Phnom Penh, Cambodia.

Eng, Soth.

1969. *Ekasar Moha Borâs Khmer*, Phnom Penh, 3 vols.

Khun, Saep and Li, Thiemteng.

1972. *Rajapongsavatar, manuscripts of Vatt Kok Kak, Kambuja Suriya*, No. 3-12.

Ministry of Education.

1952. *Preah Reach Pongsavodar Nei Prates Kampuchea* (Royal Chronicle of Cambodia), Edition of the Royal Palace, Phnom Penh.

Nhok, Them.

1945. "The summary of the Khmer Royal Chronicles in 1918", *Kambuja Suriya*, No. 8, 9 & 11, Year 17.

Pal, Ros.

1941. *Nis Preah Reach Pongsavodar Mohareach*, Vatt Setbaur (Setbaur pagoda).

Ros, Chantrabot.

1997. *Histoire du Cambodge Partie légendaire et lapidaire*, L'Harmattan, Paris.

Sim, Savan.

1944. *Preah Reach Pongsavodar Nokor Khmer*, Vatt Kok Kak (Kok Kak pagoda).

Tran, Ngia.

1973. *Pravoatesas khmer* (Cambodian History), 1 and 2, new published by the Ministry of Education Youth and Sport in 2003.

Tranet, Micheal.

2001. *Pongsavartar Sdec Kan* (Chronicle of Sdec Kan).

Vāṃṃ, Joun (VJ).

1933. *Preah Reach Pongsavodar Maha Khsat Khmer Krong Kampuchea Thipadei*, (Cambodia Royal Chronicle), 2 vols, Institute of Asian Culture, Sophia University.

P/48 (I), EFEO.

Prah Rajapongsavatar (Chronique Royale du Cambodge), dérigée sous le règne du roi Norodom.

P/48 (II), EFEO.

Prah Rajapongsavatar (Chronique Royale du Cambodge) : 1^{ère} partie (pages 1-52), Partie Legendaires, dérigée en 1878 par le Prince Nupparot (Fin de Ang Duong) ; 2^{ème} partie (pages 53-245), Rois depuis Nippanbat jusqu'à règne de Norodom, dérigée vers 1818 par l'Okhña Voṅsa Sarpec Noñ.

P/64, EFEO.

Chroniques Royales du Cambodge, commençant au règne du Nippan Bat, dérigée en 1869 par ordre du roi Norodom.

P/65, EFEO.

Chronicque Royale du Cambodge 1340-1868, Archives Royales, Phnom Penh, 1916 (G. Cædès).

Documents in Foreign Languages:

Ang, Chouléan.

1997. "Nandin et ses Avatars", *Angkor et dix siècles d'art Khmer*, Paris, pp. 62-69.

Ang, Chouléan, et al.

1998. *Angkor: Past, Present and Future*, APSARA, Royal Government of Cambodia.

2008. "La Plus Ancienne Inscription en Pali du Cambodge", translated from French into Khmer by Ang Chouléan, *UDAYA*, 115-127.

- Aymonier, Étienne.
 1880. "Chronique des Anciens Roi du Cambodge", in: *Excursions et Reconnaissances*, N. 4, pp. 149-184.
 1891. "Première Etude sur les Inscriptions Tchames", *JA*, XVII, pp. 4-86.
 1899 and 1900. "Inscriptions Modernes d'Angkor", *JA*, pp. 493-529 and 1900, pp. 143-175.
 1900-4. *Le Cambodge*, 3 volumes, Paris, Ernest Leroux.
- Baoyun, Yang.
 1994. "Les sources historiques en caractères chinois: un trésor pour les recherché sur l'histoire du Cambodge", *Péninsule* (1), pp. 45-50.
- Barth, M. A. et Bergaigne, M. A.
 1885. *Inscription Sanskrits du Cambodge et Champa*, Notices et Extraits des Manuscrits de la Bibliothèque National, Tome XXVII (1-2), Paris.
- Bosselier, Jean.
 1963. *La Statuaire de Champa*, EFEO, Paris.
- Berval, René de.
 1956. *Kingdom of Laos: The Land of the Million Elephants and of the White Parasol*, France-Saigon.
- Blair, Emma Helen and Robertson, James Alexander (Blair and Robertson), edit,
 1973. *The Philippines Islands 1493-1898*, Vol. 9, pp. 161-180 & Vol. 15, pp. 135-167.
- Briggs, Lawrence Palmer.
 1948-49. "Siamese Attacks on Angkor before 1430", *The Far Eastern Quarterly*, Review of the Eastern Asia and the Adjacent Pacific Island, Washigton, D. C, Vol. VIII, pp. 3-33.
 1950. "Les missionaries portugais et espagnols au Cambodge 1555-1603", *BSEI*, Saigon.
 1951. *The Ancient Khmer Empire*, 1st published in 1951, reprinted in 1999 by the American Philosophical Society and White Lotus.
- Bruguier, Bruno.
 2000. "Les ponts en pierre du Cambodge ancien Aménagement ou controle du territoire", *BEFEO*, Tome 87, Vol. 2, Paris.
- Cabaton, Antoine.
 1914. *Hollandais au Cambodge au XVIIe siècle*, Société de l'histoire des colonies Françaises, Paris.
- Cœdès, Goerge.
 1918. "Essai de classification des documents historiques Cambodgiens conservers à la bibliothèque de l'École Française d'Extrême Orient," *Etude Cambodgiennes XVIII*, *BEFEO*, XVIII, fasc. 9, pp. 15-28.
 1921. "The Origins of the Sukhodaya Dynasty", *JSS*, Vol. 14, pp. 1-11.
 1924. *Recueil des Inscriptions du Siam*, Bangkok, 1924.
 1929. "Nouvelles Donnés Chronologiques et Généalogiques sur la Dynasties de Mahāndrapura", *BEFEO*, XXIX, pp. 297-330.
 1936. "La Plus Ancien Inscription Pali du Cambodge", *Etude Cambodgiennes XXXII*, *BEFEO*, XXXVI, pp. 14-21.
 1937-66. *Inscription du Cambodge*, 8 volumes, EFEO, Hanoi-Paris.
 1962. "La Date d'Exécution des Deux Bas-reliefs Tardifs d'Angkor Vat", avec une note de J. Boisselier, *JA*, CCL, fasc. 2, pp. 235-248.
 1967. *The making of Southeast Asia*, translated by H. M. Wright, University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*, (tr. by Susan Brown Cowing), University of Malaysia, Kuala Lumpur.
 1989. *Les États Hindouisés d'Indochine et d'Indonesia*, Paris.
 1989a. *Articles sur le Pays Khmer*, Tome I, EFEO, Paris.
 1992. *Articles sur le Pays Khmer*, Tome II, EFEO, Paris.
- Cœdès, Goerge & Dupont, Pierre.
 1943-46. "Les Stèle de Sdok Kak Thom, Phnom Sadak et Prah Vihār", *BEFEO*, XLIII, Hanoi, pp. 56-154.
- Chandler, David.
 1979. "Folk Memories of the Decline of Angkor in 19th century Cambodia: the Legend of the Leper King", *JSS*, Vol. 67, part 1, pp. 54-62.

1996. *Facing the Cambodian Past, Selected essays 1971-1994*, Silkworm Books, Chiang Mai, Thailand.
2000. *A History of Cambodia*, Westview Press, 3rd edition.
- Dharma, Po.
1982. "Note sur les Cam du Cambodge, Relation et Organisation", *Seksa Khmer*, 5, 1982, pp. 103-116.
- Delvert, Jean.
1964. *Le Paysan Cambodgien*, Recherches Asiatiques, L'Harmattan, Paris.
- Dupont, Pierre.
1943-46. "La dislocation du Chenla et la formation du Cambodge Angkorien (VII^e-IX^e)", *BEFEO*, XLIII, Hanoi.
- Finot, Louis.
1903. "L'Inscription Sanskrit de Say-Fong", *BEFEO*, III, Hanoi, pp. 18-33.
1912. "L'Inscription de Ban That", *BEFEO*, XII, Hanoi, pp. 1-28.
1915. "Inscription de Sdok Kak Thom", Note d'Epigraphies, Hanoi, *BEFEO*, XV.
1925. "Temple de Magalartha à Angkor Thom", Inscriptions d'Angkor XI, *BEFEO*, XXV, (2), Hanoi, pp. 393-406.
- Filliozat, Jean.
1969. "Une Inscription Cambodgienne en Pali et en Khmer de 1566 (K. 82 Vatt Nagar)", *Communication Académie des Inscription & Belles-Lettres, Comptes Rendus*, Paris, pp. 93-106.
- Fletcher, Roland.
2000-2001. "Seeing Angkor: New Views on an Old City", *JOSA*, 32-33, pp. 1-27.
2008. "The Water Management Network of Angkor, Cambodia". *Antiquity*, 82, pp. 658-70.
- Frankfurter, O.
1909. "Event in Ayuddhya from Chulasakaraj 686-966", *JSS*, Vol. 6, 3, pp. 1-21.
- Fukui, Hayao.
2000. "Historical Cities and Agriculture in Tropical Asia: A Hydrological Examination", *JSAS*, No. 18, pp. 26-37.
- Garnier, F.
1871-72. "Chronique Royal du Cambodge", *JA*, Paris.
- Gaucher, Jacques.
2004. "Angkor Thom, une utopie realise?, Structuration de l'espace et modèle indien d'urbanisme, dans le Cambodge ancien", *Arts Asiatiques*, Tome 59, pp. 58-86.
- Giteau, Madeleine.
1975. *Iconographie du Cambodge post-angkorien*, EFEO, Paris.
- Goloubew, V.
1935. "Silvain Levi et Indochine", *BEFEO*, XXXV, pp. 551-567.
- Griswold A. B and Prasert òa Nagara
1971. "The Inscription of the King Rāma Gamhèn of Sukhodaya (1292 AD.): Epigraphic and Historical Studies No. 9", *JSS*, Vol. 59, 2, pp. 179-228.
- Groslier, Bernard Philippe.
1958. *Angkor et le Cambodge au XVI^e siècle d'après les Sources Portugaise et Espagnoles*, Press Universitaires de France, Paris.
1960. "Our Knowledge of Khmer Civilization: A Pre-Appraisal", *JSS*, Vol. XLVIII, Part. 1, Bangkok.
1973. *Inscription du Bayons, Mémoires Archéologiques*, III-2, EFEO, Paris.
1979. "La Cité Hydraulique Angkorienne: Exploitation ou Surexploitation du Sol?", *BEFEO*, Tome 66, pp. 161-202.
1985-86. "L'image d'Angkor dans la conscience Khmère", *Seksa Khmer*, No.8-9, pp. 5-30.
1985-86a. "For a geographic history of Cambodia", *Seksa Khmer*, No. 8-9, pp. 31-76.
1997a. "Prospection des Site Khmers au Siam", Coûts et profits en Archéologie, Edition CNRS, 1980; This article was published again by Jacques Dumarçy in the *Mélanges sur l'archéologie du Cambodge (1949-1986)*, Textes réunis par Jacques Dumarçy, *EFEO*, Réimpression N. 10, Paris.
1997b. "Redéfinition de la Stratégie de la Recherche sur la Civilisation Khmère", Avant-Propos par J. Népoté, *Péninsule*, Vol. 34.

2006. *Angkor and Cambodia in the Sixteenth Century : According to Portuguese and Spanish Sources*, Traslated from French version by Michael Smithies, Orchid Press.
- Higham, Charles.
1989. *The Archaeology of Mainland Southeast Asia, from 10,000 B.C to the fall of Angkor*, Cambridge University Press.
- Ishii, Yoneo.
1998. *The Junk Trade from Southeast Asia*, Translations from the Tosen Fusetsugaki, 1674-1723, Institute of Asian Culture, Singapore.
2009. "A Note on the Est-West Corridor passing through Sukhothai", *Southeast Asia: History and Culture*, No. 38. (In Japanese)
- Ishizawa, Yoshiaki.
1998. "Les quartiers Japonaises dans l'Asie du Sud-Est au XVII^e siècle", in *Guerre et Paix en Asie du Sud-Est*, Paris, pp. 85-93.
2000a., edited. *Two International Symposium*, JSAS, Institute of Asian Culture, Sophia University, No. 18.
2000b. "A Comparative Study of Material Contained in Inscriptions and the 1:5000 Scale Topographical Map, Considering the Hydraulic City of the Angkor Dynasty", *JSAS*, No. 18, pp. 9-25.
2007a. "Les inscriptions calligraphiques Japonaises du XVII^e siècle à Angkor Vat et le plan du Jetavana-vihāra", Edit. Yoshiaki Ishizawa, Claude Jacques, and Khin Sok, Manuel d'épigraphie du Cambodge, Vol. I, *EFEO-UNESCO*, pp. 169-179.
2007b. "Étude critique sur la (Chronique du Zhenla) de l'Histoire des Sui avec commentaire et traduction française", Edit. Yoshiaki Ishizawa, Claude Jacques, and Khin Sok, Manuel d'épigraphie du Cambodge, Vol. I, *EFEO-UNESCO*, pp. 195-209.
2012. *Challenging the Mystery of the Angkor Empire: Realizing the Mission of Sophia University in the Asian World*, Sophia University Press, Tokyo.
- Iwao, Seiichi.
1995. *A Study of Japanese Quarters in Southeast Asia in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, 4th editions, Japan. (In Japanese)
- Jenner, Philip. N.
1976. "The relative dating of some Khmer Cpap", *Austro-Asiatic Studies*, University Press of Hawaii, Part II, pp. 693-710.
- Kenneth, R. Hall.
1985. *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*, University of Hawaii Press, Honolulu.
- Kitagawa, Takako.
2000. "History of the Water King in Srei Santhor", *Tonan-ajia Kenkyu*, Vol 38, 1, pp. 50-73. (In Japanese)
2006. *Rethinking of Cambodian History*, Rengo Publication, Japan, (In Japanese).
- Khing, Hoc Dy.
1997. *Aperçu Général sur la Littérature Khmère*, L'Harmattan, Paris (in Khmer and French).
- Khin, Sok.
1978. "Deux Inscriptions tardives du Phnom Bakheng K465 et K285", *BEFEO*, LXV, pp. 271-280.
1980. "L'Inscriptions de Vatt Romlok K27", *BEFEO*, LXVII, pp. 125-133.
1980a. "L'Inscription de Praí Thom du Kulen K715", *BEFEO*, LXVII, pp. 133-134.
1988. *Chroniques Royal du Cambodge (de Bañā Yāt jusqu'à la prise de Longvek: de 1417 à 1595)*, Traduction française avec comparaison des différentes versions et introduction, Paris.
1991. *Le Cambodge entre le Siam et Le Vietnam*, EFEO, Paris.
- Lajonquière, de Lunet.
1902-04. *Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge*, 3 Volumes, *EFEO*, Paris.
- Mantienne, Frédéric.
1998. "Les Recours des États de la Péninsule Indochinoise à l'Aid Européenne dans leur Relation (XVI^{ème}-XVIII^{ème})", in *Guerre et Paix en Asie du Sud-Est*, edited by Nguyễn Thê Anh et Alain Forest, Paris, pp. 55-84.
- Mabett, Ian.
1978. "Kingship in Angkor", *JSS*, part 2.

- Malleret, Louis.
1960. *L'archéologie du delta du Mékong. II. La Civilisation Matérielle d'Oc-Eo, Publ. de l'École Française d'Extrême-Orient*, Paris.
- Mak, Phoeun.
1981. *Chroniques Royal du Cambodge (de 1594 à 1677)*, EFEO, Paris, 1981.
1984. *Chroniques Royal du Cambodge (des origines légendaires jusqu'à Paramarājā Ier)*, Traduction française avec comparaison des différentes versions et introduction, Paris, 1984.
1995. *Histoire du Cambodge de la fin du 16ème siècle au début du 18ème siècle*, EFEO, Monographies, No. 176, Paris.
2003. *Manuscrits des Chroniques Royales du Cambodge*, Institut Bouddhiste of Phnom Penh (Unpublished paper).
- Marchal, Henri.
1918. "Terrasses Buddhiques et Monuments Secondaires d'Angkor Thom", *BEFEO*, XVIII, Hanoi, pp. 1-40.
1951. "Note sur la forme du Stūpa au Cambodge", *BEFEO*, XLIV, 2, pp. 581-590.
- Maspero, Goerge.
1928. *Le Royaume de Champa*, Les éditions G. Van Oest, Paris et Bruxelles.
- Martin, Stuart- Fox.
2003. *A Short History of China and Southeast Asia : Tribute, Trade and Influence*, ALLEN & UNWIN.
- Mathieu, A. R.
1959. "Chronological Table of the History of Laos," in René de Bernal's, *Kingdom of Laos: The land of the million elephants and of the white Parasol*, France- Asie, pp. 31-49
- Mayers, W. F.
1875. "Chinese explorations of the Indian Ocean during the fifteenth century", *The Chinese Review*, 4, Honkong.
- Men, Rath Sambath.
2007. *Les Stoupas et les Temples de la Colline d'Oudong: Études Historique et Linguistique*, Mémoire pour le Diplôme de Master, Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Paris, 161p.
- Michaelian, Grégory.
1999. "La Gestion Administrative du Royaume Khmer d'après un Code Institutionnel de XVII^e siècle", *Péninsule*, No. 38, pp. 65-167.
2009. *La Royauté d'Oudong : Réformes des Institution et Crise du Pouvoir dans le Royaume Khmer du XVII^e siècle*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne.
- Moura, Jean.
1883. *Le Royaume du Cambodge*, I & II, Paris, Ernest Leroux.
- Penny, Dan
2005. "Hydrological History of the West Baray, Angkor, Revealed through Palynological Analysis of Sediment from the West Mebon", *BEFEO*, XCII, pp. 497-521.
2010. "The Mekong River System and the End of the Angkor Civilization: A Water Historical Perspective", *A History of Water*, edited by Terje Tvedt and Richard Coopey, I. B. Tauris, London-New York, pp. 129-143.
- Péril, N.
1923. "Essai sur le Relations du Japon et de l'Indochine, au XVI^e et XVII^e siècles", *BEFEO*, XXIII, Hanoi, pp. 1-104. And the Appendice, pp. 105-136.
- Pou, Saveros & Jenner, P. N.
1975. "Les Cpap' ou Codes de Conduite Khmers, I, Cpap' Ker Kāl", *BEFEO*, LXII, pp. 369-394.
- Pou, Saveros & K. Harsrea.
2003. "La Littérature Didactique Khmère: Les Cpap'", Selected papers on Khmerology, Reyum, Phnom Penh, Cambodia, pp. 200-213.
- Pou, Saveros (Lewitz).
1967. "Recherche sur le Vocabulaire Cambodgien", (I), *JA*, CCLV, 1, pp. 117-131.
1969. "Note sure Translittération du Cambodge", *BEFEO*, LV, pp. 163-169.
1970-1975. "Inscriptions Modernes d'Angkor", *BEFEO*, Paris.
1970. "Textes en Khmer Moyen: Inscriptions Modernes d'Angkor 2 & 3", *BEFEO*, Paris, pp. 96-126.

1971. "Inscriptions Modernes d'Angkor 4, 5, 6 & 7", *BEFEO*, Paris, pp. 105-123.
1975. "Inscriptions Modernes d'Angkor 34 & 38", *BEFEO*, Paris, pp. 283-353.
- 1989 & 2001. *Nouvelles Inscriptions du Cambodge*, Traduite et éditées, EFEO, Paris, Vol. I & Vol. II & III.
- Pottier, Christophe.
2000. "Some evidence of an Inter-relationship between Hydraulic Features and Rice Field Patterns at Angkor during Ancient Times", edited by Y. Ishizawa, in *JSAS*, No. 18, pp. 99-119.
- Reid, Anthony.
1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680: Volume one, The Land below the Winds*, Yale University Press, New Haven and London, 175p.
1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680: Volume two, Expansion and Crisis*, Yale University Press, New Haven and London, 390p.
- Rémusat, Abel.
1829. "Descriptions du royaume de Cambodge", *Nouveaux Mélanges Asiatiques*. I, Paris, pp. 89-97.
- San Antonio de G. Q (San Antonio).
1998. *A Brief and Truthful Relation of Events in the Kingdom of Cambodia*, translated into French by Antoine Cabaton, 1914, Ernest Lerous, Paris; translated and published into English version from French version by White Lotus.
- Stark, Miriam.
2001. "Some Preliminary Results of the 1999-2000 Archaeological Investigations at Angkor Borei, Takeo Province", *UDAYA*, 2, pp. 19-35.
- Swami Harshananda.
2008. *A Concise Encyclopedia of Hinduism*, Volume 2, Bangalore.
- Tin, Pe Maung and Luce, G. H.
1923. *Glass Palace Chronicle of the Kings of Burma*, Oxford University Press, London : Humphrey Milford.
- Thierry, Solange.
1985. *Le Cambodge des Contes*, L'Harmattan, Paris.
- Thung, Heng, L.
1994. "Geo-hydrology and the decline of Angkor", *JSS*, Vol. 82, 1, pp. 9-14.
- Vettam Mani.
1984. *Puranic Encyclopedia*, published by Motilal Banarasidass, Delhi.
- Vickery, Michael.
1978. *Cambodia After Angkor, the Chronicular Evidence for the fourteenth to the sixteenth centuries*, Vols I & II, Yale University, Ph. D.
1982. "L'Inscription K1006 du Phnom Kulen", *BEFEO*, Tome 71, pp. 77-86.
1998. *Society, Economics, and Politics in Pre-Angkor Cambodia, the 7th -8th centuries*, The Toyo Bunko.
2005. *Champa Revised*, Asian Research Institute: Working Paper Series, No. 37, National University of Singapore.
- Wade, Geoff & Sun Laichen, edit.
2010. *Southeast Asia in the Fifteenth Century: The China Factor*, NUS Press Singapore and Hong Kong University Press.
- Wade, Geoff.
2005. The *Ming Shi-lu* as a source for Southeast Asian History, pp. 1-37 (<http://epress.nus.edu.sg/msl>).
- Wang, Gungwu.
1981. *Community and Nation: Essays on Southeast Asia and the Chinese*, selected by Anthony Reid, Asian Studies Association of Australia and George Allen & Unwin Australia, first publication.
- Wolters, Oliver William.
1966. "The Khmer King at Basan (1371-3) and the Restoration of the Cambodian Chronology during the Fourteenth and the Fifteenth Centuries", *Asia Major*, Edited by W. Simon, Volume XII, Lund Humphries, London, pp. 44-89.
- Wood, W. A. R.
1921. *A history of Siam, from the early times to the year A. D 1781, with a supplement dealing with more recent events*, London: Adelphia terrace, first published.

1925. "The Pongsawadan of Luang Prasot", *JSS*, Vol. 19, pp. 153-157.
- Wyatt, David. K.
1984. *Thailand: A Short of History*, Yale University Press, New Haven and London.
1999. *Chronicle of the Kingdom of Ayutthaya*, the British Museum Version, preserved in the British Library, The Center for East Asian cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko, Tokyo.
- Zhou, Dagan.
1967. *Notes on the customs of Cambodia by Tchou Ta Kuon*, translated from French version of Paul Pelliot by J. Gilman D'archy. Paul, Bangkok.
2006. *The Customs of Camcodia* (Zhou Dagan), edited and newly translated from the French by Michael Smithies, The Siam Society, Bangkok.

研究調查報告

I. 建築学分野

アンコール遺跡群のうち、未解明の遺跡

奈良女子大学国際親善教授
上野邦一

アンコール遺跡群（図1）という、アンコール・ワットやバイヨンといった遺跡が著名であり、多くの書籍が出ていて、語り尽くされている感がある。ところが、建築を学んだ者にとって、あるいは建築という目でアンコール遺跡群を見ていると、遺跡群には不思議なことや分からないことが多くある。私が不思議に思う遺跡や疑問に丁寧に応えてくれる書籍や論文は、今のところ見いだせないでいる。カンボジア人研究者からの指摘で示唆を得たものもあるが、正確には分かっていない。

何がどういふ風に、不思議で疑問なのか、遺跡をどうみるかに興味を持つ方々に私が不思議に思っていることや疑問を提示し共有しておきたい。そして、将来解明されることを期待したい。記述は、考えついた順、気づいた順であり、記述の順にはとくに意味があるわけではない。遺跡ごとに疑問点を列記した方が理解しやすい面もあるが、共通した問題もあるので、問題ごとに記述する。アンコール遺跡群に関する未解明の問題は、本稿で述べようとしている事柄以外にも多

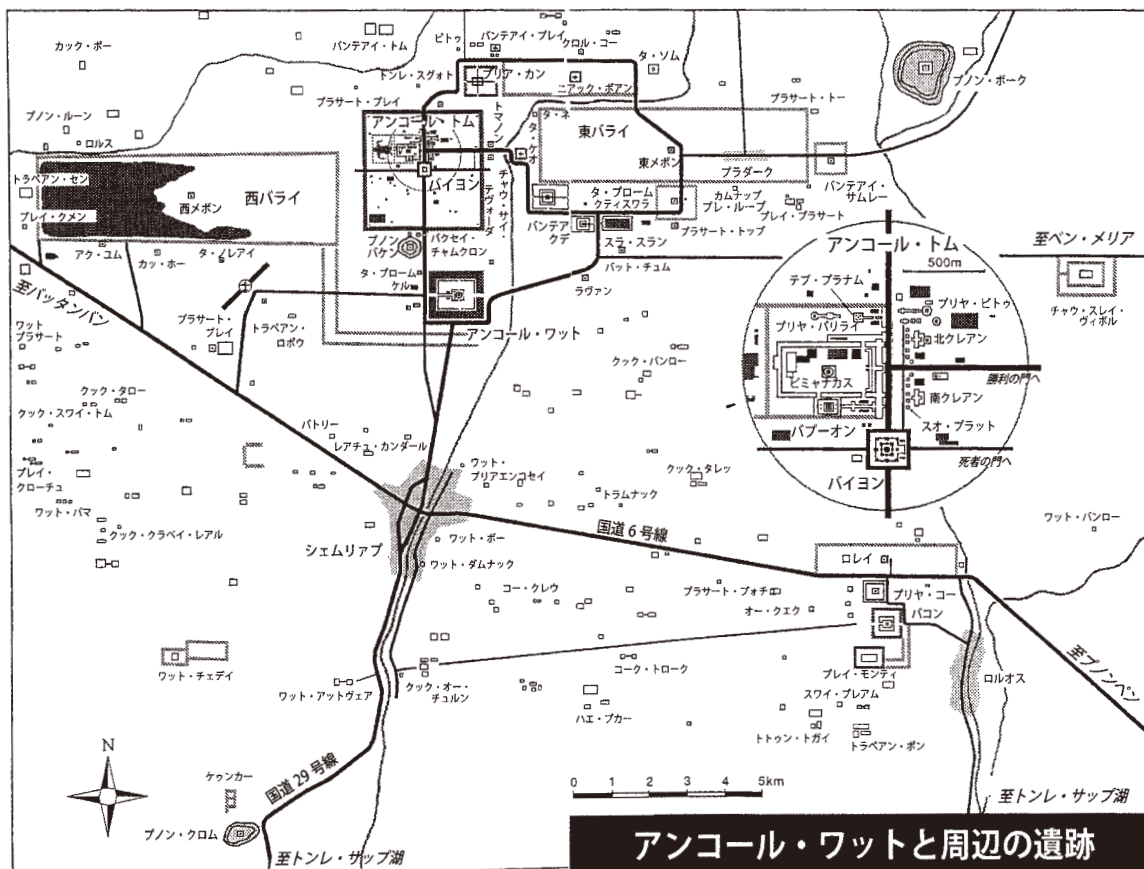


図1 アンコール地域の遺跡群 出典：『アンコール・ワットを読む』（連合出版、2005）

くあると思われる。その意味で本稿は、私が見聞した範囲で疑問を持った限られた問題提起であることをお断りしておく。

また手書きの資料を掲載するが、ほかに資料がないことをお断りすると同時に、過去十年の間での断続的にカンボジアに滞在して採取した図面で、近年の状況の変化を反映していない可能性があることもお断りしておく。

1 二階建て建築

プリア・カーンに二階建て建築とでも呼べる建物があり、PKU01と呼ぶことにする（図2・3）。この建物は伽藍の東よりで中軸線北より独立して建つ建物である。石造の柱を林立させる二階建て建物で、周囲には壁を主構造とする構築物ばかりだから、一見して異質な建物であることを印象づける。バンテアイ・クデイにある一棟（BKC17¹⁾、図4・5）、とタ・プロムにある一棟（TPU01と呼ぶことにする、図6・7）の、この二棟もPKU01に似ている建物であり、共通する性格を持つがバンテアイ・クデイの一棟もタ・プロムの一棟も一階部分しか残っていない。

これらの三棟の一階平面を見比べると、前後にポーチとでもいうべき空間があること、主体部の両端で双子柱を用いるなど、主体部の長手方向の柱間は七間と五間と異なるが、この三棟が共

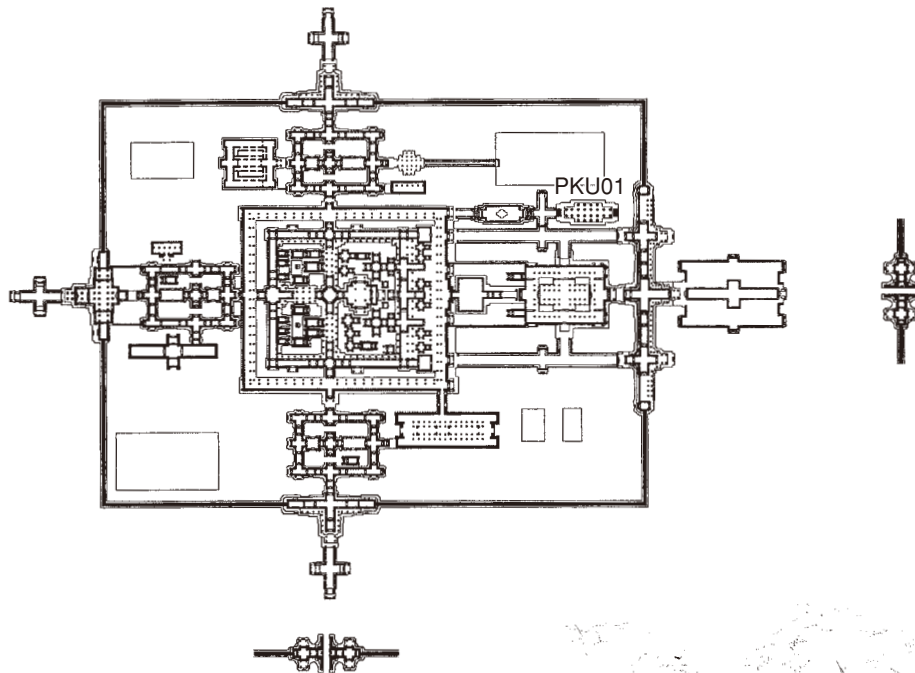


図2 プリア・カーン全体図
出典：『Art & Architecture of Cambodia』
(Thames & Hudson, 2004)

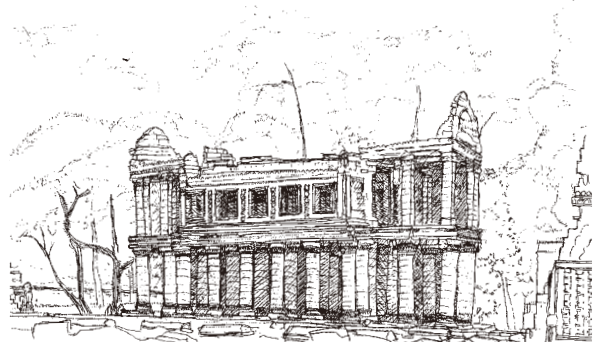


図3 プリア・カーン二階建て建築（PKU01） 筆者作図

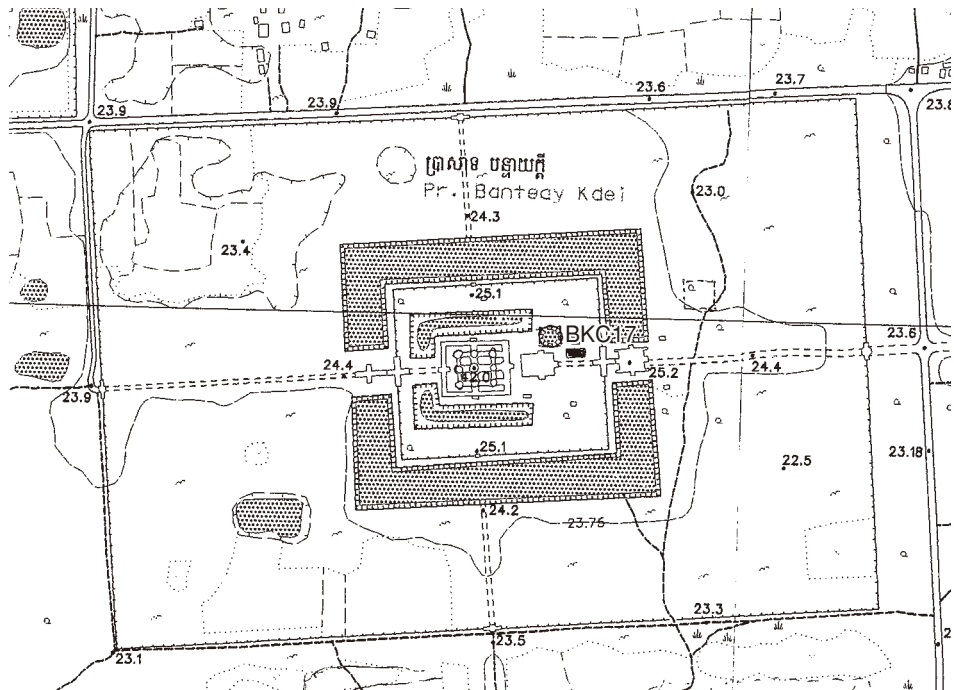


図4 バンテアイ・クデイ全体図 出典：JICA 作成地図

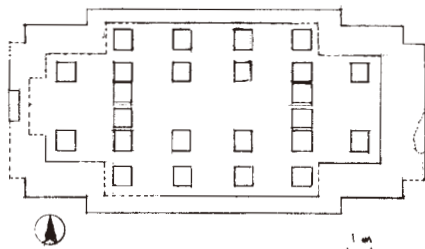


図5 バンテアイ・クデイの推定二階建て建築 (BKC17) 筆者作図

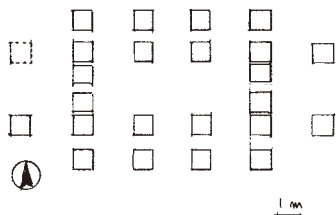


図7 タ・プロム 推定二階建て建築 (TPU01) 筆者作図

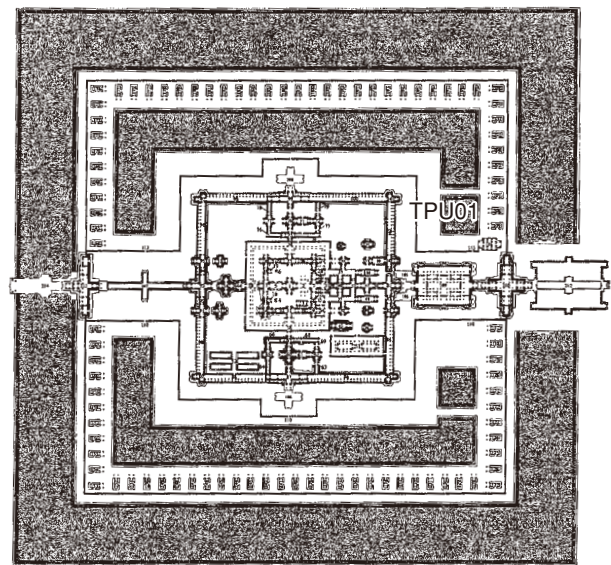


図6 タ・プロム全体図 出典：『Ta Prohm A Glorious Era in Angkor Civilization』(White Lotus, 2007)

通する属性を持つ建物であることが分かる。ここで双子柱とは、同じ柱を二本並べるので、このように呼ぶことにした柱のことである。これらの三棟の伽藍全体の中での位置を見ると、中心区画の北東に位置し、この点も共通する。すなわち、この三棟は同質の建物だろう、と考えることができるのである。

石造やラテライト構造の場合、通常はそれらを積み上げて壁を造り構造主体とする、建築用語で組積構造そせきこうぞうと呼ぶ構造にするのが多い。一方、木造は柱を立て柱上で梁で繋ぐ軸組構造じくぐみこうぞうが多い。木造でも、校倉造あべくらづくりとかログハウスのように木材を横に積重ねる工法もあるが、例外と言ってよいだろう。結局、石・レンガを構造主体とする場合は組積構造、木を構造主体とする場合は軸組構造が大勢ということになる。ところが、木造で横木を積重ねる組積構造に似た工法があるように、石造で軸組構造に似た構造を持つ建物が、PKU01、BKC17、TPU01なのである。この内バンテアイ・クデイのBKC17は一階部分に未完成の柱があり、建物全体は未完成で二階部分に着手していなかったかもしれない。またタ・プロムのTPU01は崩壊して全容が分からない。すなわち、石造で軸組構造のように見え、ほぼ完成した建物がPKU01なのである。この構造では迫り出しアーチを架けることはできないから、柱から上の構造を考えると、梁は木材であり小屋組は木造となる。屋根葺材は、草葺の可能性を否定はできないが、瓦葺と考えるのが妥当である。

PKU01は二階建てだが二階に昇る階段などの装置はない。もちろん、外側に梯子をかければ二階に昇ることができるが、二階に昇ることは無かったと思う。二階を何かに利用する、といった建物ではないだろう、と考えるからである。この建物は、機能上なにかの役に立つ建物ではなく、伽藍を構成する象徴的な存在価値しか見いだせない。

PKU01、BKC17、TPU01の三棟は同質の建物だろうとすると、この三棟は特定の機能を持たない、伽藍の構成要素としての建物ということになる。

2 オープンスペース、デッドスペース

オープンスペースというのはとりたてて何かの装置がないスペースで、空き地や広場のような場所を言い、デッドスペースとは、空間としてはある広がりを持つが、四方を壁に囲まれ閉鎖されていて利用できない場所をいう。

(1) 伽藍全体の方形区画と中心区画の位置

ロリュオス遺跡群のうちプリア・コー（図8）の建物配置を取り上げる。

ロリュオス遺跡群は、アンコール遺跡群の南東13kmほどの一帯にある遺跡群である。アンコール遺跡群が890年頃からであり、ロリュオス遺跡群はアンコール遺跡群に先立つ、870年頃の遺跡群と考えられている。このなかにプリア・コーと呼ばれている遺跡があり、祖先を祀った寺院だと解説されている。王朝の中心がロリュオスにあった時期に、プリア・コーは王宮ではないか、という意見をクロード・ジャック氏は『Angkor Cities and Temples』（66p）の中で述べている²⁾。

プリア・コーの寺院の配置を見ると、中心区画が方形の濠で囲む区画の東に寄っているのである。アンコール遺跡群に限らず、カンボジアで濠を持つような大きな寺院では、中心区画は方形の濠のほぼ中心で、正面側をすこし長くした場所に位置するのが通常で、東を正面とすると中心区画は全体の区画の中心やや西寄りになる、しかしプリア・コーは中心区画が極端に東に寄っている。濠が囲む方形の区画の西半分ほどがオープンスペースとなる。中心区画がなぜ東に寄っているのか、いくつかの理由が考えられる。

濠を掘った時期が先行し、中心区画を造営した時期が後になる、と想定するのは考えにくい。方形の濠が先にあれば、中心に建物を造るのが自然だからである。中心区画が先行して造営され

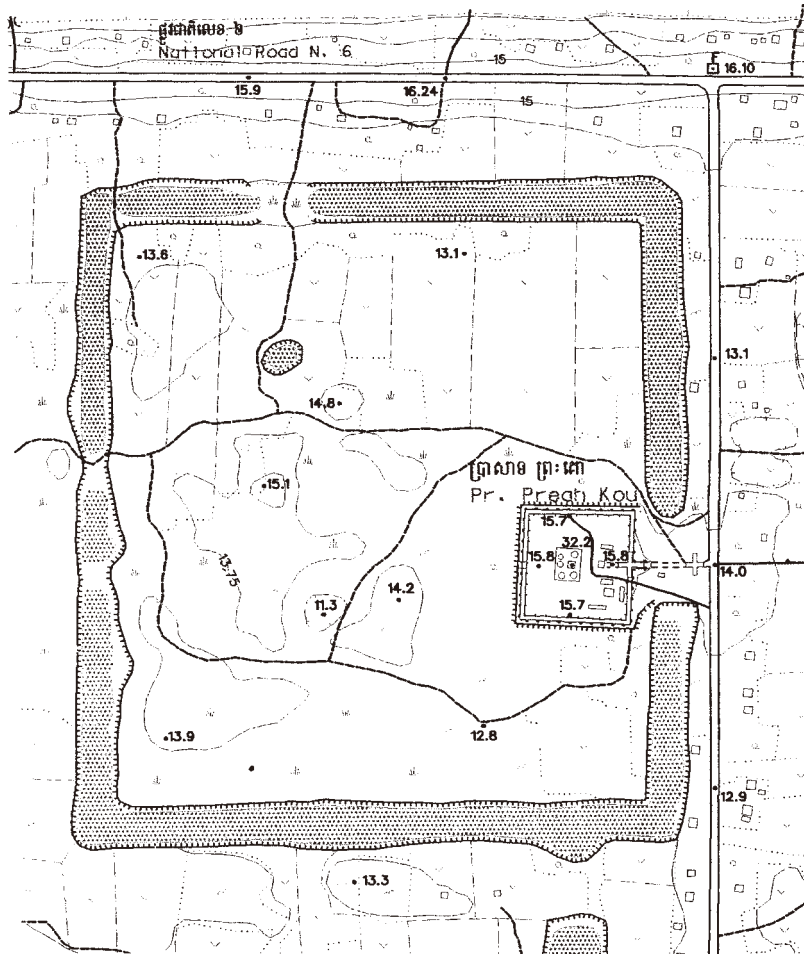


図8 プリア・コー全体図 出典：JICA 作成地図

て、壕がその後造営されたと想定するのが一案である。すなわち現在の中心区画が造営され、その後何らかの理由で、ロリュオス全体の道路計画のようなものがあり、中心区画が他と異なる異例の配置になった、と考える案である。このような事例として、平城京の条坊とずれた伽藍である奈良の海龍王寺がある(図9)。

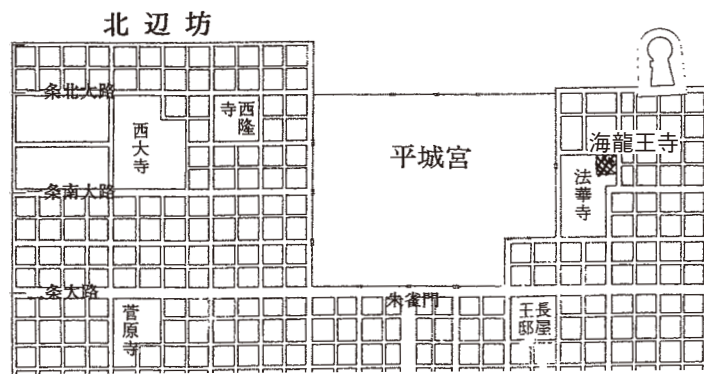


図9 平城京の海龍王寺 出典：『日中古代都城図録』(クバプロ、2002)の図に筆者加筆

があり、平城京の道の造営のときに何らかの理由で寺地を変更できなかったと、考えられている。古墳を削ってでも宮を造営しているほどだから、寺地を動かすことはできないことではないはずである。海龍王寺側に相当の理由があり、政権側もそれを認めざるをえない事情があったとしか考えられない。

プリア・コー寺院で四周する濠と中心区画との時期が違うとすると、ロルオス地区の寺院の造営時期と、都市全体の計画の造営時期との前後関係が問題となる。

第二案として、濠と現存中心区画が同時期とすれば、方形の濠で囲む区画の中央に現在の中心区画とは異なる中心区画を造る計画があったが、着手することなく建設されなかった、と考えることも一案である。この場合、アンコール地域では他に事例がない二つの中心区画を持った寺院となり、これも不思議なこととなる。ただし、日本では法隆寺のように西院伽藍と東院伽藍という二つの中心区画を持つ事例もあるので、二つの中心区画を持つこと自体はあり得ないことではない。

第三案として、現在オープン・スペースとなっている場所に王宮があったとするものである。プリア・コーに王宮があったのでは、という説があることは前述した。この方形の濠の中に、東に寺院、中央に王宮という配置は想定しうる。この王宮の建物はすべて木造建物であったので、王宮が廃絶後に建物群は朽ちて、その結果、中央の一带に顕著な建物の痕跡が現在見いだせない、と考えるのである。中心区画での発掘調査が必要で、その成果によって中心区画が東に寄る理由が明らかになることが期待される。

(2) オープンスペース

バンテアイ・クデイ (図4)、バンテアイ・プレイ (図10)、アンコール・ワット (図11) など多くの寺院には、外周壁と内周壁との間にオープンスペースがある。現状では樹林が覆っていて遺構の確認ができない。バンテアイ・クデイでは2003年から2015年にかけて D11 と呼ぶ建物と北のラテライト周壁との間で発掘調査を行ってきた。その結果この地区には目立った建物はない。ポスト・アンコール時代に属する遺物が出土するので、その時期に人間の営みがあったと推定できるが、アンコール時代には単なるオープンスペースだったのか、と考えざるを得ない。

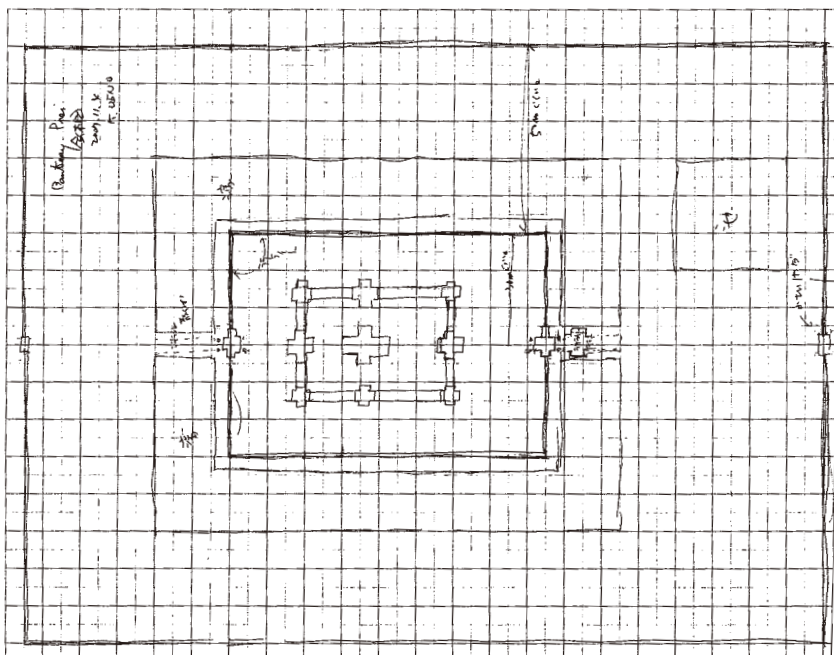


図10 バンテアイ・プレイ
筆者作図

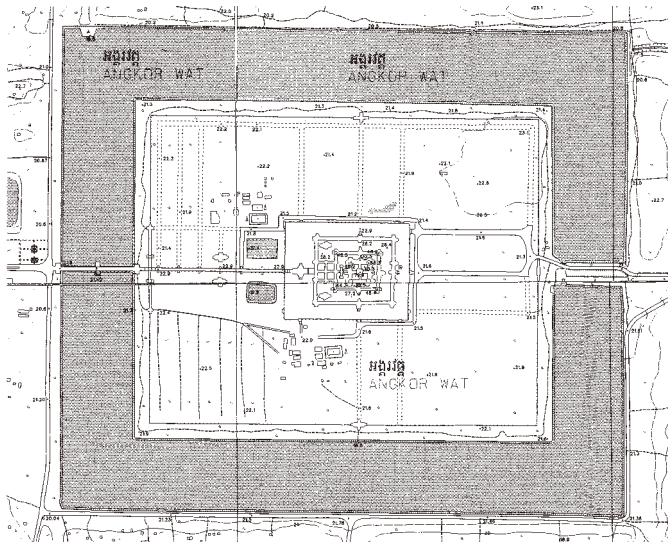


図11 アンコール・ワット全体図 出典：JICA 作成地図

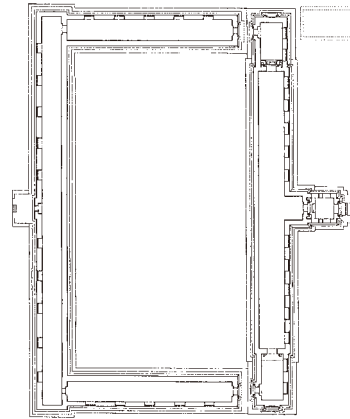


図12 ワット・プー南宮殿
出典：UNESCO、ワット・プー
保存プロジェクト

ベンメリアやタ・ソムでは、外周の濠と中心区画の間にオープン・スペースがある。

本稿は、アンコール地域の建物についての考察が中心であるが、クメール建築は現在のタイやラオスにもあり地域的に広がる。クメール建築でオープンスペースを持つ建物の事例がラオス・タイにあるので取り上げておく。ラオス南部にあるワット・プーに宮殿と呼ぶ建物（図12）があり、廊下状の細長い建物が四辺を囲み、囲まれた中心部分がオープンスペースと考えられる。このワット・プーの宮殿に似た建物がプリア・ヴィハール、プリア・ヴィハール近くのプラサート・ナック・ブオス、コーケルのプラサート・トムの東の二棟、などがある。四辺を囲む建物がすこし違うが、四辺を囲み中央にオープンスペースを持つ建物がプラサート・クナルにもある。

これらの方形建物の廊下状で囲まれた内側のオープンスペースは、機能・意味が不明である。外側から見たとき規模が大きい建物として見えるようにしたのではないかと考えることもできるが、確実ではない。

（3） バンテアイ・サムレのデッドスペース（図13）

回廊の一部は四周を壁で閉じていて入れない。仕切り壁の施工状況から見て造営当初からと考えられる。デッドスペースを設ける事情は不明である。

（4） 王宮の西にあるデッドスペース（図14）

アンコール・トムの北一帯は王宮であったといわれ、その区画の西端に高い壁で囲まれた一画がある。門が見あたらず、四周が壁で閉鎖されていて入れない。機能・意味は不明である。

（5） 小結

「無駄な空間」という考え方や、合理的空間のあり方は近代的な考え方で、こうした近代的な考え方とアンコール時代当時の様相とに齟齬があっても近代以前では問題とはならなかったはず

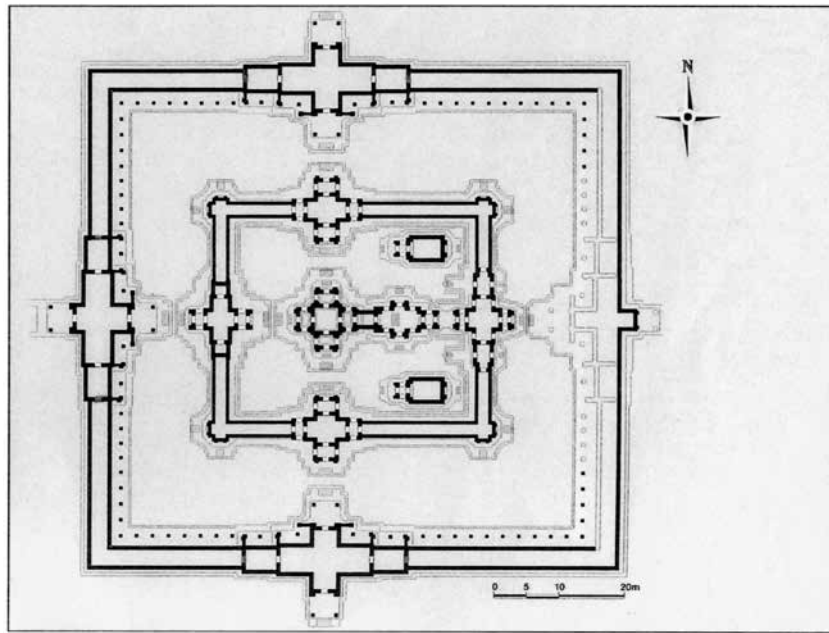


図13 バンテアイ・サムレ中心部 出典：『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）の図に筆者加筆

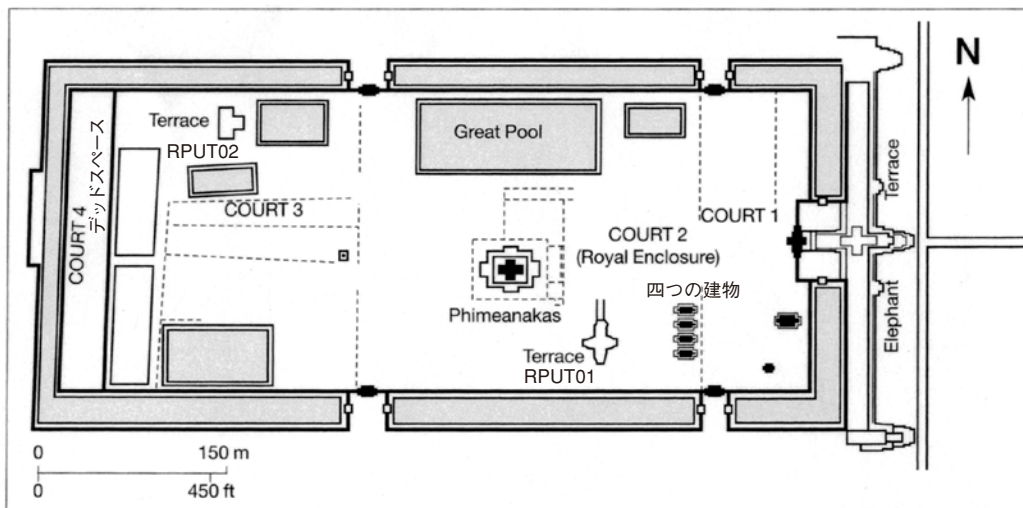


図14 アンコール・トム 北半部全体図 出典：『Angkor and The Khmer Civilization』（Thames & Hudson, 2003）

である。現代風に言えばオープンスペースやデッドスペースということになるが、当時は気にならないスペースで、全体の形や様相を整えるためであれば、そうした空間を設定するのは問題視されなかったであろう。

3 なぞが多い王宮

アンコール遺跡群の中にアンコール・トムという遺跡があり、その中心にあるバイヨン寺院はとくに著名である。アンコール遺跡群を訪問する人は、必ず行く寺院である。バイヨン寺院の北に王宮と呼ばれている区画がある（図14）。ピメアナカス寺院以外には、あまり人は行かない。

この王宮一帯に不可解な遺構が多数ある。

大穴の痕跡、意味不明のテラス、基礎のみが残る遺構などである。順次取り上げて行きたい。王宮内にあるデッドスペースについては前述した。

(1) 王宮に残るいくつかの大穴

(その1) ピメアナカスの基壇に残る大穴 (図15)

ピメアナカスは、王宮のほぼ中央にある遺跡で段状に基壇をたちあげ、最上段に祠堂を建てる。この段状の基壇上面に、多数の大穴を見いだすことができる。

これらの大穴を見ると、まずこの穴に何かを立てて柱状とし、ある構築物を建てたのではないかと考える。ところが、穴の径が60-80cmとあまりにも大きいので、径がそのまま柱径だとすると、太すぎて柱穴かどうか疑わしくなる。柱穴でないとすると、それでは、何のための穴かがさらに謎めいてくる。

柱だとして、まず石柱の場合を考えるが、この径に見合う円形の石は周辺で発見できてない。もし石柱を立てていたなら、他の遺跡と同じようにならず石柱の数個は残る、と考えられる。ところがまったく石柱の破片に相当する石片は発見できないので、石柱が立っていたことは考えられないことになる。ピメアナカスがいったん出来上がったあとに、出来上がった基壇を傷つけずに石を持ち上げる作業は不可能であろう。頂部の祠堂は当初ではなく、最初は木造であった祠堂が、後に現在のような砂岩の祠堂にしたと考えると、作業用の足場が必要で石を運び上げるから相当頑丈な足場が必要となる。この足場のあとが、大穴ではないか、という仮説をたててみる。この場合現存祠堂は二次的であることになる。

いずれの説も弱点がある。大穴の様相は東と西が共通し、南と北も共通し、対面する二辺は共

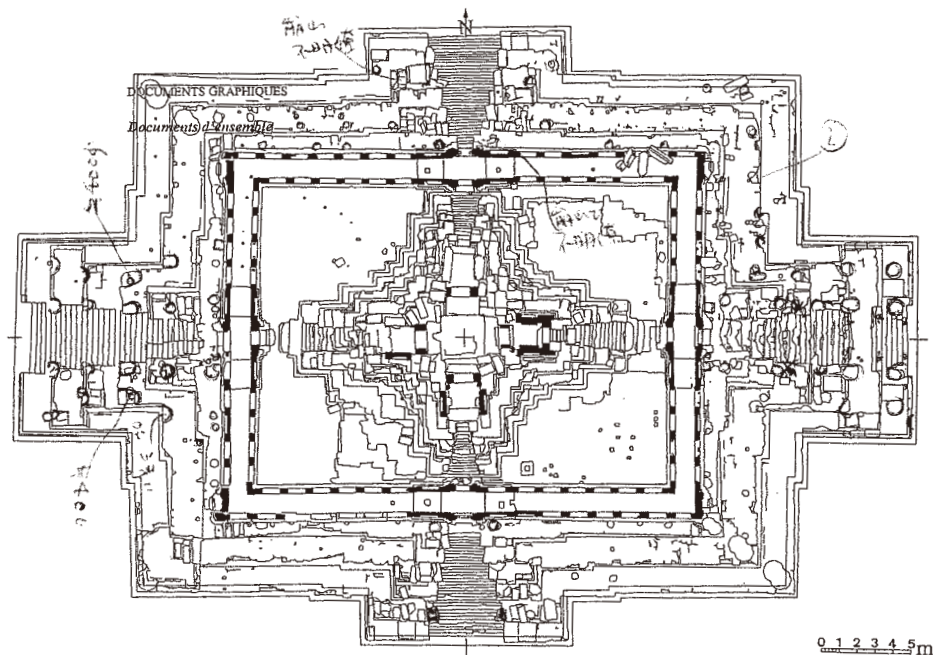


図15 ピメアナカス全体図 出典：EFEO

通するが、直交する二辺は異なる。また、この大穴群が作業用足場であれば一カ所でもよいのではないか、という問題が残る。何かの作業用の足場ということは考えられないことになる。四辺に何か構築物を建てるのは、儀式に際して仮設建物を建てる場合が想定できるが、儀式のときだけのための仮設建物に巨大な柱を用いることは不自然である。ただ、ピメアナカスを荘厳するために壮大な構築物を必要とした、と考えればあり得ないことではない。

(その2) ピメアナカス周辺の大穴

ピメアナカスの北側に、砂岩の建物基礎が見え隠れしている。この基礎を丁寧に見ると、大穴が秩序だって並んでいることが分かる。詳細は未発表だが、ピメアナカスの南側での発掘調査でも大穴を検出している。

ここでも穴の径は60cmほどであり、ピメアナカス基壇の穴にほぼ同じ大きさの穴である。秩序だって並ぶので、ある構築物の柱穴だと考えることができるが、ではどういう構築物かという点と不明としか言えない。

穴が大きいので、柱も穴に相応して大きいと考えると、柱が大きいことは建物も相当大きいと考えなければならない。

(その3) 四つの建物の大穴 (図16)

ピメアナカスの東南100mほどにある四つ並ぶ建物(RPUB01-04とする)が注目される。四つの建物は、東西5m、南北3mほどの主室に2m四方ほどの前室を持つ建物で、とりたてて特徴があるわけではない。しかし、四つの建物の側面に残る大穴が奇妙な痕跡なのである。現存するのは4つだが、もとはさらに左右に同規模の建物が並んでいたかもしれない。この四つの建物について、デュマルセは『ARCHITECTURE and its MODEL in SOUTH-EAST ASIA』(p36)の中で取り上げ³⁾、四つが微妙に大きさが違うことを指摘している。そして、基壇に残る大穴が建物を覆う木造構造物と考えていることを脚注で記述する。

穴の径・形状はいくつかあり、半円形で径70cmのもの、方形で44-55cmなどがある。

基壇脇の大穴は、対面する基壇の大穴と対応する場合と対応しない場合とがある。対応する場合は建物の間に、構築物を造り何かにか利用することが考えられる。しかし、対応しない場合をどう考えるのか。ピメアナカスの基壇上にある大穴が、ピメアナカスを覆うような構築物だったとすると、四つの建物の基壇脇の大穴も建物を覆う構築物だった可能性がある。ただ、こうした小建築を大型の構築物で覆うことはイメージしにくい。結局、大穴は不明のもの、ということになる。

(大穴の考察：まとめ)

ピメアナカス基壇上や、その周辺で見つかる大穴は、秩序だって並んでいるので、ある構築物であったと考えられる。足場穴と考えるには、柱が大きすぎるし、

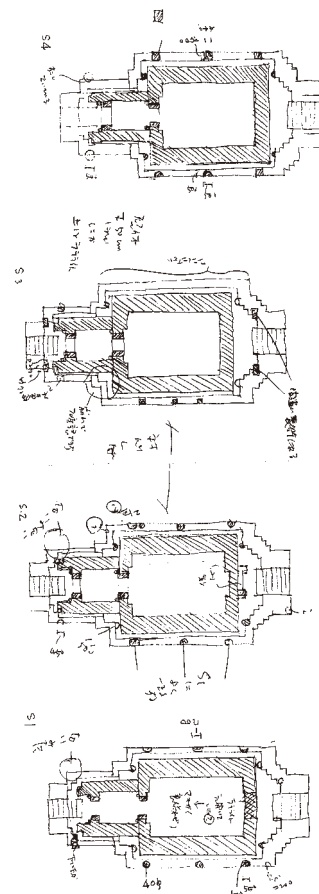


図16 四つの建物の大穴
筆者作図

足場はいわば仮設の構築物だから、巨大な柱を立てることは考えられない。

大穴の中を観察すると、中に何も残っていない。石柱だと意図して撤去しないかぎり、何か残るし近辺に石が散乱するはずである。大穴は柱の大きさを示すのではなく、礎石あるいは基礎を入れて、ほぞを穿って木の柱を立てた、という想定も不可能ではない。この場合でも、礎石や基礎が石であれば、その一部が通常は残る。何一つ残らない、ということは考えにくい。

木製の基礎を入れて、木の柱を立て、その後朽ちて掃除を繰り返すと何も残らないことが起こるかもしれない。しかし、木の場合でも一般的には何も残らないことは考えにくい。破片が散乱しながしかの痕跡が残るものである。

ゆえに、現状で跡形もなく穴のみが残る構造物を想定することが困難なのである。

足場穴や構築物だと、基壇上に均質に穴が残るはずである。ところが前述したようにピメアナカスでは、階段の両側の大穴が顕著で大きく、その他の基壇上面にある穴は階段両脇に比べれば小さい。また、南北二辺と東西二辺とでも穴の様相異なり、東西と南北で構築の仕方が違う構築物を示唆しているかもしれない。

構築物の性格・形状は不明だが、大穴で構築物を建てることを得意とする工人集団がいたのではないかと私は考えている。柱を立てたとして、石柱にせよ、木柱にせよ、未知の構造である。

(2) 王宮内のテラス

王宮の東にある、象のテラス、ライ王のテラスは著名で訪問者が多い。一方、王宮内にありながら誰も訪れない単独のテラスが二カ所ある(図14)。登壇して、どういう行為を行うためだったのかが分からないテラスである。

一つはピメアナカスの南東100mほどにあるしっかりしたテラスで十字形である。RPUT01と呼ぶことにする(図17)。もう一つは、ピメアナカスの西北200mほどの位置で、女の沐浴場という方形池の西にもう一つ小さい方形の池があり、そのさらに西にテラスがある。RPUT02と呼ぶことにする(図18)。鍵形であることが珍しい。

アンコール地域でテラスと言えば、多くは十字形テラスで寺院の主区画へ入っていく手前にある。あるいは仏教テラスと通称され、中心区画の前にある。いずれにしても、崇拜物へのアプローチ途中にある。ところが、RPUT01もRPUT02も単独のテラスであり、何かの前にあるという訳ではない。

RPUT01は、十字形で側面に柱を立てるタイプである。四辺に階段があるが、十字形の形状か

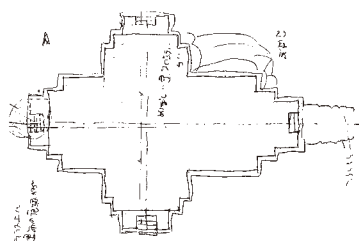


図17 王宮内テラス RPUT01 筆者作図

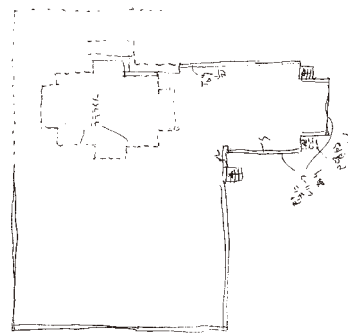


図18 王宮内遺構 RPUT02 筆者作図

ら北が正面となる。上面はほぼ平坦で、祭壇に相当する壇はない。

RPUT02は鍵形で、階段の様相から東が正面で、北西に一段高い壇がある。この北西の壇は低い祭壇であろうか。壇上には、現在何もない。鍵形になったのは改造によるもので、当初は方形か十字形のテラスだったかもしれない。正面中央に階段がなく、西トップ寺院のテラスのように正面両脇から昇る。

RPUT01と RPUT02の二つのテラスは、現況からは当初の持っていた機能を想定することはできない。しかし、造営当初はある機能を持っていたことは充分考えられる。

(3) 王宮の北一帯にあり、基礎部分のみが残る遺構

主要な遺跡や、目につく遺跡の大半は、すでに地図やガイドブックに掲載されている。こうした地図・ガイドブックに出てこない、目立たぬ小さい遺跡がある。目立たぬ小さい遺跡であるのに、私には気になる遺跡が複数あるので、取り上げておく。

ライ王のテラスが北で途切れ、その北にテップ・プラナムと呼ぶテラスがある。テップ・プラナムの南に方形の遺跡がある。方形遺構 RPUX11と呼ぶことにする(図19、20)。南北23mほど、東西24.5mほどで、中央に7.3m四方ほどの方形基壇跡がある。中央の基壇跡や四周する回廊跡に、上部構造にかかわる石材が認められないので、木造の構築物があったと考えられよう。回廊の四辺中央には回廊より幅広い区画があり、四辺に門を設けていた基壇痕跡だろう。この遺構の西に、RPUX11よりも一回り大きい、東西43mほど×南北27mほどの方形遺構があり、RPUX12と呼ぶことにする。この遺構は方形であることが辛うじてわかる程度にしか石列が残るだけである。前述の方形遺構 RPUX11や後述する方形遺構 RPUX13の事例から、ここも木造祠堂の跡ではないかと考えている。さらに、テップ・プラナムの南50mほどのところに直径3m弱の円形で、円周に沿って砂岩を並べる遺構があり、RPUX13と呼ぶことにする(図19、21)。中央の円形遺構を方形の基壇で囲む。この遺構も木造の祠堂の土台と考えられる。方形遺構 RPUX13は、RPUX11

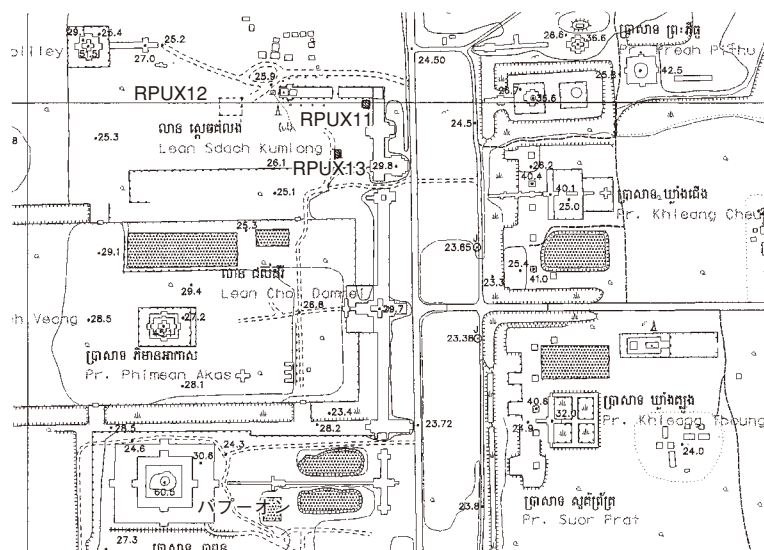


図19 王宮北方の遺構 出典：JICA 作成地図に筆者加筆

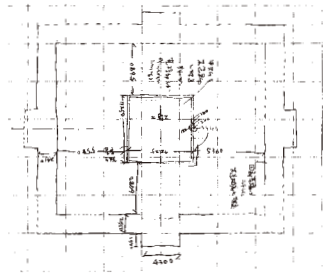


図20 王宮内遺構 RPUX11
筆者作図

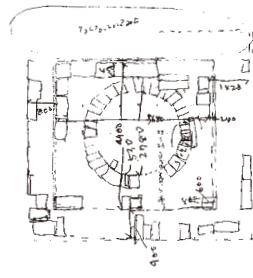


図21 王宮内遺構 RPUX13
筆者作図

の南西40mほどに位置する。5 mほどの方形の囲みの中に径3 mほどの円形の壇状遺構がある。建物の低い基壇と考えられる。RPUX11、RPUX12、RPUX13の三つの遺構が、木造建物の基壇だとすると、この一帯に木造祠堂が少なからず建っていたことになる。この一帯に集中する理由は分からない。私は、アンコール・トムの王宮の北一帯は、プリア・ピトゥの遺構も含めて勘案すると、死者のための鎮魂の空間ではないかと考えている。

4 飾りの参道・テラス

参道は本来、人がアプローチする機能を持っている道である。ところが人がアプローチできない・しない参道があり、このような参道・テラスを「飾りの参道・テラス」と名付けた。参道とテラスは連続していて一体になっていることがあり、分離せずまとめて記述する。

(1) 飾りの参道

バンテアイ・サムレには西側にも参道がある(図22)。参道を持つ寺院は複数あるが、片側にある場合は、いずれも東側にあるのが多数である。バンテアイ・サムレも東に参道をもつが、西にも参道があり、東西両側に参道がある。他に東西に参道があるのはアンコール・ワットやプリア・カーンがある。プリア・カーンの東参道は樹林に覆われて確認できないが、東参道があると考えられ西にも参道がある。東参道の方が長く、中心区画は壕で囲む方形区画のやや西よりになることになる。このように、クメール寺院では東を正面とし中心区画は伽藍全体の方形の中心からやや西より位置するのが多い。アンコール・ワットは西を正面とするので、中心区画は、伽藍全体の中心のやや東よりになる。すなわち、参道が正面・背面と両側にあるときは、中心区画が背面側にすこしずれる分だけ、正面側の参道が長くなる。

バンテアイ・サムレでは現状を観察するかぎり西参道の方が、東参道より長い。環濠や四周する壁は確認できていないが、参道の端を辺とする伽藍全体の方形区画を想定するとしたら、中心区画が東よりになる。前述したように参道の長短を問題にすれば、バンテアイ・サムレは西向きの要素を持っていることになる。ところが、現在のバンテアイ・サムレは東正面である。

さて、バンテアイ・サムレの西参道の西端は東バライの土手に行きあたり、正面から人がアプローチすることができない。東バライが、バンテアイ・サムレより後に掘削されたのであれば、参道がバライの土手で行き止まりとなることは一応説明できる。しかし、東バライの掘削は890年ころとされているから、12世紀前半ころの造営とされるバンテアイ・サムレよりも古い。いわ

ば道が土手でふさがれているのに、参道を造ったことになる。

東バライを掘削する時期に、現バンテアイ・サムレの前身寺院があり、西を正面としていて、その参道を受け継いでいけば、バライに突き当たる西参道が残る、と説明できるが、少なくとも現存する西参道は12世紀前半と見てよく、前身寺院の存在は確認できていない。

チャウサイ・デ・ヴォーダには東に参道がある（図23）。この参道の東端はシエムレップ川である。川に橋を架ければ、参道の線上から参道へ入っていくことができるが、現状を観察するかぎり橋を架けた様子がなく正面からアプローチしたことがない、と考えられる。この東参道は、実際にアプローチするための参道というよりも、寺院の構成要素としての参道、いわば飾りの参道ではないだろうか。とすると、バンテアイ・サムレの西参道の西端が東バライの土手でふさがれていても問題はない。この西参道も、いわば飾りであって人がアプローチできなくてもよいからである。

リングを両側に並べる参道の成立が、何時、どの寺院から始まるのか明確ではない。リングを並べる参道を寺院に設けることが定着すると、相当な規模の寺院では参道を設けることが普通となったはずである。バンテアイ・サムレ西参道やチャウサイ・デ・ヴォーダの東参道は、実際に人が歩むかどうかは問題にならず、形式的に参道を設ける考え方が定着したあとの寺院だろうと私は考えている。

（2）参道・テラスを付加する事例

アンコール遺跡群の寺院には、祠堂やゴープラの前に参道・テラスを設ける例が多くある。しかし、その多くが後補である。

チャウサイ・デ・ヴォーダ（図23）、パパーオン（図19）の参道は後補であり、バンテアイ・クデイでは東の十字テラスと、ゴープラと前柱殿をつなぐテラスも後補である（図4）。バンテアイ・サムレ中心部（図13）の東のテラスも後補である。西トップの仏教テラス（図24）も当初ではなく後補で、正面中央に階段がなく、正面両脇から昇る。西トップ寺院の仏教テラスには柱の痕跡があり、木造建物が建っていたことを示す。付近からは瓦が出土する⁴⁾。

どの寺院が当初から参道・テラスを持つ事例の寺院で、その後、テラスを持つ寺院はどう展開していったのか、は今のところ不明である。仏教テラスといわれるものは、仏教の展開と関わっているように思える。

寺院造営中、祠堂やゴープラが出来上がった後に、参道・テラスを造ることは施工手順として妥当であろう。現存する参道・テラスの多くは、施工の手順による時間差とは考えにくい。当初から参道・テラスを計画していれば、祠堂の正面に階段は造らないだろう。ところが、上に示した事例は祠堂の正面に階段を設けたあとに階段を塞ぐようにテラス・参道を造っている。ゆえに、当初は参道・テラスを造る計画ではなく、祠堂などがいったん出来上がったあとに付加した、と考えざるを得ないのである。

東南アジアの遺跡には増拡という現象がある。いったん造営した構築物・建物を拡大する行為で、その中には前身構築物・建物を覆ってしまう事例がある。アンコール・ワットの西参道とゴープラの接点あたりの石敷面にも増拡しようとした痕跡がある。増拡は、先行者が造営した構築物・建物をより立派に・より大きくするのが一般的である。テラスを付加することは、この増拡

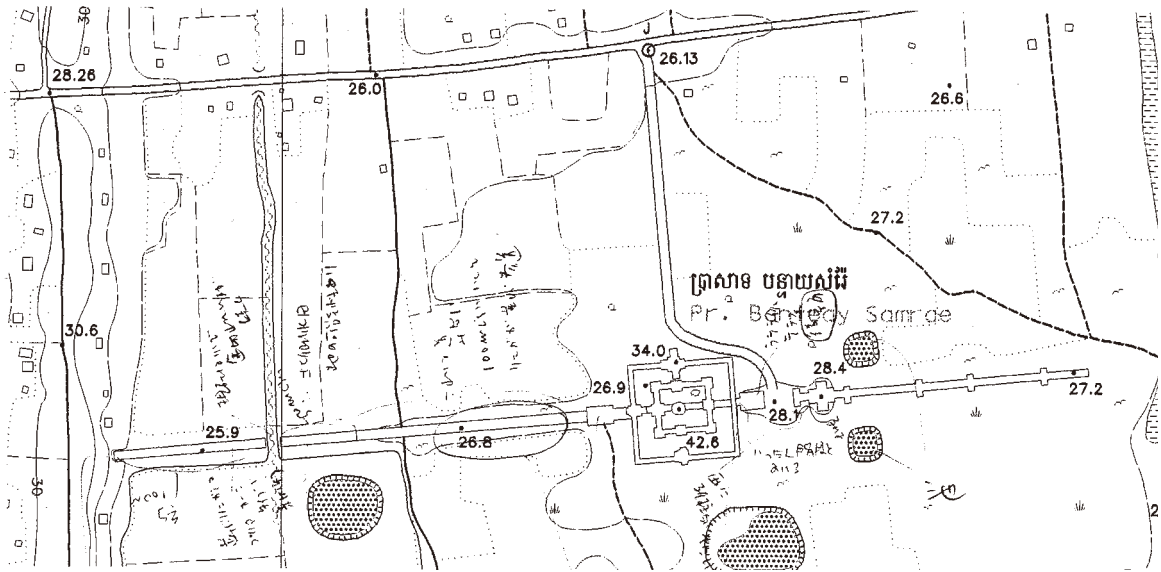


図22 バンテアイ・サムレ全体図 出典：JICA 作成地図

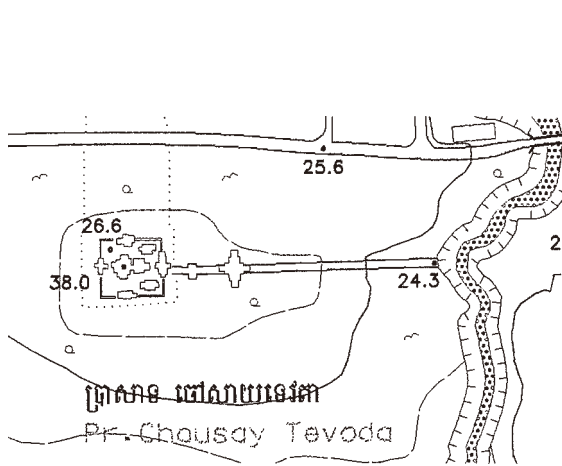


図23 チャウサイ・デ・ヴォーダ全体図
出典：JICA 作成地図

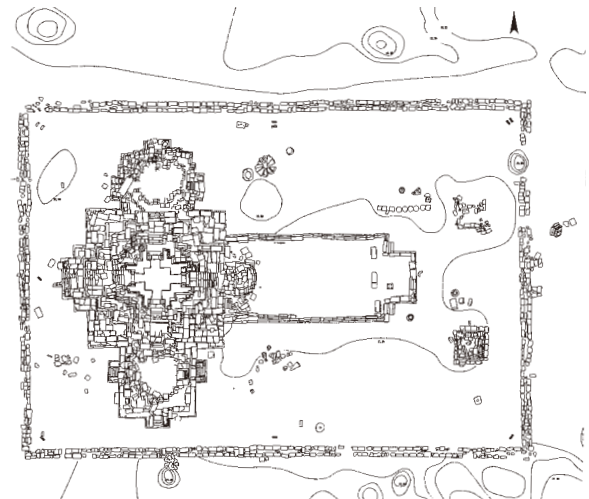


図24 西トップ全体図 出典：『西トップ遺跡調査報告—アンコール文化遺産保護共同研究報告書—』
(奈良文化財研究所、2011)

ではないか、と私は考えている。

5 タ・プロムの93の小建築 (図6・25)

アンコール遺跡群の一つにタ・プロム寺院がある。榕樹の大木が遺跡にまわり付いて、自然と遺跡の取り合わせに人気があり、訪れる人が多い遺跡である。この寺院の中心区画の堀の内側に93棟の小建築が並び建つ。残りが悪く建物と認識できないものも多いが、こうした小建築を数多く並べるのはアンコール遺跡群では他に例がない。

小建築は、長辺6.5m、短辺3mほどの矩形の空間に、前面に二本の柱を立てた平面である。崩壊しているものが大半だが、建物全体の様子が分かるものが数棟ある。これらの小建築の機能は分からない。僧侶が生活する建物、僧侶が瞑想する場、崇拝物を安置する小堂、などが候補と

して考えられるが、決め手がない。

アンコール地域にタ・プロムのように中心区画の周囲に小建築を並べる例が他にないということは、逆にタ・プロム寺院が、他とは異なる役割を担った寺院ではないか、と私は考えるのである。ジャヤヴァルマン七世は、タ・プロムを初め、似通ったバンテアイ・クデイ、プリア・カーンの三寺院を建立している。それぞれ、タ・プロムは王の母のため、プリア・カーンは父のために造営した、と考えられている。死者のためだけの寺院ではなく、それぞれが異なった役割を担って造営されている、と考えられないだろうか。

なお、同じ性格の空間かどうか不明だが、インドのカイラーサナータ寺院（図26）や、パキスタン・タキシラのジョーリアーン寺院、バングラデシュのバハールプル寺院、インドネシアのプナンバナヤプラオサンなどに、中央区画を小空間が囲う事例がある。

6 クロル・ロメアス（図27）

アンコール・トムの北大門をでて北東600mほどのところにクロル・ロメアスと呼ぶ円形遺構がある。幅2.4-3.0mほどの砂岩でできた壁体が直径約50mの円形をなし、中央部はオープンスペースとなっている。丁寧に実測していないので正確な形状は不明だが、円形に近いが真円ではなくすこし歪みがある。壁は二カ所で途切れ、その内一カ所には扉の痕跡がある。二カ所に入出口があったと考えられる。

壁体の内側には、3mほどごとに仕切りがあったことが分かる。壁に柱が立った痕跡があり、木柱を建てた木造の間仕切りと考えられる。柱径は25-30cmほどである。内部に痕跡が認められず、構築物を具体的に想定することはできない。

クロル・ロメアスとは、犀（ロメアス）の飼育舎・飼育場（クロル）という意味で、他に象の飼育舎であったという言い伝えもある、という。この遺跡からは、クメール研究者なら誰でも知っているジャヤヴァルマン七世像が出土している。この彫像が出土するような遺跡でもあるので、単なる動物飼育施設とは考えにくい。また動物を飼育する施設なら円形のプランにする必要はなく方形の建物のほうが構築物を造りやすいはずで、この点からも動物飼育施設とは考えにくい。2.4-3.0mほどの分厚い壁を回す必要性もない。入出口が二カ所あるのも疑問である。

動物飼育施設とは考えにくいだが、犀か象の飼育場としての可能性を検討してみよう。ブリュノ・ダジャンスは著書『アンコール・ワット』の中でクロル・ロメアスは象の調教場であるとい

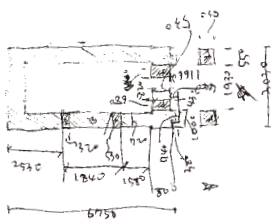


図25 タ・プロムの小建築
筆者作図

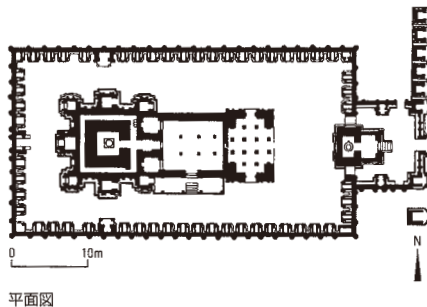


図26 カイラーサナータ寺院 出典：『インド建築案内』（TOTO 出版、1996）

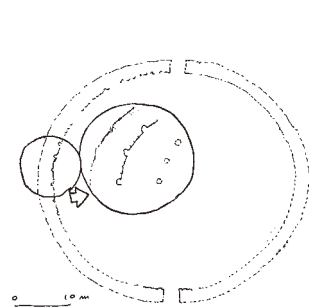


図27 クロル・ロメアス
筆者作図

う見解を示している⁵⁾。(93p) クロル・ロメアスが象の飼育舎とすると想定される木製の一区画が小さく、象よりも小さい動物の飼育舎の方に可能性がある。

アンリ・ムオが19世紀末期にアユタヤにあった象囲いについて記述している。象の飼育舎・調教場ではなく、国王が使う象を選別する行事用である。四辺形の建物で二重の囲いがあると記述する。このアユタヤの象囲いは遺跡として残っている。クロル・ロメアスも、子象を選別するような儀式を行う施設だった可能性はある。

『真臘風土記』⁶⁾ や『島夷誌略』⁷⁾ によると、カンボジアの産物に「犀角」が上がっている。東南アジアには、スマトラサイ、ジャワサイが生息していたので、クロル・ロメアスの名のとおりサイの飼育舎であることを全面的に否定はできない。アンリ・ムオのデッサンにも犀と思われる一枚があり、当時カンボジアにも犀が生息していたことを窺わせる。

正倉院の薬物に犀角があり、また犀角器もある。正倉院に残る犀角は、一角犀で南アジア・東南アジア生息のものである、と考えられている。犀角は現在、漢方薬の一つにもなっている。さて、専門家の御教示によれば、犀角は一度切っても、また生えてくる。ゆえに、アンコール王朝の時代に産物として犀角を得るために多数の犀を飼育していた可能性はある。

クロル・ロメアスは、いろいろな機能・用途を想定させるが決め手はなく、例がない遺構で動物の飼育舎かどうかとも確定しておらず、性格不明の遺構と考えておく方がよい。

7 中心祠堂を持たない建物群

(1) 滝の寺 (図28)

アンコール・ワットから北東50kmほど離れたところにプノム・クーレンと呼ぶ山がある。ジャヤヴァルマン二世が即位し、アンコール王朝を開いたとされる。

この山中には神像や千ともいわれる多数のリングが川底の岩に彫刻され、また近くに滝があって人々の憩いの場にもなっている。この滝の上に、目立たないプラサート・トゥック・テラー寺院があり、日本語訳で「滝の寺」という。寺院の中を川が流れている。最初から川をまたいで伽藍を造営している。伽藍の中を川が流れることは珍しい事例だが、岡山・後楽園の流亭のような事例もあるから、流れを伽藍に意識的に取り込んだのであろう。

クメールの寺院の中心建物は砲弾型の塔状の建物が多く、祠堂と呼ばれている。ところが滝の寺の主祠堂は砲弾型とはならず、見慣れている主祠堂とは異なる。ただ中心にある建物なので主堂ということになるが、木造小屋組を持ち瓦葺建物と考えられる。

主祠堂が木造小屋組を持つ瓦葺建物という事例は、私が管見した限りクメール寺院では他に例がない。

宗教施設ではない可能性があるし、プノム・クーレンの地域性を考慮すべきかもしれない。聖水を管理する施設といったことを考えることができるかもしれない。

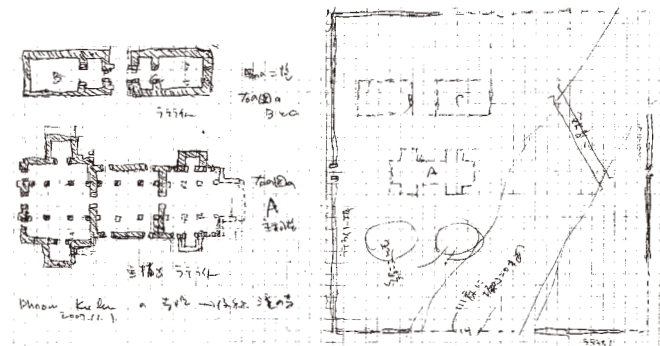


図28 滝の寺 筆者作図

(2) 南クレアン (図29)

アンコール・トムのうち、象のテラスの東に南クレアンと呼ぶ西を正面とする砂岩の建物がある。この建物の東側には顕著な建物はなく、土壇状の盛りあがり十字形に残り、石柱の残骸が散在する。

中心建物が不明確で、崇拜物を安置する装置がないとすれば、南クレアンは宗教施設ではない可能性があることになる。

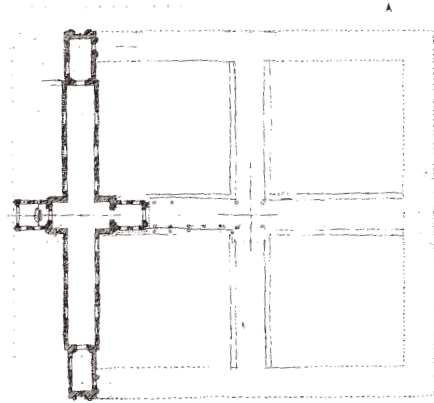


図29 南クレアン 筆者作図

8 小さい門・飾りの門

(1) 小さい門

アンコール遺跡群の中規模以上の寺院では、外の周壁に開く四辺の門は、中心区画に見合う規模のゴープラである。ここで、小さい門と取り上げるのは、中心区画がそこそこの規模を持つのに、外の周壁に開く門が中心区画に比べて極端に小さい門の事例である。少なくとも二例あり、バンテアイ・プレイ (図10) とクロール・コー (図30) の東門である。

プリア・カーンの北に、いくつかの小寺院があり、その内の一つがバンテアイ・プレイであり、クロール・コーである。

バンテアイ・プレイ寺院は東向で、寺域を囲むラテライトの塀があり南北150m、東西175mほどで、方形区画のやや西よりに中心区画がある。全体はさほど大きい寺院ではないが、堂々とした建物群が中心区画を構成する。問題はラテライト塀に開く、東西の門である。門の遺構は残りが悪く、全体を想定しきれないが、小さい門であることは確実であろう。中心区画の大きさや寺域全体の大きさに比べて極端に小さいのである。中心区画が先に造営が進み、東西の門に取りかかるときには造営規模を縮小せざるをえないような、造営事情があったのかもしれない。

同じようなことがクロール・コーにも言える。クロール・コーはバンテアイ・プレイの東2kmほどにある。全体は東向きでラテライトの外周壁で方形の区画を造り、そのほぼ中央に中心区画が

ある。外周壁に東門が開くが極端に小さい。さらに現状では、西と南北には門を認めることができない。

前述、滝の寺も東西門が極端に小さい。

門を小さくする寺院が、他にも多数あるとしたら、資金が枯渇するといった造営の事情ではなく、門を大きくする寺院とは異なった機能を持つ建物群と考えるべきかもしれない。施主の格の違い、王や王族が施主となる寺院は門を大きくし、貴族が施主となる寺院では小さくすると考えるのは一案である。施主の格差ではなく、遺跡が生きていた当時の果たした

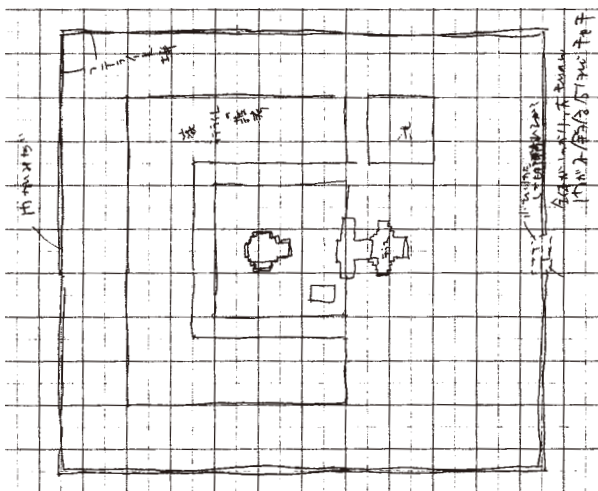


図30 クロール・コー 筆者作図

役割の違いではないか、と考えるのも、一案である。

小さい門の別の事例に、タ・プロムの外周壁に開く北脇門の事例がある。日本風に言えば、この門は穴門ということになる。タ・プロムの北外周壁のほぼ中央にある北ゴープラから東に数mの位置で、壁を一部開けて小さい門としている。ゴープラの両脇に小さい出入り口がある事例は多く、その場合、脇の出入り口はゴープラと一体となった構造である。小さい門がゴープラからすこし離れてある事例は少なく、ゴープラの脇に両脇ではなく門が一つあるだけ、という事例は他に例がなく、珍しい。

(2) 飾り門

「飾り門」と呼ぶことにした門は、建築物としては完成していて、通り抜ける門の機能を持っているが、実際には人などが通ることが想定できない門や、当初から閉鎖していて通行ができない門などである。

アンコール・ワット南北門（図11）や、バコン（図31）の南北門は出入りしなかった門と考えられる。ベンメリアやバンテアイ・チュマールは四方に門を開き、それぞれ壕に橋がかかり参道がある。実際に入入りしたかどうかは不明だが、出入りすることを可能にしている門である。ところが、アンコール・ワットやバコンの南北門は壕に参道がないから、門そのものは出入りできて、実際には使用しなかった門であった、と言える。アンコール・ワットやバコンでは、寺院の四辺に門があるべきものという概念があり、それに則って造営したもので、実際には機能しない、と考えられる。

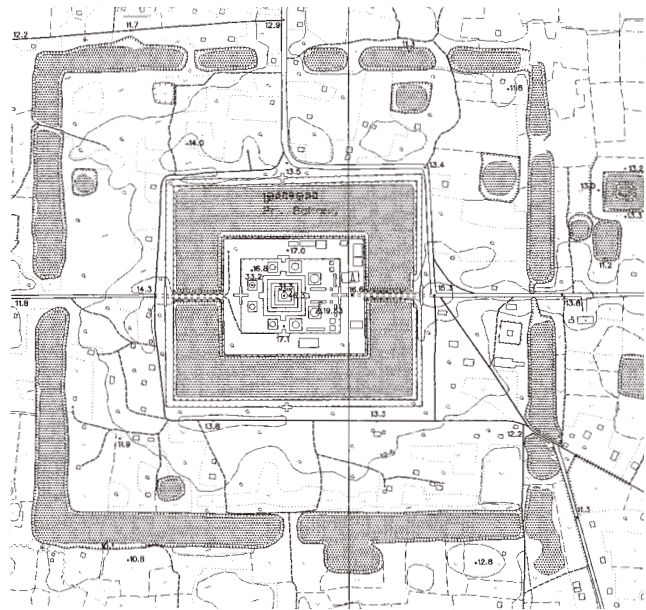


図31 バコン 出典：JICA 作成地図

前述の門と様相は異なるがチャウ・スレイ・ヴィヴォルの東門を取り上げる（図32）。チャウ・スレイ・ヴィボルはアンコール・ワットから東へ17kmほどのところにある遺跡である。この遺跡では東門から中へ入ると砂岩で積んだ壁に突き当たり、中心区画へ直進できない。中心区画全体は東を正面としていて、東門も大きく立派なので伽藍全体も東を正面としている。にもかかわらず、東門から入った後、正面の壁に阻まれて直進できず、中心区画へのアプローチができないのである。中心区画は小高い丘の上であり、東門に入ったあと左右に回ってから進むことになる。

通り抜けできない門の事例にバンテアイ・スレイの中心祠堂背後の門がある（図33）。ただし、門の様相だが祠堂として造営している、というべきかもしれない。

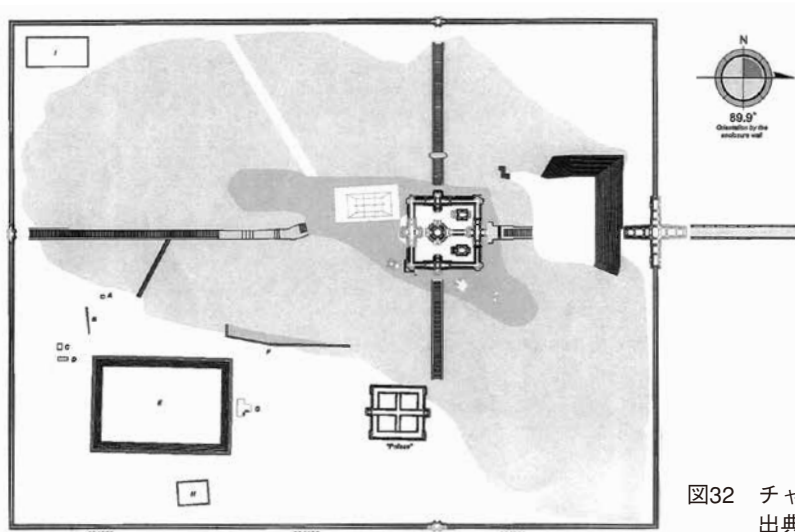


図32 チャウ・スレイ・ヴィヴォル
出典：カンボジア、アプサラ機構提供

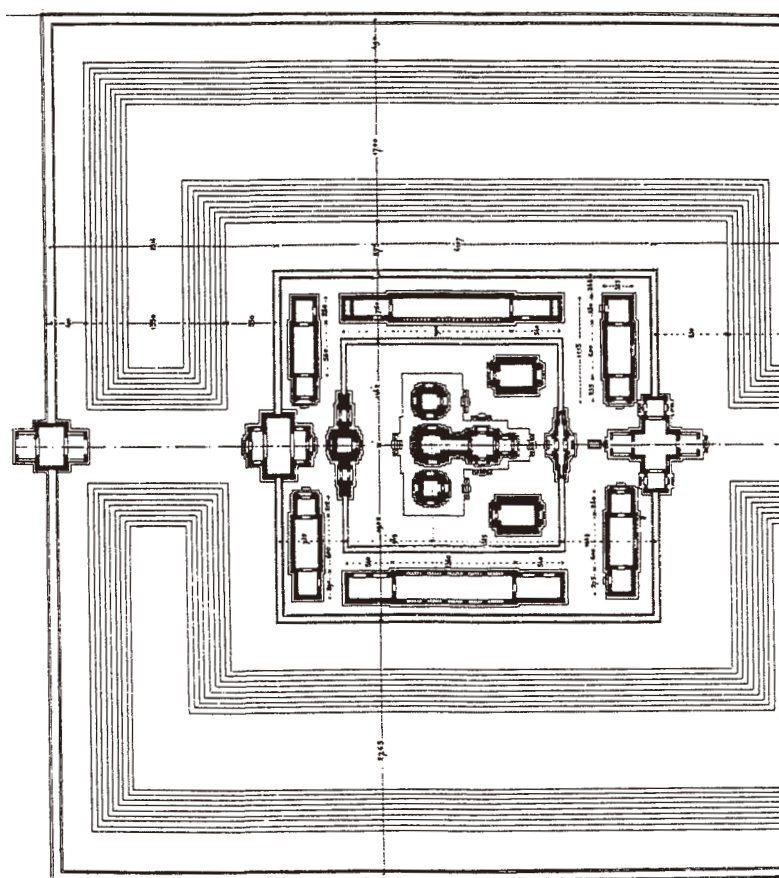


図33 バンテアイ・スレイ中心部 出典：『Le Temple D' Isvarapura』 (EFEO,1926)

9 その他、いくつかの理解できない事柄

(1) 芯をずらす壁

チャウ・サイ・デヴォーダ (図34) やトマノン (図35) のこれまでの建物配置図の多くは、厳密には正確ではない。チャウ・サイ・デヴォーダの南周壁は門の芯と壁の芯とがずれ、壁がすこ

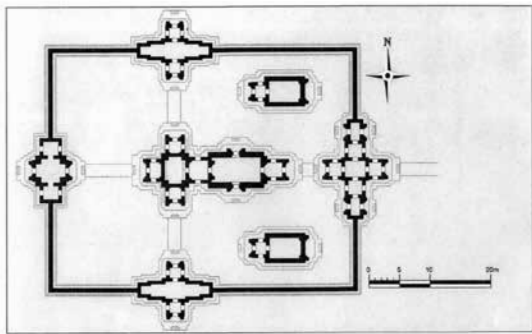


図34 チャウサイ・デ・ヴォーダ中心部
出典：『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）
著者コメント：南周壁の納まりが正しくない。

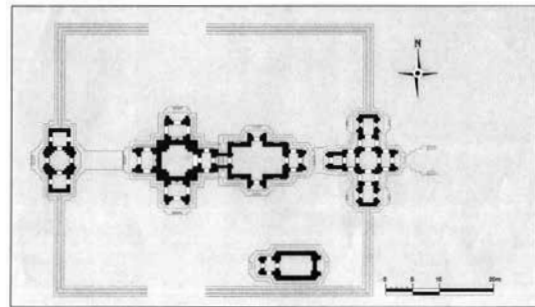


図35 トモノン 出典：『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）
著者コメント：西周壁の納まりが正しい。

し南よりになる。また、トモノンの西門に取り付く西周壁は、南側では門の芯と壁の芯が一致するが、北では芯がずれ、すこし南へ寄っている。ここで指摘した以外では、周壁はすべてゴープラの芯に納まっている。私も図と現存遺構を見比べたことが無かったので、芯に納まると思い込んでいた。現地で丁寧に観察すると微妙なずれに気づく。

アンコール・ワットでは、第三回廊の中央ゴープラの南北にあるゴープラからさらに南北に延びる回廊の長さが違う。すなわち、南側で柱間19間、北側で柱間21間である（図36）。中央区画は、中心ではなく、やや南に寄っていることになる。このように、アンコール遺跡群では、微妙に左右対称でないことが指摘されている。日本でも法隆寺では、西院伽藍の南回廊は中門の左右で長さが違い、中門が中央にないことが分かっている。

私には、理由が分からないが、たとえば東アジアでいう風水思想や、日本にある家相のような考え方がカンボジアにもあり、そうした考えによった結果、微妙にずらすことになったと考えられないだろうか。

（2） アンコール・ワットの中心区画の二種の柱

アンコール・ワットの最上段中心区画を囲む第一回廊の内側は、4区分されたオープンスペースがある。第一回廊からオープンスペース側にポーチ状の出っ張りがある。このポーチ状の先端の柱には二種類ある。八角形柱（厳密には八角の各辺は円弧になっている）と角柱が混在する（図37）。その位置には秩序が見いだせず意味不明である。そもそも意味があるのか、も不明である。中心区画で修復を行ったために二種の柱が存在することになった可能性があり、修復があったとすると、八角形柱が当初で、角柱が後補だろう。

（3） 凸凹の敷石面

アンコール・ワット（図38）やタ・ケウの中段のテラスの敷石面は凸凹が多すぎる。歩かないか、歩くとすると砂を敷いていたのではないかと考えている。参道など歩くところは敷石面の上面はほぼ平滑に仕上げているから、凸凹のままにしてあるということは、通常は人が歩かない場所と判断した方がよいからである。

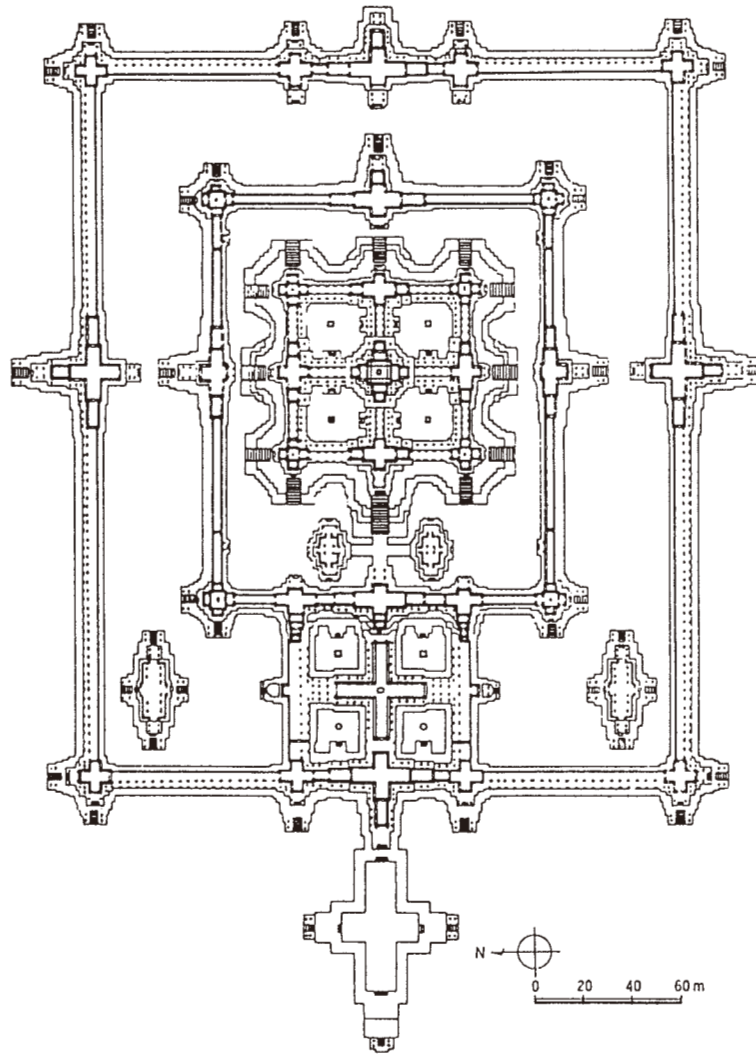


図36 アンコール・ワット中心部 出典：『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』（鹿島出版会、1982）

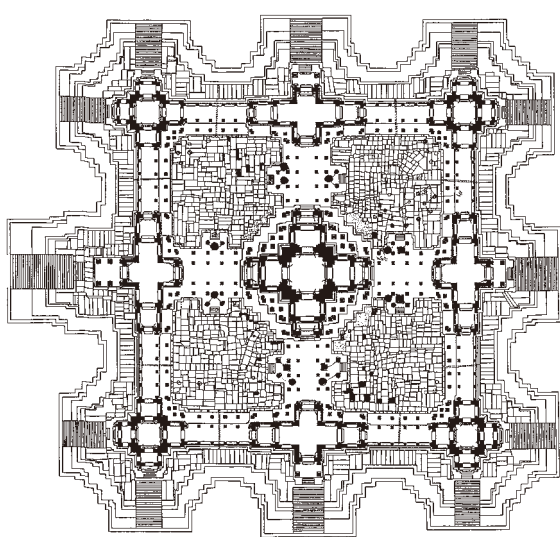


図37 アンコール・ワット最上段の区画
石敷中庭に降りる8カ所の階段で、上段両側の
柱に二種類ある



図38 アンコール・ワット中心部凸凹の敷石面 筆者撮影

二つの寺院を例にあげたが、この事例はもっとあるかもしれない。

(4) 未知の木造建造物の存在

西トップ寺院の仏教テラスには、木造建物が建っていた(図24)。その構造は謎としか言いようがない。澤田知香さんが指摘する⁸⁾ように、アンコール地域には、複数の寺院の基壇上に仮設建物かと考えられる柱穴がり、その多くは木造建物であっただろう。その実体は不明である。

(5) 二つの門

カンボジア、プリア・ヴィヘール州にあるプラサート・クナルは二つの出入り口を持ち(図39)、またコーケル遺跡群のうちプラサート・ベンも二つの出入り口を持つ(図40)。物理的には中央からの出入りではないが、ほぼ中央であり、意識上は中央からの出入りかもしれない。バンテアイ・スレイの中央祠堂背面中央には、門構え風の祠堂を置き、その南北に二つの門がある(図33)。

多くの寺院や宮殿では、中心区画に入る門は一つであるから、二カ所の門をつくることは、何か意味があるにちがいない。なお、奈良県桜井市にある吉備池廃寺は、伽藍中心部に出入りする中門が二つであった可能性があり、もし二つの中門があった寺院だとすると日本では稀有である⁹⁾。

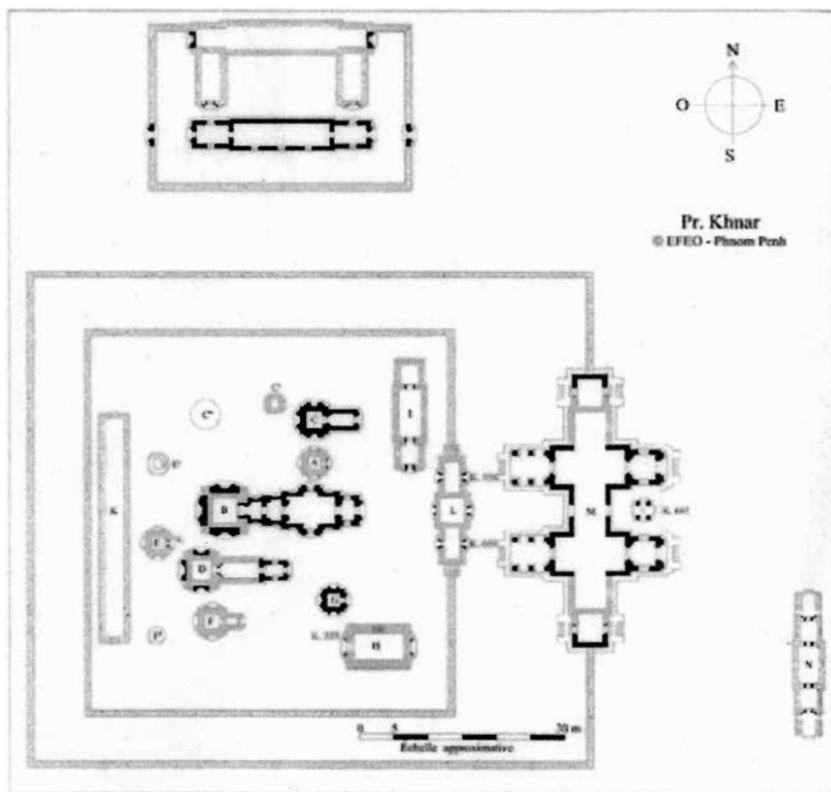


図39 プラサート・クナル 出典：EFEO・CISARK

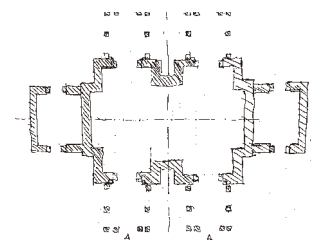


図40 プラサート・ベン、東ゴープラ 筆者作図

10 ポストアンコール期の遺構

ポストアンコール期という用語が、厳密にどの時期を指すのか近年議論が進んでいるが、時期区分を厳密に考察することが本論文の主眼ではないので、おおまかに15世紀中ころ以降として記述を進める。

南クレアン南の北東にあるヴィヘア・プランプル・ロヴェン遺跡の西端に方形土壇があり（図41）、また、バイヨンの北にあるプリア・アン・グウオクの仏像の裏手に方形土壇があり、さらにバイヨン南のワット・プリア・アン・テップの仏像の裏手にも崩れているが方形土壇がある。とすると、ポストアンコールの仏教施設では、テラスを造り奥まって仏像を安置し、その背後に方形土壇を築くのが通例ということになる。

このほか、単独の土壇がいくつか散見できる。バンテアイ・クデイには、BKC19と番号が付されている方形土壇（図42）がある。また、バイヨンの周回道路の脇、東に凸字形の土壇が、東北隅に方形土壇がある。

ヴィヘア・プラノアン・ロヴェンの西端の土壇は、17-18mほどの規模で残りが良い。東に階段跡かとも思われる痕跡があるが、階段があったかどうか不明である。

何らかの祭祀を行う場所と考えるのが妥当ということになる。ケオ・キナルさんは、これらの土壇はストウーパの基壇ではないかと指摘する。今日、ストウーパというと釣鐘型やお椀を伏せたような形をイメージするが、上に述べてきた基壇上には、現在何も残っておらずストウーパといっても木造の構築物ではないか、とも考えられる。ストウーパと呼ぶものの、木造の祠ではないか、と私は考える。木造の小建築であれば、壇上に何の痕跡も残していない状況は首肯できるからである。

バンテアイ・クデイの方形土壇 BKC19は、中心区画の東南100mほどのところにあり、東西4.4

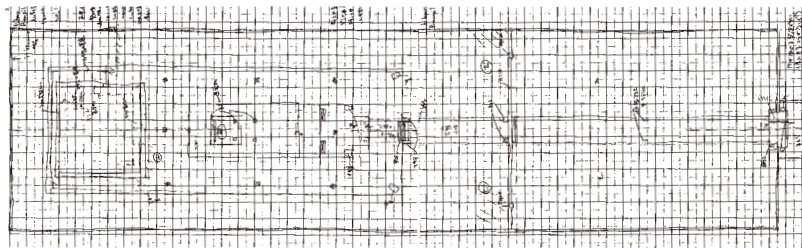


図41 ヴィヘア・プランプル・ロヴェン 筆者作図



図42 バンテアイ・クデイ内の方形土壇 (BKC19)
筆者撮影

m、南北7.3m、高さ2.5mほどである。周囲をラテライトで囲む低い基壇があったかもしれない。

ストゥーパというと、一般的には釣鐘型、半円球の構築物で内部空間がない物をいう。しかし、たとえばラオスのワット・プーではストゥーパと呼ぶ構築物は内部空間を持つ小祠堂とでもいうべき建物である。だから、木造の小祠堂をストゥーパと称して、崇拜する対象としたことはあり得ると考えることができよう。

まとめ

寺院、遺構が古いか・新しいかという時間軸を無視して、気づくことを列挙した。時間や王ごとに整理すると、分かることがあるかもしれないが、筆者の力量を超えている。将来の研究に解明を委ねたい。

偽窓・偽扉、飾りの門・飾りの参道、瓦を模した屋根などを、前身建物の形を受け継いだ結果であり、実体が無く見かけを整える現象として把握すべきだろうか。2節の小結で述べたように近代的・合理的な考え方と齟齬があっても、前近代では問題とはならなかったと考えられよう。現在では不思議で理解できない造型・空間は、全体の形や様相を整えるためであれば、問題にならず採用されたであろう。

謝辞

カンボジアでの遺跡観察は、上智大学アンコール遺跡国際調査団（団長石澤良昭）の一員として参加した現地調査の傍らに実施した。カンボジア滞在の機会を与えていただいた調査団にまず感謝する。故人となったが現地でケオ・キナル氏から多くの示唆を得た、記して感謝する。また、犀の飼育・犀角について、恩賜上野動物園の寺田光宏さんから御教示を得た。記して感謝する。

本稿の主旨は2011.4.9に開催した第52回東南アジア彫刻研究会（肥塚 隆主催、於大阪人間科学大学）で発表した。わたしの報告に対して、参加者から多くの示唆を得た。記して感謝する。

注

- 1) バンテアイ・クデイの遺構番号は『バンテアイ・クデイ建物一覧（案）』（上智大学アンコール遺跡国際調査団、1997）による。
- 2) Claude Jacque and Michael Preeman 『Angkor Cities and Temples』（River Books, 1997）
- 3) Jacques Dumarcay 『ARCHITECTURE and its MODEL in SOUTH-EAST ASIA』（ORCHID PRESS, 2003）
- 4) 『西トップ遺跡調査報告—アンコール文化遺産保護共同研究報告書—』（奈良文化財研究所、2011）
- 5) ブリュノ・ダジャンス 『アンコール・ワット』（創元社、1995）
- 6) 周 達観 『真臘風土記』（和田久徳訳注、平凡社、1989）
- 7) 『島夷誌略』（[zh.wikisource.org/wiki/ 島夷誌略](http://zh.wikisource.org/wiki/島夷誌略)）に寄る。
- 8) 澤田知香 『クメール建築における木造建物の復元的研究—宗教建造物を中心に—』（奈良女子大学博士学位論文、2008）
- 9) 『奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告』（奈良文化財研究所、2003）

参考文献

- アンリ・ムオ 『インドシナ王国遍歴記』（中公文庫、2002）
ブリュノ・ダジャンス 『アンコール・ワットの時代 国のかたち、人々の暮らし』（連合出版、2008）

- 佐藤 桂、中川 武、下田一太「クメール寺院の「宮殿」と呼ばれる付属建物について—カンボジア コーケーに関する研究（Ⅲ）」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』（日本建築学会、2008）
- 石塚光雅、中川 武ほか「チャウ・スレイ・ビボールにみる配置計画に関する一考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』（日本建築学会、2011）
- 島田麻里子、中川 武ほか「アンコールからコンボンスヴァイのプレア・カーンに至る王道沿いに分布する宿駅寺院」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2』（日本建築学会、2011）
- 溝口明則、中川 武監修『Koh Ker and Beng Melea』（名城大学、早稲田大学、2011）

II. 地質学分野

アジア地域の地質から見たアンコール遺跡

東北工業大学名誉教授
盛合禧夫

Geological analysis of the ruins of Angkor in Asia

Tomio MORIAI

Abstract

The ruins of Angkor in Cambodia are on the World Heritage List.

Angkor is highly evaluated as a cultural heritage; furthermore, in the field of architectural engineering, it is a creative masterpiece.

Italy has the most world heritage sites, and in Asia, China and India also have many world heritage sites. Surprisingly, however, Angkor is the most popular tourist destination in the world.

We would like to stress the following geological features in Asia which are related to the construction of the Angkor structures.

1. Geological features of Asia.
2. Geological structures, topography, and fault-and-fold systems in Asia.
3. Earthquakes (seismic activities) and landslides.
4. Built-in features to prevent Angkor weathering.

In Asia, there are two stable places suitable for building such structures as those of Angkor, namely, Indochina and Siberia.

Siberia is very cold with dense forests.

However, Cambodia is warmer, very stable and conveniently located.

Therefore, Cambodia was the best place for building the ancient city of Angkor.

1. はじめに

一般に遺跡のある処は、冬至、夏至、春分、秋分には、遺跡が正面から日の出が見える位置を選ぶとか、地震、水害のない安定している地盤であることなどの自然の恩恵を享受する環境条件を備えていることが多い。カンボジアのアンコール遺跡はこのような条件に適しており、さらに、文化財としても非常に高い評価をうけており、また、建築工学では創造的才能、景観デザイン、文化的伝統、新建築様式を具備した傑作である。

世界の遺跡の中で、一度はぜひ見ておきたいのは、アンコール遺跡が第一位と言われている。世界の遺跡ではイタリアを頂点としており、アジア地域では中国、インドが遺跡の多い中なので、驚く。この理由は、その根底には地球科学的背景が大きく関与しているからである。今回、アンコール遺跡を地質から見直し、検討してみる。



写真-1 アンコール・ワット

2. アジア地域の地質

2-1 アジア地域の分類

アジア地域は(1)北アジア(2)中央アジア(3)西アジア(4)南アジア(5)東アジア(6)東南アジアの6地域に分類されている(図-1)。アンコール遺跡は東南アジアのインドシナ半島に入る。また、アンコールとはサンスクリット語からの言葉で都市を意味する。



図-1 国際連合によるアジア地域の分類

2-2 地質概況

北アジア(シベリア地域)から南へ行くに従って概ね上盤の若い地層が発達している(図-2)。すなわち、北方が古い地盤で、南方が新しい、若い地層が分布する構造である。

シベリア地域では約 38-25 年億前の地層が分布し、その上位に古生代固化地域の 5 億-2.5 億年前の地層とつながり、その南の、チベット高原では中生代固化地域の 2 億年-6 千 5 百万年前の地層が被覆し、さらに、南部のヒマラヤ地域では、大槻(1982)によれば、せん断応力集中の高い地域に入る。ここは中生代-新生代に活動

した造山帯でもある。最南端のインドは Gondwana・プレートの一部であり、北のユーラシア大陸に向かって北進衝突して、ネパール地区を押し上げている。また、以上のシベリア地域から、南、東、東南アジアまで、構造運動によっての山脈、高原、断層、褶曲が各地で見られる。また、その近くには沈降によってできた平原、低地、浅い海、湖沼などが見られる。また、火山も東アジア地域には多いが、ここでは省略する。

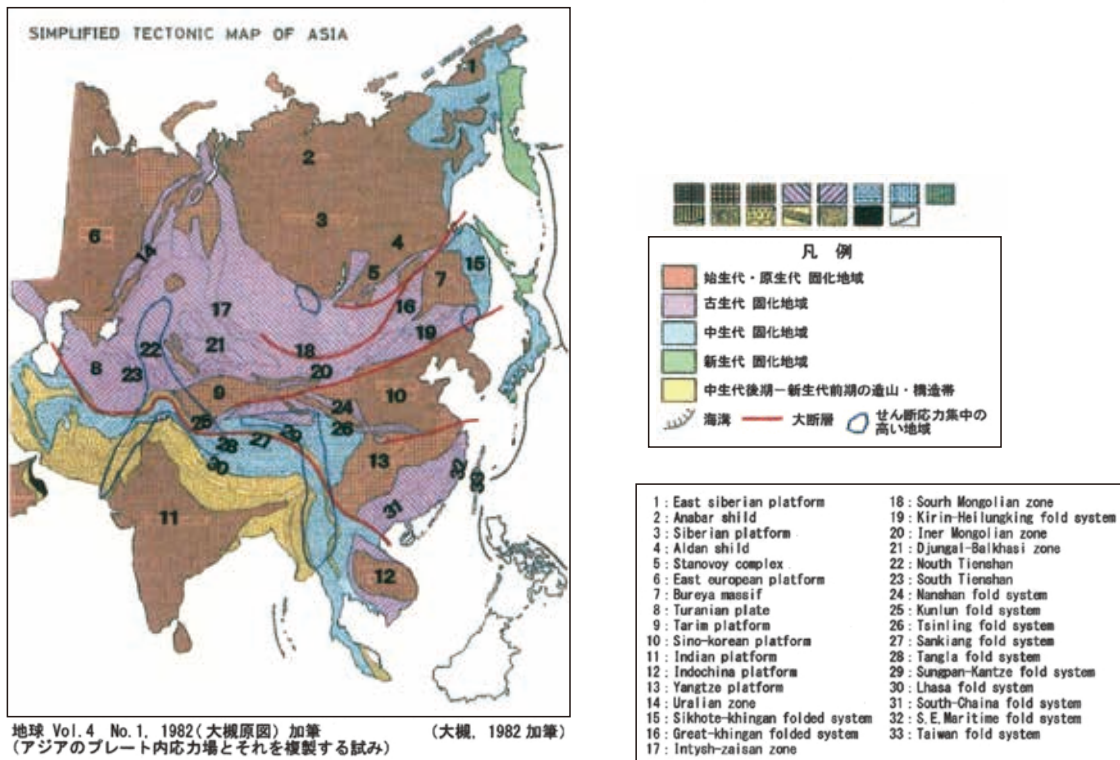
2-3 地質各論

北アジア：先カンブリア界，古・中生界の花崗岩、塩基性、中性貫入岩が分布。

中央アジア：古生代固化地域である。NW 性の大断層、トルクメニスタンには石油、天然ガスが産出。タジキスタンには先カンブリアの基盤岩と中生代、新生代の沈降帯が見られる。

西アジア：ヒマラヤ構造帯で複雑な褶曲、断層帯が発達している。

南アジア：インドが主で、 Gondwana・プレートから分離したもので、カルー植物化石、 Gondwana 植物化石 (Glossopteris、Gonganopteris) を産する。このインドプ



地球 Vol.4 No.1, 1982(大槻原図)加筆 (大槻, 1982 加筆)
(アジアのプレート内応力場とそれを複製する試み)

図-2 アジア地域の構造図

プレートは北東方向に年 5 cm の速度で動いている。また、インドは先カンブリア楕状地とそれを覆う石灰紀-白亜紀層が発達しており、礫岩、砂岩、頁岩、炭層が発達。インド西部には広く、中生代-新生代に噴出した玄武岩質溶岩が分布する。また、ヒマラヤ南部の帯状の低地帯は、沈降帯とされ、2000m の厚さをもつ。ネパールはエベレスト (8848m) があり、アンモナイト、三葉虫、ウミユリの化石が産出され、4-5 億年前にここは海であって隆起して、世界一高い山になったものである。

東アジア：中国 先カンブリア界、古生代、中生代固化地域で、モンゴルは中国と同じ地層であるが東方に新生代が発達していて、褶曲、断層が多い (日本、韓国、北朝鮮も入るが今回は省略する)。

東南アジア：インドシナ半島が大半の地域で、安定している地塊であり、インドプレートの影響も軽微で、多少の押し出しが見られる程度である。硬い先第三系上に薄い第四系が被覆し、その中央にカンボジアのアンコール遺跡が建設されている。

3. アジア地域の構造

3-1 序論

アジア大陸は広大なユーラシア大陸の東半分をしめている (図-3)。さらに、このなかに、さまざまな複雑な地形が認められる (図-4)。これはアジア地域のプレート内の造構造応力場に強く支配されているからである。基本的には、プレートが極めて流動的なアセノスフェアの上に浮かんでいるからである。また、新妻(2009)プレートの動きに関係して、例えば、相転換によって橄欖石がペロブスカイトになり、さらに温度、圧力の変化に対応して、地震災害等の発生にも影響することを指摘している。このように、ユーラシア大陸の内部は多数の大小の断層によって寸断され、全体として、塑性的変形を起こしている。また、このユーラシア大陸は東縁では太平洋、フィリピンプレートと接しており、南縁はインド大陸やアラビアプレートと衝突している。このように、アジア地域は常に異常な地塊の集合帯でもある。

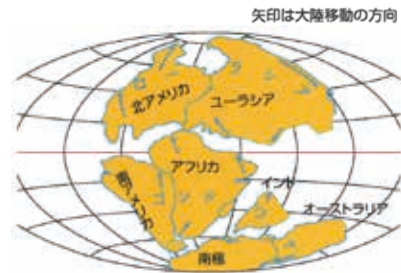


図-3 ユーラシア大陸とゴンドワナ大陸



図-4 アジア地域の全図

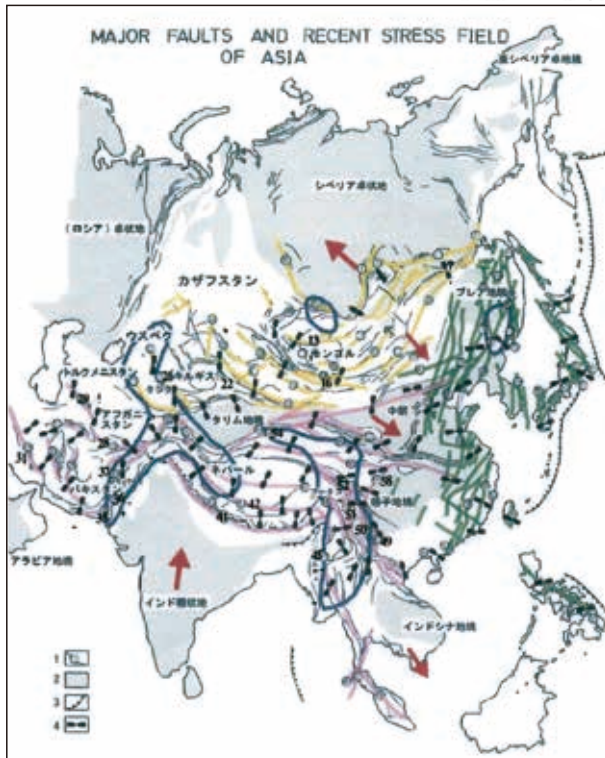
3-2 構造区分

大槻(1982)、Huang(1978)はアジアの地質とプレート内応力場の複製する研究で、アジアの地質を三大区分している (図-5)。1.はモンゴル-天山地域の南に凸の構造形態を示す領域(Pal-Asiatic Tectonic Domain)、2.は太平洋側に沿って北東-北北東に伸びる構造を持つ領域(Marginal Pacific Tectonic Domain)、3.はユーラシアプレート南縁を縁取る構造領域(Tethys-Himalayan Tectonic Domain)。さらに、プレートの移動の時に、ヤング率、ポアソン比をあたえて、せん断応力を算出している。リソスフェアの厚さを一定(80km)にして、ヤング率を 1.8、1.4、1.2、 $1.0 \times 10^{12} \text{dyn/cm}^2$ 、ポアソン比を 0.24、0.25、0.26、0.27 としたものと、ヤング率を 1.5、1.25、 $1.0 \times 10^{12} \text{dyn/cm}^2$ とリソスフェアの厚さを 150、100、70、50km としたものを統合して、せん断応力場を解析している。

また、せん断応力の計算は次式を使っている。せん断応力： τ 、ヤング率： E 、ポアソン比： σ 、剛性率： $G = E/2(1+\sigma)$ 、歪率： $\Delta X/L$ (ずれ： $\Delta X=1\text{km}$ 、厚さ： $L=80\text{km}$)とすると

$$\tau = G * \Delta X/L$$

(大槻, 1982 加筆)



アジアのプレート内応力場と主要断層。1: 断層とその番号。大線の場合は逆断層で、逆断層と横ずれ断層の記号を付してある。2: 起伏地または台地。3: 高層。4: 主圧力軸。

凡例

| | |
|---------------------------------------|---|
| — | Pal-Asiatic Tectonic Domain |
| — | Tethys-Himalayan Tectonic Domain |
| — | Marginal Pacific Tectonic Domain |
| ○ | せん断応力集中中の高い (194.3kg/cm ² ~ 260.3kg/cm ²) 地域 |
| → | 主圧力軸 |

断層と番号名称: ①Northern Uda (Coastal) 断層帯, ②South-Aldan 断層, ③主断層系, ④Muysk 断層系, ⑤

⑥North Baikal 断層系, ⑦Eastern Sayan 断層系, ⑧Pre-Yenisey 断層系, ⑨Lanskiy - Tukuringrskiy - Champulinskiy - Southern Tukuringrskiy Ninni-Sagayanskiy 断層系,

⑩Debugān 断層, ⑪Modonoba 断層, ⑫Deigr 断層, ⑬North Gobi 及び Erendaban (Onon) 断層, ⑭Baingol 断層, ⑮Khangai (-Zhelitira) 断層, ⑯Kandat 断層, ⑰Bayan-Khongor 断層, ⑱Ikhebogda-Undurshila 断層, ⑲Kuznetik-Altai 断層, ⑳Karamelli 断層, ㉑North Margin of Central Tianshan 断層, ㉒Irtish 断層, ㉓Darbut 断層,

㉔Alakol-Dzhungarian 断層, ㉕Chingiz-Dzhungari 断層, ㉖Central Kazakhstan 断層帯, ㉗Main Karatau 断層, ㉘Talasso-Fargana 断層, ㉙South Fergana (Katran) 断層, ㉚Hari Rud (Herat, Gerirud) 断層, ㉛Kopet Dagh 断層, ㉜Great Kavir (Dorunch) 断層,

㉝Zagros Thrust Belt, ㉞Kuh Banan 断層, ㉟Nayband - Sarvestan 断層, ㊱E. & W. Neh 断層, ㊲Ornach-Nah 断層, ㊳Kirithar 断層, ㊴(Quetta)-Chaman 断層, ㊵Pamir Thrust, ㊶Karakoram 断層,

㊷Main Central Thrust, ㊸Main Boundary Fault, ㊹Indus Suture Zone, ㊺Lantsangkiang 断層, ㊻Nukiang 断層, ㊼Shan Scarp, ㊽Kapoe (Ranong) 断層, ㊾Khlong Marui 断層, ㊿Malayan (Bok Bak) 断層,

①Hsiaokiang 断層, ②Anningho 断層, ③Chinshakiang-Red River 断層, ④Kantse-Litang 断層, ⑤Cherchen 断層, ⑥Altyn 断層, ⑦Northern Margin of Taidam-Southern Margin of North Tainling-North Huaiyang 断層, ⑧East Kunlun 断層, ⑨North Nanshan-Northern Margin of North Tainling-North Huaiyang 断層,

⑩Lungmenshan 断層, ⑪Lingshan 断層, ⑫Wuchuan Szechwei 断層, ⑬Heyuan 断層, ⑭Changle-Amoy 断層, ⑮Lishui-Haifeng 断層, ⑯Tancheng-Lukiang 断層, ⑰Taihangshan 断層, ⑱East Tsangchow 断層,

⑲Silamulun 断層, ⑳Northern Margin of Inner Mongolian Axis, ㉑Yalu 断層, ㉒Fushun-Mishan 断層, ㉓Yilan-Yitung 断層, ㉔Khingan-Tastakh 断層, ㉕Kur-Cicha 断層, ㉖Amur 断層, ㉗Central Sikhote-Alin 断層, ㉘Fudisino-Iman 断層, ㉙Sinegorsk 断層,

㉚Daubikhe 断層, ㉛Yangsan 断層, ㉜双猪鼓脊帯, ㉝胡查鼓脊帯, ㉞喀喇崑崙造山線, ㉟糸魚川-静岡構造線, ㊱中央構造線, ㊲長門構造線, ㊳Longitudinal Valley Fault, ㊴Philippine Fault.

図-5 アジア地域の断層と応力場

3-3 河川

アジア地域の河川には多数の河川が発達しているが、主なものは次の通りである(図-6)。大半がチベット高原から流れている。

イラワジ川(エーヤワディ川): ミャンマーの中央部を流れる。全長 2170km。

サルウィン川: チベットを源流とし、雲南省を流れ、ミャンマーのマルタバン湾に注ぐ。全長 2815km。

ソンコイ川(ホン川): 紅河とも呼ばれる。全長 1200km。

メコン川: 東南アジアを流れる川で、東南アジアで最長。全長 4350km。

メナム川(チャオプラヤー川): タイのバンコクを中心として流れる。全長 372km。

ガンジス川: ヒマラヤの南側のインドの北部を流れる大河。全長 2525km。

黄河: 中国の北側を流れ、渤海へ注ぐ。全長 5464km。アジアでは長江、エニセイ川に次ぐ3位。

長江: チベット高原を水源とし、東シナ海へ注ぐ。全長 6300km。世界第三位。最下流部は揚子江と称する。

インダス川; インドを流れる大河。チベットからはじまる。全長 3200km。

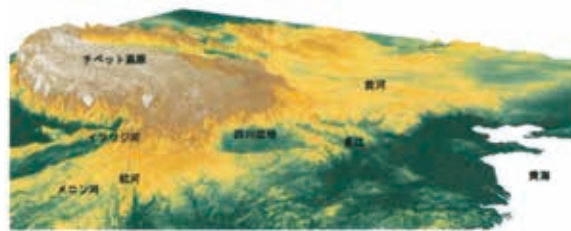


図-6 高原、盆地、河川、海

3-4 山脈、高原、砂漠、盆地、平原、湖、諸島 (図-4)

<山脈>

ヒマラヤ山脈: アジアの山脈で最も標高の高い地域にある。エベレスト(8848m)全長 2400km。

横断山脈: 中国の四川、雲南の西部、チベットの東部にかけての南北に走る山脈で、南はミャンマーの国境にある。平均 3000-

4000mで最高7556m。

クンルン山脈：標高6000mの山脈で、高山が200近くある。全長3000km。

アルタイ山脈：中国、ロシア、モンゴルにまたがる。全長2000km。

ヒンドゥークシュ山脈：アフガニスタンの国内を北東から南西に1200km伸びる山脈で、7000m以上の山がある。

ウラル山脈：ロシアを南北に縦断する山脈で、ユーラシア大陸とヨーロッパを分ける境界線の山脈でもある。

アルポルズ山脈：イランの北部のカスピ海に臨むもので、最高5610mの山がある。

天山山脈：タクマラカン砂漠の北方。カザフスタン、キルギス、中国の国境にある。7000mの山がある。

大シンアンリン山脈：中国、内モンゴル自治区北東部を南北に走る山脈で、長さ約1300km。

ヤプロノウイ山脈：シベリア南部にある山脈で、バイカル湖の東400-500kmにある。約1000km伸びている。

カラコラム山脈：ヒマラヤの一部でもある。このなかに、K-2(8611m)の山がある(Kはカラコラム山脈)。パキスタン、インド、中国の国境にある。

パトカイ山脈：アラカン山脈の北東延長部に当たるもので、インド、ミャンマーにかけての山脈。

アラカン山脈：インドからミャンマーにかけての山脈。最高峰3826m。

ドーナ山脈：ミャンマー南東部タイとの国境を北北西から南南東に走る山脈で、全長200km。

<高原>

シヤン高原：ミャンマーの中部のほぼ全域を占めるもので、アルプス-ヒマラヤ造山帯の一部でもある。

チベット高原：世界一の高原で、平均4500kmの広い平坦地で、周囲には7000-8000mの高山がある。

パミール高原：西アジアの最東端のヒンドゥークシュ山脈にある高原で、平均標高5000mである。

<砂漠>

タクマカン砂漠：タリム盆地の大部分を占めるもので、東にはクムタグ砂漠がある。

ゴビ砂漠：世界第4位の広さ(南北97km東西1600km)を持ちシルクロードの拠点。

カラクム砂漠：トルクメスタンに存在する砂漠で、国土の70-80%を占める。

<盆地>

タリム盆地：内陸盆地で、東西1400km南北550kmの広さを持つ。

四川盆地：中国の西南部で、長江の上流域。面積16万平方、タリム、ジュンガル、ツアイダム盆地と並ぶ中国4大盆地の一つ。

<平原>

ヒンドスタン平原：インド、パキスタン、バングラデシュ、ネパールにまたがる広大な平野。ヒマラヤ山脈の隆起に対しての沈降地形。

<湖、島>

バイカル湖：世界遺産で、水深1634m透明度とも世界一、インドプレートの北進で北東方向の陥没が関係している。南北680km東西40-50kmの大きさを持つ。

青海湖：中国最大の湖。内陸塩水湖。周囲360kmで、世界第2位。

ニコバル諸島、アンダマン諸島：ベンガル湾のインドの島、2004年の震源域がある。

3-5 主な断層帯と褶曲帯(図-5 番号は図上での位置)

ヒマラヤ造山帯：④ Main Boundary Thrust ④ Indus Structure Zone ⑥ Talass o-Fagana 断層 ② Alakol-Dzhungarian 断層 ③ Hari Rud 断層 ⑨ Kopet Dagh ③ Ornach-Nah ③ Kintnar 断層 ③ (Quetta-) Chaman 断層 ③ Zogros Thrust ⑤ Chinshahakiang-Red Rivir Fault ⑤ Lungmenshan ⑤ Kantze-Liang ④ Hsiakiang 断層 ⑤ Anninggho 断層 ④ シヤン高原 Shan Scarp ⑤ Ayn 断層

モンゴル西部：⑬ Khangai ⑬ Ikhebogade-Undurshir

シベリア台地南東縁：⑦ Lanskiy 断層

4. アジア地域の地震災害と地すべり(図-7、8)

4-1 地震帯、地すべり帯

アジア地域の地震は日本を中心として地震、火山活動が多発しているが、このほかにアジア地域はインドプレートがユーラシア大陸と衝突して、頻繁に地震が発生している。一般にプレートが移動するとき、その境界は互いに異なった方向に動くことが多いと言われている。

これまでに述べたように、アジア地域は複雑な構造帯の活動のなかで、断層などの極めて不安定な集合体とも考えられる。

<地震>

南アジアの地震：

(1)パキスタン 1600-1900年 100人以上の死者

(2)インド 1600-1900年 100人-30万人の死者

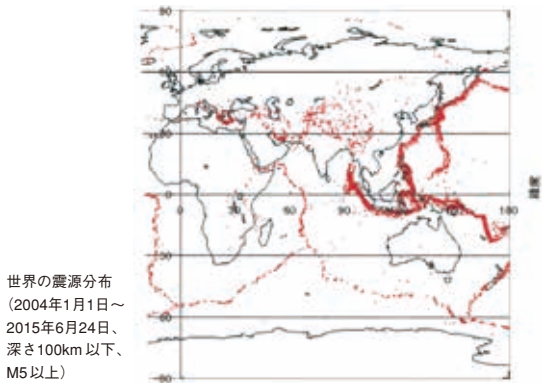
(3)ネパール 1934年1月15日インドで7253人、ネパールで3400人の死者

東南アジアの地震：1600-1987年 100人以上の死者。また、ミャンマーのバガン遺跡の地震災害(2016.8.24)もヒマラヤ造山帯中である。さらに、ミャンマー、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアで発生。

中国の地震：山東、河北、山西、四川、雲南、新疆、西藏で巨大地震が発生。

<地すべり>

中国は70%が山岳地帯で、数10万から100万カ所地すべり危険個所があるといわれている。甘粛省では10数年間に1000カ所あまり地すべりが発生して、2000人以上が死亡している。この中で1983年3月7日のサラサン地すべりが有名である。



世界の震源分布
(2004年1月1日～
2015年6月24日、
深さ100km以下、
M5以上)

図-7 地震分布



図-8 中国の地すべり分布 (中村浩之)

4-2 造山帯

アルプス-ヒマラヤ造山帯(図-7)

アルプス山脈からヒマラヤ山脈を通りインドシナ半島まで伸びているものである。プレートの衝突などで、破壊し、隆起して、褶曲山脈ができた。この隆起に伴って沈降も発生して、浅海や平原地域も形成された。火山も見られるが、アルプス-ヒマラヤ造山帯の火山活動は少ない。アジア地域に関する主な地形はザグロス山脈、イラン高原、アルボルズ山脈、ヒンドゥークシュ山脈、パミール高原、カラコラム山脈、ヒマラヤ山脈、チベット高原、クンルン山脈、横断山脈、パトカイ山脈、アラカン山脈、シヤン高原、ドーナ山脈、マレー半島、ココ諸島、アンダマン諸島、ニコバル諸島である。

5. アンコール遺跡

5-1 アンコール遺跡地域の地質概況

カンボジアはインドシナ台地の一部で後期三疊紀に生じた造山運動による圧密、隆起した大陸地殻の地塊である。また、トンレサップ湖を中心に第四系のラテライト性赤色土が広く分布している。この下部には先古生層、古生層、中生層が発達している。さらにこのなかに、変成岩、花崗岩、流紋岩、安山岩、玄武岩がへい入、貫入している。遺跡はラテライトや先第四系の砂岩(主として中生層)を使用していることが多い。

- アンコール・ワット(1)
- アンコール・トム(2)
- バイヨン(2)
- プンバケン(3)
- 西バイイ(4)
- 西メボン(4)
- 東バイイ(5)
- 東メボン(5)
- プリヤ・カーン(6)
- プレル・ブ(7)
- タ・プロム(8)
- バンテアイ・クテイ(9)
- ニヤック・ポアン(10)
- タ・ソム(11)
- バンテアイ・スレイ(12)
- バンテアイ・サムレ(13)
- ロレイ(14)
- プリア・コー(15)
- バコン(16)
- シェムリアップ(17)
- プラン・クロム(18)
- トンレサップ(19)

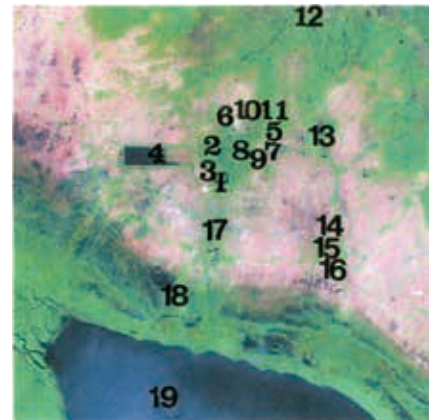


図-9 アンコール遺跡の分布

5-2 生い立ちと遺跡

9C頃から数々主建設が始まる。特に、スーリヤヴァルマン 2 世(1113-1145)とジャヤーヴァル 7 世(1181)であり、とくに、スーリヤヴァルマン 2 世はアンコールワットを建設した。遺跡は 2300 ヶ所中主なものは 60 数ヶ所あり、とくに有名な遺跡は次の通り。

アンコールワット、アンコールトム、バイヨン、プノン・バケン、西バライ、東バライ、東メボン、プリア・カーン、プレループ、タ・プローム、バンテアイ・クディ、ニャック・ポアン、タ・ソム、バンテアイ・スレイ、バンテアイ・サムレ、ロレイ、プリア・コー、バコン、トンレサップ(図-9)。

9 世紀から 14 世紀にかけてのクメール王朝の建設した煉瓦や砂岩で作った石造りの宗教建築である。そして、彫像や浮彫の美しい美術傑作を見せてくれる。アンコール、ワットの高い堂塔(65m)は世界の中心で神々が住むメール山を象徴し、周壁は雄大なヒマラヤ連峰を、環濠は無限の大洋を意味している。しかし、そのあと、シャムの侵攻で、仏領インドシナ連邦の保護国にまで転落してしまう。それで、アンコール遺跡は密林に深く覆われてしまう。しかし、1860 年フランスのアンリームオーによって再発見される。その後は、種々の混乱と困難を経て、今日に至っている。

5-3 カンボジアの地獄時代

フランスの植民地時代(カンボジア、ベトナム、ラオスの三カ国、19 世紀)、シアヌークのカンボジア王国、ロンノル政権(クメールルージュとロンノルとの闘い)ベトナム戦争(1964-1973 年)アメリカの撤退、ポルポトによる民主カンブチアの成立(カンボジアの地獄時代、大量の知識人、技術者の殺戮、約 200 万人の殺人)その後 1990 年統一政権、国連の PKO 活動、1997 年ポルポトの死去などを経て、現在に至る。この困難の歴史の中で遺跡はかなり損傷したと言われる。

5-4 アンコール遺跡の損傷(写真-2)

一般に遺跡の損傷は基本的には地質構造に支配されているが、どうしても避けられない損傷は現実には発生している。例えば、建築構造、生物、暴風の問題である。また、石材の診断は、遺跡と言う貴重なものであるので、自由に採取したり、実験できないので、新共振法を開発して使用したが、今

回は参考文献 13 に記したので、省略する。

地下水、水：地表面から 1-3m のところに存在しており雨期と乾季では 3-4m の上下差があり、そのため地盤に影響が出る(この以下の地下水は省略)。

一般に水を含むと土の強度は低下する。コンシステンシーの限界によるものである。

(水分の含有量によって固体、塑性、液状に変化)また、地表水、地下水は重力の高い位置から低いところに向かって流動するもので、水量が 8 倍になれば流速は 2 倍になり、運搬力は流速の 6 乗に比例する。雨期が 5 月下旬から 10 月下旬の間にスコルで激しい降雨があり、それで、災害が発生する。また、遺跡の仕口(柱と梁の接合部)は長い間の水分、風化、消耗などで、構造全体が緩む。やがて、剛性が低下して、崩壊する。アンコール遺跡の中のバンテアイ・クディ(写真 2-1)の回廊は不同沈下している。柱はほぼ 4 段の石を重ねているが、これが崩壊している。図-10 のように柱の下段の石と上段の石の雨期と乾季ではその値が全く異なる。長時間続くと崩壊するのである。また、図-11 のように約 10 日でもとに戻っている。

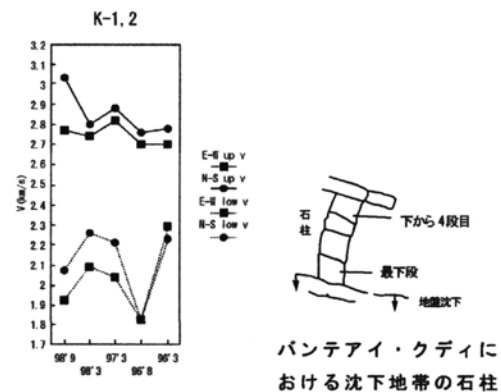


図-10 バンテアイ・クディの石柱の強度変化

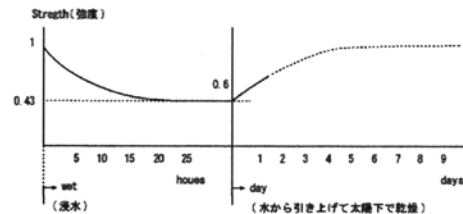


図-11 砂岩の浸水・乾燥による強度変化

石材：砂岩とラテライトである。砂岩は中、古生層で、赤褐色、灰色、淡緑色があり、変質しているものは緑泥石、褐鉄、カオリンなど発生している。砂岩の中の層理、葉理面が風化し破壊の原因を作っている。ラテライトは鉄、アルミニウムに富んだ土壌であるが、石のように硬くなったものを使用している。ラテライトの中の礫が抜けたり、泥土化したりして、強度低下につながる。X線回析では針鉄鉱、赤鉄鉱、カオリン、石英が検出された。

気温の変化：大気温度は季節によって、また、一日の中でも較差がある。岩石を構成している多種の鉱物の熱による膨張率の差が岩石の鱗脱、剥離につながる。

生物の作用：植物の肥大成長によって岩石の割れ目に侵入して、割れ目増大するばかりでなく、根の先端から有機酸を分泌して、岩石を化学的に分解する（写真2-2）。また、遺跡被害の現象として次のようなことでも発生する。

- 1.鳥などの排泄物
- 2.植物
- 3.地衣類、藻類
- 4.微生物、バクテリア、硫黄菌
- 5.水分による（体積増大、干ばつ 可溶性塩類、石材の変質、劣化、地盤沈下）、酸性雨、硬度の違い、荷重、火事
- 6.マイクロクラック、石材の傷、錆び
- 7.観光によるごみ、落書き
- 8.戦争、洗浄、盗難、略奪、政争
- 9.地形的異常、地すべり、傾動
- 10.試料採取、管理施工技術、加工技術
- 11.宗教
- 12.遺跡の他への利用（兵営、倉庫などへの転用）



写真-2-1 パンテアイ・クディの沈下



写真-2-2 樹木による建物の破壊



写真-2-3 ラテライトと含有礫



写真-2-4 ラテライト塊の緩み



写真-2-5 砂岩の層理



写真-2-6 レリーフの溶解



写真-2-7 砂岩の剥離



写真-2-8 石柱の亀裂とクラック

6.まとめ

アンコール遺跡のあるカンボジアは地震、水害のない安定な楯状地で、交通も便利で、気候も良好である。傍にはアルプス・ヒマラヤ造山帯があるが、その影響は殆どない。一般に地質的変動のある処やその影響のありそうな処には文明開化も起こり難い。しかし、そのような地質構造のことを全く知らないで建立したものや、また、知っているても災害防止できると思ってなのか、そのような処に、たくさんの遺跡があるのも事実である。最近、発生した中国の四川省の災害やネパール、ミャンマーの地震災害は、もともと危険地帯としていた処に起こったもので、残念ながら、予想通りであった。古生代のカレドニア、パリスカン造山運動も巨大であったが、中生代後期から新生代前期のアルプス・ヒマラヤ造山運動はもっと強大であったようで、現在も続いている。この活動によって、アジア地域には、たくさんの山脈、高原が出来、さらに、平原、浅い海、湖水などが誕生している。もし、この中に遺跡があつたら当然損傷を受けるはずである。このような過程のなかでカンボジアのアンコール遺跡は、長い間のたくさんの試練を乗り越えて素晴らしい太古の傑作品をみせてくれている。それは、カンボジアはアジアのなかで、常に、最も安定な地盤であったからである。カンボジア外に安定な処はシベリアがある。しかし、

同地は寒いし、8月には降雪もあるし、-73度になることもあると言われる。また、交通も不便である上、タイガと呼ばれる針葉樹が多いので、カンボジアにはとても敵わない。遺跡、遺産には先ず、基本的には地質的環境が優先され、安定した地盤地域が文化財の要因であることが理解できた。アンコール遺跡はこのような好条件を具備した処であった。

参考文献

- 1) 大槻健四郎(1982):アジアのプレート内応力場とそれを複製する試み, 地球 No.3, pp.7-14.
- 2) Moriai, T (1991): Study on the Ground and Stones of the Angkor Monuments, Institute of Asian Cultures, Sophia University, No.4(1991), pp.121-172.
- 3) Moriai, T.(1991): Ground and Groundwater of Banteay Kdei and Prah Khan, Institute of Asian Cultures, Sophia University, No.5(1991), pp.40-60.
- 4) 石沢良昭・河野 靖・盛合禱夫・藤木良明・遠藤宣雄(1991):カンボジアの文化復興(4), 上智大学アジア文化研究所, pp.1~393, 1991.
- 5) 石沢良昭・河野 靖・盛合禱夫・藤木良明・遠藤宣雄(1991):カンボジアの文化復興(5), 上智大学アジア文化研究所, pp.1~633, 1991.
- 6) 盛合禱夫(2000):アンコール遺跡の地質学, 連合出版, pp.1-166.
- 7) 盛合禱夫・松村吉康他(2001);地すべりに関する新共振法による研究, 地すべり, Vol.38, No.1, pp.69-77.
- 8) Moriai, T.(1992): Geological Study on the Angkor Monuments, Institute of Asian Cultures, Sophia University, No.7(1992), pp.138-147.
- 9) 盛合禱夫(1992):アンコール遺跡の地盤及び石材の劣化, 土と基礎, Vol.40, No.1.Ser.No.408 (1992), pp.41-46.
- 10) 石澤良昭(2013):新古代カンボジア研究, 風響社, pp.1-766.
- 11) Huang, T.K (1978): Eclogae Geol.Helv., 71, pp.611~635.
- 12) 盛合禱夫(2016):アンコール遺跡地域のラテライト, Vol.36, 東北工業大学紀要理工学編 人文社会科学編, pp.13-16.
- 13) 盛合禱夫 松村吉康(1999):土、岩石およびコンクリートの診断法—新共振法による計測—, 東北地質調査業協会 40周年記念誌, pp.37-56.
- 14) 新妻信明(2009):日本列島テクトニクスと海洋

沈み込み「プレートテクトニクス」その新展開と日本列島, 共立出版.

- 15) 力武常次(1996):近代世界の災害, 国会資料編纂会.

Ⅲ. 图像学·美术史学分野

クメール寺院建築の尊像配置

—プレア・カン寺院のリンテルに表現された禅定印仏坐像—

日本学術振興会特別研究員 PD

久保真紀子

はじめに

本稿は、筆者が2012年に上智大学に提出した学位請求論文の一部であるとともに、その後に発表した2本の論文（久保 2014、2015）ならびに2015年11月に上智大学で開催された科研「検証 アンコール・ワットへの道」第10回研究会での報告内容を再編成したものである。

プレア・カンは、アンコール朝の最大版図を築いたジャヤヴァルマン7世統治期の寺院複合施設で、1191年頃の創建とされる（図1）。寺院は東を正面とし、東西約800m、南北約700mという大規模な敷地を持つ。同心矩形状に配された4重の周壁の各辺中央部には塔門が配され、一番内側を巡る第1周壁内の中央主祠堂の周囲には、経蔵や副祠堂等、いくつもの施設群が配されている。第2周壁と第3周壁の間の敷地の南側、西側、北側には、いくつかの施設を周壁で取り囲んで形成された副次的伽藍とも呼ぶうる小規模な複合施設が配されている。

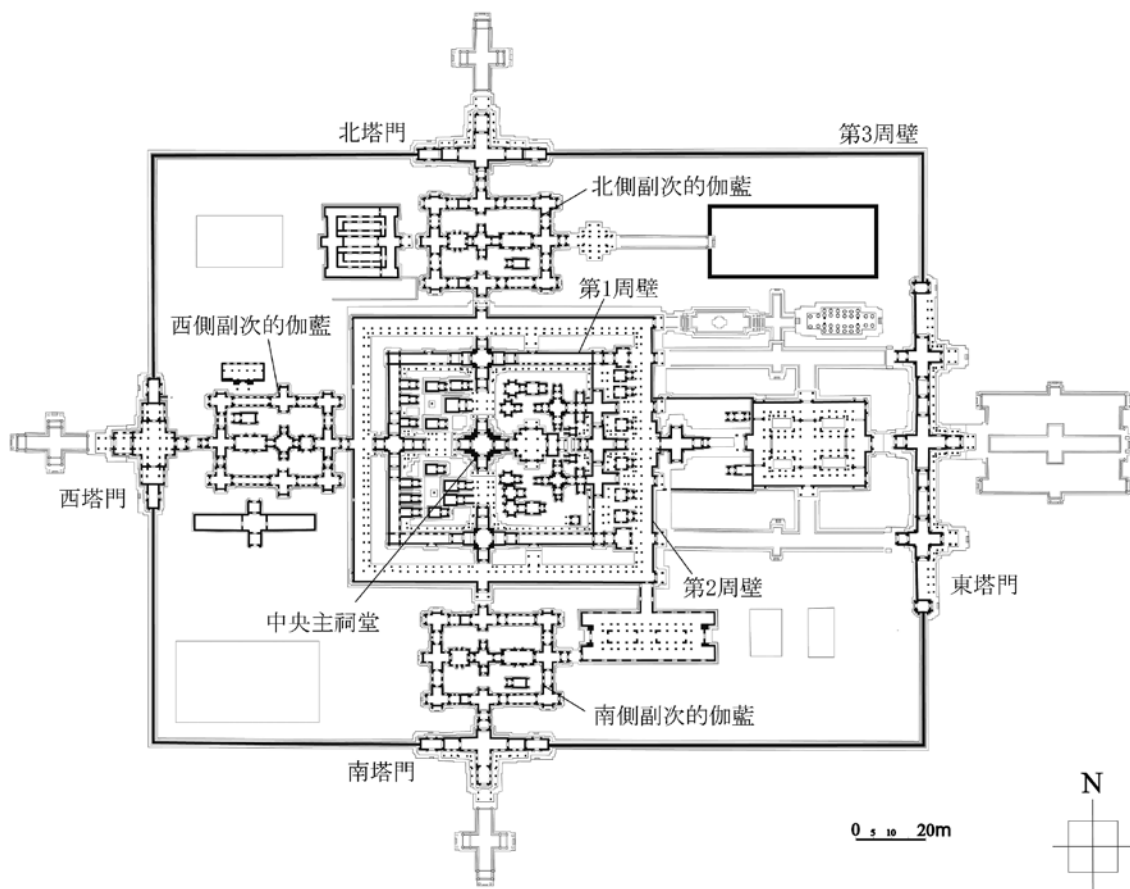


図1 プレア・カン伽藍全体、第3周壁以内（EFO作成図面をもとに筆者が作成および加筆した）

1939年、フランス極東学院による整備作業中に、プレア・カン敷地内から高185cm、幅58cm、奥行58cmの砂岩製の四角柱が発見された。4面にはそれぞれ72行のサンスクリット語碑文が刻まれ、この碑文についてはこれまでにセデスやマクスウェルら碑文研究者が仏語訳や英語訳を発表している¹⁾。また、この碑文には、西暦1191年頃この寺院の中央主祠堂に本尊が安置されたとする記述がみられることから、この寺院の創建年代を記したものとして、プレア・カン創建碑文とも呼ばれる（以下、創建碑文とする）²⁾。

この創建碑文でとくに注目すべき点は、寺院伽藍の特定の場所に特定の尊像を安置したとする尊像配置の記述や、安置した尊像の数に関する記述（史料1）であり、建造者ジャヤヴァルマン7世がこうした尊像配置によって何らかの世界観を表現しようとしたことが分かる。ただし、創建碑文中に登場する尊像名からは、安置された彫像の像容や詳細な配置構成を読み取ることは困難である。本稿では、プレア・カンで確認された諸資料をもとに、この寺院伽藍に実際に表現された尊像配置を類推し、そこに表現されたジャヤヴァルマン7世の宗教的・政治的世界観と、それが寺院建造過程において変容するプロセスについて考察する。

1. 本研究の資料と目的

寺院伽藍内に祀られた尊像を類推するための資料として、寺域で発見された丸彫の彫像、彫像を安置するための台座、出入口枠に刻まれた碑文（以下、出入口枠碑文とする）、そして、出入口構成部材に浮彫された装飾（以下、出入口装飾とする）が考えられる（図2、3、4、5）。筆者は、これまでの現地調査でプレア・カンにおけるこれらの資料を収集し、それぞれの資料について彫像の尊格を類推するにあたっての有用性と限界を検証した。そのうち、祀られた尊格を最も直接的に知りうる資料は、寺院内に祀られた丸彫の彫像である。しかし、伽藍内に安置された彫像のほとんどは遺失しており、遺跡内で確認できるものはごくわずかであるため、彫像から尊像配置を知ることは難しい。そこで、寺院伽藍を構成する各施設の出入口装飾を主要な資料として取り扱い、丸彫の彫像と台座、出入口枠碑文といった諸資料を補足的に用いることで、プレア・カンの尊像配置を推測することにした。出入口に浮彫された図像は、その出入口の室内に安置されたであろう彫像の尊格を表象している可能性があり、間接的であるにせよ網羅的に伽藍全体の尊像配置を類推できる有用な資料と考えられる。

ジャヤヴァルマン7世統治期のクメール寺院建築の出入口は、一般的に、ペディメント、リント、コロネット、ピラスター、出入口枠といった構成部材からなり（図6）、各部材にそれぞれ尊像や説話図といった図像、および花文様や葉文様といったさまざまな文様が浮彫されている。本研究の1つ目の目的は、これら出入口装飾に表された図像の主題を特定し、その配置構成について考察することによって、創建碑文における尊像配置の記述との整合性を検証することとする。

また、プレア・カンの大伽藍は、創建碑文が奉納されたとされる1191年以降も度重なる増改築を繰り返して形成されたことが、美術史や建築史あるいは岩石学の分野における先行研究で指摘

1) Cœdès 1941; Maxwell 2007b

2) マクスウェルはこの碑文のことを“Preah Khan: Foundation stele”や“Preah Khan foundation inscriptions”と表現している（Maxwell 2007b: 2, 13）。



図2 ガネーシャ坐像
(EFEO Archive No.17377)



図3 台座



図4 出入口枠碑文



図5 出入口装飾

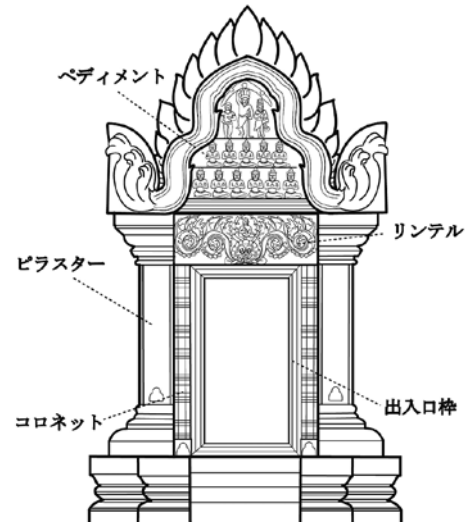


図6 出入口構成部材と名称 (筆者作成)

されている。本研究のもう1つの目的は、出入口構成部材に表されたさまざまな図像や装飾文様を出入口装飾というまとまりの諸要素として捉え、その様式的特徴を類型化し、プレア・カンの寺院伽藍の建造過程を再検証することである。これらの検証によって、本研究では、プレア・カンの寺院創建時と創建以降における尊像配置に込められた象徴的意味の変容およびその歴史的背景を考察する。

2. 出入口装飾の様式的特徴によるプレア・カンの寺院建造過程の再検証

出入口装飾の様式を分類するにあたって、プレア・カンの現地調査で確認された各施設にみられる増改築の痕跡を手掛かりに、出入口装飾の各部位の様式的特徴による類型を時系列に並べ、それら装飾の図像表現や様式の変遷過程を整理した。そのうちペディメントの様式は、この寺院の建造過程を通してほとんど変遷がみられなかった。一方、リントルおよびピラスターには、装飾パターンの様式や、線型の形状や文様の組み合わせにいくつかの類型がみられ、その配置傾向も確認できた。つまり、出入口構成部材の細部意匠は、それぞれ別個にその様式を変化させながら、出入口全体として徐々にその様式が変遷していったと考えられる。

この出入口装飾の様式分類に基づき、プレア・カンの伽藍を構成する各施設の建造時期の前後

関係を整理し、伽藍全体として5つの時期区分を提示した³⁾。この建造時期区分は、美術史⁴⁾や建築史⁵⁾、あるいは岩石学⁶⁾等の先行研究で提示されたものと多少の差異はあるものの、大部分においてほぼ同様の結果を示している。各研究分野における時期区分の差異は、建造過程における採石時期と建造時期、彫刻が施される時期に時差が生じることによるものと考えられる。

3. 創建期の出入口装飾の図像表現とその配置傾向

次に、創建期の伽藍に込められたジャヤヴァルマン7世の世界観について考えるため、プレア・カンの出入口装飾に表された図像の配置傾向を整理する。プレア・カン創建期の伽藍全体を、「伽藍中央部」(第1周壁とその内側の諸施設)、「伽藍東側」(第2周壁東塔門と第3周壁東塔門)、「伽藍南側」(第3周壁南塔門と第3周壁内南側副次的伽藍)、「伽藍西側」(第3周壁西塔門と第3周壁内西側副次的伽藍)、「伽藍北側」(第3周壁北塔門と第3周壁内北側副次的伽藍)および「外周部」(第4周壁の4つの塔門)の6つの区分に分けると、各区域の出入口装飾に表現された主な図像の主題は以下のとおりである。

伽藍中央部(図7～9、図30、付図1)

観音菩薩立像5例、禪定印仏坐像13例、ジャータカ図8例(ヴェッサンタラ・ジャータカ1例、ムーガパッカ・ジャータカ2例、プーリダッタ・ジャータカ2例、シヴィ・ジャータカ1例、シーラーニサンサ・ジャータカ1例、サーマ・ジャータカ1例)。



図7 観音菩薩立像
(第1周壁東塔門リントル)



図8 ムーガパッカ・ジャータカ
(第1周壁南塔門)



図9 ヴェッサンタラ・ジャータカ
(第1周壁西塔門崩落リントル)

3) この出入口装飾の様式分類に基づく時期区分については、筆者の学位請求論文(久保 2012)で詳述しており、その後、2015年7月の日本建築学会東洋建築史小委員会で口頭発表した。本稿では紙幅の都合上その詳細を示すことを控えるが、後日稿を改めて紹介したい。

4) Stern 1965

5) Cunin 2004, 2013

6) クニン・内田 2002

伽藍東側（図10～12、付図2、3）

仏伝図1例（乳粥供養）、ジャータカ図3例（ブーリダッタ・ジャータカ1例、ヴェッサンタラ・ジャータカ2例）、禪定印仏坐像4例、観音菩薩立像1例、般若波羅蜜多菩薩立像1例。

伽藍南側（図13、14、付図4、7）

禪定印菩薩坐像2例、仏伝図1例（降魔成道）、ジャータカ図2例（シヴィ・ジャータカ1例、ムーガパッカ・ジャータカ1例）。

伽藍西側（図15～18、付図5、8）

ヴィシュヌ像6例（ヴィシュヌ立像2例、ガルダに乗るヴィシュヌ2例、アスラを追うヴィシュヌ2例）、ヴィシュヌを中心としたヒンドゥー教の三神像1例、シヴァ像2例（踊るシヴァ1例、放浪者としてのシヴァ1例）、クリシュナ伝説図13例（カーリヤを退治するクリシュナ2例、アリシュタと戦うクリシュナ1例、ケーシと戦うクリシュナ2例、カンサを殺害するクリシュ



図10 乳粥供養
（第2周壁東塔門）



図11 ブーリダッタ・ジャータカ
（第2周壁東塔門）



図12 般若波羅蜜多菩薩立像
（第3周壁東塔門）



図13 シヴィ・ジャータカ
（第3周壁南塔門）



図14 降魔成道
（第3周壁内南側副次の伽藍）

ナ 4 例、ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ 4 例)、『ラーマヤナ』図 5 例 (ラーマとハヌマーンの出会い 1 例、ラーマと猿王スグリーヴァの同盟 1 例、ヴァーリンとスグリーヴァの争い 1 例、アヨーディヤーへの凱旋 1 例)、行者坐像 5 例。

伽藍北側 (図19~23、付図 6、9)

シヴァを中心としたヒンドゥー教の三神像 3 例、シヴァ像 2 例 (踊るシヴァ 2 例)、ヴィシュヌ像 8 例 (ヴィシュヌ坐像 2 例、アナンタに横たわるヴィシュヌ 1 例、アスラを追うヴィシュヌ 2 例、ガルダに乗るヴィシュヌ 2 例、ヴィシュヌの超三界 1 例)、乳海攪拌図 1 例、クリシュナ伝説図 3 例 (ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ 2 例)、『ラーマヤナ』図 11 例 (シーターの誘拐 1 例、ラーマと猿王スグリーヴァの同盟 2 例、ヴァーリンとスグリーヴァの争い 2 例、ヴァーリンを殺すラーマ 1 例、シーターに会うハヌマーン 1 例、インドラジットの魔法で囚われたラーマとラクシュマナ 1 例、ランカー島の闘い 1 例、アヨーディヤーへの凱旋 1 例、シーター



図15 カンサを殺すクリシュナ
(第3周壁西塔門)



図16 カーリヤと戦うクリシュナ
(第3周壁内西側副次的伽藍)



図17 ガルダに乗るヴィシュヌ
(第3周壁内西側副次的伽藍)



図18 ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ
(第3周壁内西側副次的伽藍)

の神明裁判1例)、行者坐像12例。



図19 シヴァを中心としたヒन्दウー教の三神像
(第3周壁内北側副次的伽藍)



図20 踊るシヴァ
(第3周壁内北側副次的伽藍)



図21 アナンタに横たわるヴィシュヌ
(第3周壁内北側副次的伽藍)



図22 シーターに会うハヌマーン
(第3周壁内北側副次的伽藍)

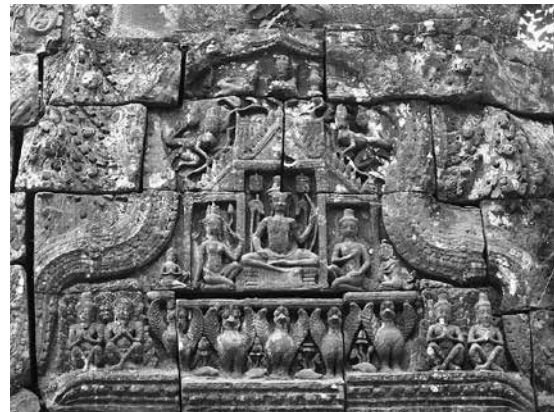


図23 アヨーディーヤへの凱旋
(第3周壁内北側副次的伽藍)

外周部（付図10～13）

観音菩薩立像 4 例、禪定印仏坐像 4 例。

これらの図像の配置傾向と、創建碑文の記述内容から読み取れる尊像配置、および出入口枠碑文に記された尊像名の配置傾向とを比較すると、一定の整合性が確認できる（図24～26）。具体的に、伽藍中央部の出入口装飾では、観音菩薩をはじめとした仏教図像が表されているとともに、出入口枠碑文にはサンスクリット語の複数の語彙のあとにローケーシュヴァラ（観音菩薩、世界

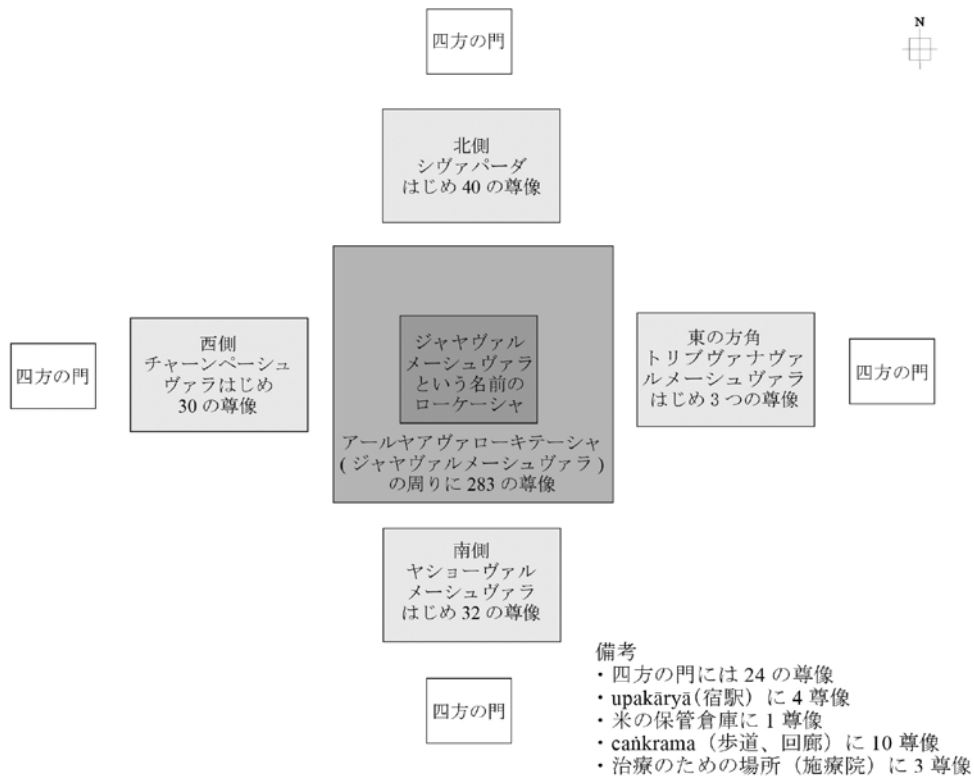


図24 創建碑文の記述内容に基づく尊像配置（筆者作成）

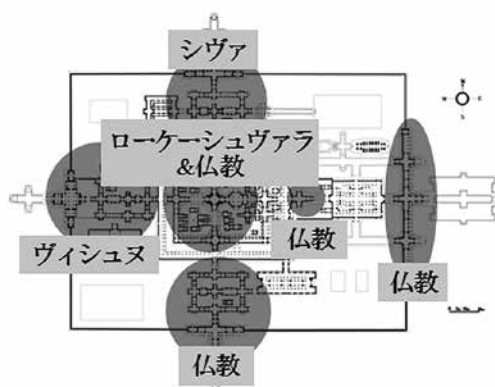


図25 出入口装飾に基づく尊像配置（筆者作成）

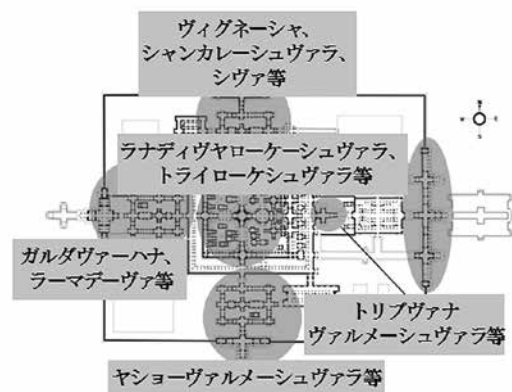


図26 出入口枠碑文に基づく尊像配置（筆者作成）

の支配者) という語尾が組み合わされた尊像名がみられる。伽藍東側と南側では、仏教図像が出入口装飾に表されるとともに、出入口枠碑文にはジャヤヴァルマン7世の先代の王や両親、祖先の名前に由来する尊像名がみられる。伽藍西側では、ヴィシュヌに関する図像が出入口装飾にみられたとともに、ヴィシュヌの乗り物ガルダや、ヴィシュヌの化身の1つであるラーマ等、ヴィシュヌに関連する尊名が出入口枠に刻まれている。そして、伽藍北側には、とくにその中心部においてシヴァに関する図像の浮彫が出入口装飾に多く確認できるとともに、出入口枠碑文にも、シヴァと関連する尊名が確認できる。このように、プレア・カンの伽藍内には、特定の区域に特定の信仰の対象となる尊像が安置された可能性を、出入口装飾の図像表現や碑文の記述内容から類推できる。

4. 創建期と増改築期における出入口装飾に込められた意味の変容

プレア・カンでみられるリントルの様式類型

次に、プレア・カンの建造過程に伴う出入口装飾の様式的特徴および図像表現に込められた意味の変容について考察する。とくに、創建時と創建以降の増築時における変容を検証するため、プレア・カンの第1周壁と周壁内施設群に多くみられる、中央に禪定印仏坐像を浮彫したリントルに着目したい。プレア・カンの第1周壁と周壁内施設群は、回廊状の周壁と、周壁各辺中央にある4つの塔門、周壁の四隅にある隅祠堂、中央主祠堂から四方へ伸びる列柱広間や列柱廊等の主要施設群と、田の字形に区分された4つの敷地内に林立する副祠堂群によって構成される。

ここで、プレア・カンのリントルに表された浮彫の類型を示しておきたい。リントルに表された浮彫について、プレア・カン伽藍全体では3つの類型が確認できる(類型i、ii、iii)。まず、類型iは、リントル中央下部にカーラあるいは植物文様を表し、その上部に葉状龕が配されている。そして、葉状龕からリントル両端に向けて左右に伸びる花綱は、上下に往復しながら伸びている。左右の花綱上には一対の小さな葉状龕を表し、その龕内に仏坐像や供養者像等を浮彫している(図27)。類型iiとiiiのリントルは、中央下部にカーラあるいは植物文様を表し、その上に葉状龕を表す点は類型iのリントルと共通するが、類型iiのリントルは、その左右に下端部で渦を巻く縦長の葉文様が並ぶ(図28)。長い葉文様の内側に、合掌する供養者像等が浮彫されているものもある。類型iiiのリントルには、中央下部のカーラと葉状龕の左右に、大きな渦巻文様と短い葉文様からなる装飾パターンが表されている(図29)。

こうした3つの類型を確認した上で、第1周壁と周壁内施設群でみられる禪定印仏坐像を浮彫したリントルに焦点を当てると、主要施設群で確認されたものには類型iの特徴がみられ、副祠堂群で確認されたものには類型iiiの特徴がみられることが分かった。なお、類型iiのリントルは主要施設群の数箇所を確認できたが、それらの中央にはジャータカ図などが表され、禪定印仏坐像が表されたものはみられなかった。

類型iのリントルに表された禪定印仏坐像は、全体として大きく表され、豊かな装身具を身に着けた姿で表現される(図30)。仏坐像の背後に表された葉状龕は、切れ込みの深い1枚の葉をかたどっており、龕の縁取りは表現されない。類型iiiのリントルに表された禪定印仏坐像は、装身具を身に付けずに簡素な姿で、小さく粗雑に表現されている(図31)。葉状龕は、三葉形アーチ状の縁取りに囲まれ、縁取りの周りに小さな葉模様が連続している。



図27 類型 i のリントル



図28 類型 ii のリントル



図29 類型 iii のリントル



図30 類型 i のリントル中央の禅定印仏坐像

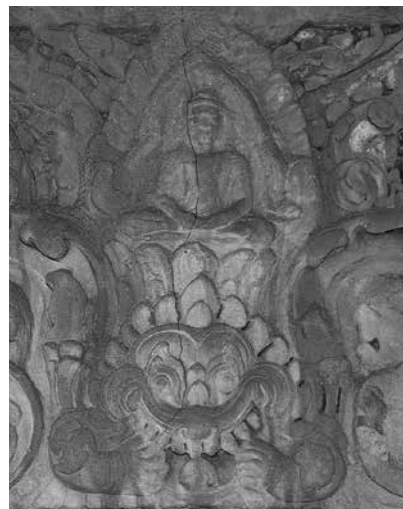


図31 類型 iii のリントル中央の禅定印仏坐像

禪定印仏坐像を浮彫したリントルにみられる差異

プレア・カン創建碑文第35偈には、中央主祠堂に安置された本尊と、その周りに安置された283体の尊像に関する記述があることから（史料1）、第1周壁と周壁内の施設群は、創建碑文が刻まれた時点で、ある程度建造されていたことが推察される。そして、本稿第2章で述べたように、出入口装飾の様式的特徴と第1周壁と周壁内の施設群で確認できる増改築の痕跡からこれら施設群の建造過程を考えた結果、主要施設群と副祠堂群の建造時期に差異があり、5期の建造時期区分の中で、主要施設群は寺院創建期に当たる第1～3期の半ばまでに建造され、副祠堂群は創建以降の増改築期、とくに第3期後半～4期に建造されたことが分かった。つまり、主要施設群にみられる類型iのリントルは、創建碑文が刻まれた時点ですでに制作されており、類型iiiのリントルは、創建碑文が刻まれた後の増改築時に制作されたと考えられる。したがって、類型iと類型iiiの様式や表現の違いは、施設の建造時期およびリントルの制作時期の違いに起因すると考えてよいであろう。

5. 碑文史料からうかがえるプレア・カンの建造意図

禪定印仏坐像のリントルにおける様式的差異が建造時期の差異によって生じたものであるにしても、その背景には、建造時期の差異による建築様式全般の変遷や、時代が異なるごとに職人集団による造作に差異が生じた可能性もまた十分に考えられる。ここではこれらの可能性を十分に認めつつ、寺院建造者ジャヤヴァルマン7世の建造意図が創建期と創建以降の増改築期とで変容した可能性について、創建碑文や出入口枠碑文の記述を読み解きながら検証する。

プレア・カン創建碑文第34偈（史料1）に記されているローケーシャとは「世界の主」という原義を持つサンスクリット語であり、特定の尊格を表す言葉ではないが、碑文の記述内容からは、ジャヤヴァルマン7世の父親の姿をしたローケーシャ像がプレア・カンの伽藍中心、つまり中央主祠堂に安置されたことが読み取れる。また、これに続く第35偈から、このローケーシャは、アヴァローキテーシャ、すなわち観音菩薩⁷⁾でもあることが分かる⁸⁾。こうした記述内容から、中央主祠堂内に安置されたローケーシャ像には、ジャヤヴァルマン7世の父親ダラニンドラヴァルマン2世としての特性と、観音菩薩としての特性が与えられたことが読み取れる。

また、プレア・カンでは、64カ所の出入口枠に古クメール語の短い碑文が確認されており、それらはセデスやマクスウェルによってローマ字表記化および解釈がなされている⁹⁾。主要施設群で確認された14カ所の出入口枠碑文のうち9カ所で、*ṅak sañjak*（ネアック・サンジャク）の冠称を与えられた個人名と、古クメール語で「世界の主」を意味する *kamraten jagat*（カムラターン・ジャガット）という冠称を伴う尊像名が、「形」「姿」「像」を意味するサンスクリット語、*rūpa*（ルーパ）によって繋がれた形式で記載されている。第1周壁東塔門で確認された碑文（史料2）のように、カムラターン・ジャガットの冠称を伴う尊像名には、語尾のローケーシュヴァ

7) 観音菩薩を指す一般的なサンスクリット語は *Avalokiteśvara*（アヴァローキテーシュヴァラ）だが、プレア・カンで発見された創建碑文や出入口枠碑文では、*Avalokiteśa*（アヴァローキテーシャ）や *Lokeśvara*（ローケーシュヴァラ）といった語で言い換えられている。

8) Cœdès 1941: 275; Maxwell 2007b: 34

9) Cœdès 1951; Maxwell 2007a

ラの語と、他のサンスクリット語の語彙を組み合わせたものが多い。ローケーシュヴァラが「観音菩薩」の他、「世界の支配者」の意味を持つことを考えると、これらの尊像名は、観音菩薩を表すと同時に支配者ジャヤヴァルマン7世を表した可能性があり、観音菩薩と王に対する賛辞が暗示されたと解釈できる。そして、その後にはネアック・サンジャクという冠称を伴った人物名が続く。サンジャクは高官を意味することから¹⁰⁾、碑文が刻まれた出入口のある室内に、当時王に仕えていた高官たちの姿を表した尊像が祀られたのかもしれない。そして、王朝直属の高官たちは、カムラテン・ジャガットの冠称を戴く儀式によって尊格化され、その尊像が本尊ローケーシャの周囲に安置されたと思われる。さらに、創建碑文にあるように、本尊ローケーシャにはジャヤヴァルメーシュヴァラ (Jayavarman (n) īśvara → Jayavarmēśvara) という名前が与えられたことから (史料1、第34偈)、先の2つの特性に加えて、ジャヤヴァルマン7世自身としての特性も与えられたと考えられる。高官の特性が与えられた尊像は、ジャヤヴァルマン7世の父親であり観音菩薩であると同時にジャヤヴァルマン7世自身でもある本尊を莊嚴する役割を担い、本尊を取り巻くように安置されたことが推察される。

次に、副祠堂群の出入口枠碑文の多くは、南東敷地内副祠堂5の碑文 (史料3) のように、カムラテン・ジャガットを冠する尊像名が、kamrateñ añ (カムラテン・アン) を冠する名前的一部分と、deva (デーヴァ、「神」の意)、īśvara (イーシュヴァラ、「支配者」「王」の意)、īśvarī (イーシュヴァリー、「王妃」の意) 等の語尾を組み合わせて成り立っている。これらカムラテン・ジャガットの冠称を伴って祀られた人物は、単独で、あるいは両親をはじめとする近親者とともに尊格化され、尊像として礼拝されるようになったと考えられる。セデスによると、10世紀以降の碑文で、カムラテン・アンは尊像のモデルとなった地方領主等、実在の人物の冠称として用いられた¹¹⁾。また、各地方において功績を残した領主がその地方の守護神として尊格化される際に、カムラテン・アンの冠称が与えられたとする解釈もある¹²⁾。カムラテン・アンという冠称の明確な意味についてはさておき、これらの出入口枠碑文の記述は、特定の地方領主 (地方神) がジャヤヴァルマン7世によってアンコールのプレア・カンに集められ、そこで何らかの儀式が執り行われることによって、寺院内に奉納されるに相応しいより上位の尊格となるべく、地方領主 (地方神) にカムラテン・ジャガットの冠称が与えられ、副祠堂内にその尊像が安置されたことを示すのではないだろうか。

尊像を安置することが認められた地方領主とは、戦争で活躍したり儀軌祭礼の資財や人員を提供したりと、当時の王朝に対して何らかの功績を残した人々であったことだろう。地方領主にとって、プレア・カンに尊像を奉納することは、王に対する忠誠を表明することであったとともに、アンコール朝から評価を受けた証として一定のステータス・シンボルでもあったと思われる。一方、王は尊像を寺院内に奉納させることで地方領主をこの寺院に帰属させ、毎年恒例の祭事等の際に定期的に参詣させる足掛かりにしたと考えられる。

これら副祠堂群の出入口に残るリントルには、概して類型 iii の禪定印仏坐像か、それが削り

10) Jenner 2009: 612

11) Cœdès 1951: 98

12) Jacques 1985

取られた痕跡あるいは植物文様のような形に改変されたものがみられた。しかしながら、それら副祠堂群の室内に必ずしも仏教尊像だけが安置されていたとは限らず、ヒンドゥー教の尊像や精霊信仰の尊像等、各地方領主の信仰を表す礼拝対象物が安置された可能性もある。したがって、これら副祠堂群の出入口リントルに施された禪定印仏坐像が、一様に堂内に安置された尊像を表象する役割を担っていたと言い切ることはできない。

このように、中央主祠堂に祀られた本尊ローケーシャ像を取り巻くように地方領主（地方神）を祀る副祠堂が次々と建立されるに伴い、中央主祠堂と副祠堂群の間に中心と周縁の関係が築かれた。中央に祀られたローケーシャ像、すなわち観音菩薩像に対して、類型 iii の禪定印仏坐像はその周縁を飾る従属的な図像としての意味、いわばジャヤヴァルマン7世の信仰する仏教へ帰属する地方領主の象徴として表現された可能性が考えられる。この副祠堂および尊像の奉納は、地方領主が、形式的ではあれ仏教に属することを示すと同時に、地方領主やその祖先を尊格化し、ジャヤヴァルマン7世の支配するアンコール朝と王の信仰する仏教へと統合されることを意味したと考える。

まとめにかえて —ブレア・カンの尊像配置の変遷とジャヤヴァルマン7世の政治戦略—

以上を、ブレア・カン伽藍全体の尊像配置の中で捉えなおしてみたい。中央主祠堂に祀られた本尊ローケーシャには、観音菩薩としての特性、ジャヤヴァルマン7世としての特性、そしてジャヤヴァルマン7世の父親としての特性という3つの特性が込められていた。このような多義的な特性を備えた本尊を中心に、その周囲に安置された多様な信仰に属する彫像群にもまた、王の祖先や、アンコール朝歴代の王、王朝直属の高官、あるいは地方領主やその家族等、個人や祖先の特性が仮託されていたことが、それぞれの出入口枠に刻まれた碑文の解釈によって明らかとなった。つまり、ブレア・カンの伽藍内に奉納された多様な信仰に基づく尊像群は、個人崇拜や祖先崇拜という共通の慣行を基底として結びついているといえよう。創建碑文の第158～160偈によると、ジャワとヤヴァナ（安南）、チャムの王たちが聖水を持ってアンコールで行われた祭礼に定期的に参加していた¹³⁾。この記述から、当時アンコール朝の影響力はマレー半島や、ヴェトナム北部、インドシナ南東の東岸と南岸にまで至っていた様子がうかがえる。このように広大な地域には、おそらく仏教だけでなくヒンドゥー教や精霊信仰等を信仰する人々もいたであろう。

これらを踏まえると、創建時のブレア・カンには、ジャヤヴァルマン7世の影響力が及んだ地域の人々を統治し、アンコール朝の宗教的、政治的中心性を確立するための装置としての役割が与えられていたと考えることができよう。そこでは、彫像に個人や祖先の特性を与えて崇拜する慣行を巧みに利用することによって、1つの寺院内に多様な信仰が混淆する尊像配置が計画されたと思われる。このように創建時には、第1周壁と周壁内施設群で構成された伽藍中央部の空間は、ジャヤヴァルマン7世自身であると同時に、王の父でもある本尊とその周囲に高官が付き従うアンコール朝の中枢部のための空間として計画されたと考えられる。そして、宗教的な枠組みの上では観音菩薩を本尊とする仏教的世界観が表現された。その中央部の空間に地方領主が入り込む余地はなかったであろう。

13) Cœdès 1941: 281-282; Maxwell 2007b: 95-98

しかし創建以降には、伽藍中央部の空間に、地方領主を尊格化した尊像を安置するための副祠堂が中央主祠堂を取り囲むように増築された。そこには、地方領主たちをアンコール朝ならびに王朝が信仰する仏教へと帰属させ、地方勢力を統合しようとするジャヤヴァルマン7世の政治的指向が、創建時の王のそれよりもさらに強まっていったプロセスとして理解できる。

ジャヤヴァルマン7世はその治世に、王都アンコールから遠く離れた地域に寺院建設を通じて地方拠点を築き、王都と地方を結ぶ王道や石橋を整備し、121カ所に宿駅を、102カ所に施療院を設置した¹⁴⁾。その支配領域は、東は南シナ海まで、西は現在のタイ領のミャンマー国境付近まで、南はマレー半島北岸まで、北はタイ中部のスコタイやラオスのビエンチャンまで拡大された。その領土拡大の動きを象徴するかのよう、プレア・カン中央主祠堂周囲には、各地の地方領主（地方神）を祀るための副祠堂が次々と建設された。いわば、この寺院伽藍には、ジャヤヴァルマン7世の統治下で各地の諸勢力が統合されてゆく様相が表現されたと考えられることができよう。なお、プレア・カンよりも少し後に着工されたと考えられる王都の中心寺院バイヨン¹⁵⁾では、中央主祠堂の周りを取り囲む小室群の13カ所に地方領主（地方神）の名前が刻まれている¹⁶⁾。創建以降に副祠堂群を増築して地方領主（地方神）を祀ったプレア・カンとは異なり、バイヨンではその配置計画の段階から、地方領主（地方神）が本尊の周りを取り囲む配置構成が計画された可能性が高い。このバイヨンをはじめとして、ジャヤヴァルマン7世統治期の諸寺院に祀られた地方領主（地方神）については、今後、プレア・カンにおける研究成果を1つの指標として、出入口装飾の図像表現や碑文の記述内容を詳細に比較検討してゆく。それによって、王都アンコールと地方拠点との関係や、諸寺院の間に築かれた関係について考察を深めてゆきたい。

【謝辞】

本研究は、科研費（22・5387）、高梨学術奨励基金（2009年）、みずほ国際交流奨学財団の留学助成を受け実施されたものである。また、現地調査は、カンボジア政府アプサラ機構の許可のもと実施し、調査時には、同機構ならびに上智大学アジア人材養成研究センターからご助言やご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

注：本稿の挿図ならびに付図のうち、注記のないものはすべて筆者自身が撮影・作成したものである。

【主要参考文献】

- Cœdès, George. 1941. "La stèle du Preah Khan d'Angkor." *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 41(2): 55-302.
- . 1951. "L'épigraphie des monuments de Jayavarman VII." *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 44(1): 97-120.
- Cunin, Olivier. 2004. "De Ta Prohm au Bayon, Analyse comparative de l'histoire architecturale des principaux monuments du style du Bayon." Doctorat de l'Institut National Polytechnique de Lorraine.

14) 石澤・三輪 2014: 79-81

15) クニン・内田 2002: 218

16) Maxwell 2007a: 95

- . 2013. “A Study of wooden structures: Contribution to the architectural history of the Bayon Style Monuments.” In *Materializing Southeast Asia’s Past: proceedings of the EurASEAA 12* Volume 2, edited by Marijke J. Klokke and Veronique Degroot. 82-107, Singapore: NUS Press (The conference of the EurASEAA 12 was held in 2008 and this paper was originally presented in a conference at the School of Geosciences, Department of Archaeology, University of Sydney in 2006).
- Ecole Française d’Extrême-Orient. “Preah Khan.” *Rapports de la Conservation d’Angkor*.
- Hawixbrock, Christine. 1989. *L’iconographie du Prah Khan d’Angkor*. Paris, Mémoire dactylographié de DEA. Université de Paris III (Unpublished).
- Jacques, Claude. 1985. “The Kamraten Jagat in Ancient Cambodia.” In *Indus Valley to Mekong Delta: Explorations in Epigraphy*, edited by Noboru Karashima, 269-286. Madras: New Era Publications.
- Jenner, Phillip N. 2009. *A Dictionary of Angkorian Khmer*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Maxwell, Thomas S. 2007a. “The Short Inscriptions of the Bayon and Contemporary Temples.” In *Bayon: New Perspectives*, edited by Joice Clark, 122-135. Bangkok: River Books.
- . 2007b. “The Stele Inscription of Preah Khan, Angkor Text with Translation and Commentary.” *Udaya* 8. Phnom Penh: 1-113.
- Roveda, Vittorio. 2005. *Images of the Gods: Khmer Mythology in Cambodia, Laos & Thailand*, Bangkok: Riverbooks.
- Stern, Philippe. 1965. *Les monuments Khmers du style du Bayon et Jayavarman VII*. Paris: Presse de Université de France.
- 石澤良昭・三輪悟. 2014. 『カンボジア密林の五代遺跡』 連合出版.
- クニン、オリヴィエ・内田悦生. 2002. 「バイヨン様式建造物の建築史構築における砂岩帯磁率の寄与」『アンコール遺跡調査報告書2002』 日本国政府アンコール遺跡救済チーム [JSA]. 197-223.
- 久保真紀子. 2012. 「アンコールのプレア・カーンにおける図像表現とその配置構成：出入口に施された装飾を中心に」2012年度上智大学学位請求論文.
- . 2014. 「アンコールのプレア・カーン寺院における尊像配置とその意味：出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して」『佛教藝術』 337: 56-83.
- . 2015. 「禪定印仏坐像の表現と配置構成—アンコールのプレア・カンの出入口に施された浮彫装飾を中心に」『東南アジア—歴史と文化』 44: 27-44.

【史料1】 プレア・カン創建碑文 (K.908)¹⁷⁾

[第34偈] saśrījayavarmmanrpaśrī-jayavarmmeśvarākhyalokeśaml
vedenducandrārūpairludamīlayad atra pitṛmūrttiml

It was here (in Jayaśrī / Preah Khan) that King Jayavarman, in the year Form-Moon-Moon-Vedas (1113 or 1114 Śaka) opened the eyes of [the Bodhisattva] Lokeśa under the name of Lord Jayavarmeśvara [being] the image of [his] father.

「ここ（ジャヤシュリー）に、かのジャヤヴァルマン王は、彼の父親の姿をしたジャヤヴァルメーシュヴァラという名前のローケーシャを、形（1）、月（1）、月（1）、ヴェーダ（3もしくは4）[の年（釈迦暦1113/14年＝西暦1191/92年）]に開眼させた。」

[第35偈] āryāvalokiteśasyalmadhyamasya samantataḥ śatadvayan trayośtīstena devāḥ pratiṣṭhitāḥll

Around [this] central Ārya-Avalokiteśa he (Jayavarman) established two hundred and eighty-three gods.

「中心のアールヤ・アヴァローキテーシャ（本尊ローケーシャを指す）の周りに、彼（ジャヤヴァルマン）は283の諸尊を安置した。」

17) ローマ字への翻字は (Cœdès 1941: 274-275)、英語訳は (Maxwell 2007b: 32-34) による。日本語訳は、これら先行研究をもとに筆者が行った。

[第36偈] vivudhās śrītribhuvanavarmmeśvarapurassarāḥl trayāḥ pratiṣṭhitās tenalpūrvasyān diśi bhūbhṛtāll
In the eastern direction he, the king, established three gods, beginning with Lord Tribhuvanavarmmeśvara.
「かの王は、東の方角にトリブヴァナヴァルメーシュヴァラをはじめとした3尊を安置した。」

[第37偈] kāṣṭhāyān dakṣiṇasyāṃ śrīl yaśovarmmeśvarādayaḥl tena pratiṣṭhā devālviṃśatir dvādaśa uttarāll
In the southern area, he established thirty-two gods, starting with Lord Yaśovarmmeśvara.
「南側に、王はヤショーヴァルメーシュヴァラをはじめとした32の諸尊を安置した。」

[第38偈] śrīcāmpēśvaravimvādyastrimśat paścimatas surāḥl kauveryāṃ śivapādādyāścatvāriṃśatpratiṣṭhitāḥll
In the west, he established thirty gods, starting with the image of Lord Cāmpēśvara; in the north, forty, starting with a Śivapāda.
「西には、彼（ジャヤヴァルマン）はチャーンペーシュヴァラの像をはじめとした30の諸尊を安置し、北にはシヴァパダをはじめとした40の諸尊を安置した。」

[第39偈] eko vṛihigr̥he devaścaṅkrameṣu punar daśal catvāś copakāryāyāmlārogyāyatane trayāḥll
One god at the rice-storehouse, then ten in the ambulatories, four in the staging post, and three in the hospital.
「vṛihigr̥ha（米の保管倉庫）には1尊、caṅkrama（歩道または回廊）には10尊、upakāryā（宿駅）には4尊、ārogyāyatana（治療のための場所）には3尊安置した。」

[第40偈] dāreṣu ca caturdikṣulcaturviṃśati devatāḥl ete śatāni catvārildevās trimśac ca piṇḍitāḥll
Twenty-four deities in the gateways [located] in the four directions. These put together [with the 283 gods mentioned in verse 35, make a total of] four hundred and thirty gods.
「四方の門には24の尊像を安置し、これらはひとまとまりにされた430の諸尊である。」

【史料2】第1周壁東塔門中央東側前室出入口枠に刻まれた碑文（K.621）¹⁸⁾

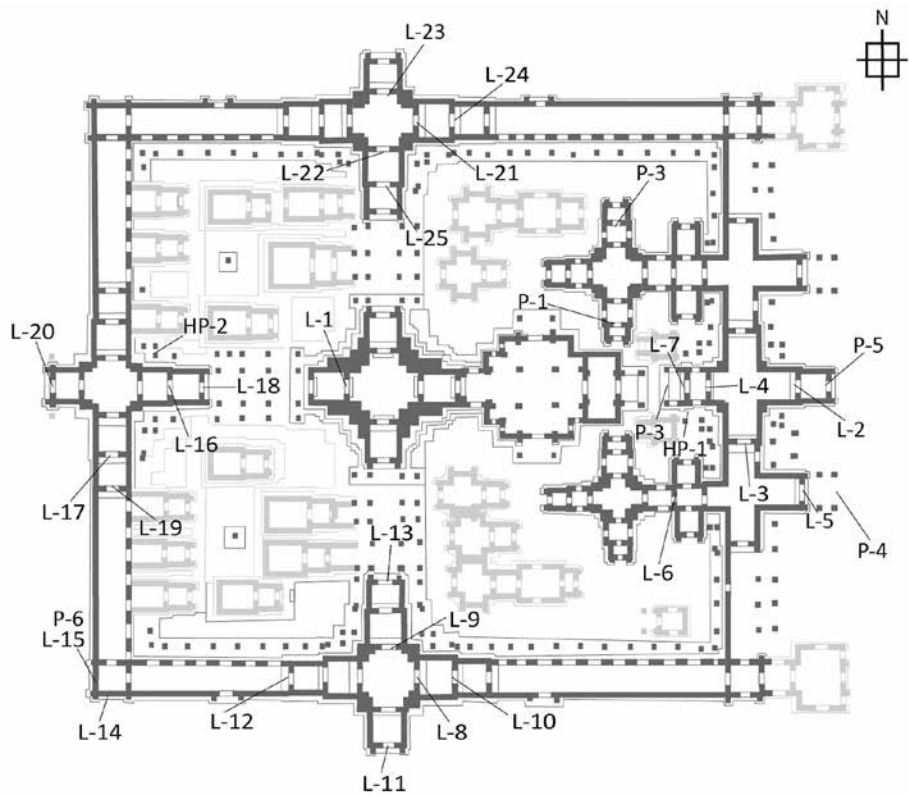
kamrateṇ jagat śrīraṇadivyalokeśvaralrūpa ṅnak saṅjak harisoma chveṅll
「ネアック・サンジャク・ハリソーマ・チュヴェーンの姿をしたカムラteen・ジャガット・ラナデイヴィヤローケーシュヴァラ」

【史料3】南東敷地内副祠堂5の出入口枠碑文（K.907）¹⁹⁾

kamrateṇ jagat śrīsaṃmadadevalrūpa kamrateṇ aṅ śrīsaṃmadakumārall
「カムラteen・アン・サンマダクマーラの姿をしたカムラteen・ジャガット・サンマダデーヴァ」

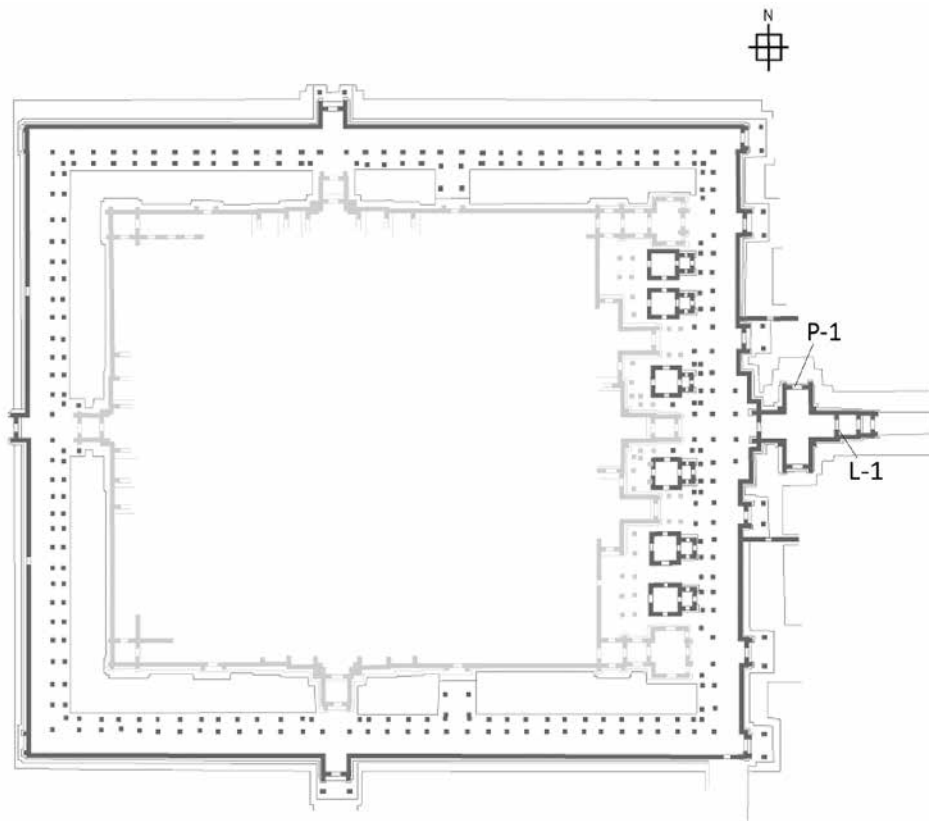
18) ローマ字への翻字は（Cœdès 1951: 109; Maxwell 2007a: 125）を参照した。日本語訳は筆者による。

19) ローマ字への翻字は（Cœdès 1951: 107; Maxwell 2007a: 132）を参照した。日本語訳は筆者による。



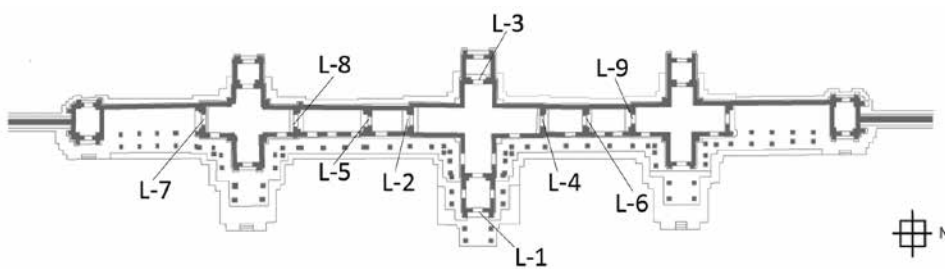
| ペディメント | | リンテル | |
|-----------|----------------|------|--------------------|
| P-1 | シーラーニサンサ・ジャータカ | L-1 | 観音菩薩立像 |
| P-2 | 禪定印仏坐像 | L-2 | 観音菩薩立像 |
| P-3 | 戦闘場面 | L-3 | 禪定印仏坐像 |
| P-4 | 禪定印仏坐像 | L-4 | 観音菩薩立像 |
| P-5 | 神殿の中に立つ男女 | L-5 | ヴェッサンタラ・ジャータカ |
| P-6 | 戦闘場面 | L-6 | 禪定印仏坐像 |
| ハーフペディメント | | L-7 | プーリダッタ・ジャータカ |
| HP-1 | サーマ・ジャータカ | L-8 | 禪定印仏坐像 |
| HP-2 | シヴィ・ジャータカ | L-9 | 観音菩薩立像? |
| | | L-10 | 禪定印仏坐像 |
| | | L-11 | 仏教三尊像? |
| | | L-12 | 禪定印仏坐像 |
| | | L-13 | ムーガパッカ・ジャータカ |
| | | L-14 | 男女&ケーシンと戦うクリシュナ |
| | | L-15 | 「仏伝」剃髪 |
| | | L-16 | 禪定印仏坐像 |
| | | L-17 | 禪定印仏坐像 |
| | | L-18 | 観音菩薩立像 |
| | | L-19 | 禪定印仏坐像 (崩落) |
| | | L-20 | ヴェッサンタラ・ジャータカ (崩落) |
| | | L-21 | 禪定印仏坐像 |
| | | L-22 | プーリダッタ・ジャータカ |
| | | L-23 | ムーガパッカ・ジャータカ |
| | | L-24 | 禪定印仏坐像 |
| | | L-25 | 禪定印仏坐像 |

付図1 伽藍中央部で主題が確認された出入口装飾とその配置



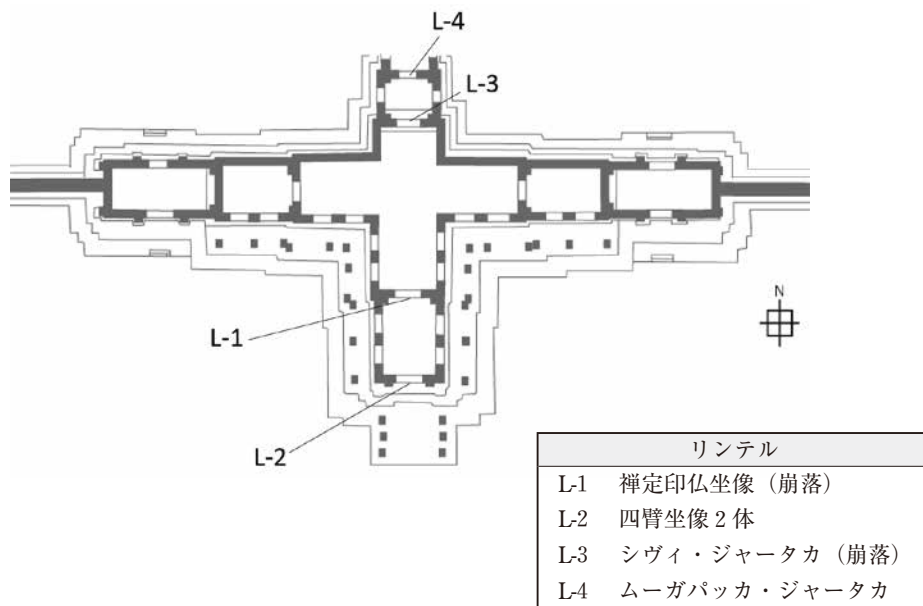
| ペディメント | | リントル | |
|--------|--------------|------|----------|
| P-1 | プーリダッタ・ジャータカ | L-1 | 「仏伝」乳粥供養 |

付図2 第2周壁で主題が確認された出入口装飾とその配置

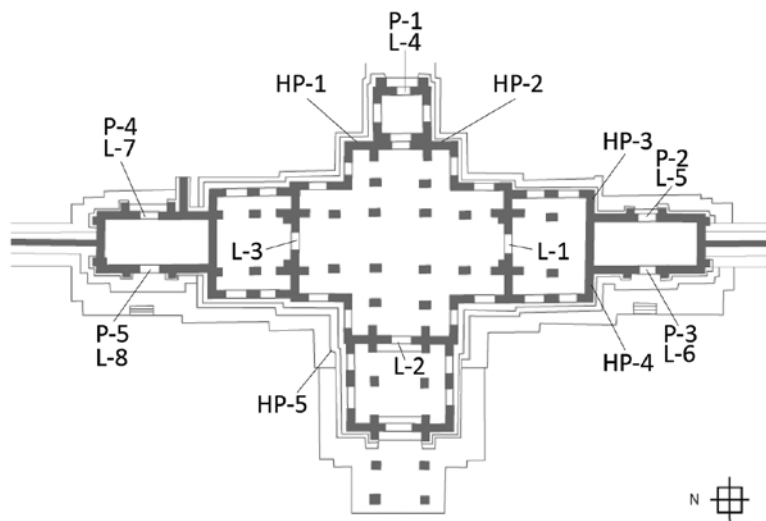


| リントル | | | |
|------|--------------------|-----|---------------|
| L-1 | ヴェッサンタラ・ジャータカ (崩落) | L-6 | プーリダッタ・ジャータカ |
| L-2 | 禪定印仏坐像 (崩落) | L-7 | ヴェッサンタラ・ジャータカ |
| L-3 | 禪定印仏坐像 (崩落) | L-8 | 多菩薩立像 |
| L-4 | 禪定印仏坐像 | L-9 | 観音菩薩立像 |
| L-5 | 禪定印仏坐像 (崩落) | | |

付図3 第3周壁東塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



付図4 第3周壁南塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置

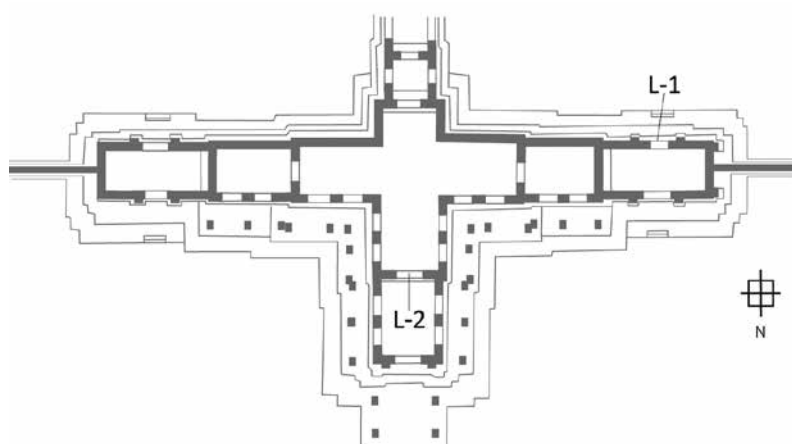


| ペディメント | |
|--------|---------------------------------|
| P-1 | 水面上に浮かぶボートの場面 |
| P-2 | 四臂坐像 |
| P-3 | カンサを殺すクリシュナ |
| P-4 | 『ラーマーヤナ』 ラーマと猿王スグリーヴァ の同盟 |
| P-5 | 踊るシヴァ |

| リントル | |
|------|--------------------------|
| L-1 | 行者坐像 |
| L-2 | カンサを殺すクリシュナ |
| L-3 | ガルダに乗るヴィシュヌ |
| L-4 | ヴィシュヌ立像 |
| L-5 | ゴーヴァルダナ山を 持ち上げるクリシュナ |
| L-6 | 『ラーマーヤナ』 ラーマとハヌマーンの出会 |
| L-7 | ケーシンと戦うクリシュナ |
| L-8 | アリシュタと戦うクリシュナ |

| ハーフペディメント | |
|-----------|---------------------------------|
| HP-1 | ゴーヴァルダナ山を 持ち上げるクリシュナ |
| HP-2 | 『ラーマーヤナ』 ヴァーリンとスグリーヴァ の争い |
| HP-3 | カーリヤと戦うクリシュナ |
| HP-4 | カンサを殺すクリシュナ |
| HP-5 | 『ラーマーヤナ』? |

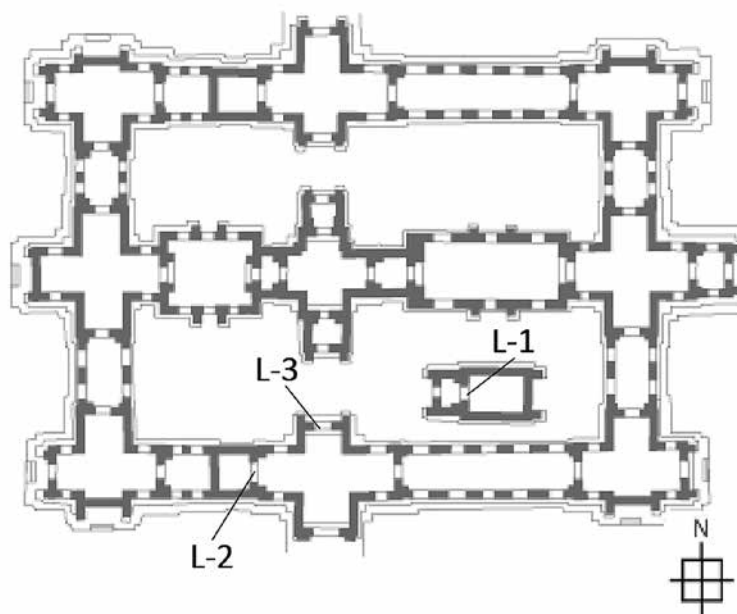
付図5 第3周壁西塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



| リントル | |
|------|------|
| L-1 | 行者坐像 |
| L-2 | 行者坐像 |

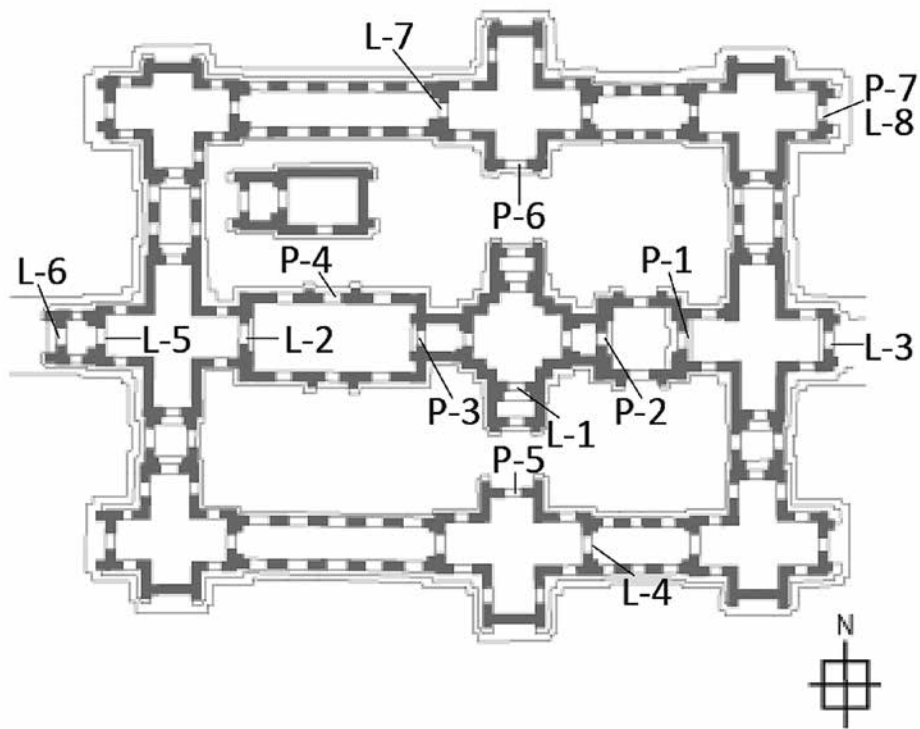
| 備考 |
|---|
| 1) 崩落し、この塔門北側に置かれているペディメントで、当初はこの施設に属していたと考えられる浮彫の主題：乳海攪拌、『ラーマーヤナ』インドラジットの魔法で囚われたラーマとラクシュマナ、ガルダに乗るヴィシュヌ |
| 2) 崩落し、南側前室に置かれているリントルの主題：『ラーマーヤナ』ヴァーリンとスグリーヴァの争い、ヴァーリンを殺すラーマ |

付図6 第3周壁北塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



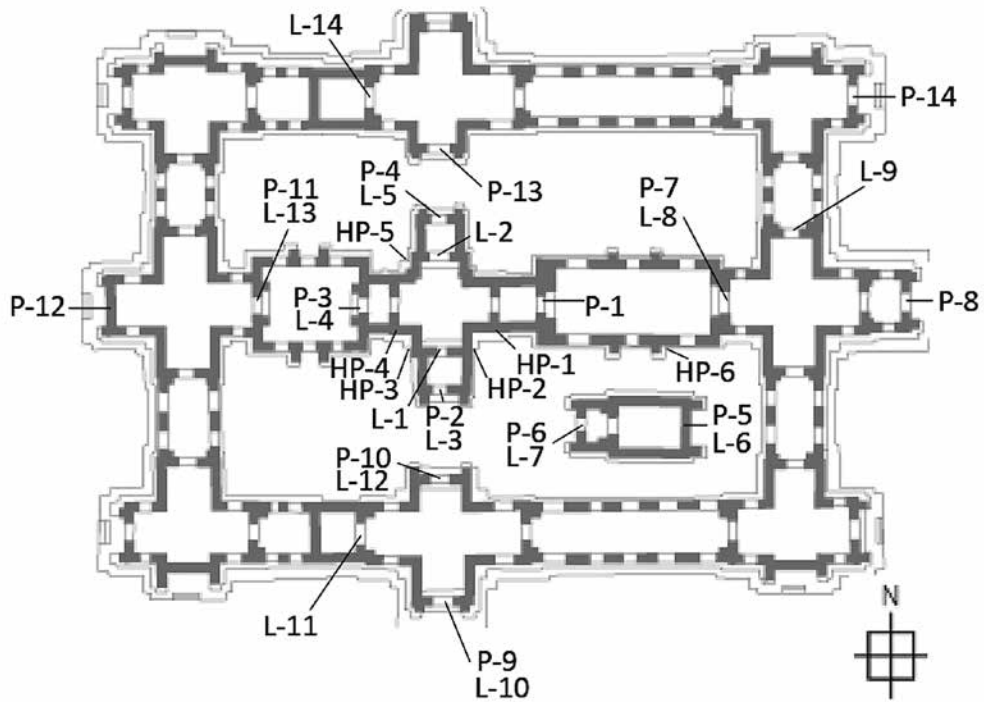
| リントル | |
|------|-----------------|
| L-1 | アイラーヴァタに乗るインドラ？ |
| L-2 | 「仏伝」降魔成道（崩落） |
| L-3 | 禪定印仏坐像（崩落） |

付図7 第3周壁内南側副次的伽藍で主題が確認された出入口装飾とその配置



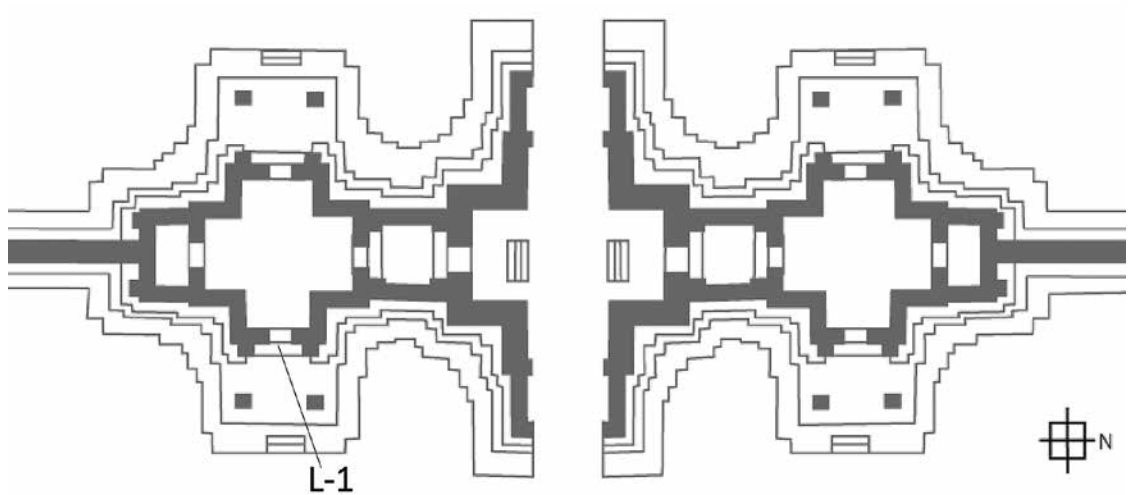
| ペディメント | | リントル | |
|--------|-----------------------|------|--------------------------|
| P-1 | ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ | L-1 | カーリヤを殺すクリシュナ (崩落) |
| P-2 | 放浪者としてのシヴァ | L-2 | 行者坐像 |
| P-3 | ヴィシュヌを中心としたヒンドゥー教の三神像 | L-3 | ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ (崩落) |
| P-4 | アスラを追うヴィシュヌ | L-4 | 行者坐像 |
| P-5 | ガルダに乗るヴィシュヌ | L-5 | カンサを殺すクリシュナ |
| P-6 | 『ラーマーヤナ』アヨーディヤーへの凱旋 | L-6 | ケーシンと戦うクリシュナ |
| P-7 | アスラを追うヴィシュヌ | L-7 | 行者坐像 |
| | | L-8 | 行者坐像 |

付図8 第3周壁内西側副次的伽藍で主題が確認された出入口装飾とその配置



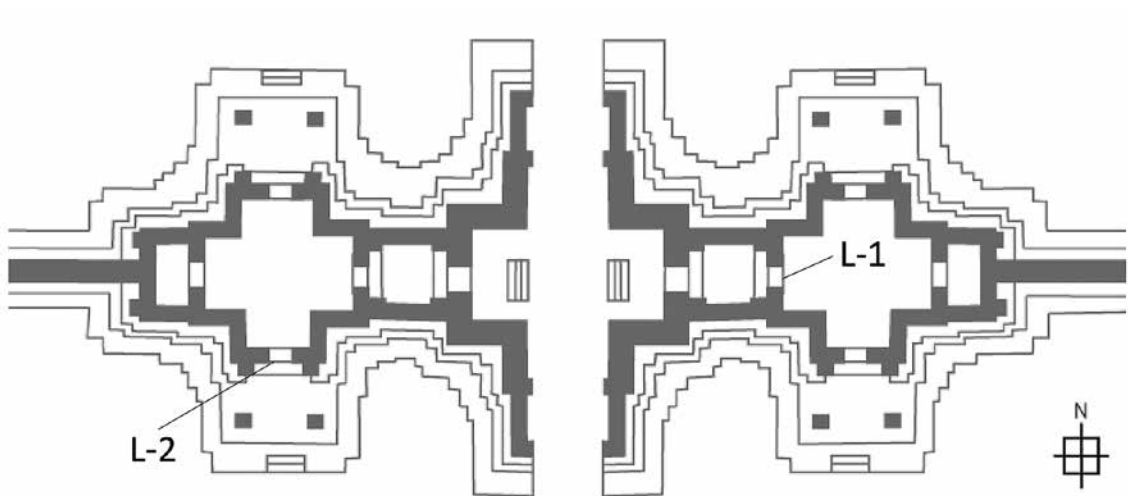
| ペディメント | | リンテル | | ハーフペディメント | |
|--------|--------------------------------------|------|----------------------------------|-----------|------|
| P-1 | シヴァを中心とした ヒन्दゥー教の三神像 | L-1 | 『ラーマーヤナ』 ラーマと猿王スグリーヴァの 同盟 | HP-1 | 行者坐像 |
| P-2 | シヴァを中心とした ヒन्दゥー教の三神像 | L-2 | 『ラーマーヤナ』 シーターの誘拐 | HP-2 | 行者坐像 |
| P-3 | 踊るシヴァ | L-3 | ナーガを抱えるガルダ | HP-3 | 行者坐像 |
| P-4 | 『ラーマーヤナ』 シーターの神明裁判 | L-4 | ゴーヴァルダナ山を持ち上げ るクリシュナ | HP-4 | 行者坐像 |
| P-5 | アスラを追うヴィシュヌ | L-5 | アスラを追うヴィシュヌ | HP-5 | 行者坐像 |
| P-6 | ゴーヴァルダナ山を持ち上げる クリシュナ | L-6 | 行者坐像 | HP-6 | 行者坐像 |
| P-7 | アナントに横たわるヴィシュヌ | L-7 | ガルダに乗るヴィシュヌ | | |
| P-8 | 『ラーマーヤナ』 ラーマと猿王スグリーヴァの 同盟 (崩落) | L-8 | 行者坐像 | | |
| P-9 | ヴィシュヌの超三界 | L-9 | 『ラーマーヤナ』 ヴァーリンとスグリーヴァの 争い | | |
| P-10 | シヴァを中心とした ヒन्दゥー教の三神像 | L-10 | アイラーヴァタに乗るインド ラ (崩落) | | |
| P-11 | 踊るシヴァ | L-11 | 行者坐像 | | |
| P-12 | 『ラーマーヤナ』 アヨーディヤーへの凱旋 | L-12 | 台座に坐すヴィシュヌ | | |
| P-13 | 台座に坐すヴィシュヌ | L-13 | 行者坐像 | | |
| P-14 | 『ラーマーヤナ』 ランカー島の闘い (崩落) | L-14 | 『ラーマーヤナ』 シーターに会うハヌマーン (崩落) | | |

付図9 第3周壁内北側副次的伽藍で主題が確認された出入口装飾とその配置



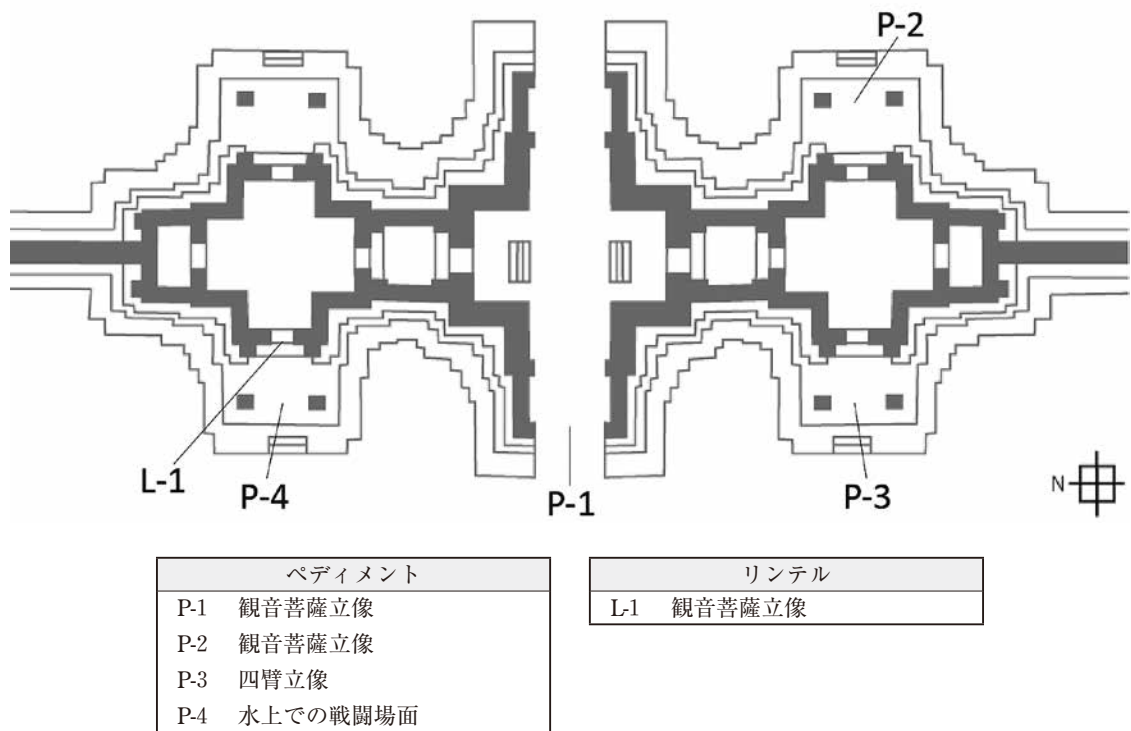
| |
|-----------------|
| リントル |
| L-1 禪定印仏坐像 (崩落) |

付図10 第4周壁東塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置

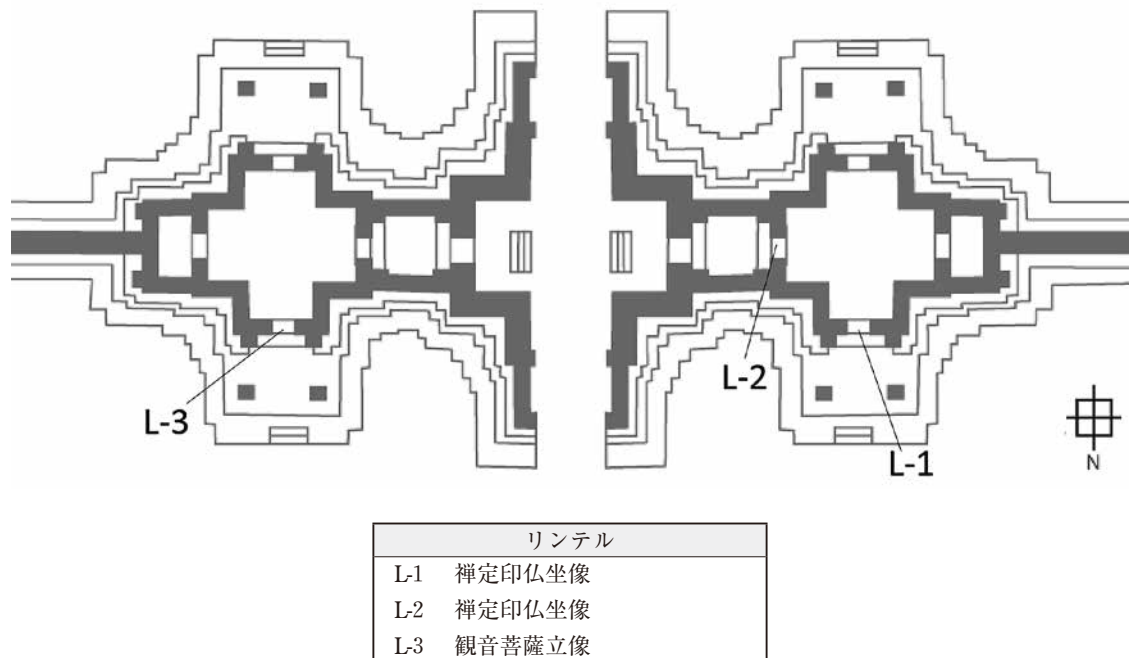


| |
|----------------|
| リントル |
| L-1 禪定印仏坐像 |
| L-2 ナーガを抱えるガルダ |

付図11 第4周壁南塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



付図12 第4周壁西塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



付図13 第4周壁北塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置

タ・プローム寺院の出入口に表された浮彫 に関する調査報告

日本学術振興会特別研究員 PD
久保真紀子

はじめに

本稿は、2016年8月7日～27日に実施したタ・プロームの出入口構成部材に表された浮彫に関する調査報告である。タ・プロームの寺院伽藍は多くの施設から構成されており、出入口の総数は約400カ所にのぼる。今回、3週間にわたる調査期間の中で、そのすべての出入口の現地調査を完了した。現在はその資料整理の途中であり、出入口に浮彫された図像表現の主題が寺院伽藍において構成する配置傾向や、その配置から類推される尊像配置によって表現された世界観に関して、現時点で詳細な考察結果を提示するには至っていない。したがって、本稿では、調査の目的や方法を示すとともに、伽藍内で確認された浮彫のうち主題が特定できたいくつかの代表的な作例を紹介し、調査で気付いた点をいくつか指摘することにしたい。今回の調査資料を丁寧に分析した上で、後日改めて詳細な考察結果を報告する予定である。

1. タ・プロームの概要

タ・プロームは、ジャヤヴァルマン7世の治世初期に建立された仏教寺院である。1882年にタ・プロームの寺域から発見された石柱碑文 (K.273)¹⁾ の第36～37偈 (A面第71～72節、B面第1～2節) には、西暦1186年 (釈迦暦1108年)、王がこの寺院に本尊としてジャヤヴァルマン7世の母親を表した般若波羅蜜多菩薩像を安置したことと、2名の宗教的指導者の彫像とその左右に260の神々の像を安置したことが記されている。

タ・プローム石柱碑文 (K.273)²⁾

第36偈

prātiṣṭhapaç çhrījayaṛājacūddā-
maṇiṃ maṇidyotitapuṇyadehāml
tasyāñ jananyā jinarāṭṛmūrttiṃ
mūrttiṃ samūrttidyuśāsāṅkarūpaiḥll

Il a érigé Śrījayaṛājacūdāmaṇi dont le corps est brillant de gemmes, et en celle-ci l'image qu'il érigeait était celle de sa mère qui est l'image de la mère du Jina, en Formes – Ciel – Lune – Forme.

1) 4面のうちA、B、C面にはそれぞれ72行、D面には74行、全145節のサンスクリット語碑文が刻まれている (Cœdès 1906)。

2) 翻字と仏語訳はセデスによる (Cœdès 1906: 75)。日本語訳は筆者がセデスの仏語訳をもとに訳した。

彼は1108年³⁾ (西暦1186年) に、宝石で体中を輝かせたジャヤラージャチューダーマニをそこに安置した。それは彼の母親の像であり、ジナの母親⁴⁾ の像であった。

第37偈

so tiṣṭhipac chrījayamaṅgalār[tha]-
devaṃ tathā śrījayakīrtidevaml
mūrttiṃ guror dakṣiṇavāma — . yaṣ
ṣaṣṭiṃ śate dvau parivāradevānll

Il a érigé Śrījayamaṅgalārthadeva, et aussi Śrījayakīrtideva, l'image de son guru ... à droite et à gauche un entourage de 260 divinités.

彼は自身の宗教的指導者であるジャヤマンガラールタデーヴァとジャヤキールティデーヴァの像と、その左右に260の従属的な神々の像を安置した。

20世紀前半、フランス極東学院はアンコール遺跡群の保存修復活動を精力的に進めたが、このタ・プロームに対しては最小限の補強を行うにとどめていた。それ以降も長年の間、この遺跡では本格的な修復は実施されなかったが、近年、インド考古調査局 (Archaeological Survey of India) とカンボジア政府アプサラ機構との共同プロジェクトによって、部分的に修復が行われた (2003~2015年)。また、1992年にアンコール遺跡群が世界遺産に登録されてからは、大木が建物に絡みつく光景が情趣を感じさせる遺跡として多くの外国人観光客が訪れるようになり、連日賑わいを見せている。

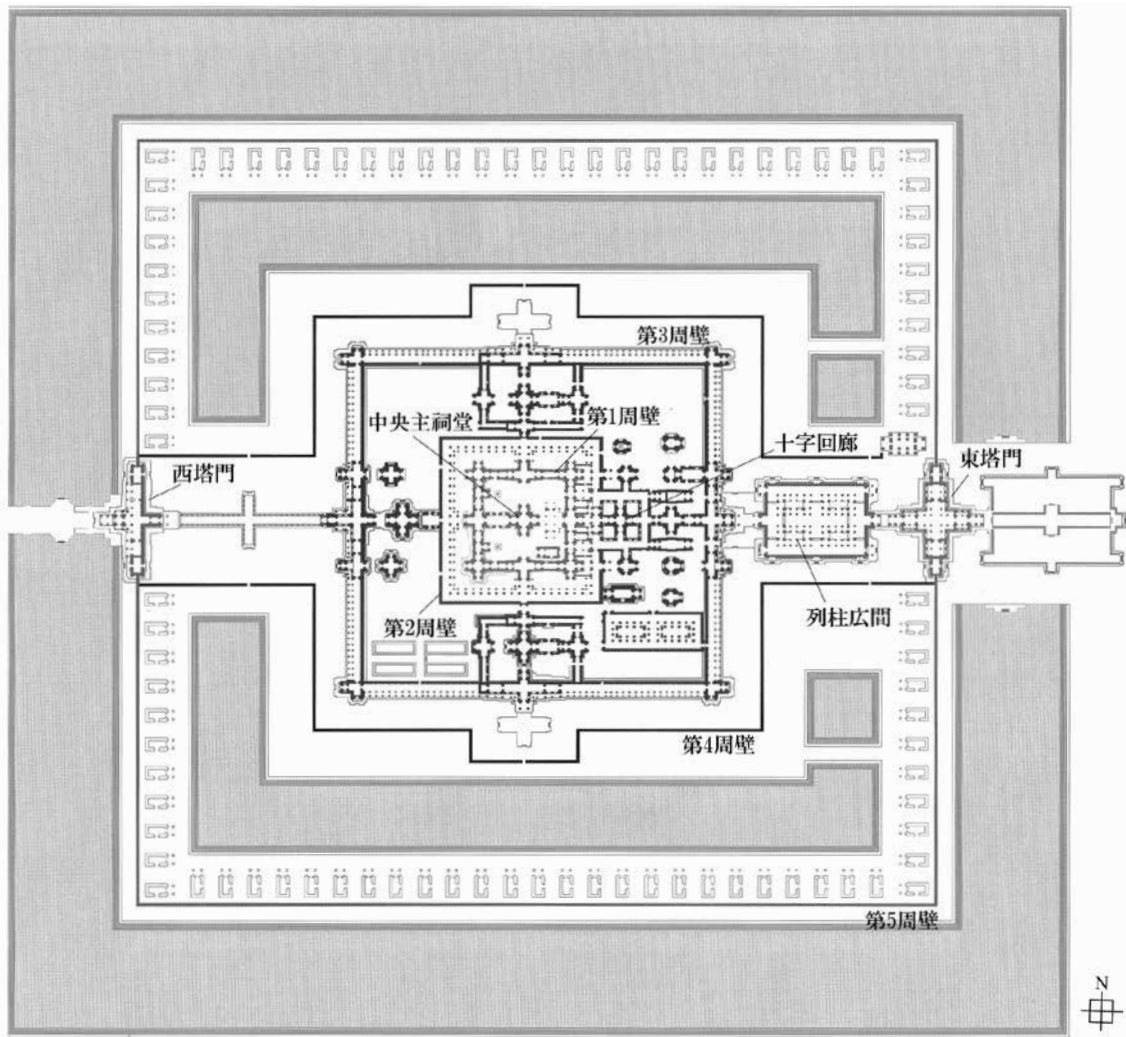
タ・プロームは東西約1,020m、南北約670mと広大な敷地を持ち、伽藍中央部は、6重にめぐらされた周壁、それらの間に築かれた2重の環濠に囲まれている (図1)。中央主祠堂の周りには2つの回廊と周壁が取り巻き、それぞれ東西2面あるいは東西南北四面に塔門が配されている。東側には十字回廊があり、南側と北側には中央祠堂と回廊からなる副次的伽藍が配されている。そして、第3周壁の東側と西側には、小規模な祠堂が立ち並んでいる。第3周壁東塔門と第5周壁東塔門の間には、「踊り子の間」と呼ばれる列柱広間がある。

2. 目的

本調査は、次の2つの目的のもとに実施した。1つ目は、出入口構成部材に施された浮彫 (図2) や出入口枠に刻まれた碑文 (図3) といった諸資料をもとにタ・プローム創建時の尊像配置を示すことである。2つ目は、出入口装飾の様式的特徴および各施設に残る増改築の痕跡を手掛かりに、寺院建造過程を示すことによって、この寺院における尊像配置の変遷過程を提示することである。そして、タ・プロームで得られた結果を、同時期に建造されたプレア・カンの尊像配

3) シヴァの8つの姿 (=8)、空 (=0)、月 (=1)、姿 (=1) で1108年を表す (Cœdès 1906: 75)。

4) 「ジナの母親」とは仏陀の母親を意味し、般若波羅蜜多菩薩のことを指す (Cœdès 1906: 45)。



注: (Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

0 5 10 20 50m

図1 タ・プローム伽藍中央部

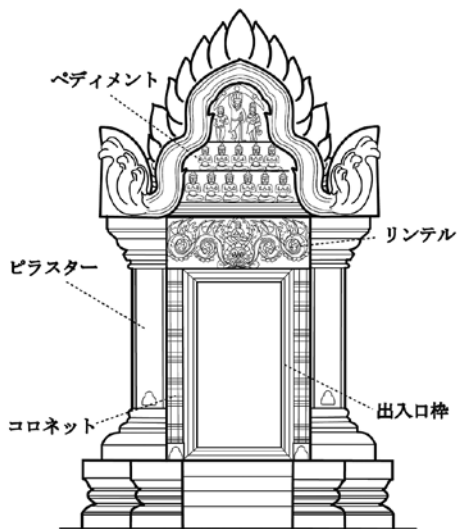


図2 出入口概略図



図3 出入口枠に刻まれた碑文
(第3周壁西塔門主室東面出入口)

置に関する筆者によるこれまでの研究成果⁵⁾と比較し、両寺院にみられる共通点や相違点の考察を通して、ジャヤヴァルマン7世統治期の図像表現の特徴や王の寺院建造意図を読み解くことを目指す。

3. 調査方法

(1) 2つの視点からの調査

上述の目的のもと、本調査は、図像研究と様式研究という2つの視点から、タ・プロームの尊像配置を調査した。図像研究については、出入口装飾や壁面浮彫を写真撮影し、それぞれ図像的特徴を記録する。その後、他寺院の類例との比較、ならびに先行研究で提示された説の再検討を通して、浮彫に表現された図像の主題を特定する。すべての図像の特定が終わったら、寺院伽藍全体における図像の配置構成をダイアグラムに表し、その配置構成が、タ・プローム石柱碑文に記された2つの寺院伽藍の尊像配置と整合するかどうかを検証する。

様式研究については、遺跡調査時に出入口装飾の各構成部材（ペディメント、リントル、ピラストラ、コロネット、出入口枠）の写真撮影を行い、文様の種類や形式を観察し、インベントリー用紙に記録した。それを調査後、あらかじめ準備した凡例集（装飾の形式や文様のヴァリエーションを一覧にした凡例集）に基づき、各部材に施された彫刻の様式的特徴をコード化して、分類する。そして、施設の各所に残る増改築の痕跡等を手掛かりに寺院建造過程を類推し、そこに施された装飾の時期区分を行う。このような方法で、タ・プロームの寺院建築に施された浮彫装飾の様式変遷を提示する。

(2) 現地調査

調査の方法は以下のとおりである。まず、出入口構成部材に施された浮彫（崩落して出入口付近に置かれているものも含む）、および出入口周辺の壁面に施された渦巻文様の写真撮影と図像的特徴ならびに所在場所を図面に記録した。同時に、彫刻の図像的特徴や主題を記録した。また、各出入口において、出入口枠の高さや幅、構成部材の寸法の計測等を行った。出入口枠に刻まれた古クメール語の短い碑文については、先行研究の記述内容を参考に、それぞれ所在場所を確認し、撮影した。最後に、各施設の残存状況（屋根の崩落箇所、樹木が伸びている場所、石材崩落箇所、および進入不可の箇所）を確認し、図面に記録した。

(3) 調査メンバー

- ① 久保真紀子（日本学術振興会特別研究員 PD）
- ② プン・ダラー（アプサラ機構職員〈Department of Conservation of the Monuments inside Angkor Park, APSARA National Authority, Cambodia〉）

5) 久保 2012, 2014

4. 調査で気付いた点

(1) 仏教図像

ペディメントやリントルに施された浮彫の大半は仏教図像であった。具体的には、禪定印仏坐像、観音菩薩立像、般若波羅蜜多菩薩立像、仏伝図、ジャータカ図等が確認できた（付図3～6）。図像の主題を特定するにあたっては、Christine Hawixbrokの研究や、Vittorio Rovedaの著書を参照した⁶⁾。

禪定印仏坐像

第3周壁西塔門でみられたリントル（図4）中央には、蓮の上で禪定印を結び瞑想する仏坐像が表されている。仏坐像は頭部に冠帯と頂髻が表現され、その背後には葉文様で縁取られた葉状龕が表されている。仏坐像の顔は破壊されており、その顔貌をうかがうことはできない。仏坐像の下には花綱を吐き出すカーラが表され、その左右には2人の供養者が跪き合掌している。

顔が破損している点を除き、比較的残存状況の良好な図4のような作例がある一方で、禪定印仏坐像が削り取られてその下に表された台座だけ残っているものも多数みられた。第3周壁内北側副次的伽藍でみられたペディメント（図5）の削り取られた部分をよく観察すると、その上部に葉の生い茂る樹木、そしてその上に大きな傘が表されている。この樹木は仏陀がその下で瞑想したという菩提樹を表現しており、樹下の台座には、当初仏陀坐像が表されていた可能性が高いと考えられる。また、台座上にリングのような円筒形のものが表されているペディメントも散見された（図6）。この円筒は、周囲に



図4 禪定印仏坐像（第3周壁西塔門主室東面出入口）



図5 台座上が削り取られたペディメント（第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂北側前室北面出入口）



図6 台座上がリングに改変されたペディメント（第1周壁内南西敷地に張り出した小室東面出入口）

6) Hawixbrok 1989, 1994; Roveda 2005

浮彫を削り取った鑿跡が残っており、当初浮彫されていた禪定印仏坐像の頭部や手足を削り取って、胴体の部分を円筒形に改変したものと考えられる。

以上の、禪定印仏坐像がほぼ完全な状態で残存している箇所、後世に削り取られているが、その痕跡や周囲に残る菩提樹等によって、当初は禪定印仏坐像が表されていたと類推できる箇所、そして、禪定印仏坐像からリングに改変されたと判断できる箇所は、他にも多数の出入口で確認でき、付図3にその配置状況を示した。

観音菩薩立像

図7は、第3周壁内祠堂7のリンテル中央に表された観音菩薩立像で、4つの手に数珠や水瓶といった持物を執り、下半身には短い裙をまとっている。顔から頭髪部にかけて摩滅あるいは破損して不鮮明だが、結い上げられた頭髪の形状は確認できる。足元には、2体の供養者がひざまずき合掌している。観音菩薩立像は、他にも第2周壁内広間11、第3周壁内東側十字回廊と祠堂8、第5周壁内列柱広間、第6周壁内東側の「宿駅」と呼ばれる施設のペディメントやリンテルでも確認できる。この配置傾向から、観音菩薩立像は、中央主祠堂の周りを取り囲む第1周壁内の施設ではなく、比較的周縁部の施設に見られることが分かった（付図4）。



図7 観音菩薩立像（第3周壁内祠堂7北面出入口）

般若波羅蜜多菩薩立像

図8は、第5周壁内列柱広間、いわゆる「踊子の間」と呼ばれる施設でみられたペディメントだが、ペディメントの外縁と下端の水平帯状装飾で囲まれたティンパナムの彫刻面は2段に区切られ、その上段中央には下半身に裙をまとった女性立像が表されている。顔は破壊されているが、頭部には豪華な髪飾りが表現されている。両手の持物は破壊されているが、左手には蓮の花が一部残っており、この女性立像は両手に蓮の花を執る般若波羅蜜多菩薩立像である可能性が考えられる。周囲には踊子たちが舞い、女性供養者たちがひざまずき合掌している。下の段にも、合掌する女性供養者たちが表されている。

同様の特徴を持つ女性立像は、他に、第1周壁南塔門、経蔵、西側広間、第3周壁東塔門、第6周壁東塔門と南塔門のペディメントやリンテルの出入口でも認められた（付図3）。これらの配置傾向から、とくに中央主祠堂⁷⁾を取り巻く経蔵や塔門といった施設に女性立像が多く配されたことがうかがえる（図9）。これらの施設に多く見られるこの女性立像は、タ・プローム石柱碑文に記されたこの寺院の本尊、ジャヤヴァルマン7世の母親の姿を表した般若波羅蜜多菩薩

7) タ・プロームの中央主祠堂では、出入口構成部材を含め、壁面に施されたすべての浮彫が削り取られているため、寺院建造当初に表現されていた図像は確認できず、この祠堂内に祀られていた尊像について類推することは難しい。



図8 般若波羅蜜多菩薩立像（第5周壁内列柱広間北東隅祠堂東面ポーチ型出入口）



図9 女性立像脚部（第1周壁内西側広間北面出入口）

像を表象している可能性が考えられる⁸⁾。同じくジャヤヴァルマン7世統治期に建造されたプレア・カンの伽藍中央部では、出入口に観音菩薩像の浮彫がいくつも認められる。プレア・カンで発見された石柱碑文（K.908）は、この寺院の本尊が観音菩薩像であると同時に、ジャヤヴァルマン7世の父親の像でもあると記している⁹⁾。般若波羅蜜多菩薩を本尊とするタ・プロームの伽藍中央部の配置傾向は、プレア・カンの伽藍中央部の観音菩薩立像の配置傾向と類似しているように見受けられる。

仏伝図

仏教説話を主題とした図像も多数確認できた。そのうち、釈迦の生涯を物語るいわゆる「仏伝」と呼ばれる物語を主題とした浮彫の分布状況を付図5に示した。

第3周壁内南側副次的伽藍でみられた図10のペディメントは、釈迦が愛馬に乗って、生まれ育った王宮から抜け出す「出家踰城」の場面を表している¹⁰⁾。2段に区切られたティンパナムの上段には大きな馬にまたがる釈迦が表され、その周囲には、従者が釈迦のために傘を差し掛けながら駆ける姿が表されている。下段には、合掌する供養者たちが表されている。この場面を主題とする浮彫は、他に、第3周壁南東隅祠堂と第5周壁内列柱広間のペディメントでも確認できた。

図11のペディメントには、釈迦が髪を下して修行の道へと入る「剃髪」の場面が表されている¹¹⁾。このペディメントは上端部の石材が崩落しているが、3段に区切られたティンパナムの上段中央には、片手で髪を掴み、もう一方の手に握った短剣で髪を切る釈迦の姿が認められる。中段と下段には、合掌する供養者たちが表されている。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内南側副次的伽藍のリンテルで確認できた。

第3周壁祠堂4でみられた図12のリンテルには、激しい修行の結果やせ細った釈迦に、村娘の

8) Roveda 2005: 262-263; Kapur and Sahai 2007: 51

9) プレア・カン石柱碑文（K.908）第34～35偈（A面第67～70節）（Coedès 1941: 274-275, 288; Maxwell 2007: 32-34）

10) Hawixbrock 1989: 19, 1994: 34; Roveda 2005: 230

11) Foucaux 1884: 197; Hawixbrock 1989: 19, 1994: 34; Roveda 2005: 230-233



図10 出家踰城（第3周壁内南側副次的伽藍東塔門主室西面出入口）



図11 女性立像脚部（第3周壁内南側副次的伽藍北塔門東側通路南面出入口）



図12 乳粥供養（第3周壁内祠堂4南面出入口）



図13 降魔成道（第3周壁内南側副次的伽藍北塔門主室南面出入口）



図14 ムチリンダ竜王の護仏（第3周壁内南側副次的伽藍中央祠堂主室西面出入口）

スジャーターが乳粥を献上する「乳粥供養」の場面が浮彫されている¹²⁾。リントル中央のカーラの上に浮彫された2人のうち、向かって右側に跪いているのがスジャーター、彼女から差し出された乳粥を受け取っているのが釈迦と考えられる。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁南東隅祠堂に確認できた。

図13のリントルには、釈迦の瞑想を妨げるためにマーラが遣わした軍隊が大暴れするので、釈迦が大地に手を触れて大地の女神トーラニーを呼び出した場面が浮彫されている¹³⁾。トーラニーは、自分の髪を絞って水をあふれさせ、洪水を起こすことによって、マーラの軍隊を撃退した。マーラの誘惑に打ち勝った釈迦は悟りを啓き、仏陀（目覚めた者）となる。このリントルでは、トーラニーの頭上に表された龕の内側は削り取られているが、当初は釈迦の姿が表されていたと推察される。

12) Roveda 2005: 235

13) Hawixbrock 1994: 34; Roveda 2005: 235-238

この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁西塔門のペディメントとピラスター、第5周壁東塔門と西塔門のリンテルでも確認できた。

悟りを開いた後も樹下で瞑想を続ける仏陀であったが、そこににわかには暴風雨が吹き荒れた。図14のリンテル中央には、仏陀が瞑想していた樹下の土の中からムチリンダ竜王が現れ、その鎌首を広げて仏陀を風雨から守る「ムチリンダ竜王の護仏」と呼ばれる場面が表されている¹⁴⁾（いわゆる「ナーガ上の仏陀坐像」）。このリンテルでは仏陀像が削り取られているが、7つの頭を持つナーガの鎌首と3重に巻かれたとぐろが確認できる。とぐろの上には仏陀坐像の脚部や胴部の痕跡が残っている。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内南側副次的伽藍のピラスターや第5周壁西塔門のリンテルで確認できた。

ジャータカ図

釈迦が前生で行った数々の善行を説いた「ジャータカ」を主題とした浮彫の分布状況を付図6に示した。

第3周壁祠堂3でみられたペディメント（図15）には、ヴェッサンタラ・ジャータカから、施与を至上の喜びと考えるヴェッサンタラ王子が、バラモンに依頼され2人の幼い子供たちを施す場面が表されている¹⁵⁾。2段に区切られたティンパナムの上段右側に坐すのがヴェッサンタラ王子で、向かい合って坐すバラモンの手に聖水をかけている。2人の手の下には2人の子供たちが立っていたと推察されるが、そのうち1人は破損している。下段右側には馬車が表され、御者のような人物もいる。荷台の上には傘が差し掛けられているが、傘の下に人物は確認できず、この馬車や荷台の傘が何を意味しているのかは不明である。このヴェッサンタラ王子がわが子をバラモンに施す場面の浮彫は、他に、第3周壁内東側十字回廊や第5周壁西塔門のリンテル、第5周壁東塔門内に置かれた崩落リンテルでも確認できた。

第5周壁東塔門でみられたペディメント（図16）には、シヴィ・ジャータカから、空腹の鷹に捕えられ食べられそうになっている鳩を救うために、自らの太腿の肉を切り取って鷹に与えるシヴィ王が表されている¹⁶⁾。3段に区切られたティンパナムの上段中央には、宮殿の中で身をよじらせるようにして短剣で太腿の肉を抉り取るシヴィ王の姿が表されている。中段には、家臣が天秤を使って、切り取られた肉の重さがハトの重さに至っているか計量しており、下段では合掌する供養者たちが表されている。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内祠堂7のペディメントでも確認できた。

第1周壁東塔門の南側に取り付く通路の出入口でみられたペディメント（図17）には、将来自分が王位を継承することのないよう、主人公テーミヤ王子が目と耳と口が不自由であるように装ったムーガバッカ・ジャータカの浮彫がみられる¹⁷⁾。このリンテルでは、テーミヤ王子に刺激を与えようと、父母が2人の剣士に命令し、王子の頭に剣を突きつけて驚かせようとする場面が表されている。向かい合って立つ2人の剣士は、剣を水平に持ち上げている。2人の間の浮彫は削

14) Roveda 2005: 239

15) ジャータカ第547話（中村 1988: 212-216）；Hawixbrock 1989: 19, 1994: 31-32; Roveda 2005: 255-256

16) ジャータカ第499話（Foucher 1955: 324-326）；Roveda 2005: 249

17) ジャータカ第538話（中村 1991:9-10）；Roveda 2005: 249



図15 ヴェッサンタラ・ジャータカ（第3周壁内祠堂3北面出入口）



図16 シヴィ・ジャータカ（第5周壁東塔門北側前室北面出入口）



図17 ムーガパッカ・ジャータカ（第1周壁東塔門南側通路西面出入口）



図18 ブーリダッタ・ジャータカ（第3周壁内祠堂7西面出入口）

り取られてしまっているが、当初はそこに瞑想するテーミヤ王子の姿が表されていたと推察される。このように剣を突き付けられても全く動じず、静かに瞑想を続けた王子は、後に出家して両親はじめ多くの人々の教えを説く人物となる。この場面を主題とする浮彫は、他に、第3周壁内南側副次的伽藍のペディメントとリントル、北側副次的伽藍のペディメント2点とリントル、第5周壁内列柱広間の出入口上に浮彫された疑似的なペディメント、第3周壁西塔門で確認できた。

第3周壁内祠堂7でみられたペディメント（図18）には、蛇の王国に生まれたブーリダッタ王子が、功德を積んで天上界に生まれ変わりたいと願い、あらゆる試練を耐え忍んで修行を積むブーリダッタ・ジャータカが表されている¹⁸⁾。2段に区切られたティンパナムの上段中央には台座があり、その上には当初ブーリダッタ王子が浮彫されていたと考えられるが、削り取られてしまっている。台座の左右には、このジャータカに登場するガルダ王とナーガ王が坐し合掌している。下段には、3つの蛇の頭を持つ女性たちが坐し、合掌している。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内祠堂3のリントルで確認できた。

18) ジャータカ第543話（中村 1991: 148-196）；Roveda 2005: 252

(2) 渦巻文様内側の小さな浮彫

ピラスター柱身部の側面や、出入口周辺の壁面に浮彫された渦巻文様の内側には、禪定印仏坐像や供養者像、踊子像、仏伝図やジャータカ図、あるいは庶民の日常生活の光景等、ヴァリエーション豊かな浮彫が認められる。また、『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』といった叙事詩やヒンドゥー教の神々を思わせる図像もみられる。それら小さな浮彫の図像は、ペディメントやリントル等、出入口構成部材の浮彫と共通する図像が多いため、今回の調査対象に加えることにした。以下、いくつかの例を紹介する。

第3周壁内南側副次的伽藍でみられた図19の浮彫は、鷲鳥に乗るヴァルナと考えられる。本来、ヴァルナは西を守る方位神とされ、10世紀後半のバンテアイ・スレイ等では、ヴァルナは鷲鳥にまたがった姿で西側の出入口のペディメントやリントルに表される¹⁹⁾。一方、タ・ブROOMでは、ヴァルナ像は特定の方位に限定的に確認されるわけではなく、さまざまな施設の壁面に確認できた。鷲鳥に乗るヴァルナ像は他に、第3周壁東塔門や南側経蔵、祠堂1の壁面にも確認できた。

図20は、同じく第3周壁内南側副次的伽藍のピラスター側面に浮彫されたムーガパッカ・ジャータカで、図17と同様の場面を表している。このピラスター側面には、この浮彫が上端部に表されているものの、その下に連続する渦巻文様を見ると、『ラーマーヤナ』の場面(図21)や日常風景を表した浮彫がみられ、ピラスター全体として、必ずしも仏教図像で統一されているわけではないことが分かった。

図21には、たくましい体つきの2匹の猿が腕を組み合って争う姿が表されている。これは、『ラーマーヤナ』から、猿の王スグリーヴァが、因縁の間柄である兄ヴァーリンと争う場面を表した浮彫である²⁰⁾。この争いの結果、スグリーヴァと同盟を結んでいたラーマによって、ヴァーリンは倒される。この場面を主題とする浮彫は、他に、第3周壁西塔門のピラスターや南側副次的伽藍の壁面浮彫でもみられた。

図22は第3周壁内北側副次的伽藍の壁面にみられた浮彫で、『マハーバーラタ』にも登場する



図19 鷲鳥に乗るヴァルナ(第3周壁内南側副次的伽藍西塔門主室東面出入口)



図20 ムーガパッカ・ジャータカ(第3周壁内南側副次的伽藍西塔門主室西面出入口)

19) Roveda 2005: 188-191

20) Book IV Kishkindhakanda.6 (Shastri 1976: 195-206); Roveda 2005: 126-130



図21 『ラーマヤナ』ヴァーリンとスグリーヴァの争い（第3周壁内南側副次的伽藍西塔門主室西面出入口）



図22 ケーシンと戦うクリシュナ（第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂北西壁面）

英雄クリシュナが、馬の姿をした魔物のケーシンと戦う場面を表している²¹⁾。将来、クリシュナに殺害されるという予言におびえたカンサ王は、クリシュナを殺すために次々と魔物を差し向けたが、反対にどの魔物もクリシュナによって退治されてしまった。最終的にはカンサ王自身も、クリシュナによって殺害されることとなる。この場面を主題とする浮彫は、他に第1周壁南塔門のリンテルにもみられた。

（3）主題未特定の図像

これまで紹介してきたように、タ・プロームで確認できた多くの浮彫については、そこに表現された主題が特定できたか、もしくは類推できたが、中には特定するのが難しい図像もあった。ここでは特定の難しい2つの図像に焦点を当て、その図像的特徴と現時点での筆者の見解を示す。

台座上に坐す男女と、その下で馬と戦う男性

第3周壁内東側十字回廊のペディメントには、彫刻面の中央上部に男女が台座上に坐し、その下に馬と戦う男性を表した浮彫がみられた（図23）。ジャヤヴァルマン7世統治期の寺院もしくはそれ以前の寺院でみられる浮彫で、これと類似した図像を調べた結果、上部の男女は、カイラーサ山を揺り動かすラーヴァナにおびえるシヴァとウマー（図24）、あるいはランカー島の闘いに勝利し、故郷のアヨーディヤーに凱旋するラーマとシーター（図25）との類似性が見られた。とくに、このタ・プロームのペディメントでは男性が弓を持っていることから、ラーマである可能性が高いと考えられよう。その下に表された馬と戦う男は、先述のクリシュナが馬の姿をした魔物ケーシンと戦う様子を表した浮彫（図22、26）と酷似しており、この図像との関連性がうかがえる。これら2つの図像は、ともにヒンドゥー教に関する図像であるが、それぞれ異なる神話や叙事詩を主題とした図像である。これまでの研究では、この浮彫において、それら異なる主題が組み合わされている理由や、そもそも全く別の主題を表した図像である可能性を詳細に検討し

21) Bhāgavata-purāṇa 10.37 (Tagare 1976-1978: 1480-1484); Roveda 2005: 90



図23 台座上に坐す男女と、馬と戦う男性（第3周壁内東側十字回廊中央祠堂東側前室東面出入口）



図24 ラーヴァナにおびえるシヴァとウマー（バンテアイ・スレイ）[2009年筆者撮影]

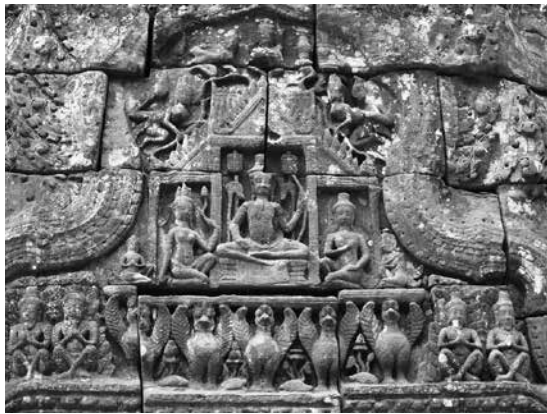


図25 『ラーマヤナ』アヨーディヤーへの凱旋（プレア・カン）[2014年筆者撮影]



図26 ケーシンと戦うクリシュナ（バプーオン）[2013年筆者撮影]

ていない²²⁾。今後、類例の比較検討を行うとともに、神話や叙事詩の内容を再検討し、この図像の主題を解明したい。

蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像

第1周壁南塔門のペディメント（図27）、第3周壁内祠堂12のペディメント（図28）、および第5周壁西塔門のペディメントには、蛇行する大きな蛇の上に、中央に坐像が削り取られた痕跡が残る台座、その左右に四臂坐像や三面四臂坐像が合掌して坐す浮彫がみられた。このタ・プロームで見られる2例の他、プレア・カンやバンテアイ・クデイなど同時期の寺院でも同様の図像が確認されている²³⁾。フランス極東学院がプレア・カンの整備作業中に撮影したペディメントの写真（図29）を見ると、中央の坐像は冠帯や胸飾を付け禅定印を結ぶ仏陀座像であることが分かる²⁴⁾。手のひらの上には小さな薬壺が表されている。その右側には三面四臂坐像がひざまずき、

22) Hawixbrock 1989: 19, 1994: 23, 39; Roveda 1997: 151

23) Roveda 2005: 411

24) 現在、このペディメントは、前方に取り付く通路の屋根によって大部分が隠されている。図29は、フランス極東学院が1943年5月に撮影した写真であり、このペディメントの全体像が収められている（EFEO Archive



図27 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像（第1周壁南塔門北面出入口）



図28 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像（第3周壁祠堂12南側前室南面出入口）

合掌する姿で表されている。2つの手が執る持物は写真が不鮮明で判別しにくいですが、おそらく右手に執るのは数珠と考えられ、この坐像は四面四臂のブラフマーを表す可能性が考えられる。そして、左側の一面四臂坐像の2つの持物のうち、左手が執るのは法螺貝と考えられ、この坐像はヴィシュヌを表す可能性が考えられる。同様に、バンテアイ・クデイのペディメントの浮彫（図30）も、中央の坐像の右側に坐す三面四臂坐像の右手は数珠を執り、左側に坐す一面四臂坐像の左手の持物は一部破損しているものの、その輪郭から法螺貝であろうと判断できる。これら類例の図像表現と比較した結果、これらの浮彫は、仏陀坐像とブラフマー坐像およびヴィシュヌ坐像からなる三尊形式である可能性が考えられる。

また、タ・プロームでは他に、蛇行する蛇は表されていないものの、それぞれ台座上に坐す三尊像もみられた（図31）。中央の台座上の坐像は削り取られているが、その上部に菩提樹と傘があることから、当初は仏陀坐像が表されていたこと

が類推できる。その右側には、4つの手のうち1つに法螺貝を執り、もう1つの手に不明瞭だが何らかの持物を執るヴィシュヌ、左側には、三面四臂の坐像が表されている。この三面四臂の坐像は、四面四臂のブラフマーである可能性は考えられるが、2つの持物が破損して不明瞭であるため、断言することはできない。しかし、この図像も、蛇行する蛇の上に坐す三尊像同様に、仏陀像とヒンドゥー教の神像を併祀した三尊像である可能性が高いと考えられる。なお、同時期の建造であるブレア・カンでは、中央にカイラーサ山を背に坐すシヴァ、その右手にヴィシュヌ、左手にブラフマーが坐すヒンドゥー教の三神像が複数例確認されているが（図32）、タ・プロームではこうしたヒンドゥー教の三神像は確認できず、総じて、中央には仏陀像が表されたものが確認された。以上のような仏陀像とヒンドゥー教の神像を併祀した三尊形式が成立した理由や当時の宗教的背景については、今後、考察していくべき課題と考える。

No.14520)。また、フランス極東学院の月間報告書には、この三尊像について「3頭のナーガの上で、ヴィシュヌとブラフマーの間に坐すシヴァ（筆者訳）」と記している（Rapport's de la conservation d'Angkor 1943.5）。しかしながら、この中尊には、シヴァの特徴とされる乱れた頭髪や顎鬚、額の第三眼、片足を台座の下におろす坐り方（図32）はみられないため、シヴァとみなすことは難しい。



図29 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像
(プレア・カン) [EFEO Archive No.14520]



図30 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像
(バンテアイ・クデイ) [2013年筆者撮影]



図31 三尊像(第3周壁北西隅祠堂西側前室西面出入口)



図32 ヒンドゥー教の三神像
(プレア・カン) [2014年筆者撮影]

5. 今後の課題

以上、タ・プロームの調査で確認した浮彫のうち、主題の特定できたものを中心に紹介した。今後、資料整理を継続し、寺院伽藍全体の図像配置ならびに浮彫の様式的特徴について詳細に考察していきたい。同時に、寺域から発見された丸彫像の写真や寺域に残る台座の調査や、フランス極東学院による整備作業、およびインド考古調査局による修復時の記録の収集を行う。さらに、石柱碑文や出入口枠碑文といった碑文史料を精読し、出入口構成部材に表された図像表現やその配置構成と、碑文の記述内容との整合性を検証する。以上の課題に取り組むことによって、ジャヤヴァルマン7世のタ・プローム建造意図、ならびにこの寺院の尊像配置に表現した世界観を明らかにしたい。

【謝辞】

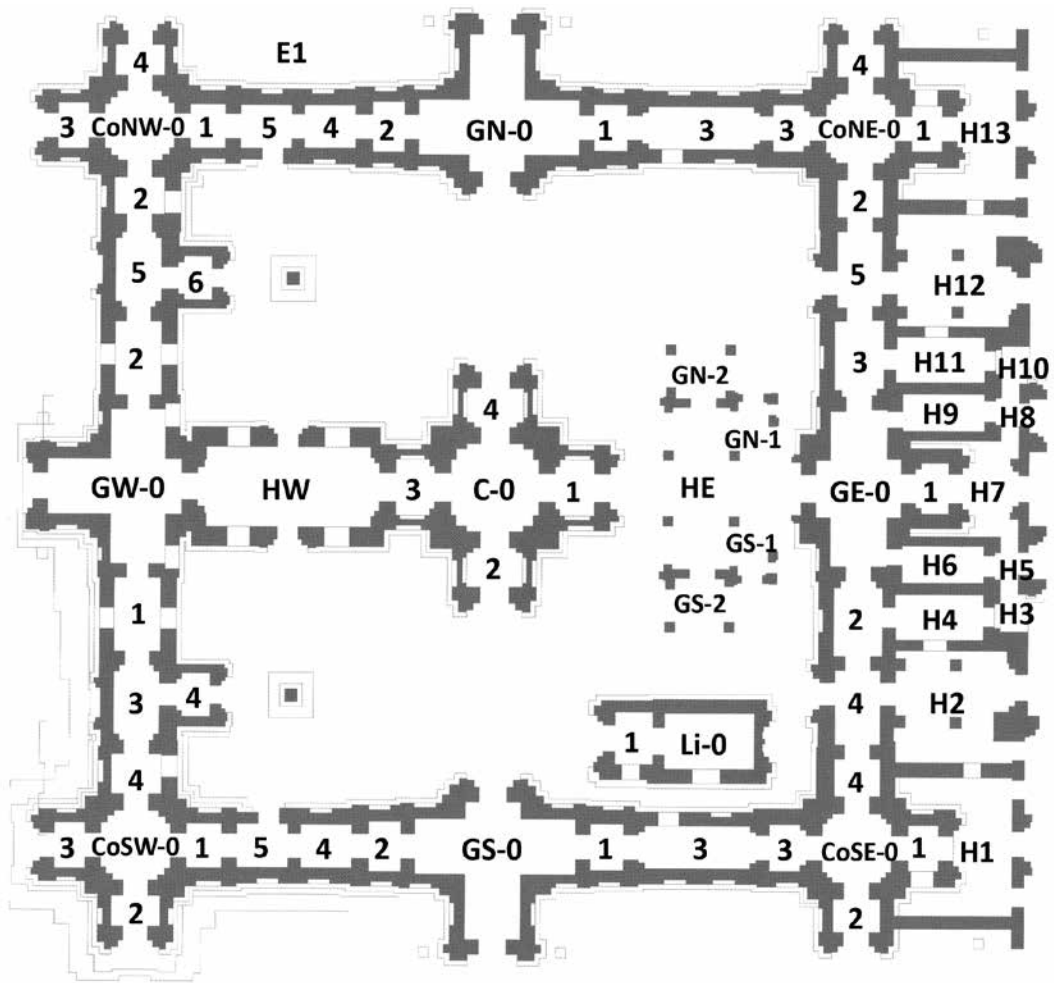
本研究は、JSPS 科研費 JP16J00303の助成を受けたものである。また本調査は、上智大学アンコール遺跡国際調査団(ソフィア・ミッション)の研究プロジェクトの一環として、カンボジア政府アプサラ機構(Authority for the Protection of the Site and the Management of Angkor Region、略称 APSARA National Authority)から調査許可を得て実施した。両機関には、調査を実施する

にあたり、さまざまな面でご協力いただいた。また、浮彫の図像の主題を特定するにあたって、肥塚隆先生からご助言を賜った。深く御礼申し上げます。

注：本稿の挿図のうち、とくに注記のないものはすべて今回の調査（Research on Image and Decoration at Ta Prohm 2016）で撮影したものである。

【主要参考文献】

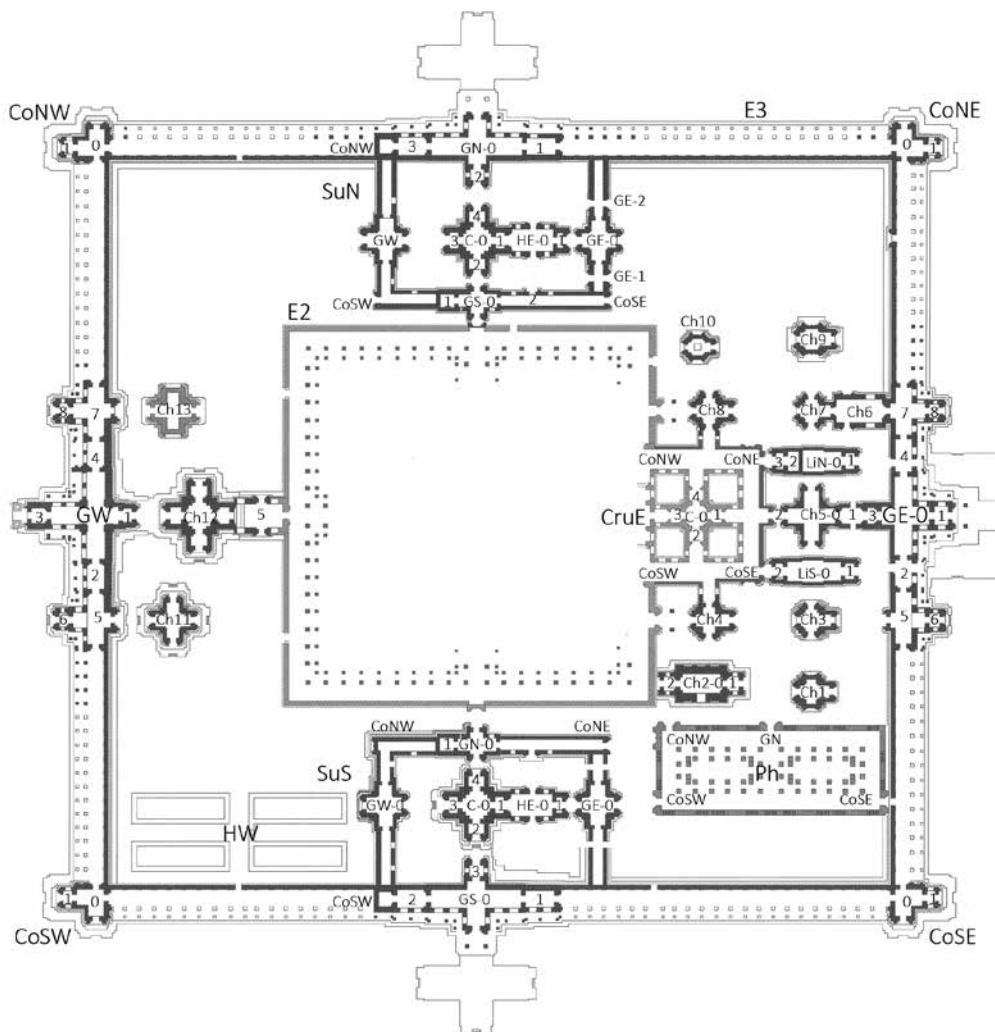
- Cœdès, George. 1906. “La stèle de Ta Prohm”, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 6, 44-86.
- . 1941. “La stèle du Preah Khan d'Angkor.” *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 41(2), 55-302.
- . 1951. “L'épigraphie des monuments de Jayavarman VII”, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 44(1), 97-120.
- Cunin, Olivier. 2004. *De Ta Prohm au Bayon, Analyse comparative de l'histoire architecturale des principaux monuments du style du Bayon*, Doctorat de l'Institut National Polytechnique de Lorraine, Nancy.
- . 2013. “A Study of wooden structures: Contribution to the architectural history of the Bayon Style Monuments”, In *Materializing Southeast Asia's Past: proceedings of the EurASEAA 12*, 2, edited by Marijke J. Klokke and Veronique Degroot, Singapore: NUS Press, 82-107. (The conference of the EurASEAA 12 was held in 2008 and this paper was originally presented in a conference at the School of Geosciences, Department of Archaeology, University of Sydney in 2006.).
- Ecole Française d'Extrême-Orient. “Ta Prohm”, “Preah Khan” *Rapports de la Conservation d'Angkor*.
- Foucaux, Philippe E. 1884. *Le lalita vistara : développement des jeux : contenant l'histoire du Bouddha Çakya-Mouni depuis sa naissance jusqu'à sa prédication*, *Annales du Musée Guimet*, t.6, Paris : E. Leroux (溝口史郎訳 1996 『ブッダの境涯』 東方出版).
- Foucher, Alfred. 1955. *Les vies antérieures du Bouddha, d'après les textes et les monuments de l'Inde*, Paris : Presses universitaires de France (杉本卓洲監修、門脇輝夫訳 1993 『仏陀の前生』 東方出版).
- Glaize, Maurice. 1944. *Les monuments du groupe d'Angkor* [4e éd. revue et mise à jour, 1993], Paris, Adrian-Maisonneuve.
- Hawixbrock, Christine. 1989. *L'iconographie du Prah Khan d'Angkor*. Paris : Mémoire dactylographié de DEA, Université de Paris III (Unpublished).
- . 1994 *Population divine dans les temples, religion et politique sous Jayavarman VII* (2 vol.), Paris : Thèse dactylographiée de l'Université de Paris III sous la direction de M. le Professeur Bruno Dagens (Unpublished).
- Kapur, Pradeep K. and Sachidanand Sahai. 2007. *Ta Prohm: A Glorious Era in Angkor Civilization*, Bangkok, White Lotus Press.
- Maxwell, Thomas S. 2007. “The Short Inscriptions of the Bayon and Contemporary Temples.” In *Bayon: New Perspectives*, edited by Joice Clark, 122-135. Bangkok, River Books.
- Roveda, Vittorio. 1997. *Khmer Mythology : Secrets of Angkor*, London, Thames and Hudson.
- . 2005. *Images of the Gods: Khmer Mythology in Cambodia, Laos & Thailand*, Bangkok, River Books.
- Shastri, Hari P. (tr.). 1976. *The Ramayana of Valmiki*, vol.2, 3rd ed, Brussels : Jos. Adam, (Reprint. Originally published: London : Shanti Sadan, 1957).
- Tagare, Ganesh V. (tr.). 1976-1978. *The Bhāgavata-purāna*, Delhi : Motilal Banarsidass.
- 久保真紀子 . 2012. 「アンコールのプレア・カンにおける図像表現とその配置構成：出入口に施された装飾を中心に」 2012年度上智大学学位請求論文 .
- . 2014. 「アンコールのプレア・カン寺院における尊像配置とその意味：出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して」 『佛教藝術』 337: 56-83.



注：(Kapur and Sahai 2007: 197)をもとに筆者加筆

| 施設コード | 施設名 |
|-------|-------|
| E1 | 第1周壁 |
| C | 中央主祠堂 |
| HE | 東側広間 |
| HW | 西側広間 |
| Li | 経蔵 |
| GE | 東塔門 |
| GS | 南塔門 |
| GW | 西塔門 |
| GN | 北塔門 |
| CoSE | 南東隅祠堂 |
| CoSW | 南西隅祠堂 |
| CoNW | 北西隅祠堂 |
| CoNE | 北東隅祠堂 |
| H | 広間 |

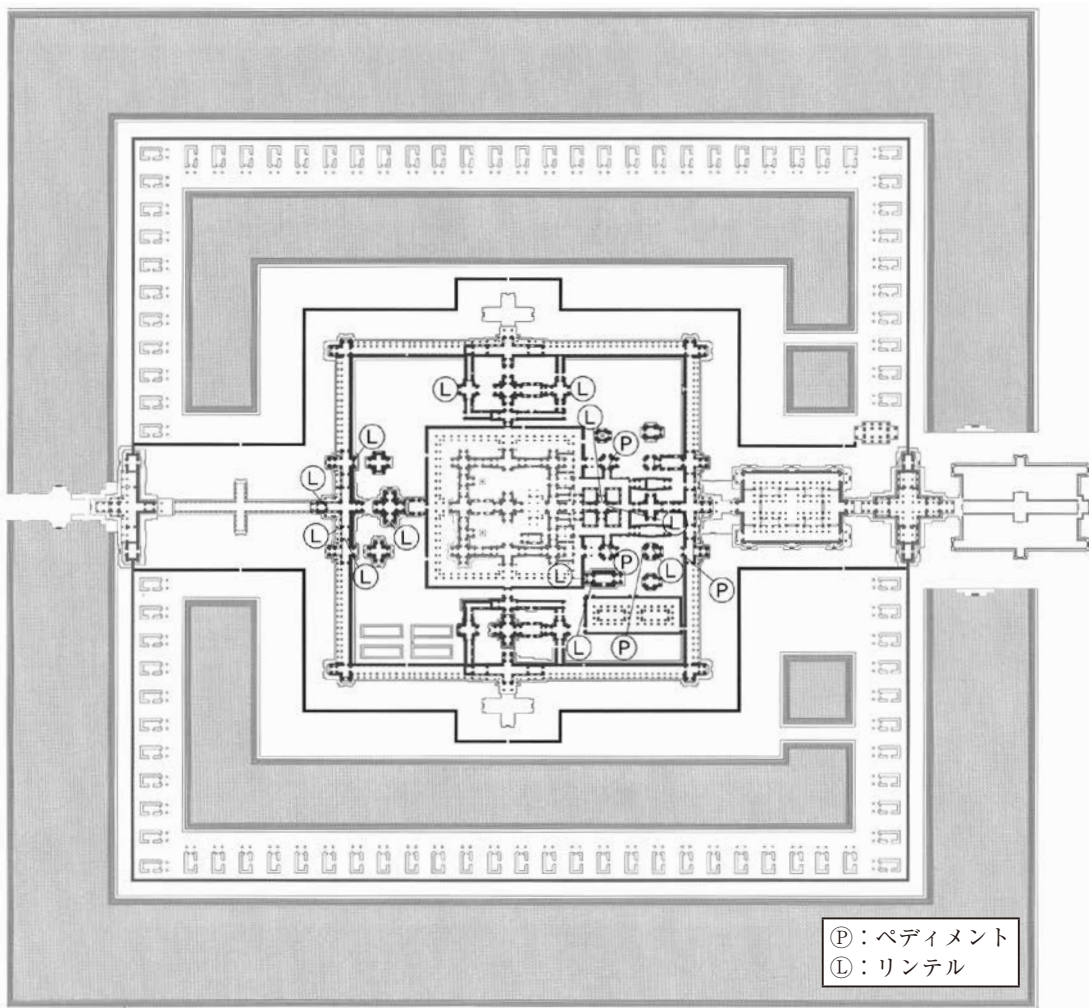
付図1 タ・ブローム施設コード（加藍中央部）



注：(Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

| 施設コード | 施設名 |
|-------|---------|
| E2 | 第2周壁 |
| E3 | 第3周壁 |
| GE | 東塔門 |
| GS | 南塔門 |
| GW | 西塔門 |
| GN | 北塔門 |
| CoSE | 南東隅祠堂 |
| CoSW | 南西隅祠堂 |
| CoNW | 北西隅祠堂 |
| CoNE | 北東隅祠堂 |
| CruE | 東側十字回廊 |
| SuS | 南側副次の伽藍 |
| SuN | 北側副次の伽藍 |
| C | 中央主祠堂 |
| HE | 東側広間 |
| Ch | 祠堂 |
| Li | 経蔵 |
| Ph | 列柱広間 |

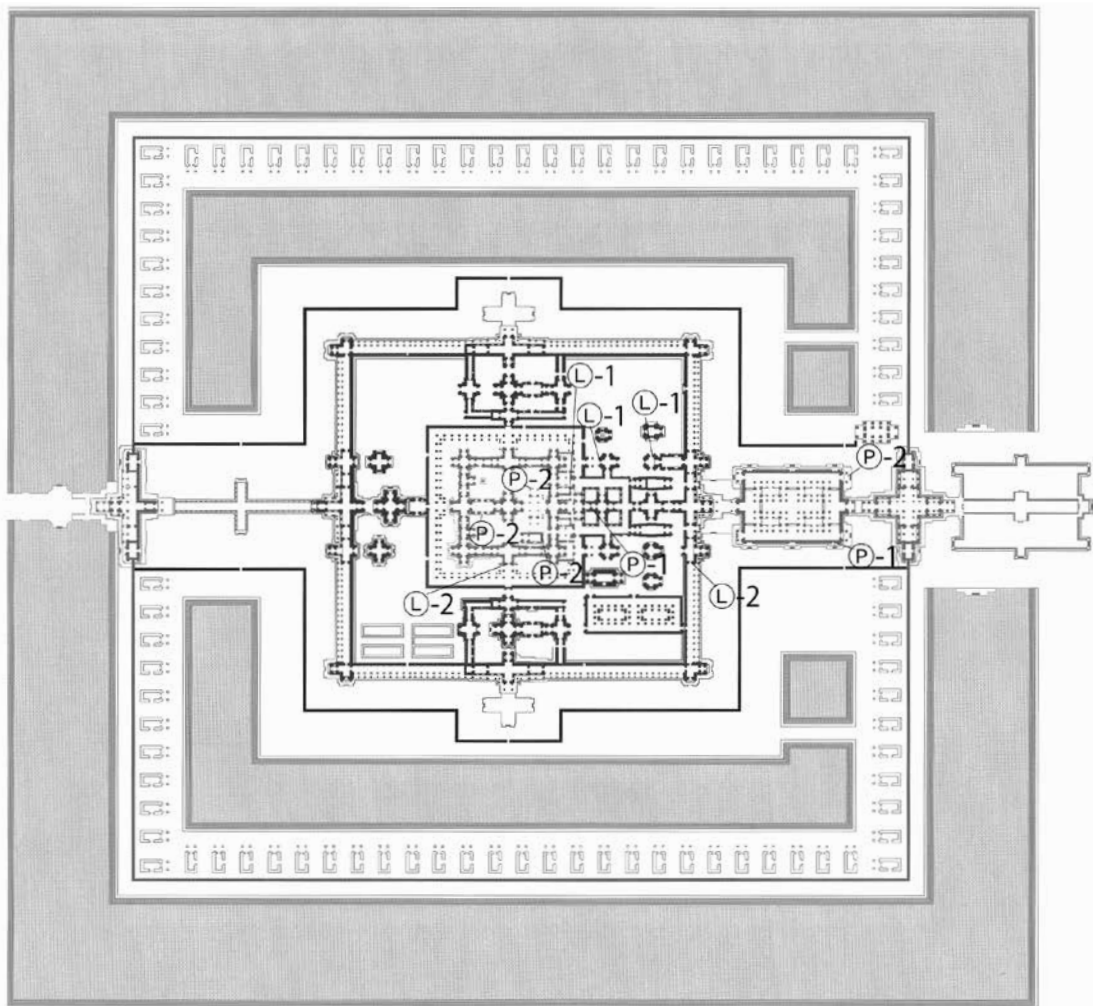
付図2 タ・プローム施設コード（第2周壁～第3周壁）



注：(Kapur and Sahai 2007: 178)をもとに筆者加筆

| | | |
|--|--------|--|
| 禪定印仏坐像が判別できる程度残存しているもの | ペディメント | E3-Ch3-W, E3-Ch4-N, E3-Ch8-S, E3-GE-5-W |
| | リンテル | E3-Ch2-0-W, E3-Ch2-2-W, E3-Ch3-N, E3-Ch12-0-S, E3-GW-0-S, E3-GW-2-S, E3-GW-7-E, E3-CruE-C-0-E, E3-CruE-C-0-N, E3-SuN-GE-0-E, E3-SuN-GW-0-W |
| 削り取られた痕跡から禪定印仏坐像と判断できるもの、および周囲の菩提樹や傘等から禪定印仏坐像が表されていたと判断できるもの | ペディメント | E3-Ch11-N, E3-LiS-2-W, E3-GE-6-E, E3-CoSE-0-S, E3-CoNW-0-N, E3-CoNW-1-W, E3-CruE-C-S, E3-SuN-C-2-S, E3-SuN-GE-0-E, E3-SuN-GS-0-N, E3-SuN-GW-0-W |
| | リンテル | E1-CoNW-0-W, E1-CoNW-0-N, E2-H4-E, E2-H9-E, E3-Ch3-W, E3-Ch4-E, E3-Ch5-0-W, E3-Ch8-S, E3-GE-5-E, E3-GE-7-W, E3-CoSE-0-W, E3-CoNW-0-E, E3-CoNW-0-S, E3-CoNW-0-N, E3-CruE-C-0-S, E3-SuN-C-0-W, E3-CruE-GE-1-N, E3-SuN-C-0-S, E3-SuN-GW-0-E, E3-SuN-GE-0-W, E3-SuN-GN-0-W, E5-Ph-CoNE-N, E5-Ph-CoNW-N |
| リングに改変されたもの | ペディメント | E1-GW-4-E, E3-Ch12-5-S |

付図3 禪定印仏坐像の配置場所（第5周壁内）と出入口コード一覧

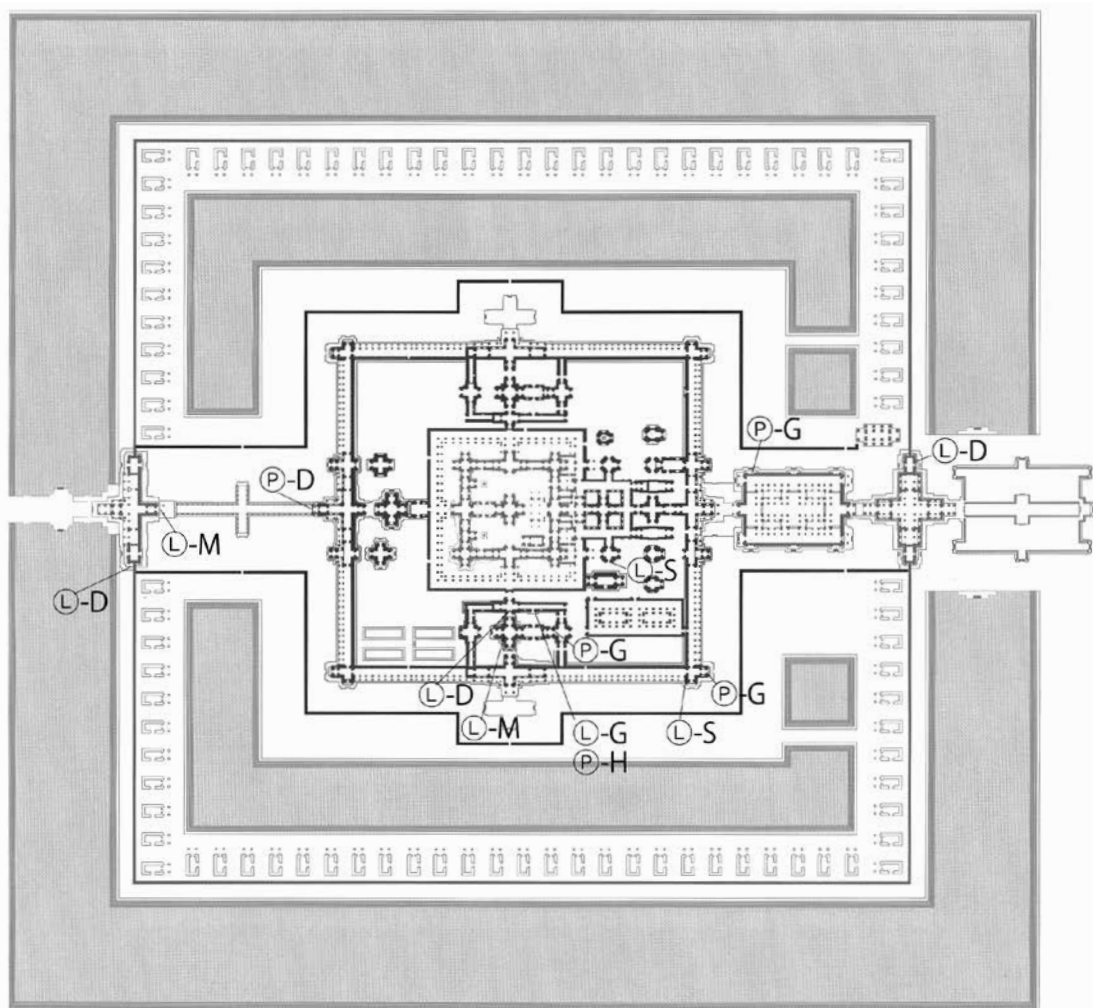


注: (Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

- Ⓟ-1: 観音菩薩の浮彫されたペディメント
 Ⓛ-1: 観音菩薩の浮彫されたリントル
 Ⓟ-2: 般若波羅蜜多菩薩の浮彫されたペディメント
 Ⓛ-2: 般若波羅蜜多菩薩の浮彫されたリントル

| | | |
|----------|--------|---|
| 観音菩薩 | ペディメント | E3-CruE-C-3-W、E5-Ph-CoSE-S、 E6-DA-S、E6-DA-N |
| | リントル | E2-H11-E、E3-Ch7-N、 E3-Ch8-W |
| 般若波羅蜜多菩薩 | ペディメント | E1-HW-GN-2-N、E1-LiS-0-E、 E5-Ph-CoNE-Po-E、E6-GE-4-S、 E6-GS-0-N |
| | リントル | E1-GS-0-S、E3-GE-5-S |

付図4 観音菩薩像と般若波羅蜜多菩薩像の配置場所（第5周壁内）と出入口コード一覧

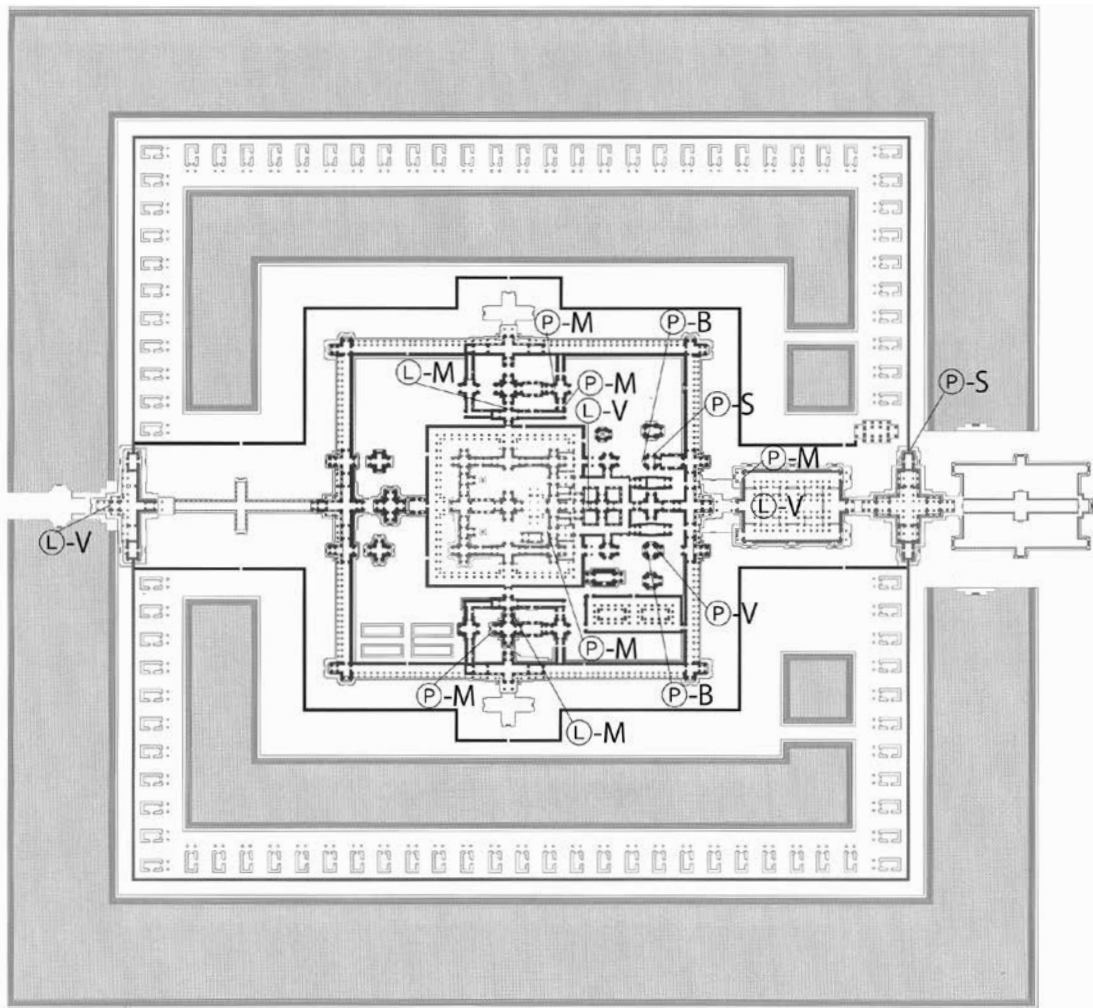


注: (Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

- Ⓟ-G : 出家踰城が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-G : 出家踰城が浮彫されたリントル
- Ⓟ-H : 剃髪が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-H : 剃髪が浮彫されたリントル
- Ⓟ-S : 乳粥供養が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-S : 乳粥供養が浮彫されたリントル
- Ⓟ-D : 降魔成道が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-D : 降魔成道が浮彫されたリントル
- Ⓟ-M : ムチリンダ竜王の護仏が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-M : ムチリンダ竜王の護仏が浮彫されたリントル

| | | |
|------------|--------|--|
| 出家踰城 | ペディメント | E3-CoSE-1-E、E3-SuS-GE-0-W、E5-Ph-CoNW-N |
| | リントル | E3-SuS-GN-2-S |
| 剃髪 | ペディメント | E3-SuS-GN-2-S |
| | リントル | E3-SuS-GN-2-S |
| 乳粥供養 | ペディメント | |
| | リントル | E3-Ch4-S、E3-CoSE-0-W |
| 降魔成道 | ペディメント | E3-GW-3-W |
| | リントル | E3-SuS-GN-0-S、E5-GE-6-E、E5-GW-5-S |
| ムチリンダ竜王の護仏 | ペディメント | |
| | リントル | E3-SuS-C-0-W、E5-GW-1-E |

付図5 仏伝図の配置場所（第5周壁内）と出入口コード一覧



注：(Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

- Ⓟ-V：ヴェッサンタラ・ジャータカが浮彫されたペディメント
- Ⓛ-V：ヴェッサンタラ・ジャータカが浮彫されたリントル
- Ⓟ-S：シヴィ・ジャータカが浮彫されたペディメント
- Ⓛ-S：シヴィ・ジャータカが浮彫されたリントル
- Ⓟ-M：ムーガパッカ・ジャータカが浮彫されたペディメント
- Ⓛ-M：ムーガパッカ・ジャータカが浮彫されたリントル
- Ⓟ-B：プーリダッタ・ジャータカが浮彫されたペディメント
- Ⓛ-B：プーリダッタ・ジャータカが浮彫されたリントル

| | | |
|---------------|--------|--|
| ヴェッサンタラ・ジャータカ | ペディメント | E3-Ch3-N |
| | リントル | E5-GE-3-W (崩落)、 E5-GW-3-W、E3-CruE-C-3-W |
| シヴィ・ジャータカ | ペディメント | E3-Ch7-N、E5-GE-6-N |
| | リントル | |
| ムーガパッカ・ジャータカ | ペディメント | E1-GE-4-W、E3-SuS-C-3-W、E3-SuS-GW-0-W、 E3-SuN-GE-0-W、E3-SuN-GE-1-E、 E5-Ph-CoNW-W (壁面に浮彫された疑似的な ペディメント) |
| | リントル | E3-SuS-GN-0-S、E3-SuN-GS-N |
| プーリダッタ・ジャータカ | ペディメント | E3-Ch7-W |
| | リントル | E3-Ch3-W |

付図6 ジャータカ図の配置場所(第5周壁内)と出入口コード一覧

IV. 考古学分野

アンコール・ワット西参道の環濠内考古学調査

—2015年12月調査速報—

上智大学総合グローバル学部
丸井雅子
大阪市教育委員会事務局
宮本康治
上智大学アジア人材養成研究センター
三輪 悟
上智大学アジア文化研究所
ニム・ソテイーヴン

1. 調査名称

平成27年度国際交流基金「アジア文化創造協働助成プログラム」受託事業「アンコール・ワット修復人材養成プロジェクト」の一環としてのアンコール・ワット西参道環濠内考古学調査及び専門家人材養成（実施主体 上智大学アジア人材養成研究センター）

2. 調査箇所と期間

(1) 調査箇所と規模（図1～3）

アンコール・ワット西参道中央テラス北西入隅環濠内、修復座標88-91m付近、約10㎡。

(2) 調査期間

2015年12月21日-2016年1月5日（準備および埋戻し期間含む）

3. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査の経緯

カンボジア・アプサラ機構と上智大学が実施したアンコール・ワット西参道修復工事第Ⅰ期（1996年8月起工式、2007年11月竣工式）では、1998年に同参道東端部にて環濠内基礎および堆積にかかわる調査を実施し、砂岩円柱を据えていたラテライトを基礎1段目として下へ5段目まで確認することができ、とくに下段を覆う堆積からは多くの遺物を収集した（図4、5）。しかし水位および堆積泥土の問題から、堆積を分層掘削するには至らず、将来の課題として残された（上智大学2011：84-86）。今回、同修復工事第Ⅱ期を開始するにあたり、前回の課題を踏まえ当該箇所の参道基礎の構築状況および堆積を考古学的に調査し記録することを目的として調査を行った。

(2) 調査参加者

丸井 雅子 上智大学総合グローバル学部・教授
宮本 康治 大阪市教育委員会事務局・主任学芸員

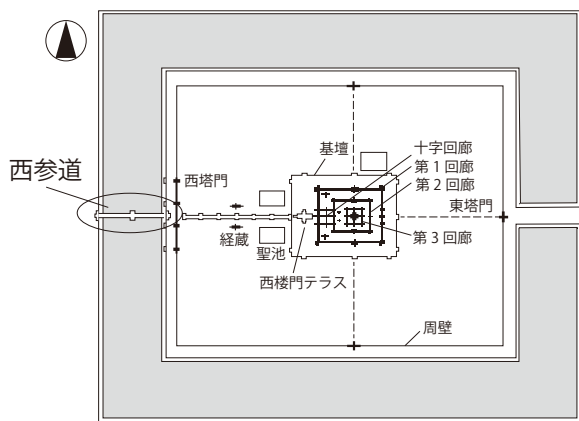


図1 アンコール・ワット平面の配置と西参道の位置

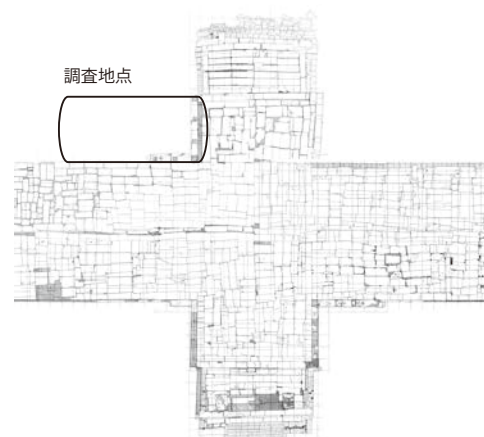


図3 西参道と調査区の位置

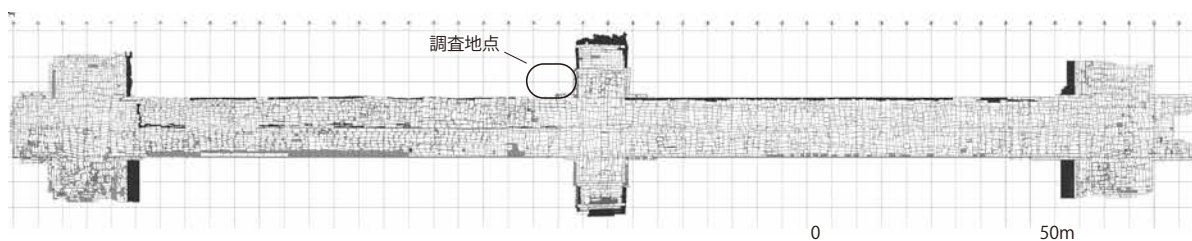


図2 西参道と調査地点

三輪 悟 上智大学アジア人材養成研究センター・研究員
 ニム・ソタイーヴン Nhim Sotheavin 上智大学アジア文化研究所・客員研究員
 マオ・ソックニー Mao Sokny アプサラ機構・建築専門家
 チュエン・ブティー Choeung Vuthy 上智大学アジア人材養成研究センター・スタッフ
 シム・ダニー Sim Dany アプサラ機構・考古専門家
 キム・センパクダイ Kim Sengphakdey アプサラ機構・考古専門家
 他、現場作業員（アプサラ機構所属作業員のべ202名）

(3) 調査の経過（日誌・抄）（写真1、2）

2015年

12月21日（月） 調査のために補助土手を作成する。現在すでにある東西約90mの土手はアプサラ機構により2012-2013年にかけて築造されたもので、今回の予備調査にあたって新たに築くのはそこから参道壁面につながる南北の土手である（図4）。作業員は土嚢づくりから開始。ポンプにより土手内の水を汲み上げながら、土手のための土嚢を積む作業を行う。

12月22日（火） 引き続きポンプによる水汲み上げおよび補助土手築造作業

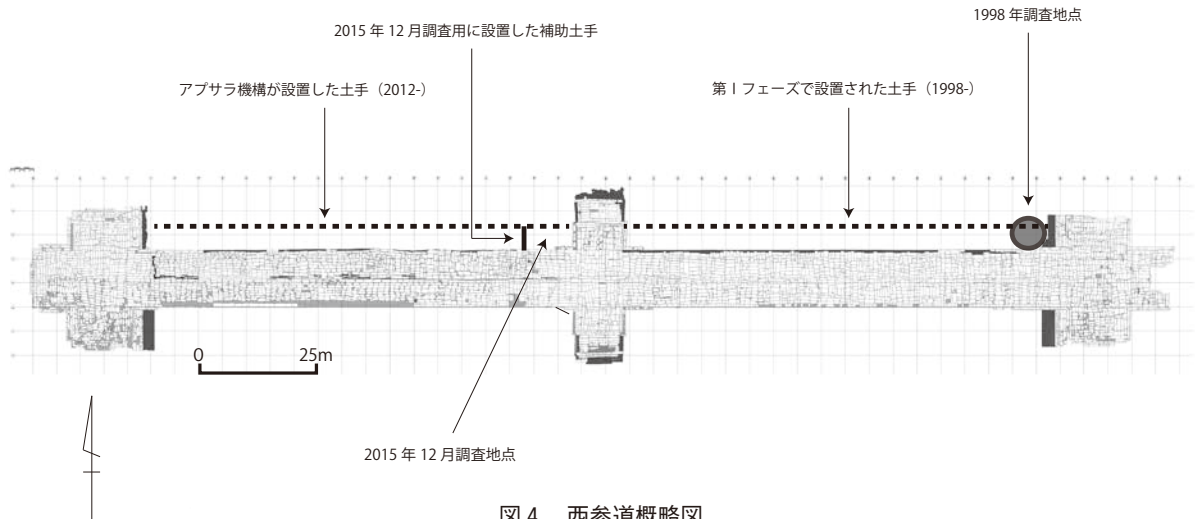


図4 西参道概略図

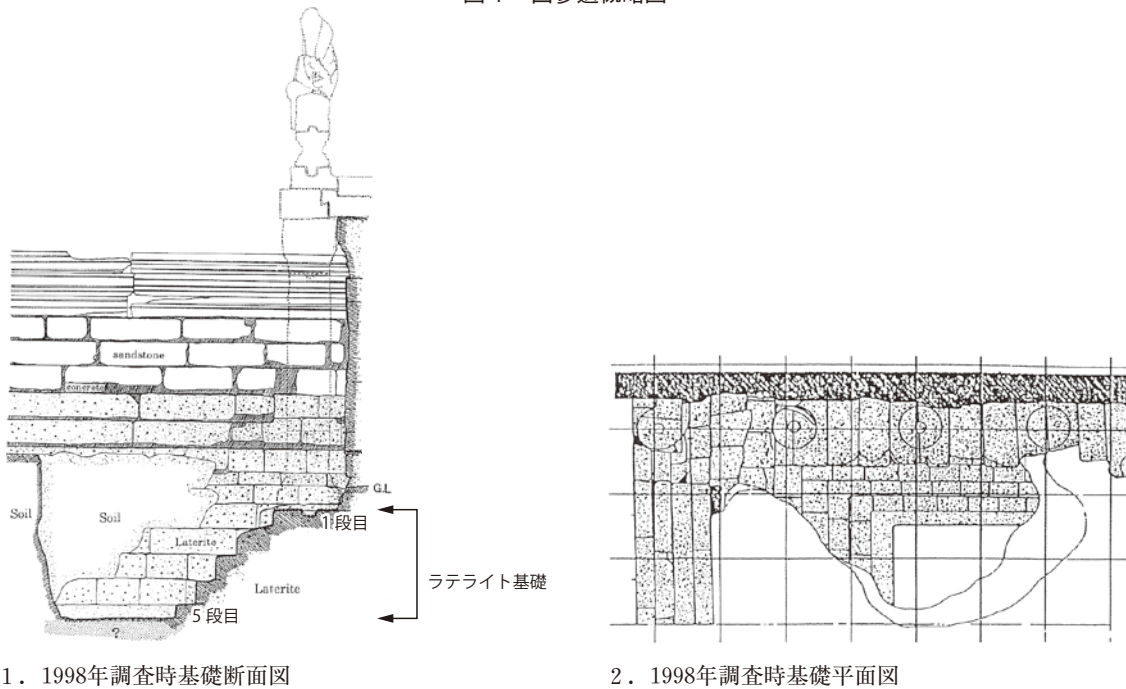


図5 第I期調査(1998年)成果:基礎断面、平面〔転載:上智大学他2011 図2-3、2-4〕

- 12月23日(水) 補助土手築造作業を継続。
- 12月24日(木) 補助土手築造作業継続。トレンチ設定。
- 12月25日(金) トレンチの泥および土砂の取り上げ、同時に水の汲み上げ。さらに土手の嵩上げ作業。泥土や崩落砂岩を除去し、ラテライト基礎を検出。出土層位は明確ではないが基礎4-5段目を覆う下層堆積土から無釉の焼き締め陶器(無釉硬質陶器)や黒褐釉陶器などが多く出土。
- 12月26日(土) トレンチの現状写真撮影。基礎は前回(1998年調査時)と同じく5段目まで確認、5段目ラテライト下端まで掘る。現状の最下面は硬いラテライト片(ラテライト粒=ラテライト・チップ)を敷き固めた面が広がる模様。



1. 土手作りおよび水汲み作業の様子



2. トレンチ内土砂除去作業の様子



3. 図面作成（実測）の様子

写真1 調査風景



1. トレンチの状況
(北から撮影)



2. サブトレンチの状況
(北から撮影)



3. トレンチの完掘状況 (西から撮影)

写真2 調査風景および出土遺構の状況

- 12月27日（日） 現場作業休み。ポンプによる水汲み上げ。
- 12月28日（月） 測量のため、西参道上面のEFEOによるB.M.148から、調査区そばの土手上に作業用測量基準点を移す。B.M.148は海拔22.032m、土手上作業用基準点は海拔19.992m。トレンチ内の堆積を分層し、それぞれの境界面を測量。トレンチ北東角部分を分層掘。層位ごとに掘り下げ遺物取り上げ。
- 12月29日（火） 調査成果写真撮影。写真撮影終了後、土層図作成、注記、引き続き平面図作成。
- 12月30日（水） 平面図の補足、レベル測量。トレンチ内最下面の北側40cm四方（サブ・トレンチ北 Sub trench N）を深掘りしたところ、ラテライト・チップを硬く敷き詰めた層、次いでラテライト・チップと泥質砂層の混在する中間層を経て、灰色泥質砂層に続くことが確認された。急ぎ図面を補足する。さらにラテライト基礎5段目以下も深掘りし（サブ・トレンチ南 Sub trench S）たところ、5段目の下に6段目を検出した。前回（1998年）は5段目まで掘り

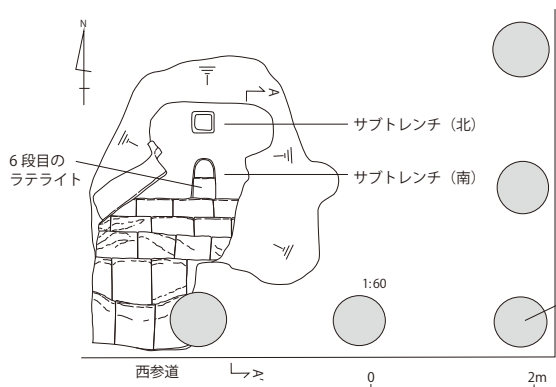


図6 調査区平面図

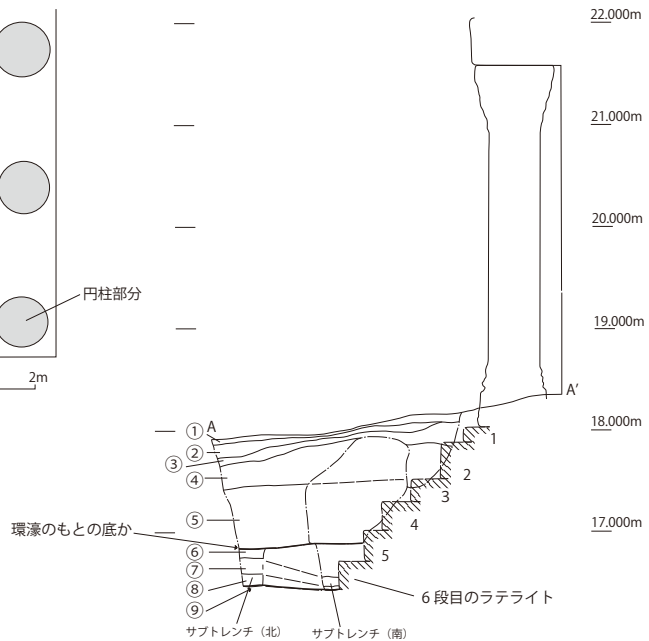


図7 地層断面および立面図

下げて作業を終えていたので、6段目の検出は今回の調査による新知見である。作業終了後、トレンチの埋戻し開始（両サブ・トレンチ内およびラテライト基壇部分を土嚢で覆う）。

12月31日（木） 上智センターにて出土遺物写真撮影、図面のトレース作業。現場は終日、土嚢袋へ土詰め作業。発掘関連作業は本日午前ですべて終了。

2016年

- 1月1日（金） 現場作業休み。
- 1月2日（土）～5日（火） 埋戻し作業（5日完了）。

4. 調査の成果と概要

(1) 目的と概要

アンコール・ワット西参道修復工事第Ⅱ期の予備調査として、参道基礎の構築状況および環濠内の堆積状況を考古学的に明らかにすることを目的として、調査を行った。ラテライト基礎を6段目まで確認し、基礎構築に伴う地業としてラテライト粒を多く含む硬い層と粘土質砂層で整地されていたことを観察した。また、環濠内の堆積を比較的良好な状況で分層掘り遺物を取り上げることができ、後述する第5層にまとまった量の遺物が包含されていることがわかった。

(2) ラテライト基礎の構築状況（図4～7）

前回の西参道修復工事第Ⅰ期に伴って1998年に参道東端部で実施された基礎に関わる調査では、砂岩円柱の載る基礎ラテライトを1段目と数え、全5段積の基礎が確認された（図5）。5段目以下は掘削しなかったが非常に硬い土の面が広がっていたことから、ここがある時期の環濠底面であった可能性を考えた。基礎を構成するラテライトの保存状態は、1段目の劣化が最も激しく

形状を著しく損なっていたが、2段目は先端の角が若干かける程度、3段目以下は良好であることが確認された（上智大学他 2011：318）。

今回の調査（図7）においても当初、ラテライト基礎5段目が検出された時点で非常に硬いラテライト粒を含む面が広がっており（第6層＝⑥）、基礎の構築状況は前回1998年調査時と同じと判断した。その後サブ・トレンチにおける深掘り作業により、基礎が少なくとも6段目まで築かれていたことを確認できたのは新しい知見であった。さらに6段目ラテライト基礎の下端と同じ高さにも硬いラテライト粒を多く含む面が広がる（第9層＝⑨）ことを観察し、この面は第6層と非常に近似する特徴を示す。

ラテライト基礎の保存状態（図6）は、今回の調査箇所では1段目の劣化が最も激しく形状をほとんど留めていない。さらに2、3断面も先端角をかなり欠いていた。4段目以下は保存状態が非常に良く、ラテライトの角が明確に残る。基礎は小口に積まれ、その個体大きさは高約25cm、幅約40cm。1段目から6段目下端まで約1.6m下がる。基礎の迫り出し幅は、西参道ラテライト側壁から6段目北端まで約2.2mであった。なおある時期の環濠は、前回1998年の見解と同じく5段目に接するように広がるラテライト粒を含む硬い面を底としていた可能性が考えられる。これについては後述（5）で説明する。

（3）層序の概略と地層の特徴（図7）

トレンチ内で堆積の状態が比較的良好な北東部分を分層した。層序は次のとおりである。

第1層（図7の①）：10YR 4/4 褐色細粒砂で砂岩およびラテライト小片を含む。土手（2012～2013年にアプサラ機構が建設）に使用されたブルーシートや土嚢袋を層中に含むことから、ここ数年の現代の堆積である。

第2層（②）：10YR 4/2 灰黄褐色中粒砂で多量の砂岩片を含む。若干の出土資料として、清朝あるいはそれ以降の色絵磁器破片、さらにガラス片や葉きょうを収集したことから、近・現代の堆積と考えられる。

第3層（③）：7.5YR 5/4 にぶい褐色中粒砂で少量の砂岩片を含む。少量ではあるが土器片を含む。

第4層（④）：7.5YR 6/4 にぶい橙色細粒砂で少量の砂岩片を含む。

第5層（⑤）：7.5YR 3/2 褐黒色細粒砂でラテライト片、炭化物、木片、そして大型砂岩を多く含む。これら砂岩は参道の部材（欄干、円柱）である。さらに土器、瓦、陶器等の多くの出土遺物が認められ、参道構築後に廃棄されたものを含む堆積である。

第6層（⑥）：5YR 5/6 明赤褐色シルト質粗砂～礫で多量のラテライト粒、木片、木葉を含む。非常に硬い面が形成される。環濠の底面として機能していた可能性がある。

第7層（⑦）：7.5YR 5/6 明黄褐色シルト質粗砂～礫で少量のラテライト粒を含む。

第8層（⑧）：2.5YR 5/3 黄褐色シルト質細粒砂～中粒砂質粘土で粘性高い。

第9層（⑨）：7.5YR 5/6 明赤褐色シルト質粗砂～礫で多量のラテライト粒を含む。硬い面が広がり、その特徴は第6層と近似する。以上の第6～9層は参道構築に伴う一連の整地層と考えられる。

(4) 出土遺物 (写真3)

本調査では土器・陶磁器・瓦等の計87点の遺物が出土した。第2層から第5層にかけて出土し、サブ・トレンチでの確認を行った第6～9層では遺物は見られなかった。この中でも第5層から多くの資料が出土している。十分な観察を行えていないため、その概況について記しておく。

第2層：色絵磁器および無釉焼締陶器がある。色絵磁器は中国産の可能性があり、清朝あるいはそれ以降であろう。外面に呉須による圏線と淡緑色の上絵が見られる。

第3層：遺物は少なく、無釉軟質土器の体部片がある。外面に矢羽根状の叩き目があり、内面には炭化物が付着し、煮炊具の破片であろう。

第5層：多くの遺物は本層からの出土である。掘削時に大きく上下に分けて取り上げており、一括して掘削したが下部に相当するところからの出土資料がある。

上部では無釉焼締陶器、無釉軟質土器、中国産磁器などがある。無釉焼締陶器では大型壺片、無釉軟質土器では外面に叩き目をもつ体部片があり、外面にスス、内面に炭化物が付着するものがあり、煮炊具とみられる (写真3-1)。中国産の可能性のあるものは口縁部の細片で、口縁端部が露胎である。

下部からは無釉軟質土器、無釉焼締陶器、灰釉陶器、黒褐釉陶器や木片がある (写真3-2、3-3)。無釉軟質土器では壺類とみられるものや上部のものと同じく外面にススが付着する体部片がある。

下部相当層に属するとみられるものに無釉軟質土器や無釉焼締陶器、灰釉陶器、中国産青磁、瓦がある (写真3-4～6)。無釉軟質土器では壺類とみられるものや体部片、炉の脚部などがある。中国産青磁は碗等の口縁および不明器種の体部片である。また、以上に加えて参道からとみられる崩落砂岩石材が多く見られた。

遺物は参道基礎部の構築に伴う地層である第6層以下からは出土せず、構築の時期を直接検討する資料はなく、参道構築後の環濠機能時のものである。以上の資料については詳細な検討を今後行う必要があるが、多くの資料が出土した第5層では土器・陶磁器類が一定含まれていた。中でも無釉軟質土器で外面にスス、内面にも炭化物が付着し、煮炊具片とみられるものが多く含まれていた。具体的にどのような活動にともなって用いられていたかは他の要素も踏まえて検討していく必要があるが、そうした実用的な器種が廃棄されていたことが注意される。また時期については中国産青磁の特徴等からみてアンコール・ワットの築造期よりも後出し、ポスト・バイヨン期あるいはそれ以降の可能性が高いと推測される。

ここで1998年の参道東端での調査時の状況と比較しておくことにする。先回の調査では層位的な検討を十分行うことはできなかったものの、破片数にして1000点を超える遺物が出土している (丸井1999)。その大半は瓦で、それ以外を黒勝釉陶器・中国産磁器などが占めていた。瓦には軒瓦および棟飾などが含まれていた。陶磁器では青磁・白磁等があり、中国産磁器に枢府手の碗があり、高台内に「宮」とみられる墨書が見られるものもあった (宮本ほか2010)。時期的には上記の白磁を含め、ポスト・バイヨンおよびポスト・アンコール期に及ぶ可能性をもつものである。現時点ではこれと本調査の例について詳細な比較は難しいものの、量的に前回が多いこと、とりわけ瓦片の量が多いことなどが指摘される。またその一方で今回のものには無釉軟質土器で煮炊具が多く含まれる傾向があり、異なる点である。このうち瓦について近辺の建造物で生じた



1. 第5層上部出土土器類



4. 第5層下部相当層出土 無釉軟質土器、無釉焼締陶器等



2. 第5層下部出土資料



5. 第5層下部相当層出土 中国産



3. 第5層下部出土土器類



6. 第5層下部相当層出土 瓦類

写真3 出土遺物

不要物を廃棄したものとするれば、前回のものは環濠内、アンコール・ワット中央側からもたらされたものであり、用いられていた場所により近いために廃棄された量が多いものと想定しておくことができよう。また遺物の年代についてはやはりアンコール・ワット建造より後出する時期のものが多くを占める傾向は指摘できそうである。

今後他の地点での状況もあわせ検討し、環濠への廃棄がどのように行われたか、時期的な推移や地点による傾向などを見ることで、参道・環濠が機能していた時期の状況について検討していく必要がある。そうした検討を積み重ねることでアンコール・ワットの時期的な推移を考える手がかりとなるものと思われる。

(5) 西参道基礎構築の概要と経緯

以上をまとめると、西参道基礎構築、それ以降、そして現代に至るまで次のような経緯が導き出される。

まず参道建設箇所の地業に着手する。ラテライト粒を硬く叩き締めたと推測される層（第9層）を準備しその上面にラテライト基礎を敷設し始める。今回の調査では最下段として6段目が確認できた。6段目から5段目ラテライトとほぼ対応する高さまで、粘土質砂層（第8～7層）とラテライト粒を多く含む硬い面（第6層）によって整地される。整地層（第9～6層）は40～50cmの厚みをもつ。この非常に硬い第6層上面が環濠底面であった可能性がある。興味深い点は、ラテライト粒を主体とした非常に硬い層が複数（第9、6層）確認されたことである。仮に、第9層を西参道の基礎および構造全体を支える整地としてのラテライト層とし、第6層を環濠に貯水するための底面としてのラテライト層と考えるならば、その中間の粘土質砂層（第8～7層）の役割はどのように理解するべきか。これについては今後の検討課題としたい。また、これら整地作業がラテライト基礎構築のどの段階でなされたものなのかは現時点では判断できない。

第5層を含むそれより上の層は参道構築後に環濠内に堆積したものである。既述のとおり第5層中には参道砂岩の大型石材および土器、陶器等が大量に含まれていた。こうした大型石材は参道からの崩落もしくは倒壊部材でそのまま環濠内に放置されたもので、一方土器や陶器には炭化物の付着が見られたことから環濠近くで日常的に使用されていたものが廃棄されたと推察することができる。年代を特定できる遺物は少なく、ポスト・アンコール・ワット期もしくはポスト・バイヨン期以降という上限に言及するに留めておく。第2層は近・現代の堆積、第1層はここ数年の堆積泥土である。

(6) 参考：西参道内部盛り土の状況（図8）

最後に上述の地業を考察する参考資料として、1994年8月に西参道内部で実施されたオーガー試錘結果を紹介しておきたい（塚脇、藤田、クム 1995）。西参道入口付近の参道表面に敷設された砂岩（厚30cm）およびその下のラテライト（厚30cm）を外し、ラテライトの下100cmを試掘、さらに試掘穴底面から440cm（参道表面から600cm）までオーガー試錘した。観察された堆積土は6つに区分され、いずれも水平に堆積しており明らかに盛土と断定されるが、いわゆる版築の痕跡は全く認められない（前掲：34）。600cmより以深は、層準にある硬い埋没物のため掘進が不可能であった。この硬い層がラテライト敷石なのか、あるいはラテライト粒を多量に含む硬い層なのか判断は困難である。

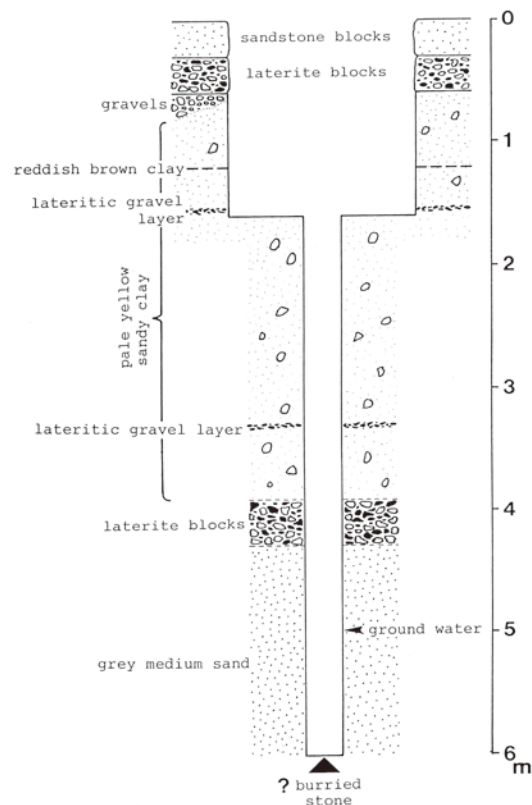


図8 試掘およびオーガー試錘結果（1994年8月実施）
【転載：塚脇他1995 図3】

今回の調査で観察した第9層との関係、さらに西参道構築過程の全容を明らかにするためにも、今後解体作業の途中で参道内盛土深部の詳細な調査と観察が必要とされるであろう。

5. まとめ（成果と課題）

今回の調査区は非常に限定的であったが、西参道を支える基礎が少なくとも6段目まであったことを明らかにした。また基礎のラテライト敷設にあたってはラテライト粒を主体とする非常に硬い層と粘土質砂層を積み重ねていたことも観察した。それとともに環濠内の堆積状況についても地層の状況を観察し、分層しての遺物の取り上げを行った。今後、第Ⅱ期対象の参道内部構造や、構造物から離れた環濠内の堆積状況を観察することも、修復計画を具体的に設計するために不可欠である。なお調査にあたっては環濠水位を全体的にさらに下げることが、効率、安全の面からも強く要望される。

[参考文献]

上智大学、上智大学アジア人材養成研究センター、上智大学アンコール遺跡国際調査団

2011『アンコール・ワット西参道修復工事 第Ⅰフェーズ』

塚脇真二、藤田幸夫、クム・ソリット

1995「試掘ならびにオーガー試錐結果から推定されるアンコール・ワット西参道の内部構造」『カンボジアの文化復興』11、上智大学アジア文化研究所、32-39.

丸井雅子

1999「アンコール・ワット西参道出土遺物—西参道北側基礎部分の掘削調査にともなう—」『カンボジアの文化復興』16、上智大学アジア文化研究所、176-179.

宮本康治、丸井雅子、石澤良昭、片桐正夫

2010「アンコール遺跡出土墨書陶磁器について—アンコール・ワット西参道修復に伴う環濠内埋土の調査出土資料から—」『日本考古学協会第76回総会研究発表』日本考古学協会、26-27.（および口頭発表：2010年5月23日 於国士舘大学）

編 集

Editor

編集長 石 澤 良 昭

Editor in chief Yoshiaki ISHIZAWA

カンボジアの文化復興(29)

——アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

発 行 者 上智大学アジア人材養成研究センター
所長 石 澤 良 昭

発行年月 平成28年(2016年)11月

発 行 所 上智大学アジア人材養成研究センター
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
電話 (03) 3238-4136
Fax (03) 3238-4138

制作協力 株式会社ムーンドッグ
〒164-0003 東京都中野区東中野 4-9-1 第一元太ビル3B
電話 (03) 5348-7058

印 刷 所 株式会社平河工業社
〒162-0814 東京都新宿区新小川町 3-9
電話 (03) 3269-4111